

---

**とある異世界とある国、そこに伝わる物語。**

シェイド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある異世界とある国、そこに伝わる物語。

### 【Nコード】

N9193Q

### 【作者名】

シエイド

### 【あらすじ】

この物語は、とある異世界のとある国に伝わる英雄伝。異世界から来た少年が、愚直な国王に天下を取らせるべく戦っていく話である。

今から200年前、この国は群雄割拠の戦国時代であった。

無論いくつかの軍閥があり、互いが互いを滅ぼしあっていた。

国土が広大で戦争好きな、ルスリア帝国。

宗教により平定されている、イル教国。

大きな例がこの二つである。  
他にも10を越える国があった。

現在我々が暮らすこのアリア王国はその軍閥の中でもとりわけ小国であり、隣国である一大強国、ルスリア帝国の脅威に脅かされ、滅びるのは時間の問題とされていた。なぜ、この国は生き延びることができたのだろうか？

その答えは、2つの要因により成り立つ。

一つめは、当時のアリア国王が愚直ながらも政治に長け、人を見る目があり、人徳者だったこと。

二つめは、自称異世界人の男率いる最強最凶の戦闘集団“黒虹”が味方についたこと。

もっとも、アリア国王が異世界人を味方に付けられたのは、国王の人徳によるものだが。

これから話すのは、異世界の彼が仲間と共に戦ったエピソードを語る英雄伝。

彼無くして今アリア王国は存在しないだろう。その尊敬すべき彼の

## 第0話 プロローグ(前書き)

主人公最強もの小説です。嫌いな方はご遠慮ください。

アドバイス、感想、よろしくお願いします。

## 第0話 プロローグ

「いつつ・・・ん？どこ？どこ」

俺、源 ミナモトカエデ 楓は、バスケットのクラブチーム帰りに、バランスを崩してコケた、ハズだった。

それがどうしてか今、白い空間にひとり、浮遊感を感じて佇んでいる。

本当に何も無い空間だ・・・真っ白、どこを見ても白。それに奥行きが感じられないのにとこまでも広がっているような・・・。

「よっ。」

「！！！！？？？？」

肩に後ろから急に手を置かれた。俺は本能に従い飛びずさる。

声の主を見ると、白いマントを纏った、同い年くらいのイケメン君だった。

茶髪を襟足が見えるくらいまで伸ばし、無邪気な笑みをたたえている。あの髪は地毛だろうか？

「ここは？つてかお前は？」

俺は恐る恐る聞いてみた。俺の通学路にはこんな場所はなかったはずだし、こんなところに平気にいるこいつもよく分からない。まずは情報が必要だ。

するとイケメン君はへらへらしながら近づいてきた。

俺は警戒を強める。何しろここがどこだか分からないし、何よりこの男、隙が無い。

少し距離を保ち、ゆっくりと後ずさる。

そんな俺を見てその男・・・青年は背中を掻きながら、呆れたように言う。

「そんなに警戒しなくてもいいじゃん。つてか、その分だと気付いてないね・・・。まずここは神域。んで俺は人ならざる者。お前が死んだから、ここに連れてきた」

「!?!」

あまりに唐突な死の宣告、そして“神域”や“人ならざる者”というワードにハテナを浮かべるが・・・。

俺は・・・死んだのか？たかがチャリでこけて？

「ああ、死んだよ。お前がこけた瞬間に車にはねられたの、覚えてない？」

あくびをしながらそんなことをのたまう青年。

それにしてもマジかよ。車にはねられたとか覚えてねえし、にわかには信じられねえよ・・・ん？そういえば俺いま声に出したか？

「出してねえよ？心読んだ。」

「!?!」

んだと？こいつ、何モンだ？

青年は首をかしげ、さも当然のように言った。

「言っただろ？人ならざる者・・・つまり、神だな。」

また読んだのか？つてか神？・・・意外だ。

「よく言われる」

自称神は笑いながらそんなことをのたまっている。

「ってかこいつの話信じたとして、俺は死んだのか。地上のみなさん！死んだらこうなるみたいですよ。輪廻転生とか、六道輪廻とかじゃなくて、高校生染みたヤツに絡まれるだけみたいですよ。」

「それは、違うな。」

俺の心を読み、ついでに否定してきおったよ……。  
どゆこと？

「普通は輪廻にそのまま巻き込まれる。俺、こんな成りしてても一応最高神だからさ、一人にこんな面会してる時間はないの。用事があるときでないとな。でも人間て凄いな。輪廻を知ってるっておかしくない？記憶は抹消されるはずなんだけどなあ……。」

知らん。ブツダにでも聞いてみる。

俺はそういう系統は詳しくねえからな……。  
それにしても、最高神？こいつが？

「ああ、ゼウス……またはジュピターと呼ばれている。どっちで読んでもいいよ。よろしくカエデ！」

軽く嬉しそうに笑い、白いマントを翻して自己紹介。

「なんで俺を名前呼び？まあいいや、ゼウス、か。」

「……つまり、用事があるから俺を？まさか「神の都合で殺しちゃった ごめんね」的なノリか？」

「んなアホな。これでも仕事はちゃんとやってる。ミスって殺すなんてありえないよ。」

へえ、じゃあ生前に本で読んだようなことは無いのか。  
・・・っつーか俺の心にプライバシーなんてもんは存在しないのな  
？年中無休オープンかコラ。

「うん・・・んで、話を戻すけど、カエデには行ってもらいたい  
ところがある。カエデに通じる言葉で言えば、異世界転生だ。」

急に真剣な目になってゼウスは語りだす。口元は笑っているが・・・  
俺は死後の世界に行くんじゃないのか。  
地球生活が終わりを告げた・・・。まだ未練あんだけどなあ。グス  
ン。

「そんなの、ケータイ片手にふらふら走るから悪いんだろ？」

グサ！！！！

この一発は、強烈だぜ・・・。しかもこいつ終始笑顔だし。  
ふう、まあいいや。異世界ねえ。でも、なんでだ？

「ちよつとその世界の歴史が変わりそうだね・・・どうせなら、カ  
エデみたいに信念を貫く性格の人間を放り込んで、いい世界にした  
いじゃない？まあ、カエデが断るなら別の死人を探すけど・・・ダ  
メかな？」

へえ、いい世界にしたい、か。まあ別に俺としてやり直せないんな  
ら地球にいても仕方ないし、異世界も面白そうだ。加えてこいつの  
考えにも乗せられたい。断る理由は・・・ないな。

「マジで！？いやあ、助かるよ。じつは信念もってる人間探すのっ  
て、結構辛いんだ。了承してくれてありがとう。」



髪を掻きつつ、ゼウスは笑う。安心したような笑みだ。神って意外と親しみやすいものなのかもな……。

んでさつきから信念信念って、なんのことだ？

「つまり、その世界の悪に染められない人間ってこと。せつかくいい世界にしたいのに、放り込んだ人間が悪に走ったら意味ないでしょ？」

……確かにな。でもいざ行くとして、俺魔法なんかしらないよ？

「あ、そうそう。カエデ異世界行ったらチートだから。魔力量とか一流魔導士の100倍だから。ついでに動体視力、身体能力もほぼ最強。おまけにカエデ人の“死”に慣れてるから、最初から最強だよ？」

人の“死”に慣れてるってのは確かだが、嬉しくねえな……。

「じゃあ、話すことはコレだけだ。準備はいいか？あ、言い忘れた！創造魔法が使えるから、たぶんそれだけで序盤は平気だと思う。呪文は、“創造　○○”○の部分に固有名詞いれればいいからさ。まあ、頑張れ。」

「創造魔法、か。分かった。歴史が変わりそうってのも興味あるしな。行ってくる。」

うん、久々に喋った。

すると、なんかさっきの倍の笑顔でゼウスが近づいてきた。

「いってらっしゃい。がんばってな。」

そういつてゼウスが俺の肩に触れ、俺はこの空間から、消えた。

## 第1話 異世界初日(前書き)

落ち着けば週一投稿にするつもりですが、やっぱり初日って乗っち  
やいますね(笑)  
連続投稿です

## 第1話 異世界初日

ゼウスに肩を触れられてから、少しの間浮遊感があった。俺は少々怖いので目を瞑ってそのまま動かないでいる。

数分後、その違和感がなくなり、地面に足がついた感覚があったので、目を開く。

そして・・・あまりに美しい光景に、息を呑んだ。

見る限りの草原に、可愛らしく咲く様々な花たち。空は蒼く澄み渡り、細く長い川がせせらいでいた。

「確かに、異世界かも知れねえな。」

俺は一人感嘆の声を漏らす。少しの間ここで心を洗いたいなどと洒落たことを考え、その場に大の字で寝転がった。

自然と、寂しくはないものだ。まあ家族とのかかわりがほとんどないから、仕方ないかもな。

何故寂しく感じないか・・・少し今のうちに俺の過去を清算しておこう。

俺の父は傭兵だった。その父は傭兵の中でも屈指の実力者で、結構な二つ名を持っていたらしい。

もっとも俺に対しては優しく厳しく戦闘術を授けてくれた一人の師であるのだが。

俺はリビアで生まれ、少しの間そこで育った。両親共に日本人だから言語は日本語しかおぼえず、そのためリビアに友人はいなかった。そんなある日、住む街に火の手が上がった。敵軍の侵略である。その時5歳だった俺は何がなんだかよく分からなかったが、沢山の人の

間に両親と一緒に囲まれた時、父から一つの拳銃をもらった。

父には小さい頃から戦闘技術を習い、殺さねば殺されると教わっていた。

まあ、日本じゃありえない話だな。

その拳銃を俺に渡した直後、周りに居たオッサンたちが一斉に射撃。父は二人の盾になって死に、母は俺を抱いて必死に走った。後ろから恐ろしい形相で走ってくるおっさんたち。

・・・俺は母親に抱かれたまま何がなんだか分からず銃を乱射。奇跡と呼ぶかは分からないが、追ってきた10人のうち、8人が倒れた。残る二人。母は俺を降ろすと、護身ナイフで二人に切りかかった。

母も父と結婚した身、後に聞いた話では、母もまた元傭兵とのこと。母はあっさり二人を片付け、俺と母を追うものはいなくなった・・・父を犠牲にして。

その後俺と日本に帰り、財産のほとんどを俺に渡すと、母はリビアに戻った。

遣り残したことがある。そんなことを言っていた気がする。

そんなこんなで、その後は一度か二度くらいしか母親には会っていないし、別に自分から会おうとも思わなかった。

ゆえにだるうか、少しも寂しくない。自分の人生に悔いはあるが。

ふと、俺はこの世界を考える。ゼウスが言っていた歴史の変わり目・・・歴史が動く時は戦争がたいていくつついてくる。

不愉快なものだな。

・・・まあそんなこと、この風景には不似合いだけど。

しばしごろねをしていると、日が段々高くなってきた。この世界に四季があれば、春なのかな。この気温はとても心地いい。

グリュウウウ・・・

おなが、すいたな。

周りを見回しても誰もいなさそうなので、とりあえず川にそって歩くことにした。

水があれば町村もあるだろう。

川にそって歩いてみると、道に出た。舗装されているわけではなく、茶色い土が顔を出している。ふむ、右と左、どちらに行こうか。

キーン！ キーン！

なんだ？右の方角で剣戟を交えるような音が聞こえてくるが・・・行ってみるか。

右の方へ行くに従い、だんだんと音が大きくなってくる。

少し大きめのカーブを曲がったところで、正体があった。50Mほど向こうで戦っている。

・・・にやるほど。馬車を囲んで乱戦してる。なんか蒼い軍服みた

いなを着て、レイピアで戦っている集団と、上半身裸でサーベルもつて戦っている集団。

こりゃ騎士団対山賊ってところか？馬車は荷馬車などではなく、なんか豪華な作りなことから、たぶんどっかのお偉いさんってことが分かる。

んと、まあ騎士団の味方したほうが良さそうだな。

攻める側より守る側の味方するだろ？普通。

まずは武器だが・・・父の形見のあの銃でもいいが、もし銃がない世界だったら厄介だ。まずは俺の得意な武器で行くか。

「創造 デュアルディオスクロイ」

すると両手が光り輝き、接敵部分が刃となっっているトンファーが出現する。俺が幼少のころから触ってきた、父の近接武器でもある。さて、準備もできまし、行きますか。

まず、手前にいる三対一の構図があったので、そいつの救済に向かう。よくよく見るとそいつだけ軍服が変わっていることから、隊長的立場だと推測できる。

なんだか苦戦してるな。まあ三対一じゃしかたないか。ダッシュで向かう。

「ウオ!？」

なんだか異様に身が軽い。てか速い。本来なら6秒程度はかかるはずのところを、3秒たたずに目の前に出てしまった。

「兄ちゃん、加勢するぜ。」

「「「「「!？」「「「「」

一瞬で自分たちの目の前に現われた事に驚いたのだろう。馬車を囲んでいた全員がこちらを向く。  
まあ、知った事じゃない。

「何者だ！てめえ！！野郎ども何ポーっとしてやがる！！！かかれえ！！！」

おくの方にいる一際でかいオッサンが一番最初に我に返る。どうやらアレがリーダーか。

アイツの周りには5、6人の騎士団が倒れている。強いらしいな。そのリーダーの掛け声で、その場の全員を我に返ったようだ。

俺が話しかけた団長が、慌てて俺に向かって叫ぶ。

「危ないからさがっている！！こいつらはこの辺では有名な山賊、一般人の敵う相手じゃ」「うおうりゃああ！！！」な！？」

隊長さんは俺を制してくれたようだが・・・空気を読まずに俺に切りかかる輩が一匹。

サーベルを振り上げ、空竹割りにしてこよつとする。

「おせえ。」

右手を横に回転一閃。そいつの首を薙ぐ。

ドサ・・・

「「「「「は？」「」「」「」

「で、兄ちゃん、こいつら、名前なんなの？」

俺は薙いだトンファアを肩にかけ、隊長っぽい兄ちゃんに再度聞く。





騎士団の連中、戦え。

ザコを相手にするのが面倒になったので、とりあえずリーダーの元へ駆ける。

「よっ。」

「!?!」

ゼウスにやられたのと全く同じことをしてみた。リーダーの肩を後ろから叩く。

慌ててコチラを向いたところに一閃。首を飛ばした。これでひとまず片付いたか・・・俺はため息を一つ。

「ふう。ん?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

あまりにもさつきと違って静かなので俺が辺りを見回すと、敵味方関係なく、お口あんぐりな状態だった。

「ほれ、リーダーくたばったよ。・・・失せな。」

「ヒイヒイヒイ!!! 逃げる!!!」

最後の三文字にありったけの殺気を込めた結果、山賊どもは一目散に逃げ出した。

「さて、行くか。じゃな、兄ちゃん。」

「あ、ま・・・・・・・・」

俺は隊長っぽい兄ちゃんに別れを告げ、背を向けて歩きだした。馬

車が来たほうにはきつと町があるだろう・・・」お待ちください！  
「！！！！」ん？

聞こえたのは少女の声。・・・女の子なんていたっけ。  
そう思つて振り返ると、馬車の扉から少女が顔を出していた。

「お待ちください・・・。助けられた恩があるのに・・・お礼くらい言わせてください。」

そういつて、旅装ながらも気品のある服をまとい、金髪巻き毛の口  
ングにエメラルドの瞳・・・絶世の美少女とも言える少女が馬車か  
ら出てきた。

「かわいい・・・じゃねえや、礼なんていらねえよ。気分でやっただ  
けのことだ。」

「それでも。ありがとうございます。・・・もしよろしければ、お  
名前をお聞かせ願えないでしょうか？」

話しながら、俺の目の前まできた。おい騎士団。素性を知らない人  
間の前に主を出していいのか？

「・・・カエデだ。それじゃあ。」

「カエデ・・・待ってください。カエデさん！」

俺の名前を反芻したのち、もう一度引き止めてくる。

「ん？」

「・・・もしよろしければ、私と一緒に、一度王都までいらっしや  
いませんか？」

「嘔吐？」

「王都です！！！！！！」

ん？ニュアンスの問題だな。顔を真っ赤にして叫ぶお嬢さん。和むわぁ……。

「正直、俺ここがどこだか分からないんだ。説明してもらえるか？」

「ほえ？あ、はい。旅の方は国とか知らなくても仕方ないですよね。」

いつの間にか俺は旅人になっているが、しかたがない。そのほうが都合いいしな。

「ではとにかく、馬車にのってください。話は道すがらいたしまし  
よう。」

改めて聞くと、馬車もファンタジーの部類だよなあ。  
てか、俺乗っちゃっていいんかいな？

「さすがに馬車に俺が乗るのはちょっと……行くぶんには構わな  
いけどさ。」

「そうですか。……あなたのような方が来てくれるのであれば、  
私兵団の皆さんにも迷惑かけずに済みますし……。ちよつと待っ  
てくださいね。」

そういつてお嬢さんはさっきの隊長っぽい人のところへ駆けていっ  
た。

……つてか真面目に騎士団空気じゃねえか！！！！

数分して、お嬢さんが帰ってきた。

「お帰り。」

「ほえ？あ、た、ただいまです・・・？ってそれより、私兵団の皆さんにはやはりドルマの街に帰ってもらうことにしました。」

「え？」

帰ってもらって？護衛ちゃうん？

するとお嬢さんは少しあごに人差し指を当てて考えた後ち、話し始める。

おおかた言葉を選んでいたのだろう。

「えと、この人たちは私の護衛ではなくて、街の私兵団の方々なんです。王都までは山賊や魔物がやすいので、市長さんがつけてくれたのですが、私兵団の皆さんにとってもこれからは死人が出るような旅・・・。それにカエデさんがいらしてくれるのなら、危ない旅路も平気かなあと・・・ダメでしょうか？」

そんなカワイイ顔で首かしげられてもなあ・・・。てか私兵団だけ？チキン過ぎるだろおい！！

「まあいいけど。そのかわり俺は一文無しだし、お嬢さんはいいのか？こんな得体の知れないやつと旅して？」

するとなぜか顔を赤くして・・・

「お、お嬢さんはやめてください・・・／＼／＼」

あ、そこ？

「私はイリス・ハーミットっていいいます。イリス、と呼んでください。」

「あ、悪い。よろしくなイリス。んで、いいのか？俺とで。」

「もちろんです。助けていただきまし……何より味方になっ  
ていただきたいです……」

「ん？最後なに？」

「あ、いえ、こちらの話です！」

「じゃあ、行きますか。」

イリスについていくと、私兵団の一人が二人分の馬を用意してくれ  
ていた。

これでいけということだろうが、馬乗れるかねえ？

イリスは颯爽と馬にまたがる。

みようみまねで俺も飛び乗った。まあ、イリスのマネをしていれば  
なんとかなるだろう。

「では、いままでありがとうございました。」

馬上からイリスが私兵の一人に頭をさげる。

「いえ、お気をつけて。」

ハイヤ！！！！

イリスの声にしたがい、馬が駆けていく。俺も行くかね。面白くな  
りそうだ。

## 第1話 異世界初日（後書き）

数箇所文章のおかしい点を修正いたしました。

## 第2話 さすらい道中

カッポ カッポ・・・

それにしても良い天気だ。馬に乗ってゆっくり旅するというのもなかなかオツなものかもしれねえな。

時折吹く優しい風が、俺の耳元をくすぐっていく。その度に耳にかかる髪を払うイリスが可愛らしい。

俺とイリスの二人は、林の木漏れ日でかわりばえのしない道を騎乗して進む。

「ところで、イリスは何で王都に？」

だいたいこの世界の情勢については聞き終えたので、イリスの目的についてたずねた。

少しの間考えているようだったので、その間に世界の情勢を復習する。

その世界の情勢とはこんな感じだ。

ここはアリア王国とアルテナ皇国との国境に位置し、ギリギリ、アリア領というくらいの場所。アリアの西端、ドルマの街がイリスの故郷とも言える場所らしい。

アリア王国は、隣国ルスリア帝国の侵略により、昔とは違ういびつなハート型のような形をしている。

昔はもつと丸い形をしていたそうだ。

王国に行くには二つの道がある。ここから真っ直ぐ王都に行く最短



ルートと、凹型の弧を描きながら行くルートの二つ。

何故真つ直ぐ行かないルートがあるのか。それは、ここがハート型の左高めに位置する土地で、王都がハート型の右高めの位置にあるから。つまり、このまま最短ルートを通っていくと、ギリギリルリア帝国に差し掛かって治安が悪いから、らしい。

正直、道に山賊が出るようなこの辺りの治安がいいのか疑問だが。

あとは、ルスリア帝国は巨大国家であり、天下統一を武力行使で・  
・て、まあ、要はいまこの辺は戦国時代だということだ。

あと、魔法は才能がないと使えないらしく、意外と貴重なんだそう  
だ。その魔導士を動員してくるルスリア帝国はやはり一大強国、と  
ま、魔法に関してはおいおい教えてもらおうとしますかね。

世界の情勢終わり！！

で、今に至る。

質問してから少しためらいがあったらしいが、意を決したらしく、  
そのエメラルドで澄んだ目をこちらに向ける。

「私は、国王に徴集されたんです。旅の方ならもしかしたら風の噂  
で聞いた事があるかもしれませんが、戦女神という二つ名を持って  
います。王都では割と有名なんですよ？」

なんかけつたいなあだ名だよおい。二つ名って……。  
しかも戦の女神か……ずいぶん歴戦の勇者、うちの母親を想像し  
そうな名前だが。

「見えないな、そんな風には。っていうかそんな二つ名あるなら、さつきもさつきと山賊やつつければよかったのに。」

「ほえ？あ、違います！戦うのではなくて、軍師なんです。「!?」今回は私兵団の皆さんに任せきりで・・・ほんとに申し訳なかったと思っています。」

どうやら彼女は俺が驚いたことには気付いていないようだ。だが、俺には一つ信念がある。軍師・・・試してみるか。俺と考えが違えば、ここで別れさせてもらおう。軍師とは、人々を使役して殺し合いをさせる側の人間。

その軍師が人の命をどう見ているかで、状況は変わってくるからだ。

「・・・カエデさん？」

俺が考え込んでいることに気がついたのか、話しかけてくる。だが、俺はいまの顔は見せたくない・・・。

何せ多分俺は今、元の世界の戦争を思い浮かべて冷酷な目をしているだろうから・・・。

俺は顔を伏せ、自分の手綱だけを見ながら、彼女の信念を聞いてみる事にした。

「軍師？」

「ほえ？はい。私は軍師です。」

ダメだ、声も無機質にしか・・・。

でも違和感を感じていないようだし、このまま続ける。

「戦争って、どう思う？」

「戦争、ですか？嫌いですよ？」

何言ってるんだろうこの人？とでも言いたげな声。  
この世界でもそれは常識なのかも知れないが、まあそうだろうな。  
でも俺が聞きたいのは

「そういうことじゃない。戦争ってなんだと思う？」

「どう思う、ですか。庶民にとってはいい迷惑です。」

これは自分なりの答えを持っていたのか、即答してくる。  
この答えは俺の考えと同じだから何も言わない。

「・・・そうか。迷惑なのは、庶民だけか？」

「？」

首を傾げるイリス。見てはいないが、雰囲気で分かる。

俺はあまり顔を見せないようにして、質問を続けた。

ついでに今は顔を隠せるようなフードなどはついていない、黒のジーンズの上は白いストライプのYシャツ。

第二ボタンまで開けている、少し季節の早い格好だ。

「他に迷惑するヤツはいないか？」

「ほえ？どうしたんですか？カエデさん。」

「とりあえず答えてくれ。」

俺は、国のごく一部の暗愚な考えに国の民である兵士を動員して殺し合わせるってというのが間違っていると思っている。軍師も、小手先で兵士を動かし殺し合わせる。たった数人のわがままないがみ合いの為に、どうして関係ないもの同士が殺しあう？おかしい。自分が生きるために戦う。確かにそうはいえるかも知れない。でも、殺さねば殺される、その状況を作っているのは愚鈍な権力者たちだ。確かにうちの両親は傭兵だった。でも、戦争がなければ別の暮らし

があつたはず。何万人もの命を奪い、喧嘩をするっておかしくないか？戦争は災害じゃない。愛する人を奪われて、仕方なかったはいえないだろう。ゴミ数人の喧嘩に巻き込まれて死んだのと同じなんだよ！！

「徴兵された、人たちですかね？」

お？俺の考えと同じだ。

「私は軍師として人を動かす時、申し訳ない気持ちでいっぱいになります。間違つてもおくにの為だ、なんて言えません。だってそうじゃないですか？たかだか上の数人のせいで犠牲になるんです。だから私は、戦争が嫌いです。」

ほう。

俺は顔を上げた。たぶん、もう無機質な目はしてないだろうから。

この子は俺と考えが似ている。

イリスを見ると、さっきと全く変わらない澄んだ眼をしていた。

今言ったことは本当のことだろう・・・だが。

「じゃあなんで軍師に？」

俺が疑問に思っていたことを口にすると、彼女は、少しため息をついた。

「本当は、戦争になんて関わりたくありません。でも、何もしなければ終わらない。だったら策を使って一回で追いついたほうが命は減らないでしょう？」

つぶす、ではなく追いつくといったか。ますます気に入ったかも。

「俺、イリスのこと気に入ったわ。」

「ほえ！？え・・・いやでもまだ・・・はうう／／／／」

何か勘違いしているみたいだが、目の保養になるからいいか。

日がだんだん暮れてきた。最初の村に着くまで、あと半日だそうだと  
というわけで、今日は野宿。

適当に集めた薪に火を灯し、さつき襲ってきた猪っぱい魔物の肉を  
焼く。

あとはイリスの持っていた携帯食料のドライフルーツが今日の夕食  
だ。

そういえば、おなか鳴ってたのに忘れてたな。

異世界初の食事じゃねえか？

「はぐはぐ・・・ほおひへば「飲み込んでから喋れ。」もぐもぐこ  
くん。そういえばカエデさんって、フルネームなんていうんですか  
？」

「カエデ・ミナモトだ。どうした？」

俺とイリスは近くにあった丸太に腰掛け、互いに対面になるように  
座っている。間に焚き火があるような形だ。

「いえ、珍しい名前ですし、ファミリーネームも聞いた事がないの

で……。失礼ですが、どこの出身なんですか？」

むう、そうきたか。どうしようかな、話すべきか、言わないでおくか……。

俺は食べ終わった焼肉の串で、持っていないほうの手をトン、トンとたたきながら考える。

「あ、やっぱり失礼ですよね。」

イリスは申し訳なさそうにフォローをしてきた。

どうやら俺が答えないのを言いたくないからだと思っただらしい。まあ当たらずとも違うのだが。

まあいいか。イリスだし、なんだかんだ言ってこれから一緒に旅するんだ。

俺は串を焚き火の中に捨て、話し始めることにした。

「俺は……この世界の人間じゃない。」

「ほえ！？どういうことですか？」

今日一緒にいて思ったけど、イリスの驚き方がかわいいな。

俺を食い入るように見つめてくる……。おいおい、綺麗なウェーブが燃えるぞ？

「この世界に来た理由は、この世界が歴史の変わり目にあるから。」

「歴史の変わり目……ですか。」

「ああ、もうそろそろ、歴史が動く。」

まあゼウスの受け売りだけだな。

少し凄みを利かせてそう言うと、イリスはゴク、と喉を鳴らして恐る恐る聞いてきた。

「どんな風に、ですか？」

「そりゃ俺にもわからん。」

「・・・？じゃあ歴史が動くって？」

今回ほえ！？って言わなかったな。まあいいや。

この人何いつてんだろう？みたいな感じに思われているかもしれないが、まあ仕方ない。

「歴史は自分たちで動かすもんだ。だが必ず何かが起きるさ。」

「そうですか・・・でも、正直力エデさんが異世界人っていうのも素直に納得できる気がします。」

「・・・なんで？」

「だって、その格好に黒髪黒瞳。珍しいなんてもんじゃありませんよ？」

そうか、黒髪とか珍しいんだ。ちなみにルックスは上の中くらいだと自負しているが、まあそんなことどうでもいいな。黒ジーンズに白のストライプシャツは珍しいのか？

「ま、信用する要素になったならよかったよ。」

「はい。」

「イリス。」

「はい？」

ここまで来たらもう、さっき試したこととか全部言っちゃったほうがいいかもな。

「さっき俺はイリスを試した。ごめん。」

「試したって？」

パチパチと、焚き火の爆ぜる音が耳に心地良い。  
どういふことか聞いてくるイリスに、俺はまだ残っていた焼肉を焚き火の近くから取りながら答える。

「馬上で、気に入ったって言っただろ？」

「ほえ！？いや、あれはその・・・／＼／＼」

照れてるのは目福だが、いろいろ勘違いしてねえか？

とりあえず串の肉を食いちぎり、モグモグしてから話を戻す。

「俺な、戦争大嫌いなんだ。正直軍師って言われた時は一瞬敵意さえ芽生えた。」

「！？」

そりゃ驚くわな。さっきは別段殺気も放たなかったし、それに一緒に旅するって決めた直後だもんな・・・。

「でも、戦争について考えてることが酷似していた。“皆に迷惑。上の人間が勝手にやればいい。”ってな。だから、一緒に行こうって決めたんだ。」

俺が微笑みかけると、驚いた表情から、段々泣き顔に・・・え？

「・・・クスン。」

「どうした？」

目を手の甲でこすりながら、イリスは言葉をつむぎ始めた。

b

「えぐ・・・私、この考えでいつも他の参謀にバカにされるんです。」



先代アリア王にも言われました。国の為に死ぬのは名誉だつて！！  
！「ツツ！」だから私、軍師っていう仕事に汚れすら感じます。いまの王はどうか知りませんが、同じ考えだったら軍師辞めるつもりです……。だからカエデさんみたいな強い人に認めてもらえて嬉しかった……。」

思わず話の途中でしたうちしてしまった。

なるほどね……。俺と共有したこの考え、異端の発想なのかもな。だから誰にも認めてもらえず、今に至ると。

それにしても……。俺が強いわけじゃないが、正直この国の王……。先代か？には正直嫌悪しか生まれてこない。

それに対しての自分の無力さを嘆くこの目の前の可愛い少女を見て正直抱きしめてやるうかとも思ったが、さすがにそれはまずいので、背中をさすってやることにした。

泣いている間、ずっとさすってあげていた。

### 第3話 ゼウスの思惑

カエデたちが眠っているころ、それを空から見下ろす者がいた。  
自称最高神のゼウスである。

「自称じゃねえ!!!!!...まあい、とりあえず。カエデは仲間を見つけたみたいだな。こっちの思惑通りに進んでいる。さて...」

そういつてゼウスが取り出したのは一冊の本。

そもそも歴史の変わり目をゼウスが知っていたのはこの本があったからである。

この本の内容は、歴史。

いま現在カエデが滞在している世界の歴史である。

この本の特異な点は、現在の10年後までの歴史が載っているという点である。

そこは神クオリティといえるだろう。

つまり。

実はゼウスは、この先10年の未来を知っていたことになる。

その未来とは...ルスリア帝国による専横。

他国民は全て奴隷と化し、ルスリア帝国幹部が世界を牛耳る。

平和だった草原は消え、武器工場や兵器工場など、文明の汚点となるであろうものばかりが現れる...

「そんなの嫌だもん。俺の作った世界にはそんなどろどろになつて欲しくないもん。」

ゼウスはカエデを眺めつつ、呟く。  
異世界人であるカエデが歴史を変えてくれることをゼウスは望んでいた。

本当の歴史は伏せ、どうせならいい方へ等と言って。

騙したことは申し訳ないと思っっているが、ゼウス……いや、世界にはカエデが必要だった。

「頼むカエデ、世界を変えてくれ。」

そういつてゼウスは天界に帰っていった。

その時はゼウスといえどまだ気づかなかったのだろう。

もう10年後の歴史が変わり始めていることに……。

### 第3話 ゼウスの思惑（後書き）

アストさんのご指摘により、誤字を訂正いたしました。  
助かります。ありがとうございます。

## 第4話 創造魔法はレア度10!!! (前書き)

〈報告〉

- ・アストさん、感想ありがとうございました！
- ・章をつけることにしました。これからもよろしくです。

#### 第4話 創造魔法はレア度10!!!

朝。俺が目を覚ますと、イリスは昨日の残りの肉を焼いていた。

「あ、おはようございます。」

「おはよ〜。」

こちらを向いてにつこり微笑む彼女の目には、昨日の涙はもうない。まあよかった。

「はい、朝ごはんです。」

「さんきゅー。」

串焼きの肉を渡され、かじりつく。イリスはもう食べ終わっているらしい。

「ごくん。イリス、王城にはいつまでに着けばいいの？」

「そうですね。確か30日以内に着けばベストとか言われてましたけど……。」

「ベスト?」

徴集とかって、ベストとかじゃなくて普通規定時刻とかあるだろう? イリスは昨日と同じように俺の対面の丸太に座って、自分の膝に頬杖をつけて俺を見ている。

正直、めっちゃくちゃ可愛い。

「あ、はい。軍師ですから、戦闘に出る兵士のように急いで集めるというわけではないんです。なので、召集というよりは“何日ごろいらしていただければ結構です”の方が近いですね。」

なるほどね。アジアの軍隊でも軍師ってかなり偉かったからな・・・。  
俺も肉だけの朝食を終え、軽く伸びをして立ち上がる。尻についた木屑を払って、焚き火の周りにあった串の類を全て焚き火に放り込む。

「このまま行くと10日かからずに着くと思いますよ？結局ルスリア帝国通ることになりましたし。」

「早いな。」

イリスも立ち上がり、パンパンとお尻を払うと軽く屈伸をして膝をやわらかくしていた。

「ええ。でもルスリアは治安が悪いですから、いつどうなるかわかりませんし。早めの行動ですよ。」

「山賊が出るようなここより治安悪いのか？大丈夫かよルスリア・・・。」

俺は呆れながらそう言って、イリスに背を向け馬の上にあった荷物の整理を始める。

「あ、そういえばカエデさん！」

いきなり大声出すな。

荷物を馬から落ちないように戻し、振り向く。

「山賊倒した時のトンファー！！どこにあるんですか？」

「ああ、あれ？」

創造魔法しらないのか？

イリスは慌てて俺に聞いてくる。道に落としてきたとでも思っているのだろうか？

とりあえず具現化するか。

「創造「！？」デュアルディオスクロイ。」

俺の両腕が輝き始め、光の集束と共に、俺の手に黒く輝くトンファーが現われる。

こいつ、いい感じに手になじんでるな。少し握り心地のよさに口元を緩ませる。

ふとイリスを見ると……。

「そ、創造魔法！！！！？？？」

「ん？」

「カエデさん、創造魔法使えるんですか！？」

イリスはビククリしたような顔で俺にツカツカと近づいてくる。どんだけ驚いてんのよ……。

「ああ、なんで？」

「……エンシエントスペル……。」

なんか一人でつぶやいてるけど、俺にはさっぱりわからない。エンシエントスペルってなんぞや？

イリスはいまだなにやら呆けた顔でブツブツ言っている。

「イリス？」

「……」

「イリス！？」



「ほえ！？あ、すみません、<sup>トリップ</sup>放心状態してました。なんですか？」

「おいおい、大丈夫かこの子……。  
それよか説明よ説明。」

「俺さ、昨日も言つたとおり、この世界来たばかりで何も分からな  
いんだ。できれば魔法に關しても教えてもらいたいんだけど。」

「あ、そうでしたね。わかりました。この道を行けば昼過ぎにはス  
トークタウンに着きます。魔法の話も道すからしましょう。」

「そういつてイリスは焚き火の火を消し、馬にまたがる。  
俺も馬から荷物を降ろして、乗った。」

「……ということなんです。  
」  
「なるほどね。俺やばくね？」

「そろそろ昼を過ぎるかというところ。あいも変わらず田舎道を騎乗  
して進む俺たちだったが、さっきから道行く人がちらほらと増え始

めた。町が近い証拠だろう。  
なんだかその人々から妙に視線を感じるのが不愉快だが、まあ殺気の類ではないので放って置く。

さて、イリスの魔法についての説明をかいつまんで話すところなる。人間は体内にそれぞれルナを秘めており、それを外に具現化することによって魔法を放つ。ルナの量には個人差があり、又の名を魔力。うん、こっちのが分かりやすいな。

まず通常魔法について。

通常魔法には補助効果のあるものと攻撃できるもの二通りがあり、8属性に分類することができる。

その属性ごとに下級魔法、中級魔法、上級魔法があり、魔導士とは上級魔法まで使役できる者を指す。稀に古代呪法と呼ばれる上級よりも上の威力を持つ魔法を発動させる魔導士がいるが、それは国家に3人居ればいいほうらしい。

属性は、火水木土雷風光闇の8つ。一人の魔導士が使えるのは、大体2つが限度であるらしい。とんでもない魔力を持つ人間が、たまに3つ使役することができるらしいが・・・。

余談だが、イル教国には一人とんでもない魔導士がおり、6つの属性に6つの古代呪法を使える化け物染みた人間らしい。まあそうだな。

次に、治癒魔法と召喚魔法。

いずれも特殊な才能なしには使えない魔法。

特に治癒魔法は100人に一人の才能をもった人間にしか使えない、血を選ぶ魔法らしい。

さらに修行を積まねばならないらしく、重傷を治せるような魔導士

は、たいてい老人になってしまっているとか。

最後に太古魔法。又の名をエンシエントスペル。時空魔法と創造魔法がそれに当たり、特に創造魔法は失われた魔法らしい。・・・ゼウスめ。目立つことしやがって。そりゃ誰でも驚くわ。

時空魔法の使い手は、ただ一つの家系。代々伝承され、他の人間には使役することが出来ないらしい。今この世界でその魔法を使えるのは、その家族の父、母、娘の三人だけという話だ。けっいたいな話だ。

まあ、これでかいつまんだ話は終わり！

「カエデさん、着きましたよ。ストークタウンです。」

俺が考えている間についたようだ。顔を上げると、風車が回るうららかな町が目前にあった。

第4話 創造魔法はレア度10!!! (後書き)

・ ryoさんのご指摘により誤字を訂正いたしました。ありがとうございます！

## 第5話 ストックタウン

草原の村、というのが妥当だろうか？

いや、露店等が立ち並ぶメインストリートの活気を見ると、やはり賑わいの町とも思える。

背後の野山とわらぶき屋根の家、そして穏やかに回る風車の三要素がなければ、完全に繁華街ともいえるだろう。

イリスが宿の予約を済ませてくれ、昼を食べ終わった。

・・・そろそろずっとイリスのおごりというのも申し訳ないな。

そしていまメインストリートをふらついているのだが・・・。

「そっといえばカエデさん。」

「ん？」

イリスが露店を眺めながら話しかけてきた。

俺は相変わらず、村に入る前からある、好奇の視線やこれみよがしな噂のされかたに辟易しているのだが。

「カエデさんって結構この町や、その周りの町では有名らしいですよ？」

は？思い当たる節がないんだが。てっきり俺の黒髪や黒瞳が目立つものだとばかり思っていた。

「・・・なんで？」

するとイリスは驚いたようなあきれたような視線を投げかけてきた。

「なんでって・・・。カエデさんあの盗賊団を一人で片付けたよう

なものでしょう?」

「え?あれだけ?」

「あれだけ?つて……。あの盗賊団“ワーウルフ”は、この辺一帯を牛耳っていたようなものですよ?あの頭の為にとれだけの勇者が地に伏したか!?!?」。。。。。」

正直あの盗賊団は拍子抜けだっただけに、たいしたことはないと思っっていた。

しかも人狼つて。。。名前まけしすぎだろ、とさえ思った。

でも、あいつのせいで何人も人が死んだんだな。。。。。

正義を貫こうとした人間が、悔し涙を流しながら、何人も倒されていったんだな。

そう思うと、自分にかかっているチート補正がどれだけ自分を傲慢にしていたかが分かった。

うん、これからは自分のことを見据えていこう。

。。。らしくねえな。気にしないでくれ。

「。。。カエデさん?」

「ん?ああ悪い。何?」

首をかしげているイリス。やっぱりカワイイな、コイツ。

「何か考え込んでいたようですが。。。あ、いえ。あそこに人だかりができていたので、見ていかないかと思いました。」

「人だかり?」

イリスが指差すのはメインストリートのはずれ、つまり町の入り口付近だ。

たしかに人だかりができているが。。。。。

二人で取り巻きの後方まで行ってみると、どうやら人々が囲んでいるのは二人の男だということが分かった。

一人はクレイモアのような大剣を振り回す屈強そうな偉丈夫。

もう一人は、赤髪が映え、ちよつとニヤついた顔をしたイケメン。

細くはないが、屈強というわけでもない体格で、得物は細身の長剣。戦況はどうなっているか？

正直答えるまでもない。

赤髪は余裕の表情で息すら乱していないのに対し、偉丈夫はクレイモアを地面に突き刺し、それを杖代わりにしてかろうじて立っているほどだ。

もちろん、体には異様なまでの量の切り傷があり、一つ一つが深い。並の人間では立っていることすら困難だろう。

「オッサン、これでおわりか？もう弱いやつには興味ないから消えてくれ。俺は、もつと強いヤツと闘いたい！」

赤髪がそんなことを言い、偉丈夫に近づいて行って、杖代わりのクレイモアを蹴る。

とたん偉丈夫は崩れ落ち、彼の部下たちであろう数人が助けに現われた。彼らは偉丈夫を引きずって大衆の前から姿を消した。

「ふう。骨のないやつちゃ。」

赤髪はそういうと、散らばっていた荷物をまとめ、背負う。

だんだんと人がいなくなっていく中、俺は赤髪の様子を眺めていた。

「これでよしっ」

赤髪は最後にのぼりを背中にくりつけ、メインストリートの方、もとい俺たちの方へ向かって歩いてきた。

うん、彼の背中なのぼりが気になる。

・・・なにに？ 『俺に勝てたら金貨一枚。ただし勝負の前金として銀貨一枚いただきます。』  
ずいぶんと腕に自信があるんだな。

「あれ？あの人もしかして・・・。」

段々と近づいてくる彼の顔を、目を細めて確かめようとしているイリス。

「イリス、心当たりでもあるのか？」

イリスは彼から目を離し、答える。結構近づいてきたな。

「はい。アリアーの剣士として名高い・・・。」

おい、そこで言うって聞こえるんじゃないか？

ちよつとすぐそこまで赤髪が来たところで・・・

「“焔龍” 「ピクッ」さんではないかと。」

あつちやあ・・・いまアイツの耳から“ピクッ”って聞こえたよお。  
案の定俺らのところまで寄って来て・・・

「へえ、俺のこと知ってるんだ？」

「ほえ！？あ、はい。一度私は戦場で見たことがあります。」



やっぱりな。赤髪はイリスの横に目線をあわせるようにかがむと、話しかけてきた。

まあいいや。二つ名持っているほどの人間には少し興味がある。

「そんなカワイイなりして戦場ねえ・・・金髪、翡翠瞳・・・もしかして戦女神さんかい？」

「かわいくなんかないです・・・はい、私は戦女神と呼ばれることはありますが・・・本名は、イリス・ハーミットです。」

「やっぱり？そうか。会えて良かった。俺はドレイク。ドレイク・ベルナス。よろしくね。ところでその兄ちゃん？」

げ、絡まれたか。二人で戦場談義でもしてればいいものを。

スツと元の姿勢に戻ると、俺のほうに目線を投げかけてくる。少し俺より長身なだけに、俺を見下ろすような形だ。

でも、イリスもなかなか有名なんだな。

「黒髪に黒瞳・・・噂に聞く、トンファー使いかな？」

「人違いです。」

即答してみた。トンファー使いつて・・・俺この世界で一度しか使っていないんだが。

それでもこの情報網怖すぎだなあ・・・どこで噂が広まってんのか知りたいわ。

俺が戦つてるのを見た旅人でもいたのかね？

「うそこけ！！んな珍しい格好のヤツ間違えるわけなからうが。」

「で、なんか用か？」

激しいツツコミだな、コイツ。

俺が否定すると、結構な音量で反論がましてきた。

もう面倒になったので、頭を掻きつついかにもめんどくさそうに問いかける。

すると赤髪・・・ドレイクと言ったか？両腕を腰にあて、胸を張ってこう言った。

「よし、認めたな。俺は強いヤツを倒して武者修行をしている。お前は抑えているツモリかもしれないねえが、俺が見てきたなかでもお前はトップクラスの強さだと肌で感じ取ることができるんだ。何が言いたいか、分かるな？」

「俺と闘え”ってか？」

「(一)名答〜。」

本来ならここで「だが断る」とか即答するもんならだろうが、俺は正直闘ってみたい。

俺は戦闘意欲のない人間を傷つけたくはない。だがそれはつまり、戦闘狂相手ならとことん戦いたいということでもある。それにこいつが謳い文句にしている金貨一枚。ふんだくってやるうじゃねえか。俺は笑みを浮かべる。少し楽しくなってきた。

「いいぜ。」

「お、マジか！やべえ、武者震いしてきた！」

「ほえ！？カエデさん！？」

イリスは驚いてこちらを見る。まあ“焰龍”なんて大それた名前ついているヤツと闘って大丈夫なのか？という問いだろう。

それにしても武者震いとは。コイツは根っからの戦闘狂バトルジャンキーのようだな。

「ただし、こちらから条件は二つ。それを飲めばの話だ。」

「なんだ？」

俺が右手を突き出し、二本の指を立てるとドレイクは訝しそうに聞いてくる。

俺もあまり宿泊費とかでイリスに迷惑かけたくないからな。ついでに銀貨出すとしたらイリスの金になっちまうし・・・

「まず一つ。お前ののぼりに書いてある条件でやるが、前金などは出さない。つまり、お前が負けたら金貨一枚よこせ。俺は負けても金はださん。んで、二つ目。もし俺が負けて重傷または死んだ場合、お前が責任を持って彼女を王城まで送る事。」

「まあ、いいだろう。」

「ちよっと、カエデさん、死んだらって！」

イリスは本当に心配してくれている。

ドレイクは特に考えることもせず即答。

まあ、そう簡単には死なないさ。

「じゃあ場所は、人がいてもアレだから、あの岡の上の風車前。いいか？」

「おお！よし、そうと決まれば早く来いよ！？もっさっきっから武者震いが止まらねえんだ！！」

それだけさげふとアイツはダッシュで岡のほうへと走っていった。

## 第5話 ストークタウン（後書き）

- ・アストさんのご指摘により、不要な語を省きました。
- ・これからも文章やストーリーに対する疑問や注意点などありましてら皆さんよろしくお願ひします。

## 第6話 赤髪の剣士

「どーしてあんな決闘を受けたんですか!？」

さつきからイリスはお怒りムードだ。

いまは風車の岡に向かう途中。

ドレイクはずいぶん前から待っているだろう。ドレイクと別れたあと、俺らはいろいろ露店を冷やかしたり、服を物色して気ままに過ぎた。

宮本武蔵流じらし作戦だぜ。

「カエデさん!!!」

「んあ？」

わ、我ながらずいぶん気の抜けた返事をしてしまった。すると、イリスはうつむいて咳く。

「・・・その、絶対死なないくださいね？」

前の世界ではこんなに心配してくれる人は居なかったからな。なんか少し、嬉しいのかな。笑みがこぼれる。

「大丈夫だ。ほれ。」

「飴？」

さつき露店で買った飴だ。何味なのか気になるが、まああげることにした。

「戦いが始まったら口に入れな。溶けきる前におわるぞ。」

「おっそおおおおおおおおい！！！！！！」

「わりわり。あのメインストリート、いろんなもの売っててさあ、  
つい目移りしちゃった。」

ドレイクに向かってにっこり微笑む。

これも作戦のうちだ。たっぷり怒らせて、攻撃させまくる。  
俺の狙いは、最初から決まっているしな。

「まあいい。・・・安心しろ。お前の出した条件、二つ目は絶対ありえない。」

「？」

「俺は殺生は嫌いだ。極力避けてやる。」

少し遅れたことに関しての怒りがあるのか、複雑な表情でそう言うドレイク。  
ほう……。

こいつ案外ただの戦闘狂じゃないかもしれんな。  
少しの間が空き、ドレイクは若干不安そうな目で俺の体をつま先から頭まで何周か見ると……

「……ところで、武器はどうした？」  
「あ。」

やべえ、忘れてた。

「おいおい、いまから取りに行くってのは無しだぜ？」

苦笑いしながら頭を掻くドレイク。

只単にあきれているように見える……が。

どんだけ戦闘狂だよコイツ。早く戦いたくてうずうずしているのがモロ見えだ。

「大丈夫、すぐ出すぎ。創造 デュアルディオスクロイ。」

俺の両腕にトンファーが現われる。

「……驚いたな、創造魔法か。」

なんかドレイク、早くやることができてほっとしているような、トンでもない魔法に驚いているような、複雑な表情だ。

「まあ、説明は後でしっかりしてもらおう。……とりあえず改めて名乗ろう。俺はドレイク・ベルナス。」

「俺はカエデ・ミナモトだ。」

「カエデか……。では。行くぞ！カエデ！！」

俺に向かってドレイクが突進してくる。この男、納刀したまま柄に手をかけている。……。抜刀術か！！

その瞬間に、俺はイリスに向かって話しかけた。

「イリス、召し上げなれ。」

「頑張つて、くださいな。信じてますから。」

パクッ

キーン！！

ドレイクの突進からの抜刀切りを、トンファーで防ぐ。ツツ、なかなかのパワーしてやがるぜ。

「あの飴はなんのつもりだ……。？」

「溶けるころには勝負は着いてる……。つてな！！！」

鏢迫り合いの間に二言三言交わす。俺は最後の一言の時に力をこめ、ドレイクを弾き飛ばした。

「その体のワリになんつー力だよ。面白い！！飴が溶けた頃地べたを舐めてるのはお前だ！！！」

ドレイクが斬りかかる。そのまま2、3合打ち合い、お互いに飛びずさった。

「やっぱなかなか強いなお前。だがもうお前の弱点は見つけた！！！」



ドレイクが叫び、突きを打ち出す。

「!?!」

そうきたか！受け止めたが、俺の頬からツツー、と血が出る。

「その斬撃の受け方だ！お前が防ぐのはさっきから俺の剣の根元ばかり。確かに防ぐ力は強いが、俺の剣先までを止められねえ!!」  
「……」

その後もドレイクのラッシュは止まらない。段々と俺の頬や肩といった上の部分に浅い傷が出来ていく。

「カエデさん!!!!」

イリスが叫ぶが、集中する。

そして何十合と打ちあった。

俺の体には浅い傷がいくつも出来ている。

「俺が忠告してんのにその防御の仕方を直さないとはな。これで終わりだ!!!!」

ドレイクが左袈裟に斬りかかる。これまでで一番強い一撃。

……でももう充分だ。手はずは整った。

「守式き之型」

俺は右のトンファーでドレイクの剣身の中ほどを防ぐ。腕をクロスして防いでいる状態だ。

「!?!」

先ほどまでとは全く違う防ぎ方に驚いたのだろう。

だが、俺はこの技で終わらせる。

右で押さえつけたまま、体をひねりドレイクの左に出る。

そして右のトンファーで剣身を下から押さえた形で・・・

左のトンファーを縦回転一閃！剣の根元、先ほどからずっと打ち合っていた部位に寸分変わらず叩き込む！

バツキーン!!!!

打たれ続け、さらに一番弱い根元の部分。そして昼過ぎにクレイモアと打ち合った疲労・・・。

ドレイクの剣はいとも簡単に折れた。

「なに!?!」

「俺の勝ちだ、バーロー。」

剣身の無くなった柄だけの自分の剣を見つめるドレイク。

俺は作戦勝ちをした心地よさで、少しかっこつけたセリフを吐いた。

「俺の、負けだな。」

ドレイクはそう呟くと、柄だけ残った剣をしまい、ポケットから金

貨を一枚俺に投げた。

「約束だからな。仕方ない。」

それだけ言うと、先に岡を下っていった。

そしてイリスの元へ、俺は歩く。

「イリス、勝ったぜ！」

「切り傷が増え続けた時は、本当に怖かったんですよ？」

少し、目が赤い。

よくそんな精神で軍師やれてるな……。

俺はいま、少し呆れ顔でいるだろう。

「飴、残ってるか？」

イリスは黙って口を開ける。

あげたときよりずいぶんちっちゃくなった飴玉が、いびつな丸の形で舌の上に乗っかっていた。

翌朝

俺は宿のお姉さんに起こされた。

いつまで寝てるの!?!と怒鳴られ、仕方が無いので朝食に行くと、イリスが食事中であった。

「おはようございます。」

「はよ。」

席に着くとまもなく、朝の定食が並べられる。

この世界に米があったのには驚いたが、嬉しかった。

「さて、今日はどうする?」

俺は運ばれてきた料理を食べながら、イリスに問う。余談だが、箸はないみたいだ。米はあるのに……。

「そうですね。とりあえず東に向かしましょう。3日後には西アリアの東端、サンゼルスシティという都市に着くはずですよ。」

「はあ、また焼肉生活かあ。」

俺がため息をつくのと、イリスが意外な提案をしてきた。

「ではなにか買っていきましよう。美味しくて日持ちするものがあればですが。」

「お金大丈夫？」

「昨日金貨をもらったのでしょう？たまにはおごってくださいな。」

にっこり笑うイリス。その笑みにはなにやら黒いオーラが・・・やべえ、昨日心配かけたことまだ怒ってるし！

「そいえば金貨ってどれくらいの価値なの？」

「だいたい金貨一枚⇨銀貨100枚⇨銅貨10000枚ですね。この宿の一泊費用が銅貨30枚といたら、どれくらいの金額かわかりますか？」

・・・いま思えば、ドレイクに無茶な条件出したのかもな。ごめんよ。

指折りで説明してくれるイリス。そんな会話をしているうちに、食事は終えてしまった。

「さて、ではとりあえずここを出ましよう。」

二人とも席を立ち、宿を出る。

すると宿屋の外壁に寄りかかった、見覚えある赤髪が居た。

「ドレイクさん？」

イリスが話しかける。するとドレイクは気付いたようで目を開いてこちらへと歩いてきた。

「お、出てきたな。イリスにカエデ。まずは、昨日は惨敗だったな。最初から切り傷など気にせず、俺の武器破壊を狙っていたのか。」

「ああ。クレイモアなんてのと闘ったあとだ。あの剣にも相当疲労がある」と踏んでな。」

俺がニヤリと笑ってそう言うと、ドレイクも苦笑を返してくる。そこでドレイクは一瞬ためらった後、こう切り出してきた。

「・・・俺もお前らの旅について行ってもいいか？」

「いきなりどうした？」

「昨日のカエデとの戦いで思ったんだ。カだけじゃねえ、戦略も交えた打ち合いの出来る人間にならなくちゃダメだって。いまはカエデという目標が出来たし、それに武者修行として、カエデやイリスのような仲間もいたら面白そうだと思うから。・・・ダメか？」

ドレイクの提案？頼み？に意外さを覚えるが、それはそれとして。ドレイクの目もかなり真剣だ。

するとイリスがこちらを見ながら話す。

「私は仲間が増える分にはかまいませんが、カエデさんがなんと言つかによります。」

「？なんでだ？旅の主導はイリスだろう？現に俺の分までいつも飯代も出してもらってるし。」

「それは、カエデさんに命を救っていただいたお礼のつもりです。わざわざ一緒に旅していただいでるので、カエデさんに任せます。」

イリスはそのまま少し苦笑交じりに微笑み、俺に主導権をゆだねる。そんな風に思ってたのか・・・。余計悪い事した気分になるのは何故だろう。

「・・・分かった。じゃあドレイク。一つだけ聞こう。」

「なんだ？」

「戦争ってどう思う？」

俺がその問いをした瞬間ドレイクの顔は驚きに変わり、次いで暗くなった。

そして少し間をあげ、昔話になるが・・・と前置きをして語り始めた。

「俺は、故郷を戦争で焼かれたんだ。家族や友達を大勢失った。なんで国のお偉方の為に、こんな大勢の命が犠牲になるのか分からない。それは兵士も一緒だ。お偉方も兵士も庶民も、命の重さはかわらないだろうが・・・。だから俺は戦場でも無益に敵兵を殺したりはしなかった。俺が殺すのは敵の、自分の意志で闘う連中がほとんどだ。だからおれは、お偉方の専横政治を変える、戦争を無くすために強くなるうとしてるんだ。俺は・・・俺は、戦争なんて大嫌いだ！」

最後の言葉を俺に向けて言った。その目には苦悩、悲壮、そして一縷の希望が見えた。

戦争をなくすため・・・か。

ドレイクの真に迫る表情を見て、俺は一つひらめいた。

「ドレイク、充分だ。一緒に行こう。いや来てくれ。」

さっきの顔から一変、ドレイクの顔が華やぐ。

コイツって意外と表情のバリエーションがあるんだな。

「イリス、ドレイクの話聞いて、俺は旅の目的を決めた。」

「！！？」

ドレイクはよく分からないような顔をしている。まあ、旅人（俺）

に目的が今まで無かったのなら、何で旅してんだ？ってところだろう。

逆にイリスは少し驚いたようだ。

どういふことが聞こうと、隣で俺のほうへ体を向ける。

「まずはイリスと一緒に王城に行く。道すがら闘いながら同じ志を持つ仲間を増やし、いろんな国を回って、世界の王に相応しい王を見つめる。そしてその下で組織として暗躍し、そいつを立てて天下を統一する！！！！」

最後の言葉とともに、二人を見る。

ドレイクはなんかかなり嬉しそうだ。

イリスは少しなにやら考え込んでいるが・・・まあそうだろうな。

自分はこれから徴集なのだから・・・。

「おお！！面白そうだ！！俺に来てくれって言ったということは、その仲間として認められたということか？」

ドレイクのテンションの上がりようは計り知れない。かなり嬉しそうに俺のほうを輝いた目で見ていた。

そんなドレイクに、俺は苦笑しながら手を前で振ることで否定する。

「認めるなんてたいそうな人間じゃねえよ、俺は。ただ、仲間になつて欲しい。それだけだ。」

「俺は絶対行く！！！！カエデやイリスみたいなヤツと旅できるならそれだけでも。」

かなり意気込んだ声だな・・・それになんとか楽しそうだ。

次いで俺はイリスを見やる。複雑な顔をして俺のほうを見つめる姿は目福なのだが、そんなこと今は言っていられない。



「・・・イリス、俺は本当ならイリスにも一緒に来て欲しい。王の招集を突っぱねるわけにはいかないだろ。いえ、私もその旅についていきます。」おいイリス？」

俺の言葉の途中で、何かを決意した目をして俺を見つめるイリス。

「正直いまのカエデさんの考えたことのほうが、国の軍師として働くよりよっぽど意味があります。それに私が軍師として戦いたいのには、気の置けない仲間と。ですから、まずは王城に軍師の退職届を出しにいきます。」

イリス・・・目が本気だ。参ったなこりゃ。この子の戦争に対する思いも本物だ。

「・・・分かった。じゃあまず、王城へ行こう。」

俺が言うと、イリスもにっこり微笑んだ。

「ドレイクさん、カエデさん、とりあえずサンゼルスシティに向かいますしょう。」

「「おう。」」

## 第6話 赤髪の剣士 (後書き)

・アストさんのご指摘により、誤字を発見することができました。  
ありがとうございます。

## 第7話 刀とゼウス（前書き）

（報告）

- ・ アストさん！感想ありがとうございます！！毎度感謝です！
- ・ PV早くも2000突破！？皆さんのおかげです！ありがとうございます！
- ・ お気に入り「ほえ！？お気に入り15件！？わ、私も頑張ります！新たに登録してくれた8名の方々、前から応援してくれている方々、これからもよろしく願います！！」・・・イリス、どっから出てきた？

## 第7話 刀とゼウス

ドレイクが荷物をまとめに行っている間に俺とイリスは買い物を済ませ、ストークタウンのはずれに向かった。ドレイクとの待ち合わせ場所である。

・・・そういえばドレイク、馬どうすんだろ？  
昨日見た限りでは持っていないようだったし。

「ドレイクのヤツ、馬どうすんだろうな。」

「そうですね。でも私も急ぐ理由が無くなりましたし、のんびり歩きでもいいかと思えます。」

町のはずれ、待ち合わせ場所に着いた俺たちは、ドレイクの帰りを待っていた。

まもなくドレイクの姿が見えたが、案の定徒歩のようだ。

ドレイクは俺らの姿を見とめると、色々背負った背中をガシャガシヤ言わせながらこちらに向かって走ってくる。

・・・まあさすがにノボりはつけていないか。

「わりい、待ったか？」

「気が遠くなるほど。」

「そんな!？」

とりあえず適当にあしらっておく。コイツぜってえ突っ込み要員だ。

「あれ？二人とも馬持ち？」

「大丈夫です、急ぐ理由がないですし、のんびり歩いていきましょ  
う。」

「まあそーゆーこと。」

「じゃあ行きますか。」

「なんか悪いな、俺の為にわざわざ……。」

馬に荷物を載せ、三人で歩いていく。

思えばこれが俺の異世界譚の始まりだったのかもしれない。

ストークタウンを後にしたその日の夕方。

歩いてサンゼルスシティに着くのは4日から5日後だそうだ。

とりあえずいい具合に開けた場所があったので、今日の野宿はそこですることになった。

しばらく三人で地べたに座っていたのだが。

「じゃあ、食材取りに行きますかあ。ドレイクも来いよ。」

俺がトンファーを創造して立ち上がる。

「いつてらっしやい。じゃあ焚き火の準備でもしてますね。」

「……。」

エリスの反応は分かるが、ドレイクが無言でこちらを見つめている。

なんだ？

「どしたドレイク？」

「……えも……がねえ……。」

声が小さすぎて何いつてんのか聞こえない。

「あ？」

「得物がねえ！」

「あ。」

そういえば俺が昨日叩き折ったんだっけ……根元から。

ドレイクの武器は細身の長剣だったな。

……あ、これは使えるかも知れねえ。

「創造 無銘村正宗」

「「！？」」

俺が呟くと、日本古来の刀が鞘つきで出てきた。ドレイクの長剣よりも細く、鋭い武器。

長剣の扱いがアレなら、村正宗にもすぐに慣れるだろう。

それに刀で戦うってなかなかカッコイイだろ？

「ドレイク、おわびってわけじゃねえけどこれやるよ。」

「それは？」

「見たこともないです……。」

俺はとりあえずドレイクに刀を投げる。受け取って、じっくり観察しているようだ。イリスも興味津々だな。……てかやっぱり見たこと無いのか。これはドレイク目立つな……。

「それは刀だ。名を無銘村正宗という。」

「無銘・・・村正宗・・・」

「カタナ、ですか。カッコイイ名前ですね・・・。」  
「抜いてみ？」

そういうとドレイクは、イリスに離れるよう指示し、顔の前でゆっくりと引き抜く。

スーっという金属音がまた心地よい。

「これは・・・。」

「凄いですね。」

二人も驚いているようだが、正直俺も驚いていた。

鈍く輝く刀身はもちろん刀の特徴ではあるが、この刀の金属光沢は刀の中でも美しい。・・・さすが名刀ということか。

「ん？カエデ、これは片刃の剣なのか？」

「ああ。その代わり切れ味はとてつもない。ドレイクならすぐ慣れるだろうし、使いこなせば前の武器より凄まじいぜ？」

「そうなのか・・・。」

俺と会話をしている間も、ドレイクは刀身から目を離さない。気に入ってくれたならなによりだ。

「試し切りしてみるか？」

「いいのか？助かる。」

「創造 巨木」

ズウウウウン・・・

目の前にでっかい丸太が出現した。

「カエデさん、創造魔法ってなんでもありですね……。」

イリスが呆れているが気にしない。

「じゃあ、行くぞ。ティヤアー……!!」

ズバ……!!

ドレイクの空竹割りは美しい弧を描きながら、巨木を襲った。……  
つて。

「おいおい……。」

いくら名刀でもそりやないだろう。あろうことか刀は巨木を貫通し、  
地面までも抉っていた。

こりや多分ゼウス式チート性能が入ってるな……。

そんなことを思っていると、ドレイクが呟いた。

「すげえ……。」

「ま、まあな。」

「凄すぎです……カタナって。」

二人の感嘆詞は嬉しいんだが……ちょっとな、やりすぎ感が否め  
ない。

「これ、マジで俺にくれんのか？」





夜。俺らが買ってきた食材と、ドレイクの狩ってきた肉で夕食にした。

食後はいろいろ雑談やバカ話を交わしていたのだが……。

「ドレイクも仲間になったからには、やっぱり言っておいたほうがいいかもな。」

「ん？なんだ？」

「俺は、異世界から来た人間なんだ。」

イリスは訳知り顔で相変わらずのんびりしていたのだが、ドレイクは、一言で言えばアホ面。

一瞬の沈黙。

「は？」

「言葉のとおりだ。俺は異世界人だ。」

イリスが助け舟を出す。

「私も初めて聞いた時は驚きましたけど……黒髪黒瞳なんて人見たことありませんでしたし、エンシエントスペルの創造魔導士。正直納得するしかありませんでした。」

笑いながら言っているが、納得するしか……って結構傷つくな。まあ確かに俺もいきなり異世界人だと名乗られても信じないか。

「……まあ、正直なんでもいいや。深く考えるのは得意じゃねえ

し、カエデはカエデだ。それを言ってどうするつもりだったんだ？」  
「いや、聞かれる前に言おうと思ったただけだ。初めてドレイクの前で創造魔法を使ったとき、後で説明しろとかなんとか言ってただろ？」

「ああ、そういうえば。異世界云々も絡んでくるとはな。まあカエデが嘘つくとはあんまり思えねえし、信じるよ。異世界の話も聞きたいな。」

「信じてくれてサンキューな。」

真夜中になった。イリスとドレイクにいろんな地球の話をするうち、いつの間にか更けていたというほうが正しいか。

二人は既に寝てしまったので、俺も寝ることにする。

ドレイクは気性の割りにおとなしく寝ていたのだが、改めて見るとイリスの寝相が悪い悪い。

さっきまで足があったところに頭があるのは気のせいだと思いたい。

イリスに毛布をかけなおしてやり、俺も寝た。

「ん？ここはもしかして……。」

「だいせいかい！！」

白い風景と浮遊感。ここはヘラヘラ野郎の空間か。

「ヘラヘラ野郎って酷くね！？」

ツツ。相変わらず心読みやがる。

ってかなんで俺はここに？

「俺が呼んだ。異世界の人間には質問しにくいこともあるだろうから、定期的に呼ぶことにしたんだぜ！」

うぜえ……。

「ねえ！この前より扱い酷くない？」

まあな。眠りを妨げられてる身にもなれ。

「いや、まあ申し訳ないが。でも体力は朝には回復してるよ。カエデの脳に語りかけてるだけだから。」

ふうん。まあいいや。んで、質問なんか特にないよ？

「ああ、俺が聞きたい事もあるからそれはそれでもいいんだが。でもさ、なんで異世界で日本語通じたのか〜とか、そういうの無いの？」

どうせゼウスがチートくつつけたんだろうと思って気にしなかったけど？

「うー！……その通りなんだけどさあ、なんか味気ないなあ。」

悪かったな。んでゼウスが聞きたい事ってなに？

「あ、おう悪い。カエデがこの世界をどうしようとしてるか気になつてな。」

なるほどね。俺の考えはこうだ。

・戦争は皆の迷惑、お偉方の為になんで人々が命を張らなきゃならねんだ！！的な考えを持つ、心強い仲間を集める。

・集めた仲間と世界中を旅していい王を探す。ま、アリア王が人徳者なら一番いいんだが。

・ソイツに天下を握らせ、戦争のない安泰の世を作る。

こんなもんだ。

「そっか。分かった。最後の言葉が聴けてよかったよ。やっぱり君はチートをつけても信念を曲げないね。君を選んで正解だった。」

は？

「つまり、予想以上のチートに調子に乗るやからじゃなくてよかったってことだよ。」

なるほどね。ま、ゼウスに頼まれたしな。いい世界にしらって。

「。。。。。」

どした？

「俺は一つ、カエデに謝らなきゃいけない。」

なんで？

「歴史の変わり目。これ実は、そろそろルスリアが動き出すってことなんだ。」

ルスリアって・・・俺のいる国の隣国か。

「ああ。歴史はこのままだと、ルスリアの天下統一で終わる。そして絶対にはいい世界にはならないんだ!!!」

・・・分かった。じゃあいい王を見つけ次第、そいつと共にルスリアをつぶす。任せとけ。

「そうか、助かるよ。・・・ん。聞きたかったのはこれだけだ。もうすぐ夜が明ける。またね。」

ゼウスが俺の肩に触れ、俺はまた空間から消えた。

「頼んだよ。」

ゼウスはカエデが消えた空間に向けて、そう呟いた。

## 第8話 ルスリアの貴族とアリアの義賊

朝食を終えた俺たちは、いまサンゼルスシティに向けての道歩いている。

特に気にする事もないが、段々と田舎道から山間の道になってきている。

「坂道・・・つらいです。」

あ、気にしてるやつが一人居た。

「じゃあねえな。ドレイク、元気か？」

「おう！なんだ？」

「馬の上にあるお前の荷物、背負ってくれねえか？イリス馬に乗せる。」

「ほえ！？そんな！悪いですからいいですよ！」

イリスは精一杯遠慮しているが、ドレイクはもう自分の荷物を背負いなおしている。

「ってなわけで、遠慮せずにな。ドレイクがくたばろうが知ったことじゃねえが、イリスを置いていくわけには行かないから。」

「おい！！俺はくたばってもシカトなの！？ってか俺だったら置いてくの！？」

「黙秘権を行使する。」

「びよ！？」

そんな俺らのやりとりを見ていたイリスは、クスクス笑っている。



「わかりました、二人の好意に甘えることにしますね。」

そういつて馬にまたがるイリス。

俺が先頭を歩き、その後ろにイリスを乗せた馬と俺らの荷物を載せた馬を、自分の荷物を背負ったドレイクが引きながら歩くという構図ができた。

「ちょっとカエデ楽しすぎじゃね!?!」

後ろでドレイクが叫んでいるが気にしない。

さて、さつきからいくつか視線を感じる。殺気ではないにしても、こちらを観察・・・いや嘗め回すような不快な視線だ。

ま、いざとなったらこのメンツだろ?無問題だから放って置く。

数分後ろからドレイクの罵声が聞こえてくるのをシカトしていたら、いきなり静かになった。

「カエデ、イリス。視線を感じる。」

「!?!」

そういつてドレイクは刀の柄に手をかける。イリスは驚いているが、俺から言わせりゃ

「いまさらかよ。」

「気付いてたのかよ!?!」

ドレイク、突っ込みありがとう。



様はどうやら最初から我々の存在に気付き、お嬢様とその一行を演じたかったようですが・・・我々が見抜いた以上は、お願いしますよ?」

イリスの言葉に男は謝罪する。・・・こいつ、なかなかの観察眼だな。まあいい。

「そういうことで私を馬に?」

「それもある。まあでも正直イリスが疲れてるってのが一番大きかったけどな。さて・・・協力だ? 単刀直入に言え。俺たちに何を求めている?」

まどろっこしい言い方しくさって・・・。

「はい、我々と共闘戦線を張って頂きたいのです。ルスリアの貴族相手のね。」

「ルスリアの貴族、ねえ。」

「お前らはいったい何者だ?」

ルスリアって、隣国じゃねえか。なんでそんなところの貴族が?

「我々は義賊“ケルベロス”。アリアの治安を維持するために生まれた、非正規部隊です。・・・ついてきて頂けるのであれば、まずは我々のアジトにご案内します。ボスにも会ってもらいたいですし、何より詳しい情報はゆっくりと話したいですから。」

それだけ言うと、踵を返して左手の山の獣道を登っていった。他の連中もそれに続く。

「どうすつか。」

「畏かも知れねえぞ?」

「いえ、それはないでしょう。それならばここで殺った方が殺りやすいですし、地の利がありました。わざわざそれを放棄して犠牲を増やす事はしないでしよう。私たちが決めるのは協力するか否か、どちらかです。」

なんか、イリス軍師っぽいな。意外とさまになってるし。

「まあ力エデさんのことですから、そのボスに会ってから決める。とか言いそうですけどね。」

「お、わかってんじゃん。」

馬上で微笑むイリス。ドレイクは腑に落ちないようだったが、イリスの説明で大体納得できたらしい。

「じゃ、行くか。」

この獣道は意外と登りやすかったので、馬ごと頂上まで来てしまった。

するとそこには厩と小さな小屋があり、義賊と名乗った連中は次々とそこへ入っていく。さきほどの男だけは小屋の前で待っていたが、俺らは馬をつないで、男に案内されるまま小屋へと入った。

「誰もいねえじゃねえか。」

「普通に考えて地下だろうが。」

俺が突っ込むことになるうとはな。まあいい。男が中央付近の石畳を開けると、地下へと続く階段が口を開けていた。そのまま動かないところを見ると、入れということなのだろう。

「イリス、ドレイク、いくぞ。」

俺が先頭。続いてイリス、ドレイク、男の順で下っていく。どうやら男は自分でふたを閉めるため、一番最後まで残ったらしい。

暗い階段を降りると、奥に一つ明るい部屋が見えた。立ち止まる俺らを先導して、男はその部屋に入る。

「ボス、お連れしました。」

すると向こうからハスキーな女性の声が聞こえた。

「ご苦労。入ってくるよう伝えてくれ。」

すると男はこちらを向いて、手のひらで俺たちに入るよう促す。入ると、縦長のテーブル、両サイドには椅子がずらりと並んだ会議室のような部屋だった。

声の主は、そのテーブルの一番奥、社長席に座っている女性だろう。・・・ボスは女性だったか。

俺たちが入ってきた事を見とめると、彼女は立ち上がって奥の椅子を勧めた。

背が高く、紫の髪を腰まで流したいい感じの美女だった。これがボスねえ。

「こちらの席にかけてくれ。」

とりあえず言われたとおり席につく。大人びた口調・・・さんぞ、じゃねえや義賊にしては意外とおとなしい口調に驚いた。

向かって右側に奥から俺、イリス。

左側にはドレイクと男が座る。すると紫髪の女性が切り出した。

「旅の途中であつたろうところ、済まないと思っている。だがそなた達の協力がどうしても欲しいのだ。力を貸してくれまいか？」

どっかの国王みたいな口調だな。それはそれ。

「力を貸す云々の前に、まずは名乗れ。」

「ピクッ」

男が俺の態度に反応するが、正直当然のことだろう。いきなり呼びつけておいて、どういふ状況かも分からず、名前も分からずじゃあ、

俺らが力を貸す義理が無い。紫髪の女性は顔色一つ変えずに俺に对应した。なかなか出来た人間かもしれない。

「そうだな。私はアネス・フィードウッドだ。気軽にアネスと呼んでもらってかまわない。」

「俺らも一応自己紹介するか？聞いたところ素性は調べ上げられているそうだが。」

俺がそう問いかけると、真面目な顔でアネスは言った。

「正直、カエデ君、と言ったか。君だけでかまわない。あとの二人は生年月日まで調査済みだ。」

「すげえなおい。」

「たいした事無いさ。だが、君についての情報だけは、ほとんどと言っていいほど分からなかった。カエデという名前、黒髪黒瞳、トンプアーの使い手。本当にこれだけだ。我々がここまで一人の情報を調べられなかったのは初めてなんだが・・・何者なんだ君は？」

これだけと言ったが、俺のこの世界での情報のほとんどじゃねえか。こいつらの情報収集能力は底知れないな。イリスとドレイクも驚いているようだ。でも生年月日なんか知ってたってなんの得になるんだろうか。

「俺はカエデ・ミナモト。それ以上でもそれ以下でもねえよ。」

「そうか。本人の口からやっとファミリーネームを聞く事が出来たな・・・。」

「んで、その兄ちゃんは何名前知らねえんだが。」

ここまでボスとタメ口を張る俺にイラついているんだろうか・・・知ったことじゃない。

「俺は・・・クロツド。ファミリーネームは無い。」

「そうか。クロツド、ね。んでアネス。ルスリアの貴族と戦うとしか聞いてないんだが、どういうことだ？」

クロツドから聞いた情報はそれだけだ。協力するにしてみせないにしても、情報が足り無すぎる。

イリスもそれは同じだったようで、アネスの口が開くのを待っている。

・・・ドレイク、いつの間にか気配が消えたと思ったら。寝るなバローー。

「そうだな。その貴族は、最近私兵を率いてこの近くの村から無理やり若い男どもを徴兵したらしいんだ。我々はその貴族から村人を解放したい。」

「ルスリアの貴族がアリアで徴兵を!？」

イリスが驚きを隠さず声を発した。

まあその徴兵策は作戦としては間違いない。相手国の兵力を減らしつつ自国の兵は増強できるからな・・・だが、それはつまりアリア国民同士を殺し合わせることはないのか!？

国土を広げるためなら何してもいいのか？

ふとゼウスの言葉が甦る。

『歴史はこのままだと、ルスリアの天下統一で終わる。そしたら絶対いい世界になんてならないんだ!』』

確かにな。こんな根本的に腐った国に統一なんてさせてたまるか! これまでもこうやってえげつないやり方で国土を広げてきたんだろう。その裏で、何万人の人間が涙を飲んだか・・・!!!



バン！！！！！！

「「「「「！？」」「」「」

俺がテーブルに手を叩きつけると、全員がこちらを向いた。

「いいだろうアネス・・・協力する。」

## 第9話 俺の怒り、イリスの実力（前書き）

（報告）

・新たな4名様のお気に入り登録、感謝です。これからもよろしく  
お願いします！！

・累計ユニーク600名様突破！！これからも皆様、応援よろしく  
お願いいたします！！！！

・いまチヨー嬉しいです！！！！

## 第9話 俺の怒り、イリスの実力

「ほ、本当か！？かたじけない！！」

アネスが喜びの色を前面に出して言うてくる。

「だが・・・その貴族、その頭と周辺の幹部は絶対逃がさないと約束しろ。」

「カエデ君？」

「俺はその貴族を許せない。人の命をもてあそぶようなヤツには天誅を下してやる。」

そうか、分かった。とアネスが呟き、イリスも俺に頷く。

ドレイクはさっきのテーブルバン！！で目が覚めたらしく、状況把握に忙しいようだ。

「カエデ、戦うのか？」

「ああ。ちゃんと話を聞いてたら、ドレイクも俺みたいになっただけだ・・・！」

さて、初の本格的戦争だ。まあ戦争というには小規模だが。

ふとイリスを見ると、テーブルを睨み考え事をしているようだ。正面ではクロッドが呆れ顔でドレイクに再説明をし、アネスは席を立ってどこかへ行った。

「確かに。その貴族ぶつ殺す。」

クロツドの説明を受けたドレイクはいきり立っている。

そういえば初戦争ということで、イリスの実力が見られるな。多分いま頭の中で構想を練っているのだろう。

「ただいま。」

そこへアネスが帰ってきた。後ろには6人ほどの屈強な男が控え、アネスはなにやら巻紙を携えている。

「地形図ですか？」

「そうだ。」

アネスのもつ巻紙に一番早く反応したのはイリスだった。

アネスはその巻紙を持ったまま自席へ戻る。6人は俺らの手前。つまり廊下に近いほうに座った。

アネスが地形図を広げ、テーブルに敷く。なかなかでかい。

「では軍議を始める。いま来た6名に告げるが、ここにいる三人は揃いも揃って心強い。今回私が頼み込んで味方をしてもらうことになった。」

「何者ですかい？」

「あまり強くは見えないが……。」

「お嬢さん、怖かったらいつでも言えよ？」

「『『『『『八八八八八』』』』』』」

こいつら、半殺しにしてやろうかな。

「黙れ!!!」

お？

「まずこの赤髪のかたは有名な“焰龍”！金髪の令嬢は“戦女神”！お前ら、私が頼み込んだ方たちを侮辱するのか？」

会議室（俺が勝手に命名）に殺気がほとばしる。ってか俺の紹介は無しかよ。

「……申し訳ありません。」

5人まとめて謝った。……ん？一人足んなくね？

「ボス、じゃあこの黒髪は何者ですか？」

あ、コイツがいわなかったのか。6人のなかでも一際ゴツイ男だが、てか俺を出す？

「彼はこの三人のリーダーだ。つい最近“ワーウルフ”がたった一人によって壊滅した、という噂は知っているだろう？その一人が彼だ。」

ワーウルフってアレだろ？そんなに自慢ニヤならねえだろ。

「噂でしょう？コイツがしたって証拠はどこにも……」

ピク……

「だいたいこんな優男に戦いが出来るわけないじゃないですか。いざ戦争になったら逃げ回るのが関の山つすよ。」

ピクピク・・・

なんか俺の顔を見てイリスとドレイクが段々青ざめていくが気のせいだと思いたい。

「それにこんなヤツに人を殺す度胸なんざありませんよ。一人やつと殺して喜ぶ輩だろう精々・・・。」

人を殺して・・・喜ぶ？

ブチ！！！！

「おいお前、じゃあ俺を殺して」創造 ピエトロベレッタM93R  
「なんだ？なんか言ったか？」

「・・・おい、そののでかいの。こっち向け。」

「あ！？てめえ俺を誰だと・・・」

ドン！ 俺の愛銃・・・親父の形見が火を噴く。男のわき腹を打ち抜いた。

「ぐおおあああ！！・・・てめえ、何を・・・」

「人を殺して喜ぶだ？もう一辺言ってみるゴミ野郎・・・」

「カエデさん・・・その武器はいつたい？」

「おい、なんつー武器だよカエデ・・・。」

他の人間は声もでないらしい。

「もう一辺言ってみろって言ってるんだよおお！！」

ドン！！ぐああああああ！！！！！！  
今度は右太腿を打ち抜く。

「いいか、よく聞け。てめえみたいなバカ猿は、身をもって知ったほうがいいと思ってるな。人を殺すっていうのはこういうことなんだよ……。殺される側は強烈な痛みやおぞましい恐怖、沸騰するような憤りや悔しさを経験するんだ！！それを、人を殺して喜ぶだ？てめえは人殺しが楽しいのか！？。。。いいだろう。俺は殺しには慣れてんだ。お前みたいに人殺しを喜ぶ輩をのさばらせるわけにもいかねえからな！。。。殺される側の恐怖や痛みを、体で覚える。」

俺は痛みには震える男の眉間に銃口を当てる。

引き金を引けば終わりだ。。。だが正直俺はアネスにとめて欲しい。

自分の部下の責任はとり、そして命を守る。それがボスの仕事だから。。。

「やめてやってくれ！！！！」

お。

「頼む。。。ソイツは人殺しを喜ぶようなやつじゃない。そんなヤツが義賊“ケルベロス”なわけがないだろう？部下が失言をしたが、罰はもう充分だ。。。私がこれから責任を持って教育すると約束する。だから。。。許してやってくれ。」

俺は銃を消滅させる。ちなみに創造魔法で作ったものは、俺の意志で消せるらしい。

まあともかく。アネスはボスの資格あるわこりゃあ。

「元々殺す気は無かったよ。ただ、俺の信念に触れる発言をしたからとつちめただけだ。軍議を再開する前に、こいつを医療室にでもなんでも運んでやったほうがいいぜ？」

「正直俺はカエデが正しいと思ったよ。」  
「そうですね。それには賛同です。」

6人組のうち2人があの男を医療室へ運んでいる間、少し軍議は中断となった。

そこでのアネスに対する二人の発言が上記である。



今思えばやりすぎたかとも思うが、黙っておこう。

「すまなかった。私もカエデ君が正しいと思う。人の命は軽いものではない。あいつが軽率な発言をした。」

「それにしてもカエデ。あの武器はなんなんだ？」

「あ、それ私も気になります。」

「私もだ。」

三人揃って食いついてくる。やっぱり面倒でもトンファーで斬りつけたほうが良かったか？

「あゝ、あれはだな、俺が怒った時に出す古代魔法の創造だ。」

必死にごまかす。・・・が。

「古代魔法ではなく古代呪法です。それに普通怒ったときはルナが荒れますから、普通より弱くなるはずです。・・・ちゃんと答えてくださいね？」

・・・まずった。イリスのにつきりモードだ。仕方ないか。

「あれは銃だ。」

「銃？」

「そう、俺のせ・・・じゃねえや、俺の国ではメジャーな戦闘武器だ。」

あつぶねえ。アネスがいるの忘れて俺の世界って言おうとしたあ・・・。

「・・・そうですか。また詳しく教えてくださいね。」

これは・・・イリスには悟られたな。

「ま、俺もそれでいいや。」

ドレイクはイリスにノツただけだな。

「むう。なんでいまじゃダメなんだ？」

あんたが原因だよあんたが・・・。

「戻りました。」

お？

「・・・で、では軍議を再開する。」

なんでそんな渋々なんだよ！？

お、顔色が変わった。

「まず敵が通るのはこの山の北側の道。ルスリア南西部に繋がる街道だ。諜報員が調べた情報によれば、奴らがこの街道を通るのは昼前。それまでに我々がどう布陣するかだが・・・。」

そういつてアネスが周りを見渡す。意見を求めているのだろう。ふと横を見ると、地形図とにらめっこしていたイリスが立ち上がる。全員の視線が集中したことを確認したイリスが、説明に取り掛かった。

「まず我々が陣を構えるべき場所は3つあります。そこにカエデさ

んとドレイクさん、アネスさんを振り分け、だいたい勢力がカエデさん、ドレイクさん、アネスさんの比率が1対1対2になるようにします。そしてこの街道が山あいには差し掛かる部分、まずそこに半分の兵を伏せます。ここはアネスさん率いる勢力ですね。相手が目の前を通りすぎたことを確認したら、後ろから襲ってください。おそらく前方の指揮官への伝達が遅くなるので、それだけで混乱を招くことができます。混乱が頂点に達し、指揮官に状況が伝わったところで奴らはおそらく反転、アネスさんの軍隊を襲いに掛かりますから、そこを背後からドレイクさんの部隊が叩きます。そこでなるだけ指揮官を潰して、機能を停止させます。最後に横腹からカエデさんの隊が突っ込み、捕虜のいる位置に突っ込んでそのまま反対の山に行き、そこで捕虜を置いてからもう一度もとの山に帰るように切り込めば、壊滅するでしょう。」

「……………おおおおおお……………」

感嘆の声が聞こえるな。確かにこの作戦ならいける。

「後は配置位置を、敵の隊の長さに合わせれば作戦は完成です。そこはこの優秀な諜報員にお任せします。」

「よし、まかせろ！！！！」

「おう！！！！」

最後にちゃんと義賊連中を持ち上げ、自分の策を採用するよう操作した。なるほど、戦女神か……。

明日は面白くなりそうだ。

## 第9話 俺の怒り、イリスの実力（後書き）

・アストさんのご指摘により、誤字を発見しました。ありがとうございました。

## 第10話 “天弓のアネス”（前書き）

（報告）

・PV累計5000突破！！！皆様本当にありがとうございます！！！！

・ユニーク累計700突破だってさ！！！！これからもこの神ことゼウスをよろしく下さい！！！！・・・天界に帰れへラへラ野郎。「ひどー！？」

## 第10話 “天弓のアネス”

「隊長！来ましたぜ！」

「1000くらいとか言ってたか。それで捕虜が50名つと・・・それでもやっぱり多く感じるなあ。」

俺は今、伏兵として街道沿いの山の中腹に身を潜めている。先ほど話しかけてきたのは、軍議が終わったあとアネスが徹夜で振り分けた、今日限りの俺の部下だ。総勢50人。小規模だが、1000人を相手に奇襲するくらいならこの人数でも余裕だろう。

「そろそろアネスたちの所を通過するな。」

「ところで隊長、その道具、なんですか？」

俺はなぜか（・・・）双眼鏡を手に行っている。俺が何したかは、察してくれ。

「これは遠くを見られる道具だ。」

簡潔にさらっと流す。言及されても面倒なだけだ。

「そついえばお前らのボス、アネスの得物はなんだ？」

「ええ！？ボスの二つ名を知らないんですか！？」

「あいにくな。俺はこの国に来たばかりでな。」

「ボスもまだまだってことすか・・・世間は広いです。」

いや、俺が異世界からきたただけだ。有名かもしれねえぞ？自分のボスだ、自信を持って！



いる。俺は双眼鏡の倍率を下げ、見据える相手を探す・・・アイツか！  
他の兵たちとは違う、少し高貴な服装をした兵が一人いた。アネスとソイツの間にアングルを持っていくと・・・

ヒュン！！ ドサ！

あ。

ソイツが倒れた。・・・が、今アネス弓弾いたか？

弓矢を使うには、まず矢を番え、引き絞ると同時に狙いを定め、放つ、という三工程が存在する。だが今のアネスからはそんな動作はほとんど見えなかった。

「速えな。」

ワアアアアアアアアアア！！！！！！

ん？お、イリスの読みが当たったか。

先頭が後方の曲者に当たるため、総員向きを変えたのだ。その瞬間にドレイク率いる伏兵が突っ込んだのだろう。

もはや敵は散り散りだ。・・・さすがは戦女神というところか。さて。

「いいからお前ら！！！！」

俺が部下たち全員に声をかける。

「お前らが義賊と名乗るからには、お前らには正義があるはずだ！！！！お前らの正義はあの敵を全滅することか？・・・そう思ってる





俺が担ぐとびっくりしたようにじたばたする。ここはゼウスチートを使って……。

「ダーツシュ!」

今なら余裕で新幹線とも競える気がする。

「え?うわ?はや!」

とりあえず向かいの山の中腹で皆と合流した。

捕虜たちもそこにいたので担いできたそいつをそこに置く……っ  
っーか投げる。

「うわああ!」

どわ!

「隊長、何してんすか?」

部下が呆れたような目で見てくる。

「いや、異常にじたばたされたから。」

「ひどいっすよ!」

いま喋ったのはさっきの捕虜。まあ無視して、捕虜全員に告げる。

「いいか?俺達はこれからもう一回敵に切り込む。お前らがやられた事を考えると、はらわたが煮えくり返ってしょうがねえからな。」

そういうと、みんな何をされたか思い出したのだろう。

一斉に顔が暗くなる。

「・・・だから、俺はその貴族が許せねえ。ぶっ潰しに行く。お前はほとぼりがさめるまでそこに身を隠しておけ。」

「そんな！是非一緒に戦わせてください！！」

一人が俺にそういうと、みな口々に同じようなことを主張する。

「そうです！俺達も闘います！」

イラッ

「ここで皆さんに助けてもらえばなしでは、男が廃ります！」  
イライラッ

「たとえここで死んでも、奴らに恨みを晴らせれば本望です！」  
プチン！

「・・・おい、お前ら。何か勘違いしてねえか？」

殺気のもった口調でそういうと、全員固まる。

「まず戦うつつたヤツ。足手まといだ。黙ってる。次に男が廃るとかふざけた事抜かしたヤツ。ならテメエらが捕まる前から戦って倒せばよかったんじゃないのか？・・・そして最後オ！！誰だ死んでも構わねえなんて抜かした野郎は！？出て来い、ぶん殴ってやる！！！！！！」  
ふう。

「いいか？テメエらを助けたのは死なれちゃ困るからだ。ここで死んでもいいなんて言うなら、なんで俺らが来る前から暴動でもなんでも起こさなかった！？命が惜しいんだろ？別に恥ずかしいことじやねえよ。テメエだけの命じゃねえ！お前らが村においてきた仲間

や家族や恋人や・・・いろんな奴らが帰りを待ってるんじゃないのか！？命の安売りなんてするんじゃないやねえ！！分かったかバカ野郎ども！！！！・・・理解したやつは身を隠している。よし、ケルベロスもだ！命を安売りするんじゃないやねえぞ！？必ず生きて帰るんだ！行くぞ！！！！」

「『『『『『おう！！！！』』』』』」

「俺、勘違いしてたわ。」

「ああ、あの人のいうとおりだ・・・親父やお袋にも迷惑かけちゃった。」

「俺はもうあの人を人生の師匠にする！」

カエデたちが突っ込んだあと、そんな会話があったとかなかったとか。

カエデ隊が切り込みをいれた時にはもう、ほとんどの敵がばらばらに戦っていた。正直完勝もいいところである。

そしてもう一度、元のほうの山に戻ってきたカエデ隊。

カエデは部下50人ちゃんと全員いることを確認すると、双眼鏡片手に情勢を見ることにした。

アネスの弓の威力は正直底知れない。

二本同時に番えた矢が別々の標的にあたり、それも急所を射抜く。はたまた上空に放った矢が時間差で部隊長に当たったりもした。

・・・そして俺が一番気に入ったところ。

自分に掛かってくるやつは極力急所を避けて戦闘不能にし、殺すのは上級の兵のみという点だ。

俺と似通ったところがあった。どうやらこの世界に来てから立て続けに同じ気持ちの人間と会えている気がする。

「天弓のアネス・・・欲しいな。」

目的である特殊部隊の一員の候補に、俺の心の中だけで内定した。

圧勝だった。

結局指揮官が完全にいなくなり、一兵卒は散り散りに四散していった。

アネス本人は、恨みのこもった一撃を総大将に放ったと自慢げであったし、やはりドレイクの活躍もめぐるしいものがあったようだ。こちらの死傷者は三名。そこにもアネスのポリシーがあったようで、全員で彼らに黙祷してからの祝杯という、なかなか素晴らしいものがあつた。

三名しか死傷者を出さなかったのはイリスの策があつてこそ、という言葉もあり、意外と照れていた。

さて、俺はというと元部下に懐かれており、なかなか離してもらえない。

俺の信念を語って欲しいらしいが、んな大それたものじゃない。はああく。助けてくれーい……

そんなこんなで、初戦争の夜は更けていった。

真夜中。

俺は酔い覚ましと称して、飲んでもいないのにアジト内を散歩していた。

地下にあるのに窓の存在する部屋を発見し、外でも眺めようかと入る。

「カエデ君かい？」

「ああ、アネスカ。」

先客がいた。・・・まあこのアジトを知り尽くしているボスにそんなことを言うのは野暮だろうが。

「こんな夜更けに、どうしてここに？」

「ん？酔い覚ましにな。」

「酒なんて飲んでなかったらう？」

「ばれたか。」

二人で窓を眺めつつ、そんなたわいもない話をする。

ここでスカウトを持ち出すべきか。まあ望みは薄いだろうが、今しかないな。

「アネス。」

「なんだ？」

「俺達と旅しないか？世界から戦争を無くす旅。」

「とても面白そうではあるが、無理だな。」

「そうか、残念だ。」

もともと返事は分かっていたから何も言わない。ここからアネスがいなくなったら、義賊たちは生きて行けないだろうからな。

それから互いに無言でそとを眺めた。



## 第11話 別れ、そして旅の再開（前書き）

（報告）

- ・ お気に入り登録30件！！！！新たに登録していただいた皆様、ありがとうございます！！！！
- ・ PV7000突破です！！！！今後もこの処女作小説をよろしくお願いたします！！！！

## 第11話 別れ、そして旅の再開

「では、もう行ってしまおうのか。」

「ああ。俺達は旅を続けなきゃならねえ。」

「隊長！！！今までありがとうございました！！！！」

俺らが今日出立すると聞いた義賊の面々は、まず引き留め、それでもダメならと、俺らと出会った街道まで見送りに来ていた。それも、俺の元部下たちは泣きながら。

今回はアネスも見送りにきている。

「隊長だったのはあん時だけだ。お前らの心は、共闘した時によくわかった。アネスをすっかりサポートしろよ。」

苦笑しながら俺も元部下たちにそう告げる。

それはドレイクのほうも同じだったようで、何やらアイツの部下も泣く泣く見送るようだ。

「またいつか、会おう。今度はきつと、仲間になつてもらおうからな。」

「いつか、な。だが私はこいつらを手放すつもりはない。再会しても意志は変わらんぞ？」

「フ、じゃあまたな。」

そのやり取りを終えると、今度はクロッドといつかの喧嘩男がやってきた。

「最初は生意気な人間、と思いましたが、カエデ様を呼んでよかったですと心から感謝いたします。コイツも、カエデ様の元部下も、だいが貴方の信念に染められたようですし。」

クロツドが戦争中に居なかったのは、イリスの護衛をしていたからだと聞いていた。だから正直、感謝をするのは俺のほうだ。

「イリスを守ってくれて、こちらこそありがとうございます。またいつか会おうぜ。」

「そうですね。次に会えるのを楽しみにしています。」

クロツドは最後ににこやかに笑うと、義賊の群れに消えていった。残された喧嘩男はというと・・・。

「カエデさん!!!俺が悪かった!!!容姿だけで実力を決めつけ、あまつさえ心にもないことを言ってしまった!!!これからはもっと精進して、貴方のような信念を持つ人間になりたいです。どうかおとこの失言、お許しください!!!」

そう言って土下座した。

まあアネスの部下だし、ここまで言うのなら許すかな。俺もやりすぎたし。

「次に会うときに、“信念を持つ人間”になっていることを祈る。それまでアネスの下でしっかり学べよ。」

「はい!!!!!!」

それだけ言うと男も去っていった。

ツツ、俺は何を偉そうに言ってるんだろうな。

「別れの挨拶は済みましたか？」

「ああ、一通りな。」

イリスがいつの間にか後ろにいた。どうやらイリスも済んだようだし、後はドレイクか・・・っと、来た来た。

「終わりましたか？」

「おう。行くか。」

三人揃い、義賊たちもこちらを見ている。アネスがその中から一步踏み出した。

「では、達者でな。」

「お前らもな。」

「また会いましょう。」

「じゃあな!!」

一人一言ずつ交わし、俺らは義賊に見送られながらこの地をあとにする。

あ、いい忘れたが、捕虜になった若者たちは昨日のうちに村に帰り、そのほとんどが義賊への入団を希望してきたらしい。

そのせいか、昨日の捕虜たちがちらほらと義賊に混じって俺らを見送っている。

「隊長!!!!また会いましょう!!!!」

「さよなら!!!!」

「イリス様、ありがとうございました!!!!」

そのような言葉に、俺ら三人は手を振って応対した。

「なかなかいい連中だったな。」

「そうですね。義賊ケルベロス・・・また会いたいです。」

「俺はてつきりカエデはアネスを旅に加えるものだと思つてたよ。」  
「その話はあとでな。」

見えなくなるまで、義賊たちは俺らを見送ってくれていた。

「断られたよ。」

「あゝ、やっぱりですかあ。」

義賊たちのアジトを出たのがだいたい昼前。もう夕方になってきている。

ただ道はだんだんと下り坂になっており、気楽に三人で歩いていた。

「やっぱりって?」

ドレイクはまだわかってないようだ。

まあ別にバカ呼ばわりはしないが、察しろといたい。

「さすがにボスのアイツを連れていくわけには行かないだろう?」

「でもクロッドとかに任せられないか?」

「義賊の皆さんの、アネスさんに対する忠誠心は本物でした。それは逆に、アネスさん意外の命令は聞かないのとほぼ同義……。ア

ネスさんを連れていってしまうと、義賊は崩壊する可能性が高いです。」

「俺もダメ元だったけどな。一応、自分が欲しがられている、と知らせておきたかった。」

少し間をおいて、ドレイクも納得したようだった。

「カエデがそう言ったことで、将来仲間になる可能性が出てくるということがあるか。」

「まあそういうことだ。」

なるほど、と呟いてドレイクは会話を止めた。

その日の夜。適当に買った食材で食事にした。  
今は食後のトークタイムである。

「サンゼルスシティだっけか？そこまでどれくらいだ？」

「このペースで行くと、だいたい明後日の昼前には着くと思います。」

なるほどね。それまで野宿生活か。

「俺もサンゼルスシティには行ったことないんだけどよ、どんな街なんだ？」

ドレイクいいね。俺も聞きたい。

「なにぶん故郷、ドルマの街からずいぶん遠いですからね。私も12の頃に一度行っただけですけど……。」

そういえば二人って何歳なんだろう。

「一言で言えば、魔法が盛んな都市です。」

「「ふん。」」

「魔道具やマジックアイテム、魔法武具がよく売られており、魔法学校なんて施設もあるくらいです。ま、そこに入ったからといって魔法を使えるようになるとは限りませんが。」

なんか大量にファンタジーなワードが出てきたな……。

「なあイリス。魔道具、マジックアイテム、魔法武具、魔法学校について簡単に説明してくれ。」

「ほえ！？多いですね……口が疲れちゃいます……。まあいいですよ、カエデさんは知らなくても仕方ないですし。」

なんかバカにされたような気もしたが、知らないもんはしょうがな

い。

「俺もマジックアイテムなんて知らねえな……。」

ドレイクも知らんのか。でもコイツは剣一本、てほうが似合ってるからな。

「ではまず魔道具ですが、これは魔導の機構を使って作った文明の利器です。最近は遠くにいる人と交信できる魔道具が開発されたらしいですね。」

機械みたいなもんか。へえ、交信ねえ。会話と言わないあたり、まだ電話には到ってないみたいだな。

「次にマジックアイテムですが、これは別名マジックコインとも言います。ルナのない一般人でも魔法が使えるという代物ですが、使い捨てですし下級魔法しか撃てませんし、何より威力が三流魔導士にも劣りますから、私たちにとっては大して価値はないですね。創造魔法の使い手に、アリアーの剣士……そんな中途半端なアイテムなんていらなんでしょう?」

「そうだな!!」  
となりで凄く満足そうなヤツがいる……。まあ気にしないでおう。

「次に魔法武具ですが、これは魔法の威力を弱める鎧や、ルナを流すだけで魔法が発動する武器のことです。鎧は価値あると思います。武器に関しては必要ないとおもいます。どんな魔法も直線にしか飛んでいきませんし、例えばカエデさんのデュアルディオスクロイやドレイクさんの無銘村正宗なんかと打ち合ったりしたら三合もたずに折れますね。魔導機構を組み込んだ分、脆くなっているんで



す。・・・それに、なんといつても値段が高い！！正直お金の無駄遣いです。」

俺らってやっぱリチート性能なのかなあ。

今までで興味出たの魔道具だけだし。

「最後に魔法学校です。最初に言っておきますが、15才で卒業ですから私たちは入れませんよ？まず、ルナを測ってそれぞれの適性クラスで学び、ひたすら魔法の練習をします。月謝も高いですし、その中でも魔法を使えるようになるのは5割以下です。」

あらあら、残り5割強は不憫だねえ……。ってかイリスって15才以上だったんだ。

「なるほどね。サンキュ。でさあ、そんな魔法都市があんのに、俺ら一回も魔導士に会ってないのはなんで？」

前々から思ってたことなんだがな。俺も魔法教えてもらいたいし。

「確か前も言いましたが・・・魔導士はやはり貴重で、どこの国にも引つ張りダコなんですよ。それにこの西アリアはほとんど大都市がありませんから、特に若い魔導士がここにいるほうが稀ですよ。」

「なるほど。」

「魔導士仲間にしたいよなあ。」

ドレイクが呟く。正直俺もそれ目当てで聞いていた。だが魔法学校なんて話を聞いていると、どいつもエリート意識ばかり高いヤツな気がする・・・。

いいヤツに会えるといいがな。

「そうですね。サンゼルスシティに着いたら、一度魔導士探しても

「しましうか。」

そんなに上手く見つかるかなあ。

一抹の不安を残した。

「あ、カエデさん！！あの銃って武器について教えてください！！！」

「！」

「忘れてた！！俺も聞きたい！！！」

「だが断る。」

「「即答！？」「」

面倒だなあ。まあいいか。

このあと拳銃の構造、使用法、戦争での扱いや、どんな恐ろしいものであるかを説明した。正直あまり使いたくないということも。

二人とも未知の文明の兵器についての話を、食い入るように聞いていた。

## 第12話 とある旅人の1日(前書き)

〈報告〉

・累計PV10000突破!!!累計ユニーク1200突破!!!!!!  
皆様のおかげです。今後も“とあもの”をよろしくお願いします!  
!!!!!!

## 第12話 とある旅人の1日

「起きろカエデー!! 今日もやるぞ!!!」

「めんどくせえ……。」

朝、ドレイクに起こされる。日が上ってまもなく、イリスはとなりで幸せそうに寝ているのになぜ俺だけ叩き起こされるのか。

というのも、ドレイクと旅するようになってからの日課だから仕方がない。

ドレイクの稽古相手。それが俺の日課の一つだ。さすがに互いの武器（特にドレイク）が危険過ぎるので、村正宗をあげた日に斬った巨木から木製の武器を作り、それで毎日やっている。

汗を流すのは嫌いじゃないが、いかんせん最近寝坊ができない。・まあいいか。

「行くぞ。」

「いつでもどつぞ。」

ウリヤアアアア!!!

この稽古は三本勝負。先に相手の体に有効打を三本叩き込んだほうが勝ち。

ちなみに俺はコイツに一本も許したことがない。逆にそれが負けず嫌いなドレイクの起爆剤になっているのだろう。

ドレイクの右袈裟斬りを左のトンファーで受け流し、回転させて木の剣先を狂わせる。一瞬バランスを崩したところへ、そのまま左トンファーを滑らせて……

みぞおち強打。  
ドカ！！！！

ぐお！？

「いつぽん。」

「ち、チクシヨーーー！！！」

正直最近ドレイクの打たれ強さが上がってきた気がする。もちろん前より太刀筋もいいのだが・・・みぞおちに一本叩き込むだけじゃほとんど怯まなくなってきた。

「まだまだあー！！！！！」

うお！？

今度は左から鋭い水平斬り。

これは左トンファーに腕を添えて防ぐしかねえ。かわす余裕がない。

ガキーン！！

く、しびれるな。だがそれは向こうも同じようだ。俺の力ってゼウ  
スチートだし。

「ぐ、オラア！！！」

防がれた太刀を引き下げ、そのまま大きく回しての勢い付いた一撃・  
・だが。

「おせえ!!」

ドレイクが引いて回した瞬間に突進して腹に右トンファーを叩き込む。

ボグ!!

ん?ボグ?前までならそのまま吹っ飛んだはずなのだが。

「ぐ……相変わらず強えな。」

おいおいおい……強えなじゃねえよ。どんだけ強くなってやがる。俺は飛び下がって距離をとる。

「やべえ、リーチかかっちゃまったな。だが負けねえ!!!」

なんか「野球は9回ウラ2アウトから」みたいなこと言ってるが……んなの奇跡頼みだ。いいピッチャーが頭のいいキャッチャーの言うこと聞いてりゃ、99%後攻めの負けなんだぜ!!!!

「攻勢参之型」

距離があるからこそできる技。

ドレイクに向かってスクリューのように突進していく。

「うお、やべー!!!!!!」

「吹っ飛べー!!!!!!」

ドゴーン!!!!!!ドレイクが宙に浮く。……って!あの技食らっ

てちょっと浮くだけかよ。地球の軍人にぶつけたって3メートルは吹っ飛んでたのに……。

「はい、今日も俺の勝ち。」

「クツソーーーー！！！！！！」

余裕そうに見せているが……まさか、最弱とはいえ攻撃技を出すことになるうとは。そのままやっても負ける気はなかったが、一本取られる可能性はあった。ああいうタイプは一回ノセると止まらな  
いから……まあこっちが正解だろう。

「おはようございます。」

「おはよ。」

「おっはよ〜。」

イリスがきた。さっき起きたのをちらっと見たが、稽古が終わるまで食事の準備をして待つとは……さすが空気よめるねイリス嬢。

「今日も朝からお疲れ様です。朝食……簡単なものですができあ  
がりましたので食べましょう。」

「ほいほい。」

「了解！」

下らない話をしながらの朝食。

イリスがサバイバル料理上手いのは気にしない。

「にしても、稽古であの技って……。」

イリスが俺に対して呟く。暗に酷くないですか？という意味だろう。そういえばあの技、イリスは一回山賊戦で見てるんだよな。4人く

らいを相手にやったのを。

「イリス知ってたんの？」

「はい。初めて会ったとき、山賊を相手に……。」

「……カエデ？一つ聞いていいかな？」

「なんだ？」

「手加減してる？」

「うん。」

「即答かよ!？」

「ドレイクには申し訳ないが、あの技も攻撃技の中では最弱だ。まあとりあえず、あれくらい防げるようになれ。」

苦笑しながら俺は言う。

「チクシヨーーー!!!!!!」

ドレイクが叫んだ。

俺とイリスはクスクスと笑っている。

「でもカエデさんって本当に何者ですか？ドレイクさんって“これでも”アリアーの剣豪ですよ？」

「こ、これでもってお嬢ちゃん……。」

ドレイクがなんか黒いオーラを出しているが気にしない。

「俺はただの異世界人だよ。」

「異世界人ってだけで“ただの”じゃない気がしますが……。」

「気にしたら負けだ。」

「そうですか。」



そんなこんなで朝食が終わり、みんなで適当に洗い物。ちなみに皿や鍋は全部ストークタウンで買ったものだ。

「さて、じゃあサンゼルスシティに向けて出発しますか。」  
「うし。」

荷物はまとめて馬にのせ、俺とドレイクが一頭ずつ引く。

だんだんと山道ではなくなり、平坦になってきた。畑があり、ちらほらと人がいるところを見ると、どうやらサンゼルスシティも近くなってきたようだ。

適当に軽く談笑しながら歩いていると、いつの間にか日が落ちる。仲間と話すつてのは楽しいもので、このように“気づくと夕方、昼飯食ってねえ！”っていうのはもうパターンだ。

「さて、今日はこの辺で野宿か。」  
「そうですね。ここなら明日の昼前にはサンゼルスシティにも到着できるでしょうし。」

まず野宿を決めた場所に馬と荷物を置き、イリスが番をしている間に俺とドレイクで薪と肉を調達する。

ドレイクよ・・・嬉々として村正宗を薪割りに使うのはやめてくれ。そんなに使いたいのかお前・・・。

そんなこんなで収集作業を終わらせ、調理は俺とイリス。その間ドレイクは刀の手入れをし、血のついた刀身を磨く。俺らが調理を終える頃、輝きを取り戻した村正宗を眺めて喜んでいた。

「「「いただきます。」」」

我ながら美味い飯だなと思いつつ、横を見るとドレイクがガツガツと・・・おつおつ、よく食うな。

「明日には着きますが、あの街を抜けるとルスリア領に入ります。あの地域は元々アリア領だったので、現在はルスリアに奪われています。・・・まあそれはいいとして。ルスリア領内に入りますと、もう一度東アリアに行くまで“迷いの森”と呼ばれる森を通り抜けることになりますので、町がありません。食材はサンゼルスシティで買い込んだほうがいいでしょう。」

「了解。」

「迷いの森ってなんだ？」

俺、マジで無知だよなあ。

「迷いの森は、夜になると雰囲気を変えて旅人を迷わせるという曰く付きの森です。ですから、朝早くに入って急いで抜けることにしましょう。」

ファンタジーだなあ。方位磁針でも創造しますかね。

「まあとりあえず明日はサンゼルスシティで食材買えばいいんだな？」

「そういうことです。」

イリスがニツコリと微笑む。

あらかたの食事が片付いたところで、三人で洗い物。そういう“めんどくさいものはみんなやる”と、ドレイクが仲間になった日に決めた。

洗い物が終わると、食後のトークタイム。  
最近イリスまでドレイクをいじるようになってきた。

「最近、ドレイクさんキャラ弱くないですか？」

「ちよ！え！？何いきなり！！」

「最初あんなカッコいい“喧嘩屋”みたいな登場だったのに、今となつてはこんな有り様……。」

「え？イリス何！？そんな目で俺見てたの？」

「はい。知らなかったんですか？」

「びよ！？」

こんな感じ。確かにキャラ弱いけどさあ、イリス……さすがにひどいぞ。

寝るときは、まずイリスが落ちる。

俺とドレイクはイリスの寝相による被害を受けないところを見計らつて場所を選び、寝ることになっていた。

ドレイクを加えた初めての野宿の時は、ドレイクがみぞおちにかかとおとしを喰らつて悶絶してたっけ。

寝場所を見つけると二人とも寝転がり、特に考え事をするでもなく寝付く。

つてなわけで、お休みなさい。

旅人は、自らが英雄という運命に翻弄されるとは露ほども知らず、  
この時のんびり旅を楽しんでいた。

### 第13話 行き倒れの魔導士(前書き)

〈報告〉

- ・ 緑茶さん感想ありがとうございます！
- ・ お気に入り追加、感謝です！！頑張っていきますので、これから  
もよろしくお願いします！！

### 第13話 行き倒れの魔導士

「ここが、サンゼルスシティです。」

「おお、ここか！」

「なんかすげえな……。」

俺らの前には深い水掘みずほりがあり、城のような城壁が円状に街を取り巻いている。真っ白で手入れの行き届いた城壁には、シミ一つ見つか  
らない。

だが……。

「俺らはどうやって入ればいい？」

跳ね橋が降りない。なんだ？新種のいじめかコルア。

「えと……すみませ〜んって叫んでみます？私は恥ずかしいから  
嫌ですが……。」

「……。」

「……え？なんで二人とも俺のほう見てんの？」

「いや、適任者は一人しかいないから。」

「そうですね。」

「え！？俺に叫べと！？すみませ〜んって！？やだよ、恥ずかしい  
じゃん！」

「大丈夫、俺らは他人のフリするから。」

「早くしてください。」

「びよ！？」

いじられドレイク。うん、もうこいつはいじられキャラ決定。

逃げ場が無い事を確認すると、あいつは叫ぼうと息を吸い込む。・



さて、城壁の上から誰か出てきたぞ？どうすんだ？

「なにか呼ばれたでしょうかぁー！？」

「カエデさん。ドレイクさんに任せて、行きましよう。」

人のせいかな。やるなイリス。

仕方ないのでついていく。なんか、最近イリス黒くないか？

「え！？俺に押し付け！？……すみませー！ん！！！！なんでもないです！！！！おい、待ってくれえ！」



水掘の周りを歩いている。左側には草木が生い茂り、道なき道といえるだろう。だが、視界が悪いわけではなく、一本の道がおくにあるのが見渡せる。

「左の林を抜けると街道があります。その街道を北西に歩いていくと、とある村。さらに行くくと、私達が戦った山道に出ます。」

「！……ってことはそのとある村って……。」

「はい、私達が助け出した人たちが住む村です。」

「へえ。そう聞くとなんか気分いいな！」

「カエデさん。このサンゼルシティを抜けてもルスリア、私達が戦った道を北西に進んでもルスリア。ルスリア帝国の国土は広大です。ルスリアを除いての天下統一というのは、かなりの茨の道ですよ？」

「かまわない。だがルスリアの国土とはいえ、俺らがこれから通りぬけようとしているのはただの細く入り組んだだけの土地だろう？ アリアが飲み込まれるのはまだまだ先の話だと思うが。」

「そうですね。ま、カエデさんが今更しり込みするとは微塵も思っていないんですけど。」

イリスが微笑む。悪い気はしないが。

「俺もよくしらねえんだけどよ、北西の道を抜けたルスリアって、それも細長いだけの、いかにも“真っ直ぐ侵略しました”みたいな国土じゃなかったっけ？」

「そうでしたね。確かあの街道もルスリアをすぐ抜けて、イル教国に続くはずですよ。」

イル教国、か。その王にも会う機会があるかな……。

というか話を聞いてると、ルスリアの戦法が分かる。

大量の軍隊で敵国の数箇所を割り、亀裂を入れる。そこからどんど

ん外へ外へと領土を広げていくという寸法だ。差し詰め毒を注入し、じわじわと感染していくように。

攻め方どうこうに口を「ドサ！」挟むつもりは無いが、正直やり方が陰湿だな。ゼウスの言うとおり、奴らに天下を取らせたらろくなことが起きないかもしれない。

・・・待てよ？そう考えるともうそれだけでアリアは二箇所亀裂が入っていることになる。こりゃあ長くは持たないかもな、この国も。

「・・・カエデさん・・・カエデさん！」

「ん？」

「考え事してたんですか？何回呼んでも気付かないから・・・。」

「ああ悪い。で、何？」

俺が聞くと、イリスは黙って指を指す。その先には見知らぬ青年を介抱するドレイクの姿があった。

「どーなってるの？」

「私達が歩いてた前方の林から出てきて、そのまま倒れちゃったんですよ。それでドレイクさんが今介抱しています。」

さつき聞こえたドサ！って音はそれか。

とりあえずドレイクに近寄ってみる。意外と慣れた手つきで青年を介抱している。

「慣れてるな。」

「ん？まあな。俺の故郷がやられたとき、偶然生きてた町医者にならったからな・・・。」

「そか。すまない。」

「気にする事はないが・・・コイツはあまりよくないな。脱水症状のほかにも栄養失調、おまけに体力切れだ。察するに、長時間何かか





「カエデさん!!」

うわあ・・・聞かれること分かってるよ・・・。

「その布は何!?!」

羽衣という概念のない連中に、この説明はしんどかった。

東の門・・・つまり先ほどとは反対側の門の前には、ちゃんと跳ね橋はかかっていた。どうやら活気のある街のようで、門を出入りする人は後を絶たない。荷馬車や馬と共に、という人も多いようだ。

さっきの戦闘場所から歩くことだいたい5分。俺達はサンゼルステイに入ることが出来た。青年はというと、ドレイクの荷物があつたほうの馬に干物のように吊るしてある。・・・病人に対応する態度じゃねえな……。ドレイクの荷物はもちろん、彼が自分で背負っている。

東門を抜けると、大きなメインストリートが中心部まで続き、ど真ん中に大きく建物がそびえている……。どうやらあれが魔法学校らしい。校庭のない学校なんて想像できねえよ……。

「まずは宿だ。とりあえずアイツをどうにかしねえと。」

「では私が行ってきます。宿の場所は把握してあるので。」

「お、わりい、ありがとな!!」

俺が校庭のない学校に思いをめぐらせているあいだ、ほか二人はこんなやり取りをしていた。

宿の一室。二人用の部屋に全員で集合している。

青年をベッドに寝かせてからだいたい3時間たつたろうか？まあいろいろと騒動があつたから、サンゼルスシティに着いたの自体が昼過ぎになつたが、もう夕方である。

寝ている青年を眺めつつ、俺がすぐその店で買ってきたパンをかじつての遅い昼食。なかなかオツなものだ。・・・どこがだよ！？  
って感じだけだな。なぜ俺がこんな一人夢想を続けているかという  
と、誰も喋らないからだ。ドレイクは相変わらず青年を見守つてい  
るし、イリスはしばらく窓から外を眺めたまま動かない。おゝい、  
誰か喋ってくれゝい・・・仕方ない、俺が話すか。

「そいつ、目覚めないのか？」

「・・・ああ。」

会話続かねえし。

「こつ言つちやなんだが、なんでそんなに必死なんだ？」

「・・・故郷の戦争の時、こついう状況があつたから、かな。」

「ドレイクが助けて、友人の目覚めを待つ・・・つて状況か？」

「・・・そうだな。友人というより・・・親友だった。」

親友、か。アイツ元気かなあ・・・などと地球のアホを思い出す。

ふと青年の顔が目に入る。少し俺らより年上か？青く澄んだ長髪を  
後ろでまとめて流し、整つた顔立ち。少々そばかすが目立つが・・・

「悪い奴には見えねえよなあ。」

あんだけ必死で貴重な魔導士が追っていたということは、国家単位の犯罪人であることは間違いないと思うのだが……。

すると、彼が目を開けた。

「……ここは？」

「大丈夫か？ここはサンゼルスシティ。お前はこの街の目の前で力尽きていた。」

ドレイクが話をしているあいだ、俺は青年を観察する。青い髪によく合う透き通った蒼穹の瞳、その目には、邪なものは何一つとして感じなかった。……おそらく、冤罪が犯罪を無理にさせられたか……。

横を見ると、イリスも外から目を離し、こちら……青年を見つめている。

「追っ手は！！？？」

「安心しろ、その黒髪が一睨みで追い返した。」

「ひとにらみ……でござるか……あの上級兵を。」

俺のほうをまじまじと見つめてくる。……俺が睨んだから逃げたわけではなからうがドレイクよ。しかしコイツ、上級兵と言ったな。やはり追っ手に上級兵を使われるほどの男なのか？

「危ないところをお助けいただき、かたじけない。拙者はシャオ・シルヴァンスと申す者。貴公らの名をお聞かせ願えぬだろうか？」

「よし、俺はド「待て。」「……なんだよ。」



俺はドレイクを制する。コイツがまだシロと決まったわけじゃない。確かに俺はシロと判断したいが、あれだけ必死で一国が捕まえようとしている人間だ。何が起こるかわからない。

「俺はまだ君を信用できていない。まずは君がアレだけ追われていた理由を聞かせてくれ。」

イリスも同意見だったようで、俺を見て頷き、青年を見やる。

「貴公は、拙者と上級兵の話聞いて、いろいろと推測したようでござるな……。ではまず、拙者は確かに国家レベルの重罪人でござる。しかし、拙者は自分のしたことを正義だと、間違っていないと信じている！……！」

ほう。重罪と理解しながらの正義……。これはコイツの信念のあり方次第では、国が悪いという線も見えてきたな。それに一國に喧嘩を売る度胸……。並じゃねえ。

「全て俺の目を見て話してくれ。話次第で俺はお前を殺しもする。」

「!?!」

「おい!!」

「……。」

反応は、上からシャオ、ドレイク、イリスである。

「……だが俺もそれを正義だと思ったら、全力でお前を守ろう。味方になるう。それは約束する。……いいか、嘘はつくなよ?」

実力は未知数だが、コイツは強いだろう。国家に喧嘩を売る度胸があり、重罪を犯すような力があり、何より自分の信念がある。さて、

聞かせてもらおう。こいつの正義を。

シヤオを一瞥<sup>いちへつ</sup>すると、決意に満ちた目でこちらを睨むように見ている。俺の見解が正しければ・・・俺がコイツを買い被<sup>か</sup>っていないければ、“己の正義を話して殺されるならかまわない。俺は絶対に正しい”という目だ。

「いいでござろう。嘘など吐こうなどと思うものでござろうか。拙者は自信を持っていえる。間違っではないと・・・。」

シヤオは、イル教国の軍隊。それも魔導士部隊の隊長だったらしい。その頃彼は自分の仕事に誇りを持ち、王の下すどんな厳しい任務も従順にこなしていた。

だが、ある時王は変わった。もう年をとり“死ぬのは時間の問題”とは言われていたが、耄碌<sup>もろく</sup>などは一切していなかった。だがその日を境に、目は血走り、狂気を纏った雰囲気をかもし出すようになった。おかしい。命令されるのは誇りもへったくれもない、ただの虐殺ものばかり。王が「コロセ、コロセ」と呟いているのも聞いた。命令の主な内容は、“北方の一族が気に食わないから全員殺せ”“国の学者たちが私を愚弄しているから殺して来い”など。

シヤオと副隊長は、出される命令の数々を完遂したことにし、一つもやっていないことを隠蔽していた。

そして月日が流れるうち、他の部隊は逆らえずに虐殺を遂行。イル教国は荒れていった。

だがある日シヤオは、外務大臣が王に何か囁き、洗脳しているところを目撃した。

とつちめて全て吐かせると、大臣はルスリアと内通していたことが発覚。さらに王はもう元に戻らず、夜はうなされ、昼は破壊衝動を起こすと聞かされた。当然、その場で外務大臣は切り殺した。

シヤオは副隊長と相談し、王の苦しみと虐殺される民たちを一番楽

にできる方法を見つけた。

そしてその夜、王を暗殺した。

だがその王の最後の言葉は

「ありがとう」

二人は涙をこらえてその場を後にした。

そこまでは良かった。

王宮内ほとんどの人間が胸をなでおろし、王子を戴冠させて次の王にしようとしたのだが・・・

売国奴ばいこくどは一人ではなかったのだ。

国でもっとも権力のある宰相。その下にいる將軍と相国が、シャオと副隊長を王殺しと外務大臣の殺人罪とし、死刑宣告をしたのだ。

だが牢獄の番長がシャオに恩を感じていた人間だったらしく、脱獄をさせたので、必死に逃げてきた、と。

「・・・というわけでござる。」

俺の目を見て、しっかりとした口調で最後まで言い切った。少し淀

まずに。  
魔導士部隊の隊長ねえ。

「もしかして、あなた“大魔道”？」

イリスが急に変な問いをする。なんだ大魔道って。

「はは、アリアにまで知れ渡っているのでござるか……。」

「やっぱり！！カエデさん。この人ですよ。前魔法の話をしたときに話した、6属性を操る魔導士。」

「ああ、コイツが……。その話は後にしよう。」

「後ってことは……？」

「そうだ。殺さない。俺はお前が正しいと思った。」

シヤオの目が、覚悟から嬉々に変わった。

「ありがたき幸せ！！貴公らには守っていただき、認めていただき、喜びの限りでござる！」

「俺はカエデ。カエデ・ミナモトだ。よろしくな。」

俺が自己紹介したのに続き、二人もそれぞれ行つた。

「俺はドレイク・ベルナスだ。」

「私はイリス・ハーミットといいます。よろしくお願いしますね。」

「あ、あ、よ、よろしくでござる……！」

すごい喜びようだな、なんか。今更だがあの妙な武士言葉に触れていいものか……。

さて、まだ質問がいくつか残っていたな。

「シャオ。まだ他にも聞きたいことがある。」

「?なんでござるか?」

「なんで追っ手を追い返さなかったのか。これからアテはあるのか。この二つだ。」

少しシャオの顔が暗くなる。

「まず最初の質問についてでござるが、7日間ろくに睡眠も食事もとらず、ルナがほとんどなかったのでござる。ルナが少ない状態で魔法を使うと魔導士は制御が利かないのでござるよ……。拙者が逃げるにはルナを振り絞って追っ手を消せばすんだこととござるが、無関係の人間を殺めるのは拙者の気概が許さない……。ゆえに、黙って逃げるしかなかったのでござるよ。拙者ごときがメンツを語るのもおかしい話でござるが……。」

コイツ……。俺の想像以上に凄いヤツかも知れない。

「二つ目の質問についてでござるが、恥ずかしい話、全くアテなどないでござるよ。しいて言えば、拙者の副隊長を探したのでござるが。どこに行ったか行方も分からず、今は何をすべきかわからないうでござる。」

恥ずかしそうに頭をかくシャオ。ここまで来ると……。もらったな。追っ手どもが最後に吐いたセリフは、シャオには言わないでおこう。

「シャオ、俺達とこないか?」

すると、シャオは驚いた顔をしてこちらを見る。

「いいのでござるか?拙者は罪人。それも一文無しの身でござるよ。」

「？」

「それでもだ。一緒に来てくれ。シャオ。」

「カエデさん、理由を話したほうがいいのではないのでしょうか。」

あ、やべ。そうだな。シャオはきよとした顔で俺を見ている。

「シャオ、俺達は、強い仲間を集める旅をしている。理由は、戦争のない世界にするためだ。国のお偉いさんたちのせいで民や兵士が死んでいくのは我慢ならねえ。この二人や俺は、そういう意志をもつとともに旅をしている。シャオの話聞いて、俺はシャオに、似た信念を感じた。だから、一緒にきて欲しい。」

シャオが固まる。なんでだ？

「拙者と・・・拙者と同じ考えのお人がいたとは・・・。その旅、拙者でよろしければ是非一緒にさせて欲しいでござる！！！！！！」

よっしゃ！仲間ゲット！！

「シャオさん、これからよろしくお願いしますね。」

「よろしくな！！」

「シャオ、コイツは好きなだけいじれ。」

「びよ！？」

シャオはクスクス笑っている。

「いやあ、よくよく見ればイリス殿は戦女神、ドレイク殿は焰龍でござったか。その焰龍を手玉にとるようなカエデ殿がおかしくて・・・。」

「まあ、リーダーはカエデさんですから。」

「そついでいぢぢるか。貴公らといると、退屈しなそつな気がするでいぢぢるよ。」

シャオはにっこりと微笑んだ。

## 第14話 サンゼルスシティ（前書き）

（報告）

・アストさん感想ありがとうございます！いつも読んでいただいていること、感謝してもしきれません！  
・お気に入り件数64件！？ああありがとうございます！！！！  
死ぬ気でがんばります！！



## 第14話 サンゼルスシティ

昨日はシャオの一件でサンゼルスシティを周ることができなかった  
ので、ドレイクとイリスに旅の食料の買出しに行ってもらい、俺と  
シャオは・・・というかシャオに魔道具の掘り出し物を探してもら  
い、俺はそれに付き添っている。

「シャオはさ、6属性使えるんだって？」

「ああ、拙者は光と闇以外の通常魔法は古代呪法まで全て使えるで  
ござるよ・・・それより、拙者はカエデ殿のルナのほうが気になる  
でござる。」

シャオはある露店の出し物を物色しながらそう呟いた。

「俺のルナ？」

「拙者も自尊するわけではござらぬが、拙者も一流の魔導士と自負  
してござる。そこまですなれば、一目でその人がどんな魔法を使う  
か・・・つまりルナの波動、どの属性の魔法を使えるかくらい分か  
るのでござるよ。」

「へえ、魔導士・・・てかシャオすげえな。」

「そんなことは・・・それにカエデ殿には2種類の波動色が見える  
でござる。ひとつは分かっても、もう一つは見たこともない半透明  
の陽炎のような色をしているのでござるよ。」

俺、創造魔法の他にも使えるってことか？・・・シャオのいう見た  
ことない波動ってのは創造魔法のことだろうな。さて、俺は何をつ  
かえるのかな？

「その分かるほうの波動はなんだ？」

「闇属性でござるよ。それもとても強烈なルナでござる・・・使ったことないのでござるか？」

なんと！俺は闇属性の使い手だったか！しかも結構強いらしい。

「初めて聞いたし、使ったことなんてねえな・・・。多分シャオの言う半透明のほうはもう結構使ってるんだけどな。」

「！そうでござるか。一魔導士として、そこは興味のそそられるところでござるが・・・そちらのルナもかなり強いでござるから、ここで使役するとまずいでござるか？」

今日のシャオは昨日と打って変わって、朝からニコニコ、ノホホんな雰囲気を出していたのだが・・・魔法のことには結構食いつくなまあいだろう。この時間は人通りも少ないし。

「創造 デュアルディオスクロイ」

「！？」

とりあえずおなじみの武器を出して見せる。

「お、驚いたでござるな・・・。エンシエントスペルの使い手でござったか・・・。もしかして、そのカエデ殿の着ている羽衣も・・・？」

とりあえず瞬時にトンファーを消す。・・・なんでこの羽衣が創造した物だと分かったのだろう。

あ、ちなみにマジで俺は昨日から羽衣を着こなしている。黒いマント状にして。

「そうだけど・・・よく分かったな。なんで？」

「その羽衣からも、半透明・・・創造魔法の波動が流れているでござるよ。」

「そうか。でさあ、俺に闇魔法教えてくれるか？」

とりあえず気になっていることを聞く。だって魔法使いたいじゃん？・・・確かに創造魔法も使っけど、あれはなんか違うだろ？

「拙者は使うことができないでござるが・・・古代呪法まで一通りは憶えているでござるから、口頭での説明ならできるのでござるよ。魔法の基本は同じでござる。」

そういつてシャオは微笑むと、また「これもなかなかでござるな・・・などと物色に戻った。

昼には宿に戻り、皆で食事することになっていた。同時に買ったものの報告をしたり、午後の予定を決めるためだ。俺とシャオが宿に着くと、二人はすでに食堂の丸テーブルで俺らを待っていた。

「あ、来たな！こっちだ！」

「カエデさん、シャオさん、どうでした？」

「ただいまでござる。待ったでござるか？」

「わりいな。シャオが結構目利きでさあ。いいもの選んできたぜ。」

そんなことを言いながら、俺はイリスの右隣、その横にシャオが座る。

「まず、お金足りました？」

「ああ、ドレイクから奪った金貨の残りでな。」

「・・・このやる！この借りは必ずかえ」まあドレイクさんはほつといて。シャオさん、何を買ってきましたか？」放置！？」

イリスとドレイクはもう注文を終えたらしく、シャオはなんでもいというので、今日のお勧めを二つ注文しておく。

「マジックアイテムは必要ないとカエデ殿が言っていたでござるか、3つとも魔道具でござる。」

「そうですね。ドレイクさんもアリアーの剣豪。カエデさんは私の目が正しければ正直当代最強もいいところですし、魔法の下級なんて、いまや“大魔道”のいる私達には必要ないでしょう？」

「はは、そうでござるな。拙者はまだまだでござるが、あの上級兵を一睨みで追い返したとすれば、確かに当代最強でござる。」

大魔道が自分のことまだまだとか言ってるし。ってか何度も言うけど睨みつけて追いついたわけじゃないって！

「さて、まずはこの皮袋でござる。」

そういつて取り出したのは、シャオが最初に買った、テニスボールがギリギリ3つ入るかくらいの大きさの袋。正直なんでこれ？って思ったが、説明を聞いてファンタジーの凄まじさを思い知った。

「これはどんなものでも入る袋でござる。いま背負っていたり馬に乗せている荷物は全部、この皮袋に入ってしまうという、なかなか優れた品物でござる。」

「「おお〜。」」

マジで青狸のポケットだろ。

「次にでござるが、このイヤリングでござる。」

そういつて取り出したのは、8個パックで売っていたきれいなイヤリング。

耳に穴開けるのか？と一瞬焦ったが、どうやらさすがにそんなことはないらしい。耳たぶをはさむだけで、自分の意志以外ではとれなくなるという・・・ファンタジーだなあってモノ。

「この8個をつけているもの同士は、自然と直感で誰がどこにいるのかわかるのでござる。8個入りしか売っていなかったでござるが、まあ4つは保管しておくでござるよ。」

「「おお〜。」」

そういつて一つずつ俺らに渡し、残り4つをパックごと皮袋へ放り込む。ああ、マジで少しも容積増えとらんわ。……ってかオイ、お前ら。もう少しバリエーションないのか感嘆詞！

「最後でござるが、この“迷いの森を迷わず抜けられる君”という、ネーミングセンスゼロの魔道具でござるよ。」

そうそうこれこれ。“俺らが迷いの森を通る”と言ったら持ってきた。なにやら色んな色があったが、一番安いのを買ってきたな。

「まあその名のとおりでござる。夜になっても絶対さまようことな  
く抜けられる道具だそうでござる。怪しんだのでござるが、他の街  
にも結構あるようでござり、これを使ってここまで来たという旅人  
がいたので買ってきたもおのにござる。」

「「おお〜。」」

うっさんくせえがな。ってかこいつら……。まあいい。お、飯が  
来た。いただきます。

「これで俺らは終わりだ。二人は？」

「あ、色々買ってきましたよ。ドレイクさんが凄い力持ちで感動し  
ました。」

「し、しんどかった。」

こりゃ無理やりイリスが全部持たせたな……。すげえにこやかだ  
し。

確かに紙袋4つに、たっぷりと入っている。

「迷いの森をぬけるだけで、こんなに必要でござるか？」

「長期保存が利くものばかりですから、いざと言つ時にいつでも大

丈夫ですよ。」

シャオが、顔に汗マークが似合うような顔で聞くが、相変わらずイリスは笑顔だ。

腹黒くなければとてもかわいいんだが……。最近ほえ！？とか言わねえし。

・・・まあそれは俺の趣味の問題か。

「じゃ、この皮袋に全部いれて大丈夫でござるよ。」

「はい。あ、重くならないですか？」

「ドレイク殿に持ってもらう気満々でござるな……。」

「はい。」

「ちよ！？」

「大丈夫でござるよ。どんなに入れても重さは変わらないでござる。それに、出したいものを念じればすぐに出てくるでござるから、どんなに入れても整理の心配はご無用でござる。」

「そか。よかつたあ。」

情けねえよドレイク……ってかその袋マジですげえな。青狸みたいに「これでもないこれでもない！」ってパニクる可能性はないわけだ。前から疑問なんだけど、なんであの中にラーメンが入ってんだろう？……閑話休題。

「さて、午後はどうする？俺としてはシャオに魔法を教えてもらいたいんだが。」

「魔法！？カエデさん、創造魔法以外にも使えるんですか？」

「拙者が見る限り、カエデ殿には強い闇の波動が流れてござる。ものによれば、カエデ殿はもつと強くなるでござるよ。」

「うお～！カエデが遠ざかるう～！！」

「私とドレイクさんは魔法を使うことはできますか？」

シャオはしばらく黙って二人を見つめる。

「そうでござるな・・・ドレイク殿にはわずかに火の波動が流れてござる。イリス殿は、ふむ。土の波動が流れてござるな・・・とすると、二人のことを考えて・・・。わかり申した。午後は三人ともサンゼルスシティの外で魔法の練習をするでござるよ。うまく行けば一日で魔法を使えるようになるでござる。」

ドレイク、イリスの顔が明るくなり、シャオも笑った。さて、闇の魔法ってのはどんなのだろうな。



## 第15話 シャオの魔法教室！

サンゼルスシティ郊外の森に、俺らはいた。

「さて、まず申し訳ないのでござるが、ドレイク殿とイリス殿はあまり魔法の使える体ではないのでござる。でござるから、ドレイク殿は一つ、イリス殿は二つに絞って修練を積むことをお勧めするでござる。」

その話を聞いて暗くなる二人。まあしゃあないわな。

「まずはドレイク殿。貴殿には身体強化の魔法を覚えてもらおうでござる。この魔法は単体で使用でき、貴殿やカエデ殿のような前線で戦う人間に大事な魔法でござる。これをかけることにより、貴殿の通常時の2倍〜3.5倍の力を発揮できるのでござる。」

「おお！それは凄い！是非教えてくれ！！」

「ちよつとまで。朝の稽古にはそれ絶対使っなよ？」

たまらず進言する。んな力がかかってきたら100%骨と木製武器が砕け散るわい！

「次にイリス殿には、自らを土の壁で守る魔法と、相手を土に包む魔法。どちらも防衛の魔法でござるが、この二つを覚えて欲しいでござる。」

「わかりました。包むターゲットはあれですか？」

「いや、ドレイク殿ではござらん。」

「ちよ！？」

イリス腹黒さ大爆発！．．するとシャオがこちらに声をかけてきた。

「カエデ殿、しばらく待つてはもらえぬか？この二人に呪文を教えてから、一対一で教えたいでござる。」  
「ん。わかった。」

するとまずシャオはドレイクに呪文を教え、その後イリスに教えにかかった。

そして終わったらしく、こちらに歩み寄ってくる。

「待たせたでござるな。」

「いや？大丈夫。」

「二人は初級魔法ゆえ、手間はかけずとも済むのでござるよ。それに、こんなに教え甲斐のある生徒は久しぶりでござるからな。しっかりいい魔導士になって欲しいのでござるよ。」

なんか、凄い優遇!？

「さて、創造魔法を使うときと同じく、精神を統一するでござる。」

・・・うん。このまま“創造”って言えばなんでも出せる。

「次に、そうでござるな。自分の手に、大きな黒い球を作りだすイメージをするでござる。それと同時に、ヴァニッシュ・ボールと唱えるでござるよ。」

ボール？ボールつつたら俺にとってはアレしかねえよ。

俺は手に黒いバスケットボールを作り出す。

「バスケ・・・じゃねえや、ヴァニッシュ・ボール。」

「お、いいでござるな。その球にいろいろ不思議な形の筋が入って

いるのは気になるでござるが・・・そのままあの木目がけてぶつ  
けるでござるー！」

それは想像したのがバスケットボールだからだ！！オリアア！  
シユン！！・・・ドスーン！！！！

ん？なんか、ぶつかったとたん木の幹が消えて、上が落ちただけ  
ど。

「いいでござるな。物体を消滅するボール。それがヴァニツシユボ  
ールでござるからな。8属性それぞれにボールはあるのでござるが、  
燃やしたり、シビレさせたり、動けなくさせたりと、色んな特性が  
あるのでござる。そのなかで闇が一番強力な“消滅”という特性を  
もっているでござるよ。」

K O E E E E E E E E E E E E E E E E

「でござるが、他のボールと威力は一緒。別のボールをぶつけられ  
ると相殺してしまうでござるよ。まあ下級魔法でござるからしかた  
ないとは思っているのでござるが。」

「あれで下級か・・・怖！」

「何をいうでござるか。拙者のような魔導士にとって、その羽衣は  
インチキもいいところでござるよ。魔法攻撃や飛び道具を無効とか  
・・・チート以外の何物でもないでござる。」

あ、“大魔道”の攻撃も弾いちやうの？この羽衣。すげえ

「拙者でなければだいたいが弾かれるでござる。」

あれ？



「ちなみにルナの高いカエデ殿ならば、かなり速い速度で飛んでいくでござるよ・・・さて次でござるが、“ブラックカース”でござる。これは相手の物理攻撃を無効化する呪文でござるよ。まず拙者がいまからカエデ殿の腹を殴るでござるから、その瞬間に呪文を唱えるでござる。」

無効化、ねえ。よしやってみるか・・・なぜかシャオがファイティングポーズをとっているが気にしない。

「参る!!!」

でやああ!!!

意外と速いな!! “ブラックカース”!!

「・・・ん?おおお!!?」

俺の腹をシャオのパンチが通りぬけていた。なんてホラー!? シャオが手を引き、立ち位置に戻る。

「上手くできているでござるな。やはりカエデ殿には才能があるでござるよ。注意点としては、今のように、突き抜けた攻撃が残っている場合は、すぐに離れたほうがいいでござる。なぜなら、体内に残ったままブラックカースがとけると・・・おぞましいことになるでござるからな。」

「確かに。」

「しかし、カエデ殿のように強い人間がブラックカースを使えると・・・ずいぶんなことになるでござるな。はははは!」

高らかに笑うシャオ。どういう意味だろう。

それが顔に出ていたらしく、シャオが説明をしてくる。

「もともと闇の魔導士というのは、8属性の中でも貴重な上に、なかなか使役する魔法が強いのでござるよ。そこで古来から敵は闇魔導士に集中砲火を浴びせるのでござる。それを一時的に防ぐために生まれたのがブラックカーズなのでござるが・・・接近戦で強い貴殿がこの魔法とは、結構な凶悪タッグだと思った次第でござるよ。」  
なるほどな。ブラックカーズをかけて戦えば接近戦じゃ敵なしかな。

「さて、今日の最後は上級ま「ああああ!!やっぱり!!」「ん?」  
どっかの制服を着た14、5歳くらいの子どもたちが、こちらに向かってかけてくる。  
魔法学校の生徒か。だがなんで?

「」「」「大魔道”様!サインください!!」「」「」  
なるほど。魔法学校の生徒にとっては憧れの的か・・・ん?なんで一目で分かるんだ?

「な、なんで拙者が大魔道だと思うのでござるか!?!」  
ごもつとも。俺も聞きたいわ。  
すると赤いおさげの女の子がはしぎながら言う。

「え?教科書に顔写真つきで載っていますよ!インタビューも受けてたじゃないですか!?!」  
「あ!あれか!?!」

おいおい・・・なるほどな。ってかアリアにいるってことについては何も関心ないのか？

すると、水色の髪をした男の子が、俺を指差して叫ぶ。

「あああああ！！！！この兄ちゃん昼間の創造魔法の兄ちゃんだ！！

！！！！」

「げ！！！！」

見てやがったのかよ！！！！

「もう一回創造魔法見せてよ兄ちゃん！！！！」

「ええ？」

俺は正直唾然・・・。やれって言われてもなあ。  
ん？なんか数人白い目でその水色の子を見る。

「創造魔法なんて出来る人いるわけないじゃん。」

「そうだよお前頭おかしいよ。」

「うそ吐くなよお前。いつもそうだけどさ。」

「ボクはエンシエントスペルはただの空想上のものだといつも言っているだろ？」

口々に罵倒する。あちゃあ、こりゃコイツ可哀想だな。

「おいお前ら、こっち向け。」

全員に呼びかける。特にその水色の子と、最後に空想どこのと言った学者気取りのガキを見て。

「存在が分からないものを否定するのは確かに、悪いことじゃない。だが、信じることのほうが楽しくないか？もし本当に存在が明らかになったとき、嬉しくないか？」

「あなたも信じているんですか？やめたほうがいいですよ。エンシエントスペルなんて、古代の人々の妄想に過ぎないんだ。ボクは学者としてこのことを学会に「創造 デュアルディオスクロイ」！？」

正直、信じないのはかまわないが完全否定するのもどうかと思うからみせてやった。

言うのは勝手だが、自分の考えを人に押し付けるのは感心しないからな。

「……………ええええ！！？？」

「そ、そんな……。」「」

ちなみに最後のが学者クン。

するとそこへシャオが来る。

「拙者は、エンシエントスペルを信じていた。でござるからカエデ殿の創造魔法を見たとき、とても嬉しかったでござるよ。伝説を見ることができて。」「」

シャオ、そんなに驚いてなかったよな？

ま、いいまとめかたしてるが。

「お主らも信じてみよ。きつと楽しいぞ。」「」

「……………はい！！」「……………」

子ども達は去っていった。

日が暮れかけてんなあ。上級魔法、する時間がなくなった……。。



## 第16話 ゼウスの思惑Ⅰ

「ども。ゼウスだよ〜!!」

さて、今回は俺視点で話していくのだけれど・・・カエデのヤツ、仲間を見つけたつあるな。

しかし、こつも世界トップクラスの連中ばかり集まるとはね。何にかけてもずば抜けた存在ばかりじゃないか!!!

決して、俺が絡んでるわけじゃないんだけどな。

なんでだろう。ま、見守るだけで楽しいっていうのはあるけどさ、やっぱり気になるよな。いい出会いしてるし、はああ〜。俺も旅したいなあ。

まあそれはおいといて、俺の世界の歴史が、変わりつつあるな。カエデというイレギュラーが、いろんな人間を出会わせてるから・・・ルスリアの統一という歴史は、10年の中には無くなった。

うん、この調子で頑張っただけいいな、カエデには。

またあいつの夢にしようかな。神って職種も暇なんだわ。それに、友達って言ったらあいつくらいしか居ないしな・・・

ん？

カエデの仲間候補が大変な目に遭ってるな。

あの青髪はその事を少し知っているようだが・・・まあいずれ話すだろうけど。

大丈夫かな、結構苦戦しているようだぞ・・・？

義賊ケルベロス。

## 第17話 義賊たちの危機！

「おい！カエデー！起きろ！今日もやるぞー！」  
「・・・めんどい。」

昨日は結局上級魔法については教えてもらえなかった。・・・というのも、サンゼルスシティは魔物対策として、日が落ちると跳ね橋をあげてしまうからだ。

魔法などを街中でやるわけにも行かず、ましてや上級魔法の練習しかしていなかったため、お預けとなっていた。  
あのガキどものせいだ・・・。

「いい加減起きろよ！もう日は出てるぞ！」  
「ういうい。」

今日もコイツと稽古か・・・って。さてよ？コイツ昨日身体強化の呪文会得してたよな？  
使う気じゃねえよな？

そう思いつつ、俺の部屋を出ると、イリスがいた。

「おはようございます。今日は迷いの森を抜ける予定ですので、稽古は中止にしてもらえませんか？」

「おはよ。うん分かったラッキーおやすみ。」

「ほえ！？」

部屋の中に戻ろうとする。イリスに掴まれた。

「寝ないでください！！なんのための稽古中止だと思ってるんですか！？」

「寝るため」

「違う!」

「そか、中止かあ、ヒートアップで今日こそカエデに勝つつもりだったのに。」

ん? やつぱりコイツは……。ヒートアップとは、昨日ドレイクが習得した身体強化の呪文の名前だ。

「身体強化使うなら、もう稽古してやんねえ。」

「え!? 魔法も実力のうちだろう!」

「だったらお前の物理攻撃ブランクカーズで無効化するから。」

「な!? それは……。」

なんか新鮮だな。まあ新しい知識を使いたい気持ちは分かるが。

「おはようござる。」

「あ、おはよ。」

俺の部屋の中からシャオ登場。ちなみにイリスの部屋と男の部屋という分類で分けている。

「途中から聞いていたでござるが、こつこつ話を聞いていると、教えられたほうも嬉しいでござるよ。」

するとイリスが話し始める。

「シャオさんおはようございます。とにかく、今日は迷いの森に行くので稽古は中止。もう発つので身支度をしてください。」

「およよ? あの“迷いの森を迷わず抜けられる君”は使わないのでござるか?」

「胡散臭いにもほどがあります!!とにかく、もう行きますから準備してください。」

「はいはい!!」

「わかり申した。」

「・・・寝る。」

「カエデさん!!!!???」

「・・・起きる。」

「・・・まあいいでしょう。」

各々身支度を始める。俺は着替えて髪をチエツク。顔を洗ってから羽衣をまとい、準備完了。・・・どうやらシャオは長い髪がアダのようで、髪の毛の手入れにずいぶん時間をかけている。ドレイクの馬鹿は顔を洗う以外なにもしていない。せめて着替える。

俺の腹時計で数分後、全員の準備が整い、食堂へと向かった。

朝食を食べ終え、馬を引いて出発する。

「もうこの馬達あまり必要ないよな。」

「そうですね。でも何かあった時のためにも、持っていましたよ。」  
「了解。」

適当な会話をしつつ、サンゼルスシティを後にする。この東門を抜けて、道沿いに行くと迷いの森だ。

「そういえばイリス殿。」

歩きつつ、シャオがイリスに話しかける。

「迷いの森を抜けるとは聞いていたでござるが、抜けてどこに向かうでござるか？」

「このまま東アリアに抜け、アリア国王に会いに行くつもりです。」

すると、シャオは少しの間沈黙した。よく分からないが、聞いてみる。

「どうしたシャオ？」

「いや、申し訳ない。カエデ殿に聞いた話では、良王を立てて拙者たちの力で天下を統一する、との話であったのでござるよなあ？」

「ああ、そうだが。」

「だとしたら、アリア国王は辞めたほうがいいのではござるまいか

「？」

一瞬の間。だがイリスが口を開く。

「確かに先王はダメ王でしたが、この代の王はまだ分かりませんよ？」

「そうではなくてでござるな・・・拙者の見解を認めてくれた貴殿らでござるから話すのでござるが、“ケルベロス”という義賊を知っているでござるか？」

「「「！？」」「」」

まさかケルベロスを知っているとは。確かにアネスは有名なようだが・・・。

「この前共に戦った元仲間だ。」

「！？・・・それは意外でござったが。ではもしかすると、共に戦ったというのはルスリアの貴族、アーバルト家相手の戦いでござるか？」

「確かにルスリアの貴族相手だったが、名前は初めて知った。」

するとシャオはまた考え込む。「では時間的にも一致するでござるな・・・」などと呟いていたが、しばらくすると俺の方を向いた。

「義賊ケルベロスの行ったあの戦いは正しかったと思つてござる。

拙者逃亡中にとある村に立ち寄ったのでござるが、そのとき経緯は全て聞き申した。そして、まあその村につく前、逃げていた最中にある山あいの道にかかったのでござる。ところどころに血が落ちていて、戦の後だとはすぐ分かったのでござるが、そのとき、拙者の前方、つまり東の方向からアリア兵がわんさか来たのでござるよ。」

「！？・・・なんで？」



「これもその後の村で聞いた話でござるが、どうやらルスリアのアーバルト家の人間を沈めたのをルスリアが宣戦布告ととつたらしく、今にも攻めようとしたらしいのでござる。そこを、アリア国王自ら、自分の責任ではなくただの山賊の仕業だと。その山賊を討伐するから攻めないでくれと頼んだらしいのでござる。」

「……!?」「」

「拙者はそのとき既にイルの兵士に追われていたし、経緯も知らなかったでござるからアリア兵を横目に村に走っていったのでござるが……今思えばその義賊たちに申し訳なかったでござるなあ。」

「そんな!!! アネスはどうなった!!!!?? クロッドは!!!!?? カエデ!!! 助けに行こう!!!」

ドレイクが激昂して俺に叫ぶ。だが。

「無駄です! たとえ戦っていたとしても何日も前のこと。それにアリア兵相手となれば義賊の名が廃るでしょう? 反賊の汚名をつけられるに決まっています。あのアネスのことですから、とっくに逃亡していますよ。」

「さようでござる。それにアリア兵の数はなかなかにかかったでござるよ。少なくとも見ても5000はいたでござる。義賊の人数でかなく相手ではござらんよ……。」

「じゃ、じゃあ! どうすれば!?!」

「落ちて着けドレイクカス野郎。」

「……!?」「」

とにかくこのパニック状態を収めない。

さて、確かにアリア王は尊敬に値する器ではないな。ま、それは俺が面を拜んで決めること。とにかくアネスの安否は心配だが……今はとりあえず王都に行く事が先決だ。

「とにかく今の俺達ができることは、王都に行く事だけだ。そこでその王に文句を言うのも、罵倒するのもありだ。それに俺はその王を噂だけで判断するつもりはない。まずは会う。・・・だがどこにいるかも分からないアネスを探すのは無理だろう？まずは当初の目的どおり、王都へ行こう。」

「・・・そうだな。俺が悪かった。・・・アネス・・・無事でいてくれよ・・・。」

「分かりました。とりあえず王都にいきましょう。」

「・・・そうでござるな。噂に流された拙者も申し訳なく思う。」

とりあえず話が終わった。でも、アネスはともかく俺の部下達は大丈夫かなあ。あれほど命は大事にしろといったから、生き延びていることを祈りたい。一度だけとはいえ、共に戦った仲間だからな。

「そうこういつているうちにルスリア領に入りましたよ。もうすぐ迷いの森です。義賊の皆さんのことは心配ですが、気を引き締めていきましよう。」

「」「おう！」「」「」

第17話 義賊たちの危機！（後書き）

次から、ここにキャラのプロフィールを書いていこうと思います。  
これからも“とあもの”をよろしくお願いします！！

## 第18話 迷いの森

「どーゆーことだシャオ!!!」

「も、申し訳ないでござる・・・。」

「ドレイクさんのせいでもあるでしょうに・・・。」

「うぐ!」

「とりあえずは、東アリアを目指して南下するしかないだろう。」

えと、まあ色々あつて現在ルスリア帝国のとある村にいる。ちょうど迷いの森を抜けたところだ。

さて、なんでこんなことになったか、俺の腹時計では5時間前あたりにはさかのぼってみよう。

「ここから、迷いの森に入ります。」

「いかにも迷いそうな森でござるな……。」

さて、義賊たちの話を聞かされてから少したち、俺らは目の前にある、うつそうとした森に足を踏み入れようとしていた。

「とりあえずは入るしかないだろう。夜までに抜ければ、迷う事はないだろう?」

「はい、道さえ外れなければ。ここに生える木々や植物は、夜になると不思議な光を出し始めます。それが人間の目に悪影響を及ぼし、旅行く人々を迷わせるといいますから。」

ずいぶん草たちだな。シャオに頼んで全て燃やしちゃいたいな。

「さて、では行きましょう。」

俺達は迷いの森に入り、細い道を一列になって歩く。馬さん邪魔だなあ……。

まだ昼過ぎだから、さすがに夜までには抜けられるだろう。

しばらく歩いていると、ドレイクが足を止める。

「どうした?」

「いや、川のおいがしたので、気になっただけだ。」

「そうか。」

しばらくの間、会話はそれだけだった。

道なりに歩いていると、どでかい川に掛かる、崖どうしをつなぐつり橋に出くわした。・・・ん？

「ドレイク殿？いかがでしたでござるか？」

「お、俺と馬がわたったら、落ちないか？」

「大丈夫ですよ。そんな老朽もしていませんし、いつも荷馬車や旅人が通っているつり橋です。」

「いや、それでも・・・もし落ちたりとかしたら・・・」

よく見ると、ドレイクの顔が青ざめている。はっはくん、コイツは

「お前、高所恐怖症だろ？」

「コーシヨキヨーフシヨ？カエデさん、それなんですか？」

「高いところに人一倍恐怖したり、“落ちる”と過剰に意識して、ひどい場合、高いところにいるだけで恐怖にもだえ死ぬ病気のことだ。」

「うー？そ、そんなわけないだろう！？」

「そうなのでござるな？」

「そうなんですな？」

「仕方ない。正直高所恐怖症の人間にとってはこういうつり橋はかなりの精神的負担になる。この川沿いに歩いて行けば、また別の道もあるかも知れない。そちらに行こう。」

ドレイクの顔がいくらかほころぶ。

「そうか、助かる。・・・だが！俺はコーシヨキヨーフシヨとやらではない！！馬達を思いやっただけだ！！」

男のツンデレの需要なんざサラサラねえんだよ、と心のなかで毒づく。

するとイリスがこう提案した。

「カエデさんがそういうのなら仕方ありませんね。どうやら北に行くと、川が東方向に曲がるようです。いくらか当初の予定の場所より北に出てしまつてしょうが、そこはご愛嬌。北にいきましょう。」

と、いうことで俺達は北に向かって川沿いに歩くことにした。

するとなんだか、歩くうちに川が細くなっていく。何個か対岸側に支流ができており、段々そちらへ流れていく量が増えていつているのだろう。最後に大きな支流があつてから少し経ち、とうとう跨げばわたれるくらいの幅になった。

「もうここなら渡れますね。」

「そつでござるな。」

「じゃあ、行くか。おいドレイク、さすがにいけるだろう。」

「お、俺は馬たちのことも考えて・・・。」

めんどくさいので俺が馬2頭を引っ張り、対岸へ渡る。

すると、イリスとシャオも着いてきた。

「ほれ、お前一人だ。いい加減足引っ張るな。これ以上渋れば置いていく。俺らの目的はあくまで強い部隊。ここまで譲歩しても無理なら、精神が弱い人間はいらないからな。・・・どうするドレイク。」

すると、悔しそうに顔を歪め、数歩下がる。・・・オイまさか諦めるなんて言つなよ？

「おお！・・・！」





かもわからん。

「イリス。」

「なんでしよう?」

特に疲れたようなそぶりも見せず話してくるあたり、まだ体力は残っているようだ。

「迷った。」

「ほえ!？」

まさか、夜でもないのに迷うとはな……。どうしようか。

「安心するでござるよ!!!こんな時のために、アレを買ったのでござろうが!」

「ああ、あつたなああの胡散くせえのが。」

「胡散臭いとは失敬な!？」

だが、今から戻れば夜になるのは確實。あの……。なんだっけか? “迷いの森を迷わず抜けられる君”だっけ?もうあれに頼るしかねえな。

「まずこれにルナをこめるでござるよ。この中で一番ルナがあるのは……。風魔法 アビリティエック……。カエデ殿!?あなたのルナ量はなんでござるか!?本当に人間でござるか!？」

なんだか凄い失礼なこと言われた気がする……。  
そういえばルナ……。魔力量もゼウスチートなんだっけ?まあそれじゃ仕方ないか。

「で、では……この何とか君……正直商品名言つの面倒でござるよ。まあ、コレにルナを流してもらえぬか？」

手渡されたのはなんだかくだらなそうな箱。ルナを流すって具体的にどうやるのかわからんが、ま、適当にルナを集中すればできるだろう。

そう思つて集中する。お？なんだかルートが頭の中に入ってくる。ここを行けばいいのか。

「みんな、この“何とか君”が言つには、こっちだ。」

「……はい。」「」

もうこれに頼るしかないしな。でもこの方向であつてんのか、正直不安だ。だつてさ、どんどん川から遠ざかるんだぜ？

「抜けた〜助かりました〜。」

とりあえず、抜けることができた。迷いの森を抜けた瞬間、コイツは反応を示さなくなった。使い捨てなのか、迷いの森でならいつでも使えるのかはわからんが……まあいいだろう。前方には町が見える。なんだか町といつてもストークタウンよりは質素な町だ。村、と言つほうが正しいだろうか。

「なあイリス、この町はなんて町だ？」

「ほえ？」

どうやら迷いの森を抜けられた安心感で、周りを見てなかったらしい。

「……。」

「イリス？」

「ここって、ルスリア南東部の町、セイルの町ですよ！？なんでこんな寂れたところに!？」

「さあ、コイツが教えてくれた。」

そういつて俺はあの箱型魔道具を振り上げる。

「ちょっと、もう一度よく見せてください。」

「ほいよ。」

「……やっぱり!!サンゼルス セイルって書いてあるじゃないですか!!」

「あらあら。だからシャオ、一番安かったんじゃない？」

「一番安いのだったんですか!？」

「あ、ああ。すまんでござる。」

「どーすれば東アリアにつける？」

「南下していけばなんとか……あ、この道だと思います。」

そういつて、イリスは少し右手を走る街道を指差した。

「どーゆーことだシャオ!!!!」

回想終了。

とりあえず今日は、このセイルの町とやらに宿をとることにした。

「東アリアに着くのは何日後になる？」

夕食の席で、俺はそう問うた。

「そうですね8日、8日あれば東アリアの関所に着けると思います。

」

8日ねえ・・・ま、せいぜいルスリアの現状でも観察しながら、旅の続きでもするのでしょうか。

第18話 迷いの森(後書き)

§Character Profiles § I

name カエデ・ミナモト

hair color 黒

eye color 黒

height 178cm

weight 58kg

older 17歳

main arms デュアルディオスクロイ(トンプアー)  
ピットロケットM93r

## 第19話 セイルの町 ドレイクとシャオの実力（前書き）

（報告）

- ・しらたまさん感想ありがとうございます
- ・累計PV30000突破！！！読者の皆様に感謝ですう！！！！
- ・お気に入り登録94件！？皆様のご期待に沿えるよう精一杯頑張りますので、これからもよろしく願います！！！！！！

## 第19話 セイルの町 ドレイクとシャオの実力

夜。

思いのほか気持ちよく眠ることが出来そうだ。この世界の夜は静かで眠りやすい。

ここはセイルの町で唯一の宿屋。最近では徴兵や略奪を恐れ、旅人・特に若い人は滅多にルスリアにはこないのだそうだ。ゆえにこの日の宿泊客も、俺らのみである。

イリスは隣の部屋で寝ているのだろう。あの無邪気な寝顔と寝相を思い出すと、心なしか笑顔になれる・・・閑話休題。

野郎三人は同じ部屋で寝ているのだが、ドレイクの寝息しか聞こえない。シャオはまだ起きているのだろうか・・・。

「カエテ殿。起きているのでござるか？」

「ん？ああ。よくわかったな。」

一段ベッドにドレイクが寝ており、俺が二段ベッドの上、シャオが下にいる。・・・つまり、シャオの表情は見る事ができない。

「どうした？」

「いや、拙者は思ったのでござるよ。戦女神イリス殿を旅の連れに、焰龍ドレイク殿には一騎打ちで勝利・・・さらに創造魔法を使え、闇魔法の飲み込みも異常なほど早い。さらにあのルナの量や、拙者を助けてくれた時のあの殺気・・・あのときまでは拙者も意識があったのでござるが。まあそれはそれとして、とても並みの人間のできる事ではござらん。貴殿はいつたい、何者なのでござるか？」

なるほどな。うかつすぎたか。これからはもっと、自分のゼウスチートを隠しながらいかないと。

それにシャオとはあまり出会ってから日が無い。驚かれて、裏切られてもおかしくないよな……。

「無言……でござるか。拙者は出会って日が浅いとはいえ、カエデ殿を信頼してござる。でござるから、拙者としても不可思議なこととは聞いておきたい。疑うことはしたくないのでござるよ。」

声だけでも分かった。シャオは俺のことを信頼してくれている。俺のおごりでなければ、シャオは絶対に俺を裏切ったりしないだろう……。

「分かった。全て話す。」

「やはり……只者ではなかったのでござるな？」

「ああ。俺は簡単に言えば、異世界人だ。」

「異世界……この世界の人間ではないと言う事でござるか。にわかには信じがたいでござるが、カエデ殿はここまで腹を割れば嘘を吐かない御仁だと信じてござる……本当のことなのでござるな……。」

「ああ。俺は異世界で死に、ゼウス……神に頼まれて歴史を変えるためにここへ来た。詳しくは分からないが、神の話ではこのままではこの十年のうちにルスリアが天下を統一してしまうのだそうだ……。」

「!?!?……神様と普通に会話していたことにも驚いたでござるが……この十年でそのようなことになるとは……。」

「そんで、俺はこの世界におりてきて、イリスと出会い、ドレイクと出会った。二人はこの世界での生涯の仲間になると信じている。」

「……。」  
「そして、三人目の仲間がシャオだ。俺ら三人がいても足りない“魔法”というスキルを持った新たな仲間。俺は出会った日のシャオの思い……それを聞いて、コイツも生涯の仲間になる、と悟った



よ。  
「  
「!？」

静かだった寝室に、またも静寂が訪れる。  
しばらく沈黙した後ち、シャオが口を開いた。

「拙者は、その世界を平定するメンバーとして合格でござるか・・・  
？まだ拙者の実力など不明でござろう？拙者は実力を見せることな  
ど出来ていない。安易に仲間にして、足を引つ張らないでござるか  
？」

「それは俺も思っていた。」

「・・・起きていたのでござるか。」

さつきからドレイクの寝息が聞こえなくなっていたと思ったら、起  
きてたのか。

「俺もカエデが仲間として認めてくれたこと、嬉しく思っていた。  
だが、俺が必要とされているか分からない。俺はカエデに“必要と  
される仲間”になりたい。俺の実力を見て、欲しいと思ってもらい  
たいんだ。イリスがこの前、戦いの戦略を立てたときのカエデの感  
心した顔。俺も、そうやってお前に感心されたい。“一緒に来ても  
いいよ”止まりの立場でいたくないんだ。」

「!・・・拙者も、同じ事を思っていたでござるよ。」

ちよつとまで。なんで二人は俺にそんな信用を得たいんだ？

仲間と認めた、それでいいんじゃないのか？

つていうか認めるなんて大そうな立場じゃないぞ？俺は。

「二人とも。俺はそんな認めるなんて立場じゃない。リーダーとは  
イリスが言っていたが、それだけじゃないか。俺には人望も名声も



人狩り・・・！この前助けた連中も、人狩りされた連中だったな。これが、ここでも起こるのか・・・！許せない！！

そう思っただけは立ち上がり、ベッドから飛び降りる。すると・・・

「待つでござる。」

「おう、カエデはここで待ってる。イリスの護衛をしてやれ。」

「！？おい！人狩りだぞ！許せない！！」

「俺（拙者）が行って来る。全員助け出す！（でござるよ）！」

「・・・拙者の力、ご覧あれ。」

「おう、もう置いていくなんて言わせねえ！いくぞシャオ！」

「承知！！」

「ちよつと！！危ないよ！！！！」

女将さんが叫んだ時にはもう、二人は外へと駆け出していた。

・・・なるほどな。俺が君主・・・か・・・。

「大丈夫ですよ女将さん。俺の信頼する、仲間です。」



「てめえは人の命を弄んでんだろう！？そういうヤツのいない世界を作るのが俺らの仕事だ！！お前はもう死ぬのが決定してんだよ！！！！」

「ひい！守れ！俺を守れえ！！」

「さあ兵士さん、コイツをとっ捕まえて逃げるか、コイツに順じて死ぬか、二つに一つだ。なあに、逃げたところで追撃など絶対しない。約束だ。」

「あそこにも若いやつがいるぞー！！！！」

「ありゃ女じゃねえか？」

「いや、身長的に男だ!」

そういわれているのはシャオ。「さて……」と言漏らすと。

「ブラスト!」

とたんに敵兵たちの真っ只中に竜巻が巻き起こる。

「くくくくくわああああ!」「くくくくく」

これでそこにいたほとんどの兵が落下して重傷だろう。  
すると今度は弓がこちらに飛んでくる。

「よよ?人狩りから虐殺に変わったのでござるか?仕方がござらん  
なあ。ブレイズウォール!」

シャオの目の前に炎の壁が現われる。矢はそれによって全て消し炭  
となった。

そしてシャオは叫ぶ。

「拙者は殺生は好かぬゆえ、兵士たちの攻撃はやめていただきたい  
!?!?!?!さもなくば、全員あのようになるでござるよ!?!?!」

そういつて竜巻の跡を指差した。無数の兵士が苦しそうにもだえて  
いるが、死傷者はなさそうだ。

するとシャオへの攻撃がぴたりと止む。

「……やはり、無理やり動かされていただけでござったか。さて、  
捕虜はいずこか?」

そういつてシャオは歩き出した。

「「ただいま(でござる)」」

「ふう、お帰り。お前ら、強いなあ。」

正直な感想を述べる。あのあとドレイクは兵士たちに大将を捕縛させ、シャオは単独で全ての捕虜を解き放った。その兵士たちはとうと、散り散りになって逃げていった。

なるほどな。あの状況下でのドレイクの説得、シャオの度胸・・・たいしたものだ。

「俺は君主になるつもりはサラサラない。」

「「!?!?」」

「が、この三人に、隣部屋の幸せそうに寝ている軍師を加えたメンバーのリーダーになることは決めた。これからもよろしくな!! 認めるなんてことは俺ごときにできることじゃないが、二人がそういうのなら、俺は二人を尊敬・・・認めよう。」

「「おう!?!?!」」

ここに、“黒虹”の母体となる、カエデ・ミナモトを中心とした組織が結成された。約一名は夢の中であったが。





**第20話 最凶の槍使い 前編（前書き）**

（報告）

・お気に入り件数102件！？まさかの100名様突破です！！感謝です！！！！

## 第20話 最凶の槍使い 前編

今朝も起こされて、ドレイクの稽古に付き合うつもりだった。最近  
は俺も一本とられそうなくらい成長しているせいか、一日一日の稽  
古が楽しみで仕方がないようだ。今日こそ一本とってやる！と意気  
込んでいた……のだが。

俺らが外に出てみると、町の人々がドレイクの元に殺到した。

「この村を救っていただき、ありがとうございます！！」

「貴方と青髪の方のおかげで、人狩りを避けることができました！

！」

「是非しばらくの間御逗留いただきたいのですが。」

どうしよう、という目で見てくるが、俺も目で返事を返す。

( 知らん )

ドレイクは諦めたような表情になり、しばらく人波に流されていた。  
俺は面倒になったので宿に戻ろうとしたのだが、ちょうど馬鹿<sup>シャオ</sup>が出  
てきてしまった。あゝあ。

「おお！！青髪の方！！私達は貴方に助けられたようなものです！

！！！」

「二つもの属性を操り、それもあの威力！素晴らしい。教えを乞い  
たいです！」

「よよ？な、何事のごぞるかカエデ殿おゝ！！！」

「知らん頑張れ。」

「薄情者おゝ！！！」

そんな感じでシャオも人波に流されていった。  
なんだか、すつきりしたな。うん、もう一度眠りにいこう。  
そう思ってまた、宿に戻った。

「さて、ではいきますか。目指すは東エリアです!!どこにどんな町があるかはよく分かりませんが、まずは街道を南に下っていきましよう。」

「うい。」

「……おお。」

「……なんでドレイクさんとシャオさんはそんなにテンションが低いのでしょうか……?」

「いろいろあつたんだろつよ。」

「そうですね。」

「見捨てたくせに何を言うか!!」

「そうでござるよ!拙者なんて、わけも分からぬまま連れ去られたのでござるからな!!」

ああ、はいはい不憫なり。もともとお前らが目立ちすぎたのが悪い。その取り巻きはといえば、昨日のうちに木造の“英雄二人の像”を建立してしまつたらしい。ご苦労なこつた。んで、その像を拝んでいる。何やつてんだかな。こいつらの宗教感覚が分からん。

「ではいきましょう。」

イリスの一言で俺らはセイルの町を後にした。だいたい昼前のことであつた。

その昼過ぎ、ルスリアの方角から歩いてきた一人の若者の姿があつた。背中には長い槍を背負つていて、毛皮のフードをかぶつた若者である。その若者は木像を眺めると、村人の一人を蹴つ飛ばした。

「いて!!何をす・・・」

若者はその眼前の槍を突きつけ、問うた。

「おい、こいつらはいつどつちの方角へ行つた?」

「ひい！！き、今日の昼過ぎに東エリアへの街道を・・・。」  
「そうか。お前、死ぬか？」

もう一度槍を強く突きつける。

「！？ひいひい！！！」

「冗談だ。」

そういつて若者はその街道へと歩いていった。

「あの橙髪に毛皮のフード・・・漆黒の槍・・・まさか、“最凶の槍使い”！？」

村人は若者の悠然とした後姿を見送りながら、そう呟いた。

ちょうどその頃俺ら旅人集団は……

「なあ、腹減った。」

「ほえ！？なんですか急に！」

「いや、俺の居た世界じゃ昼飯はあるのは普通だったからな。ましてやあの二人の英雄騒ぎのせいで、俺は朝飯食いつぱぐれたし。」

「そ、そうですか……。シャオさんとドレイクさんはどうですか？」

「拙者も腹は減ったでござるよ……。村人がなかなか放してくれなかったでござるから、拙者も食べていないのでござる。」

「俺もだ！昼飯というより、朝飯として食いたい！」

「そうですね……。じゃ、今日の夕飯の当番を早回しして、私とカエデさんで料理担当、その間にシャオさんとドレイクさんは、水と肉の調達をお願いします。」

「ほいほい。」

「承知。」

「わかった！！」

というわけで、俺とイリスで荷物を置き、薪を集めて火をくべる。いい感じになってきたところで、調理にかかる。

「そっいえばカエデさん。」

「ん？」

「シャオさんとドレイクさん、昨日何があつたんですか？」

「なんかねえ、人狩りを助けたらしいよ。」

「らしいって、珍しいですね。そういうのには一番先に出て行くのがカエデさんでしょう？」

料理しながらの会話。当然、手は休めない。

「二人に、俺らに任せる的なこと言われて待機してた。」  
「へえ……。カエデさんに見てもらいたかったのでしょうか。」  
「なんか二人も同じような事言ってた。」  
「そうですか。」

なんとなく出来上がってきた。スープと野菜炒めだが。

「ねえカエデさん。」

「ん？」

「あの……。その……。カエデさんとは旅仲間ですよね？」

「ああ、そうだよ？どうした？」

「いえ……。それ以上の関係には……。やっぱりなんでもありません！！！！」

どうしたんだイリス。俺は盛り付けをしながらそんなことを思う。

「イリス、悩み事があるならいつでも相談に乗るぞ？」

「……。もういいです……。林念仁……。」

「ん？」

「もういいです！！」

「あそ？後で皆と一緒に聞こうか？」

「余計に結構です！！」

顔を真っ赤にしていうイリス。メッチャカワイイな。

「顔真っ赤だな。かわいいじゃん。」

「ほえ！？ほ、ほっといてください！！かわいくなんでないです！！！！」



ま、いいか。さて、シャオとドレイクは何をやってんだ？

「・・・あいつら何やってんだろっな。」

「さあ・・・遅いですね。」

仕方がないのでスープを鍋に戻し、再び温め直すことにする。

二人で鍋を睨みながら、近くにあった丸太を椅子に座っていた。

ドサ!!!

「ドレイクさん！？それにシャオさんも!!!」

「おい！どうした!？」

「・・・!!」

「・・・!!」

二人とも必死でここまで逃げてきたようで倒れこんだ。どうやら声が出ないようだ。シャオはその場にあった小枝を掴み、必死で地面に文字を書く。・・・ゼウスチートだろうか。見た事ない文字でも解読できる。

『やられたでござる。相手は魔法を使える槍使い！拙者はサイレスという、声が出なくなる魔法をかけられこの有様・・・その拙者をかばってドレイク殿もボロボロに・・・!!!』

見れば二人とも全身傷だらけだ。ドレイクにいたってはかなり深いものまである。

「イリス、二人の手当てをしてやれ！！特にドレイクには深い傷がある。急いでやれ!!!」

「はい!!!」

すると、シャオは俺のセイレーンのすそを引つ張り俺に気付かせると、またも地面に字を書き始めた。

『ヤツの実力はドレイク殿並でござろう。でござるが拙者をかばったせいでドレイク殿の足を引つ張ってしまった。それに、ヤツはサイレスをかけドレイク殿の身体強化を奪うと、自分にアジリティ・素早さを2倍以上にあげる魔法をかけ、ここまで叩かれてしまったのでござるよ。ヤツが使うのは風魔法。それに、拙者たちを追いかけて、もうすぐここまで「いたああああ！！！！」』

声の方を向くと、ドレイクと大して変わらない身長で、毛皮のフードを目深にかぶり、少し出ている髪は・・・橙か？

「おいおい、戦って少ししか経ってないのに逃げるとかずりいじゃん！潔く死ぬまで戦えよお。・・・およ？その黒髪い、人をじろじろ見るんじゃないやねえぜえ？」

「この二人は俺の仲間だ。一つ聞こう。何でこいつらに戦いを挑んだ？了承はされたのか？」

「おいおい、質問が二つになってるぜえ？まあいい。何でって、さっきの村の木像で、強そうだったからあ。了承？されてねえよお？俺が勝手に攻撃しただけだあ。魔導士なんてサイレスかけりゃ一撃じゃねえかテイハハハハハ！！！ザコだよザコ！木像になってるくらいだから、もう少し楽しめるかと思ったのによお！まあいいザコは消えな！！！」

こんの野郎・・・！！！！俺の仲間をこんなにしといてゆるさねえ！！！！！！！！！！

ゾワワワワワワワ！！！！！！

俺が思いっきり殺気を放つ。

「おいおい黒髪い、すげえ殺気を放つじゃねえか。なんでお前じゃなくてそのザコ二人が木像になってんだ？明らかお前のが強いじゃねえか！俺と戦え！楽しそうだ！ティハハハハハ！！」

「・・・承も得ることなく不意打ちしておいて、それで貴様ごときがよくもこの二人をザコと呼べるな・・・。」

「あ！？まあいいバトル開始だ！！サイレス！！」

水色に透き通った球が俺に向かって凄い速さで飛んでくる。ふん、こんなもの。

セイレーンで弾きとばす。

「なに！？サイレスが弾かれた！？」

「そんなこしやくな技を使わねえと勝てねえのか？てめえは。」

「ふざけんなよ・・・？サイレスを使うのは魔導士相手だ。今回はお前を黙らせてやろうと思っただけだ。その赤いみたいにあの武力で魔法を使えるのはそうはいない。貴様は戦闘系だろう？だったら関係ない。オレッチの本気で叩き潰してやるよお！！」

「ふん、好きにしる。どの道お前のような下衆と交える剣はない。」

第20話 最凶の槍使い 前編（後書き）

§ Character Profiles III

name ドレイク・ベルナス

hair color ワインレッド 赤

eye color 茶

height 183cm

weight 68kg

older 18歳

main arms 無銘 村正宗

第21話 最凶の槍使い 後編 (前書き)

〈報告〉

- ・ 結局別視点から書く事もすることにしました。これからもよろしくお願いします!!
- ・ 感想もお待ちしております!

## 第21話 最凶の槍使い 後編

〈ドレイクside〉

俺とシャオが肉を調達するために歩いていた時、急に目の前の毛皮フードの男が呼びかけてきた。

「あんたらがあの本物の主か？」

「まあ、不本意ではござるが・・・貴殿は？」

「俺か？俺は・・・最凶の槍使い。」

最後にどす黒い笑みを浮かべ、その男は叫んだ。

「お前らを強いヤツと信じて戦いを挑むう！喰らえ！！」

そういつてヤツはシャオに槍を向け突進してきた！コイツも俺と同じバトルジャンキーか・・・だが礼儀を知らんな。

「いきなり人に槍を向けるのでござるか！？ならば。アースプリズン！！！！」

ヤツの足元から土がうごめき、取り囲むように包んでいく。

「うおっとお！？土の魔導士かあ。」

そういつと素早い動作でヤツはバックステップをし、逃れる。

「へえ、ならあ！アジリティアップ！」

この男も魔導士か！だがなんだあの魔法は。俺のヒートアップと似ているが・・・。

「喰らええ！！！！」

ヤツは目にも留まらぬ速さでシャオに突っ込む！しまった、素早さをあげる魔法か！！

「く！アイスバリア！！」

突如シャオの目の前に氷の防壁が現われ、男の槍を防ぐ。

「・・・驚いたなあ。お前土と水の魔法が使えるのかあ。まあいい。お前はこれで終わりだあ！」

そういうと男は氷に刺さった槍を手放し、氷の裏側、つまり俺とシャオのいる側に素早く回りこむ。これは危ない！俺はとっさにシャオの前に立ちはだかり、

「ヒートあ「待つでござる！これは拙者の相手。下がっているでござるよ。」

「ほう、赤いのお、お前も魔導士かあ。ならもつと好都合だあ！！」

そしてヤツは片手を俺に、もう片手をシャオに向け叫んだ。

「サイレス！！」

とんでもない速さで飛んでくる水色の球をよけることができず、俺とシャオは球を正面から受けてしまう・・・が、あれ？痛くねえ。

「これでお前らは喋れねえ。特に魔導士の貴様は終わりだなあ。」  
「「!?!」」  
「……!」

一度俺はヒートアップを唱えて見るものの、声が出ない……待てよ!? それじゃシャオは無力じゃねえか!!

「さて、じゃあ魔導士の貴様あ! 死ねえ!!!」

急に喧嘩ふっかけといて、今度は死ねだど!?! ゆるさねえ! 俺はシャオをかばうように立つ。

キーン!!

村正宗を抜刀、槍を弾く。

「へえ、赤いのお、お前魔法なしでもそこそこやれる口かあ。だが、アジリティアップの俺に勝てるかな!?!」

それと同時にとてつもない速さで繰り出される突きの嵐! やべえ、受けきれねえ! しかも一個一個のリーチが長くて、受けられなかった槍先がシャオにまで届く……そのうちに俺もたくさん傷ができてしまった。このままじゃ……もたねえ!

(とりあえずここは逃げるでござるよ。ドレイク殿のおかげで助かり申したが、これ以上はまずい。唯一無詠唱で唱えられる、姿を一時的に消す呪文がござる。それを今から唱えるでござるから、逃げるでござるよ!)

(お前、どうやって?)

(念話でござる。あのイヤリングにはそういう機能もあるのでござる)



るよ。(

(!!!!)

「これでおわりだあ!!!!!!」

今までになく鋭い一撃！これはよければシャオが危ない！だが弾くこともできねえ・・・仕方ねえ！

ぐああああ!!!!!!

「・・・・・・・・!!!!!!」

声にならない声を上げたのはシャオだろう。と同時に、槍使いの様子がおかしくなった。

「ありや!?!おいおいどこいったあ!?!でてこおい!!!!!!」

これは魔法が発動してるのか!?!・・・・ぐ!あの攻撃は重かったぜ・・・・。

(今です。カエデ殿たちのところへ!ドレイク殿!大丈夫でござるか!?)

そして今、カエデがヤツと対峙している。いくらカエデでも大丈夫か？と危惧していたが・・・カエデのさっきの一言が俺らを安心させる・・・。

「ふん、好きにしる。どの道お前のような下衆と交える剣はない。」俺はコイツの仲間として・・・まだまだ未熟だなあ。

くドレイクsideoutく

くカエデsideく

さて、まあ正直コイツには痛い目に遭ってもらわないとな・・・。

「おいおい！俺と丸腰で戦うつもりかあ！？」

「何度も言わせるな。貴様に武器など使うまでもない。」

昨日、ブラックカースの効果時間を試してみた。笑えることに、ゼウスチートの俺のルナ量に比例して、約3時間この状態でいられるそうだ。

「まあ、今は使わなくてもいいか？スピードアップしても、ゼウスチートのが上だろうし。」

小声で呟く。

「あ？なんか言ったかあ！？」

「何が？早くこいよ、怖気付いてんのかゴミ野郎。」

「んだとお！！ふん！丸腰でこの最凶の槍使いと戦ったこと、後悔しな！！！」

「安心しろ、お前ごときにかける時間がもつたない。すぐに終わる。」

「っの野郎！！！！！！！」

槍で突進してくる。確かに速い。

「くっ！！」

「おらどしたあ！！！」

確かに、ドレイクが身体強化使わなければ、かなり苦戦したのも頷ける。

まあいい。スピード勝負なら負ける気がしねえ。

ゼウスチートのスピード・・・新幹線もびっくりの速度でヤツの後ろを取ると、後頭部を蹴り飛ばす！

ドガアアン！！

何が起こったかわからないまま、その男は吹っ飛び地面をえぐる。

「ぐ・・・なんだ？」

「お前の後ろにまわっただけ。」

「ふっざけんなあ！アジリティアップの俺より速いはずがない！」

「じゃあ試してみるかよ？」

そして俺は俊足で飛ぶ。ヤツから見れば消えたようにみえるだろう。

「どこいったあ！？」

「ここだ。」

つくづくつく！一度言ってみたかった！

そのままヤツ目がけて飛び蹴りをかます！またも男は吹っ飛んだ。

「ぐあああー！」

「ザコはてめえだろ？」

「くっそがああああー！」

なおも槍をラッシュのごとく繰り出してくる。めんどくせえ。見切った一つを引つつかむ。すると他の槍の残像も消えた。

「な！？」

「もうあそぶのも飽きた。お前がどんなに逆上したって、俺とお前の差は履がえらねえよ。」

「う、うるせえー！」

「でも、武器がなきゃ戦えねえよな？」

「！？どついう意味だ？」

「締めくくりはこのつっとうしい、俺の仲間を傷つけた武器、折っちまうか。」

「なに！？」

まず俺はこの槍を掴んだまま、飛びまわし蹴りでその男を吹っ飛ばす。

俺の手元にはヤツの槍が残る。さて、折ろつと力を入れる。

「終わりだ。」

「!?!? や、やめろ!?! やめてくれ!?!?!?!」

ん?なんだ?いきなり声が悲痛になる。

「なんでだ?俺は人を殺めるのが好きじゃない。だから俺の仲間を傷つけた槍を恨みぶつけて折る。間違っているか?」

「・・・それは、唯一のアリア時代の思い出なんだ!?!?!」

そこへイリスが割って入ってきた。

「二人の手当ては終わりました。それであなたは最凶の槍使い、で間違いないのですか?」

「あ!?! ああ、そうだ。」

「カエデさん、この人については知っています。」

「・・・話してみる。おいテメエ、イリスに手出したらこの槍折るからな。」

「・・・。」

「この人は昔、東アリアの北方の村でルスリアの人狩りの被害に遭い、ルスリア兵となった人です。ルスリアのアリア人に対する扱いはひどいもので、数々の人が精神を壊されながら国の駒として戦わされてきました。その中で最近ルスリアを脱走した兵士がいたとかそれが最凶の槍使い。ルスリア屈指の実力者であり、唯一軍のトップの中で異国人だったそうです。」

「分かったが。何で俺らを襲った?この分だと俺らだけではなさそうだが。」

「ルスリアが憎い。それだけだあ。」

「……！！テメエ、ルスリアの民は人狩りには関係ねえだろうが！！！！！」

「うるせえ！！ルスリアは敵なんだ！！俺の暮らしを奪った敵なんだ！！根絶やしにするまで気が済まね「ドガ！！！！」ぐああ！」

いつの間にか起きだしたシャオが、水で出来たハンマーでその男の頭をブツ叩いた。

「……カエデ殿、サイレスが解けたでござるよ。ドレイク殿は重傷なので寝かせてござるが。……お主！それはヤツ当たり以外の何ものでもないでござる！！お主が苦しい思いをしたのは痛いほど分かるでござるが、それとこれとは違う！！少し頭を冷やすでござるよ！！！」

「……うるせえ！俺は……俺は！！！」

「……いいかお前。よく聞け。まず、ここにルスリア人は一人もいない。」

「！？」

「そして全員ルスリアが憎くてしょうがない。でもな。セイルの町ではおばちゃんが宿に泊めてくれた。飯を作ってくれた。町を救ったお礼に木像も建ててくれた……それはアリアもルスリアも一緒だろうが。お前みたいに、ルスリア人だからという理由だけで攻撃するようなことはしねえんだよ！！俺はルスリアが憎い。だが俺が憎いのはルスリアという国家だ。ルスリアの幹部どもだ。この村の人たちだって、人狩りにおびえる点ではアリアの人たちと一緒になんだよ！！まあいい。ここまで来たから言っただけ。俺らの旅の目的はな、いい王を見つけよう。その為に強い仲間を集めるということもしている。だが、今のお前はどんなに強くてスカウトしない……

……何故だかわかるか？」

俺の話を黙って聞いていた。もう攻撃はしなさそうなので、槍は投げ返す。

それを受け取ると、そいつは口を開いた。

「人の命をどう思っているか、か？」

「分かったのか。ならまず自分がどうするべきか考えな。」

「俺は……ルスリアと同じことをしていたのかも知れないな。その青い人。すまなかった。」

「それは気にする事ではないでござるよ。」

「あつちで寝ている赤いのに、そう言っておいてくれ。」

「承知。」

そして、俺のほうを向き直る。

「俺はお前に気付かされたよ。憎いルスリアを倒すため、もっと精進してやるさ。」

「そうか。今までしてきたことへの反省も忘れるなよ。じゃあな。」

そして俺は踵を返し、イリスが作ってくれた料理の元へと歩いていく。

すると後ろから声が聞こえた。

「お前の旅の目的には憧れた！俺の名はフォーリ・バイカウント！次に会うときにはお前に認めさせてやる！…！」

振り返り、俺も答える。

「カエデ・ミナモトだ。ま、せいぜい頑張りな。」

第21話 最凶の槍使い 後編 (後書き)

§ Character Profiles § I V

name アネス・フィードウッド

hair color 紫

eye color 緑

height 167cm

weight 5「おい、ボスの個人情報を言っつもりか？」ッ。  
ッ。

older 18歳

main arms 弓





## 第22話 町医者と光魔法

フォーリの件から一日後、俺らは街道沿いにあつたとある町に来ていた。

岩場の近くにある、緑は少ないがのどかな町だ。

というのもドレイクのケガの具合が思ったよりよくなく、医者を探していたからだ。聞くところによるとこの町の医者は非常に優秀らしいので、今はそこに向かっている。

馬にドレイクを乗せ、イリスはその面倒を見ている。シャオは昨日からため息ばかりだ。

「どうしたんだよシャオ。」

「いや、今回もカエデ殿の役に立てなかつたばかりか、ドレイク殿の足を引つ張り迷惑をかけてしまったこと、本当に申し訳ないと悩んでいるのでござるよ……。」

昨日のことを考えているのか……。確かに今回はサイレスの魔法、魔導士のシャオにとっては相性悪すぎたが……。

「魔法でサイレスを防ぐ方法はないのか？」

「光魔法のプロテクションバリアなら、全ての補助効果魔法を無効化できるのでござるが、拙者は光魔法が使えないのでござるよ……。」

それを言われて、俺はふと考えた。シャオのことだから……

「使える魔法の属性ってのは生まれつき決まっているもんなのか？」

「そうではないでござるが、努力だけではどんなにやっても、大きな魔法は使えないでござる。」

「だったらさ・・・“大魔道”に言うのは恐れ多いかも知れんが、光魔法・・・プロテクションバリア、だっけか？それだけでも使えるように努力してみろよ。お前ならできると思うぜ？」

そういつて肩を叩き、俺はイリスに町医者場所を聞きにいった。

「確かに、不可能ではないかもでござるな。カエデ殿、拙者は貴殿に助けられてばかりでござるよ・・・。」

その後シャオは用ができたとかでどこかへ行った。

どうやら南へ行ったらしいことは、イヤリングが教えてくれている。

・・・さて、イリスの案内で町医者に到着した。

「ここですね。クレストス医院。」

「ドレイク、意識はあるか？」

「・・・なんとか・・・！」

「よし、行くか。」

「失礼しまーす。」

西洋にありそうな洒落た扉を開き、イリスが入る。

「いらっしやいっ。どうしたのかなっ？」

中に入ると藍色の紙を首元で内巻きにまとめた、20歳いくかいかないかあたりの、眉目秀麗な女性が座っていた。

「こいつがケガしてな。」

「あらあら、何かに貫かれてるねっ、これは強い力でやられてるし、槍かなんかで攻撃されたかなっ？」

ずいぶんと口調が特徴的だな・・・。まあもつと凄い、武士みたいなのがいるから何もいえないか。ってかこの人が医者なのか？

「とにかくっ、これは治癒魔法でどうにかなるねっ！よし。いくよ  
くっキュアリア！」

女性が手をドレイクにかざすと、ケガしたところが見る見るうちに治っていく。

「治癒魔法、初めてみました・・・。でもなんで貴女のような若い人が、こんな凄い治癒魔法を？」

イリスが不思議そうな顔で問う。すると女性は艶やかな笑みを浮かべながら、

「それはね〜・・・。」

「それは？」

「いろいろっ!!！」

「おい。」

「イリス、突っ込み方が怖いぞ・・・?とにかく、ドレイク大丈夫か？」

「ああ、すごく楽になった。」

「そうか・・・ありがとな。え〜っと・・・」

「キアラちゃんですっ!!!!！」

「・・・ありがとうキアラさん。」

正直テンションについていけない・・・。

「キアラでいいよっ!!・・・君かっこいいねっ!名前はっ？」

「!?!？」

「え!?!?俺!?!？」

「うんっ、きみ〜。」

まさか客側が名前を聞かれるとはな。っっていうかイリスよ、何故君が反応する?!

ああもうどうしよう。この人苦手だ・・・。

「カエデだ。」

「カエデ?ん〜、じゃあカエちゃんでもいいやっ!！」

は?

「カエ・・・ちゃん・・・？」

「うん！」

「クスクス・・・」

イリスが笑っていた。あとで聞いたら、よほどのアホ面だったらしい。しつたことか！！！！！！

「なんだか、オーラのある人でしたね・・・。」

その日の夕食の席、イリスがそんなことを呟いた。

「ああ、カエちゃんは笑えたぜ！」

「だまれさつきまでボロ雑巾だったくせに。」

「ちよ！？ひどくない！？」

「そうですね、もう少し伸びておきますか？」

「ぴよ！？イリス、さつきまでは優しかったのに……。」

「そんなことより。」

「そんなことってカエデおい！」

「シャオまだか？」

「「あ。」」

ためーら仲間忘れんなよ……。

夕食を終え、イヤリングのGPSを頼りに町の外まで出ると、夕闇に紛れた人影が一つ。

青くたなびく長髪……シャオだった。

「ようシャオ！用事ってなんだったんだ！？」

ドレイクが話しかける。

するとこちらに気付いたようで、シャオはこちらに駆け寄ってきた。

「カエデ殿！拙者、光の波動を手に入れることが出来そうでございますよ……！」

「そうか。人間やってみるもんだな。」

「カエデさん、シャオさん。どういふことですか？」

イリスが弁明を求めてくる。シャオへの説明の意味も兼ね、話すことにした。





まさか、そんなことをしているとはな・・・いや、仕方ないことか？戦争・・・つくづく最低な行為だと思っぜ・・・。

「助けに行くか!？」

ドレイクが言う。だが、徴収ならば命が奪われることはないだろう。それに相手は正規兵。ルスリアに追われる身で他の国家の王に面会なんて、なかなか難しいだろう。

「いや、今回はいい。特に人が殺されることもないと思う。」

さて、いつまで兵士はあそこにいるつもりかな？

しばらくしてルスリア兵は元の方角へと帰っていった。

「さて、村に戻りますか。」

イリスの声で、俺らは戻る。すると、町の中は散々なことになっていた……。

人々は路上で苦しみ、家という家の扉が開いている。さらにところどころには血痕が点々とあり、さっきまではなかった廃屋さえも見受けられる。おいおい……殺してはいないとはいえ、自国の民にこうも惨く（むごく）あたるものか……？

「おいシャオ！ どういうことだ!？」

「どういうこともこういうこともない……。これが臨時徴収というものでござるよ……。」

「それを知っていてこのような!? 助けるべきだった!！」

「やめろ! シャオが正しい。確かに人が殺されたわけじゃない……。だがひどいな……。このケガ人の量は……。お?」

たくさんケガ人の中、一人ケガ人の介抱にあたる人間の姿があった。

藍色の短巻き髪……。キアラ・クラスタである。ドレイクが駆け寄った。

「キアラ! お前は平気だったか!？」

「ああ、カエちゃんの時君か……。うちもボロボロ……。なんで……。なんで……。戦争なんて嫌だ! なんで私たちがこんな目に遭わなき

「やいけないのさ!!」

彼女の目は、真っ赤だった。

俺とシヤオ、イリスも近寄る。

「キアラ、大丈夫だったか？辛そうだな・・・。」

「カエちゃん・・・グスン、うう・・・怖かったよお・・・兵士・戦争・・・そのせいで私達は・・・！うわああああああん！！！」

しばらくの間、キアラが胸元に抱きついて泣きはじめていたので、そのままにしてあげた・・・。

この子が今言ったことが信念であるとすれば、仲間に加えて損はないかもしれない。

「シヤオ、ドレイク。」

「「？」」

「やっぱり、助けたほうがよかったな。俺が悪かった・・・。」

「拙者が悪いのでござるよ・・・。」

「もういいって・・・しょうがない。」

「おさまったか？」

俺が問うと、キアラは静かに頷いた。

泣き喚いでいる間、キアラに俺らの旅の目的を話して聞かせた。それが良い効果を持ったのか、キアラは思いのほか、すぐに泣き止んでくれた。

「そうか。・・・キアラ、お前も一緒に来るか？お前のような医に長けた仲間も必要だ。それに思っていることも一緒だからさ・・・。それに、家にもなにもないだろう？」

そう聞くと、キアラは黙って首を振った。

「ねえ力エちゃん。私、少し出かけてみるよ・・・戦争で傷ついた人を助けに行く。私には、まだまだ力エちゃんやみんなみたいな覚悟はない・・・ついていきたいと思うんだけど、今の私じゃ足手纏いだから・・・覚悟をつけるために、戦線や、色んな人を助けに行つて、そこでまたいろいろ学んでくる・・・。だから、次あったときにはしっかり覚悟もしてるから、仲間に加えてね？」

俺は、静かに頷いた。

第22話 町医者と光魔法（後書き）

§Character Profiles § V

name シャオ・シルヴァンス

hair color 青

eye color 蒼穹

height 177cm

weight 56kg

older 18歳

main arms 杖（魔法用）



## 第23話 とある釣り人の一日

「よかつたのですか？」

「なにが？」

俺達はキアラのいた町をあとにし、旅の続きを楽しんでいた。……今の話は馬についてだ。ルスリア兵士にいるんなものを徴収され、路銀すらほとんど持たないキアラのために馬を一頭あげたのだ。

「別にいいんじゃないか？俺らはもう荷物がかさばるっていう心配もないし、どつちみち4人に対して馬2頭しかいなかったからいつも馬連れて歩いてただろ？それよりは人を乗せて走るほうが馬の本分だろうしな。」

「それは……そうですが。」

さて、現在は昼下がり。いい感じに晴れた午後だが、最近だんだん気温が上がってきた気がする。この世界にも季節はあるのだろうか。寒いのは苦手なんだよなあ……。

「さてと、東アリアまであとのくらいだ？」

「そうですね、予定通り、あと5、6日歩けば到着しますよ。」

「それまで野宿かぁ。お？」

軽く伸びをすると、視界の端にちらりと、水面みなもが見えた。林間の道を歩いていたのだが、そのうち右側の視界が開けた。湖だ。

「美しい湖でござるなあ……。」

「キレイですね。……夜、カエデさんとこのホトリで一緒にしたいです……／／／／／／／／」

「さて！泳ぐかー!!」



ドレイクが飛び出していく。アイツは行動派アグレッシブだなあ。  
イリスがなにか呟いていたが、なんだろう。

「イリス、何か言ったか？」

「ほえ！？な、何も言ってます！／＼／」

「カエデ殿……。」

イリスの顔が赤い。なんでだか知らんが目の保養だ。うん……あ  
るえ？シャオが呆れ顔だ。なんで？

「さて、拙者も泳ぐでござるよ。カエデ殿とイリス殿はどうするで  
ござるか？」

俺に振られてもな。俺は泳ぐの得意じゃねえし……

「うん、釣り？」

「し、洗いでござるな……。」

「ま、な。あまり泳ぎは得意じゃねえし。」

「私は泳ぎます！汗を洗い流したいですしね。」

「さようでござるか。ではイリス殿、参りましょう。」

いい感じの岩場を見つけ、創造で作った釣具とルアーで、俺は一人釣りを楽しむ。4人とも楽しそうに泳いでいるなあ。いいねえ。気持ち良さそうだ・・・あり？4人？イリス、ドレイク、シャオ、ん？馬泳いでねえか？まあいいや細かいことは。ドレイクは予想通り、泳ぐの速いなあ。ついでにイリスも楽しそうだ。

・・・ってかさあ、シャオはなんで古式泳法！？イル教国はジャパニーズなのかそうなのか！？

さて、シャオにはあとでイル教国の文化を聞くとして、俺は釣りに集中するかな。

お？

ひいてるひいてる・・・



その夜。

・・・結局、俺はたくさんのマグロを釣ることができた・・・オイ  
オイ。

正直今日の晩飯には、いくらドレイクが大食漢でも2本で充分だろう  
うと思い、大半を湖に帰した。

なんでここはマグロが釣れるんだ!?

・・・さて、皆に捌いたマグロを振舞っていると、三者三様の反応  
がある。

「なにこれ!?!すごくおいしいです!サシミっていいんですか。魚  
にこんな食べ方があったとは。感動ですう!」

「これメチャウマだな!!!バクバクバクバク・・・もうねえの?」

「懐かしいでござるなあ。お袋を思い出すでござるよ。」

イリスの反応が一番嬉しいね。ドレイクの胃袋を甘くみすぎたか・  
・。  
つてか最後の奴シャオてめえおい！やっぱり故郷はジャパニーズか  
！！

いつかイル教国には絶対行く。固く決意した俺であった・・・。

第23話 とある釣り人の一日(後書き)

§ Character Profiles § VI

name クロツド

hair color 茶

eye color 茶

height 175cm

weight 62kg

older 23歳

main arms サイベル

第24話 東エリア到着・・・でもさあ・・・(前書き)

〈報告〉

- ・ブレイズさん感想ありがとうございます!!!!!!
- ・通算PV60000突破!!!!
- ・今回は短めです・・・忙しかったので!!

## 第24話 東アリア到着・・・でもさあ・・・

マグロの件・・・いや湖の日から5日後。

今日も晴天のなか、俺達は街道左沿いの茂みに隠れつつ前進していた。なぜかって？

街道のと真ん中から右の荒野にかけてルスリア軍のたくさん幕舎があるからだ。

「もうじきアリア軍が所有する関所に着きますが、多分そこ戦争状態なのでしょうね・・・。」

イリスが呟く。

確かにな。ここまでの幕舎やテントの数になると、よっぽどの兵数じゃねえか？

「というか関所か・・・。ルスリア軍対アリア軍の構図って初めて遭遇したな。」

さて、どうするべきかな。

「その関所は、俺らのような胡散臭い旅人を通してくれるのか？」

「あ、そうですね。どうしましょうか・・・あ、では私が先鋒として関所側にあいさつに向かいますよ。それならば多分、通してくれるでしょうから。」

「・・・なるほどな。じゃあ馬に乗って、ドレイクもついていけ。」

「俺もか！」

「ああ。アリアーの剣豪と軍師ならば迎えられるはずだろう？」

あとは正直、俺とシャオが怪しまれなきゃいいんだが。

「・・・わかった。」



そういうとドレイクは馬にまたがり、イリスを後ろに乗せた。  
この二人がいれば、戦時中でも通してくれるだろう。

「では行つてきます。」

「なるだけ関所に近づいておいてくれ！」

「んじゃまたな。」

「では、頼むでござるよ。」

カッポカッポカッポ……

「ルスリア軍の数は、ここからでも壮観でござるなあ。」

「ああ。この分だと10000は軽くいるだろう。」

そうなのだ。この茂みから見ると、地平線が見えなくなるくらいとはいかないが、だいたいそのくらいのテントが横一列に並んでいるのだ。

「俺だったらこの軍隊の頭を潰して降伏勧告するがな。」

「同意見でござるな。だが、さすがにそう簡単にはいきませぬ。」

むう。どうにかしてこの邪魔ツけな部隊をどけて……まあ。今の俺達には関係ないが、この中にも死にたくない奴もいるだろう。この戦もやめさせたい。

「その様子だと、カエデ殿、素通りする気はないでござるな？」

「……まあ、な。でも俺がどうこうより、出かけた二人が厄介ごとを持ち帰ってくるだろうよ。」

「？」

「そんなことより、関所に向けて進もうぜ。」

「承知。」

それから俺の腹時計でだいたい1時間後・・・

「お、帰ってきたでござるよ。」

「マジか。」

カッポカッポ・・・

「あり？」

乗っているのはイリスだけであった。

ドレイクはどうしたのだろう。ま、関所帰りだとすれば察しはつくが。

どうセルスリア相手に戦うとかでちやほやされているのだろう。

「もうこんなところまで来ていましたか。」

「ああ、茂みの中ばかり歩いてから体中青臭くしょうがねえ。」

「すみません。関所には入ることが可能になったのですが……。」

その含みから全てが察知できた。やっぱりなあ。

「素通りさせてもらえない、と。」

「そういうことです。」

「？拙者だけでござるか？話についていけないのは……。」

シャオは困惑顔である。まあ仕方がない。

「つまりだ。戦女神なんてのと焰龍なんてもんが戦時中を通りすがつてもみたら、軍にとっては計算外の大ラッキーってことよ。」

「なるほど。」

「あの〜。ついでにカエデさんとシャオさんについても話したら、大将の人大喜びで……。」

「俺らのことまで言っちゃったわけか……。わかった。行こう。」

完全に戦争フラグがたったな。ドレイクは迎えに来なかった事から、やる気満々だろうし……。

ま、頑張るか。

関所はかなり大きなモノだった。  
なんだろう。凱旋門に木製の馬鹿デッカイ扉がついたような、そんな感じ。

その向こうには嫌な予感しかしなかった。



## 第25話 関所内にて

「おお、よく来てくださった！！」

どうやらずいぶん長い間戦争をしていたようだ。ここの大將らしいが、かなりやつれてしまっている。俺達は関所内の隊長室に案内され、今大將と面会していた。

総大將は白髭を蓄えた初老の男で、髪も白かった。

どうやら俺達の噂とやらが届いているようで、かなりの歓迎ぶりだ。話を聞いていると、いくらか尾ひれがついている物もあるのだが……。

「俺達にどうしろと？」

すると、大將の顔色が変わる。仕事モード、というのが妥当だろうか。

「失礼した。私はガンドロフ・スコツティーンと申す、ここの総大將だ。戦女神に焔龍、大魔道に、それを束ねる謎の黒髪の男……あなた方の噂はそれはもう聞き及んでいて、是非この関所の戦いに終止符を打つため、協力して欲しいと思ったのだ。」

謎の黒髪の男、ね。そんな風にもう言われてんのか……。  
んで、協力か。とりあえずきつとキアラの村に徴収を仕掛けたのはあのルスリア軍だろうから、戦うことに異論はない。後は、あんまり長引くなら断りたい、というだけだ。

「戦況はどうなっているのでしょうか？」

イリスが問う。出たな軍師。

「今は攻めて来るという連絡はない。だが必ずこの数日のうちに総攻撃に出るだろう。報告では敵は臨時徴収を行ったらしい。そこを見ると、向こうも兵糧が尽きかけているようだからな。」

「では逆にこちらから奇襲いたしましょう。」

「!? 相手の兵糧が尽きかけているのにか?」

「ええ・・・詳しくは軍議で。臨時軍議を開いてください。」

「りよ、了解した!」

そういうとガンドロフは走り去っていった。

というか客人の身で総大将に臨時軍議を命じるとは。イリスって実はやっぱり絶大な権力を持っているのかもな・・・。

そういえばドレイクはどこなんだろう、と辺りを見回していると、イリスが話しかけてきた。

「きよろきよろして・・・もしかしてドレイクさんを探していらっしやるのですか? 彼でしたらカエデさんたちが来る前に総大将に会ったあと、兵士たちの質問攻めにあっていましたよ。」

くすくす笑う姿が愛らしい。「その武器はなんですか!? なんてこともいわれてましたね。」と微笑みながら呟く。まあドレイクのことだから今頃、自分の武勇伝などを誇らしげに聞かせているのだろう・・・。気配がなかったシャオを探すと、部屋の壁に寄りかかって、腕を組んで目を瞑っていた。寝ているのか?・・・だがシャオのあの格好はなかなか様になっていてカッコイイ。あとでマネしてみよ。

数十分後、ガンドロフは2人の部下を引き連れて帰ってきた。

「待たせたか？これより臨時軍議を始める。」

この部屋には、真ん中に大きな机があり、椅子が一つしかない。レイファーストということで、イリスが座っている。ドレイクがいつの間にか帰ってきており、ちゃっかりイリスの隣を陣取って話を聞く体勢になっている。俺は、作戦なんてあとでイリスに聞けばいいやなどと考え、さっきのシャオのマネをして部屋の壁によっかかる。当のシャオはというと、総大将が来た辺りから目を覚まし、今は机を取り囲む一人になっていた。この壁際、意外と居心地がいいので、そのまま寝てしまおうとしたのだが……。

「もし、カエデ・ミナモト様ですか？」

「ん？様なんで大そうなもんじゃねえよ、俺は。」

先ほどガンドロフが連れてきた将校の一人が、俺に話しかけてきた。軍の将校の割りに細身で冴えない風貌をしていた。髪は短髪で黄緑色。この世界の髪の色って何でもありなんだな、と再確認した俺である。

「いえ！とんでもありません！カエデ・ミナモト様の勇名はもはやアリア中に知れ渡っております！」

は？俺そんな目立つことしたか？

「……なんで？」

「あ、いえアリア中というのは少し大げさだったかも知れませんが、凶悪な西アリアの山賊“ワーウルフ”を一人で壊滅させたことに始まり、焰龍と決闘で勝利、大魔道の窮地を救い、イル教国の上級兵を一睨みで追い返し、最後はルスリア帝国で“最凶の槍使い”を叩きのめしたと、南は分かりませんが北アリアの特に軍人の中ではか



なり有名なんですよ!?!」

ずいぶんとまあ……よく知られたもんだ。だが……

「なんで俺が全部やったと?」

そう聞くと、その将校は半ば呆れた様子で答えた。なんとなくむかつく。

「自覚ないのですか?その黒髪黒瞳、遠くから見たって間違えなどしませんって。」

「あっちゃあ……これが問題か、この髪が……。で、そうだとして、俺になんのようだ?」

本題に戻そう。コイツは何か理由があって話しかけてきたんだった。

「あ、失礼しました!私はランド・ノアルカツツと申します!私はあなたの武勇伝を聞き、その信念を知り、憧れました!貴方は私の目標なんです!夢なんです!申し訳ありませんが、憧れの人と会話をしたいがためだけに話しかけさせていただきました!」

は?……本日二度目だがまあ問題ない。ってか気にしない。

「それだけ?」

「はい!」

なんかもう、怒られても構いませんって顔だなあ……。俺みたいなの奴の何がいいんだか。ま、そんなことより。

「お前、軍議は?」

「あああああ！！！！！！」

やっぱり忘れてたな。まあいいや。

「後で俺の部屋に來い。どうせ俺はあとでイリスに聞くつもりだったんだ。聞く側の人間が一人増えたところで構いやしないって。」

「よいのですか！？私がカエデ・ミナモト様の部屋に行くなど・・・これは後で軍人仲間全員に自慢しないと・・・。」  
「カエデでいい。様つけんな。」

そして俺はアイドルなのか？そうなのか？

「そんな！恐れ多いです！」

「どうしてもだ。でないともう返事しない。」

プイッと横を向いてみる。我ながらガキだな・・・でもそれくらい様つけはヤダ。

横目でランドを見ると・・・かなり焦っていた。

「で、では、先生と呼ぶことにします！！！」

「せ、先生！？」

なんだよ先生って・・・まあカエデ様よりましか・・・。

「じゃあいいよそれで。」

するとランドの顔の周りに花が咲いた。・・・ように見えた。

俺らがそんな話をしている間、ずっと軍議は進んでいた・・・ランド、俺はいいが上官に絞られないか？

その夕方。

イリスから説明を受けると、ランドは慌てて部屋を出て行った。なぜなら、その作戦とやらは今日決行だったからだ。

作戦の内容は、こんな感じだ。

敵は臨時徴収を終え、短期決戦に備えている。だが今日は新月になる一日前。向こうが奇襲するとすれば明日だろう。・・・月の満ち欠けはこの世界にもあるようだ。

ならば向こうが自分達の策を必死に練っている間に叩いてしまおうという魂胆だ。

まず今のうちにイリスを除く客人組が裏手から外に出る・・・「分

かってるなら早く外に出てください!!」

まだ説明の途中だ。

そして真夜中の合図と共に、正面からガンドロフ率いる4000の兵が外に繰り出し奇襲を開始。

横に長く陣を敷いているルスリア軍を、中央から粉碎するという寸法だ。

そして、両サイドから援軍が来てこちらが不利になるのを防ぐため、右からシャオ、左からドレイクが襲い掛かり、幕締めには俺が不意をついて後ろから敵の大將クラスを片付けていく、と。

なるほどな、よく出来てるよ。どうせシャオとドレイクは、敵を気絶させていくんだろっしな。

今度の戦いも頑張りますか。

「いいから早く出てください!!!」

第25話 関所内にて（後書き）

§ Character Profiles § VII

name フォーリ・バイカウント

hair color 橙

eye color 鶯<sup>つぐいす</sup>

height 180cm

weight 68kg

older 18歳

main arms 槍

第26話 関所の戦い 前編(前書き)

〈報告〉

・今回は多視点で書いていきます。

## 第26話 関所の戦い 前編

俺、シャオ、ドレイクの三人は裏手から出ると、配置に着くべく移動を開始しようとしていた。

そして城門を出たとき、裏手に村があることに気付いた。

長らく関所での戦闘が続き、不安があったのが雰囲気だけで手に取るように分かる。

大丈夫、すぐに終わらせてやるからな、と、村人達を見て心に誓った。

「あれは！」

「おお！黒髪に黒瞳、間違いない！あの最凶の槍使いを叩き潰したという無双の旅人だ！」

「間違いない！赤髪の剣士に青い長髪の青年……黒い希望のメンバーだ！！！」

「頼む！この戦争を終わらせてくれえ！！！」

そんな声が多々聞こえる……無双の旅人ねえ。まんざらでもないが。つてか黒い希望つて……なんか知らない間にチーム名付けられてんのな。ランドからは聞かなかったぞ？

だが、村人たちも精神が参っているようだ。戦争とは本当にろくなもんじゃねえな……。

「凄い人気だな！お前！」

「無双の旅人でござるか。間違っていないでござるよ。」

「黒い希望、なんてチーム名付けられてるが、どうするよ。」

「いいな！それ！リーダーは黒いしな！」

「イリス殿も腹黒いでござるから、ちよつどいいのでは？」

「ひどいなお前ら……。」

二人は笑っているが、目では俺と同じ事をおもっているようだ。

『早く終わらせよう。』

よし、とにかく作戦開始だ。

（シャオside）

真夜中。拙者は一番西側……右側のテントの横に身を潜めていた。合図と共に攻撃を開始するつもりである。





その中でも西方、関所の城門に遠い兵士は、何が何だか分からなかった……が。

そのドラが鳴る城門方向とは別の場所から一人、青髪を流した、そばかすの好青年が歩いてくるのが気になった。それも悠々である。兵士は慌てて寝起きのまま槍を向けた。

「お前、何者だ！」

「何者……黒い希望、といってあなた方は分かるのでござるかなあ？」

青年はにっこりと笑ってそういった。

「知るわけねえだろ！？まあいい！邪魔だ死ねえ！！」

「よよ？危ないでござるなあ……フレイム・ボール。」

突きを繰り出してきたルスリア兵の腹に、シャオは一抱えほどもある火の玉をぶつける。

どごおおおん！！

ぐああああ！

それが聞こえたのだろう。中心部に向かおうとしていた敵兵達と勝手にシャオを振り向き叫んだ。

「敵襲！敵襲！！」

その声に呼応するようにたくさんの兵士が現れる。そしてシャオを取り囲んだ。

「お前は何者だ！？」

「黒い希望、と言っておくでござるよ。」  
「かかれえ!!!」

困んだルスリア兵はざっと1000人。到底一人で敵う数字ではない・・・常人ならば。

大魔道にとってはその程度、たいしたことではない。

「仕方ないでござるなあ、拙者も殺生は好かぬゆえ、気絶で済ませう。・・・古代呪法、ウィル・オ・ウイスプ。」

シャオが呟いた瞬間、シャオの周りに大量の雷が落ちる!!  
その数、一人に一発にも及ぶほどだ。

ぐあああああああ!!!!!!

「雷魔法の特性は麻痺。この古代呪法は、集団気絶魔法でござるよ。」

黒焦げにひれ伏すルスリア兵の中、シャオは笑顔でそういった。  
そして、一人また悠々と中心部へ向かいながら上を向いて呟いた。

「拙者とドレイク殿のノルマが2500人とは・・・イリス殿も人使いが荒いでござるよ・・・。」

くドレイク side く

ドラが鳴ってからと言うもの、ずっと敵兵を斬り続けている。村正宗に助けられたぜ。峰撃ちに出来るから遠慮なくたたつ切れる。つてか、正直もう何百人やったよ・・・イリスの奴、人数設定おかしいだろ！！

「あそこの赤髪を止めろお！！」

「じゃあお前が掛かって来い。」

指揮官らしき奴が怒鳴ってくる。そうこう言ってる間に敵兵が600人くらいの体制で俺を囲む。  
めんど。しょうがねえな。使うか。

「ヒートアップ」

（ドレイクsideout）

シャオと逆方向では、一人の赤い鬼神が猛威を振るっていた。

指揮官は脅えきっている。何せあの片刃の剣で殴られたら最後、マンガみたいに吹っ飛ばされるからだ。何故刃側で斬らないのかはルスリア兵にとつては疑問だったが、それでも脅威には変わりなかった。殴られた奴はよくて接触箇所の骨折、悪ければその骨ごと粉碎だった。

「あそこの赤髪を止めるお！」

指揮官が声を振り絞って叫ぶ。すると中心部に向かおうとしていた兵士も集まってきた。

ざっと600人だ。これならいけると、指揮官は思った。だが。

「じゃあお前が掛かって来い。ヒートアップ。」

「そんな！？魔導士！？」

指揮官は絶望が混じった悲痛の声をもらす。なんたつて、身体強化の呪文を唱えられたからだ。今まででも充分チート並の脅威だったのに、それが最悪の場合3倍もの力を持つことになる。正直ルスリアにしてみればシャレにらん話である。

指揮官はドレイクの挑発を聞いてはいたが、到底受ける気にはなれなかった。

なんでつて、身体強化を使ってからのドレイクは一度で敵兵5、6人を軽く関所の見張り台が見える高さまで吹っ飛ばしているからだ。

こんな敵がまだアリアにいたとは・・・指揮官はそう思わずにはいられなかった。

「お前、何者だ!？」

「俺か？俺は黒い希望のメンバー、焰龍だ！よく覚えておけ!！」

そういつて一人の放り投げた敵兵が落ちてきたところを、剣の峰を使って野球のようにかつとばし、指揮官にぶつけた。

みんな派手にやってるなあ。ドレイクの方はさっきつからずつと敵兵が噴水のように湧いてるのがここからでも見えるし、シャオ側は・・・なんだか黒い煙が立ち昇ってる。殺してねえよな？俺は創造したベレッタM93R（拳銃）をホルスターにしまい、デュアルデイトスクロイを両手に装備している。ベレッタは敵将がせめて楽に死ねるようにという気遣い。まあ首と胴を切り離してもいいような輩だったら話は別だが。

さて、いくか。

ルスリアの陣地よりも北側、関所の反対側に俺は居た。一つだけがかい幕舎があることから、敵将はそこにいることが分かる。そこを目指して進むことに決めた。

〈カエデside out〉

〈敵将side〉

まずいますい・・・何故だ！何故こんな奇襲にあっている！？普通ならばここはこちらの兵糧が尽きるのを待つのではないのか？完全に計算が崩れた！

臨時徴収もしたし、これで総攻撃をしかけようとしてたのに・・・！！

オレに戦闘は無理だ。どうにかしろゴミン兵士ども！！！！

豪華な鎧を纏った男は幕舎内をうろろしている。

この男は戦争経験がなく、金で地位をもぎ取ったものの、帝に対しての失言により左遷されてこの戦いにあたっていた。ゆえにもうすでに逃げる準備は出来ている。

すると・・・

「よう。」

幕舎の幕を開け、一人の黒髪の青年が入ってきた。



第27話 関所の戦い 後編(前書き)

〈報告〉

・お気に入り登録数181件!?!ありがとうございます!!!!!!

## 第27話 関所の戦い 後編

敵将 side)

戦場にも関わらず呑気に参入してきた闖入者に、正直驚きを隠せない。

「な、なんだね君は!？」

「俺か？俺は・・・そうだな、黒い希望とでも言っておくか。」

く、黒い希望？なんだそれは？組織の名前か？・・・聞いた事もないが・・・。

「んでま、お前が敵将なんだろ？俺はアリア軍側。アンタの敵。というわけで、とっ捕まえるから。」

は？アリア側？なんでそんな奴がここに？警備はどうした!？

「警備の連中なら俺がまとめて気絶させたから・・・しばらく起きないよ？その顔だと、なんでアリア側の奴がこんなところに!？って感じだな。笑えるぜ。・・・さて、アンタに一つ聞きたい。なんでアンタの部下が必死で戦ってるなかで、アンタは一人幕舎でくつろいでんだ？」

くつろいでいただと？ふざけやがって!

だがコイツの風貌・・・トンファーと、謎の武器・・・だろうか？を腰にさし、黒瞳には強い光がともっている。顔は笑っているが、正直ふざけているようには見えない・・・。

んで、こいつは今なんと言った？兵士が戦っているなか、指揮官が

何でくつろいでいるか？バカバカしい。兵は戦うのが仕事だろう。

「お前は何を言っている？兵士は戦うのが仕事だろう？指揮官を守って死ねるんだ。本望だろうが？」

オレは正論を述べた。だが、それで奴の目が変わった・・・氷のような冷たい目。

「あ・・・そ。」

（カエデside）

コイツは・・・ダメだな。

みたところ総大将のようだが・・・さようなら。

俺はホルスターからベレッタを抜き、構えてソイツの眉間に向けて発射した。

goodbye .

ドオン・・・

総大将らしき人物は、脳天から血を噴出しながら倒れた。

気持ちのいいものではないが、コイツが生きているともっと兵士が死ぬのは確実だからな。

さて、他はどうなったかな。

そう思って、俺は幕舎をあとにした。

あらら？

幕舎を出て、俺が一番最初に思ったことがそれだった。  
なんでって、アリア兵の皆が回収作業に入っており、ルスリア兵の  
姿が見当たらなかつたからだ。

「カエデ殿！」

「カエデ！」

左右から見知った顔が走ってくる。無事だったか。

「総大将はどうなった！？」

「殺った。」

「そっか。」

ドレイクが問うてくるが、まあ返答のしようがない。

だがこの二人、正直ホントに戦争してきたのか？つてくらい服装が乱れてない。返り血さえも見当たらない・・・

「お前ら、戦った？」

するとシャオが、疑問丸出しの顔で聞いてくる。

「何を言ってるのでござるか？今回戦ったのは拙者とドレイク殿がほとんどでござる。正直兵士たちはルスリア兵の捕縛しかしていないでござるよ。」

後半はカラカラと笑いながら、シャオは言った。

この二人からそう聞いても、大げさに聞こえないから不思議だ。

「さて、じゃあ関所に戻ろうか。」

「お帰りなさい。」

城門前までイリスが出迎えに来てくれていた。

「イリス殿が無茶を言うから、拙者たち、ノルマの倍こなしてやっただござるよ。」

帰り際に聞いた話では、ノルマは2500とか言っただけでなかったか？  
倍って・・・二人で敵兵全部のしたって、マジだったんだな。改めて聞くと凄いわ・・・。

「お前ら凄いな・・・。」

「なに、古代呪法を使えば加減してもこの程度の人数、余裕でござるよ。」

加減したのか・・・。

「俺も修練不足だな。身体強化を使うと、相手は打ち所が悪いと死んでしまう。」

手加減の修練ってことね・・・。

思えば、大陸最強クラスの仲間と旅してんだよね。普通に考えた

らすごいことなんだよな。

「ま、カエデにはまだまだ敵わないぞ！」

「それはいえるでござるよ。」

チートって申し訳ないのかもな。ま、それよりもこの世界を平定するほうが先か。

俺はニヤついてこう言った。

「まあな。頑張って接近戦だけでも勝てるようにするんだな、ドレイク。」

「んだと!？」

「あはは……。」

俺らが笑っていると、ガンドロフとランド、もう一人の将校が来た。よくよく考えれば、城門の前にたまりっぱなしだったのだ。とりあえず中へと入る。

隊長室には別室があったらしく、そこでは皆が座れるようなソファが用意されていた。

談話室や応接室と言ったほうが正しい雰囲気だった。

俺たちは案内されるがままに席につくと、ガンドロフがお礼を述べた。

「これでやっと、国や村を守る事ができた。全てあなた方のおかげだ。ありがとう。」

「俺らが守りたかったのは国なんかじゃない。戦争で悲しい思いをする人々だ。それに全てが俺らのおかげがないだろう。俺らなんかに礼を述べてないで、さっさと夜中まで戦った兵士たちを労ってやれ。」

「むう……そうか。ではランド。私は行くから、4人を寢室に案

内しろ。」

「はい。」

それだけ言うとガンドロフは立ち上がり、部屋を出て行った。去り際に気持ちのこもったお礼の言葉をもらったのは嬉しかったが。

「さて、皆さんお疲れ様でした。そして、ありがとうございました  
！！」

ランドが言う。なんだろう。凄く律儀なのは伝わってくるが、剣士としては弱いんだよなあ。

「ランド。俺らは明日の朝発つが、今度会うときまでに体を鍛えておけ。そうでもないとお前戦場で命落としかねないからな。」

「は、はい。」

一応言っておいた。

「俺は眠いから寝るわ。みんなお疲れ。」

正直、真夜中からの戦闘で眠すぎた。まあ皆も同じだろうがな。

「分かりました。明日の朝には南に向かいますから、そのつもりで。」

「了解。」



そのころガンドロフは兵士たちを労いながら、一人呟いていた。

「黒い希望か……確かに、こいつらの希望かもしれない……。」

「

第27話 関所の戦い 後編(後書き)

§ h a r a c t e r P r o f i l e § V I I I

n a m e キアラ・クレスタ

h a i r c o l o r 藍

e y e c o l o r 紺

h e i g h t 156cm

w e i g h t 4「ちょっと？お姉ちゃんの体重言ったりしたらメ！なんだからねっ」

o l d e r 19歳

m a i n a r m s 未登場

## 第28話 通行禁止!?

関所を後にして一日後。

ランドには最後まで行かないでくれってせびられたが、ガンドロフが一発殴って黙らせていたな……。また来いとはあのオッサンも言ってたが、行く暇があればの話だよな……。

さて、今は呑気に旅の続き。久々にアリアの土地へと帰ってきた。馬をドレイクが引き、その前に俺とシャオが歩く。イリスは馬の上にいる。

今日もいい青空だ。清々しい風が吹き、右手の草木たちも揺らいでいる。

この世界に来た頃に比べ、花が少なくなり、新緑が映えるようになってきた気がする。やはり四季はあるのだろうか。

左手には草原が広がり、これは馬車とかでみたら最高の景色なんだろうなあと夢想する。

さて、そんな感じの午前中であつたが、午後、昼下がりになるとまた、道の雰囲気が変わつた。

右手にあつた草木たちは段々と位置を高くし、山の斜面になつていった。

左手の草原は段々と木々に変わり、今は森林と山に挟まれた道を歩いている。

「なんだか、今日一日でたくさん歩いた気がするんだが。」

「あ、俺もそう思ってたところだ!」

「環境の変化でしょうね。南に向かっていますから、段々と土地も元気になつているでしょう。」

なるほどね。……がさ!

なんだ？

がさがさー！！

「おい、何かいるぞ……。」

「ツツ、山賊か？」

ドドドドドドドド！！

あつという間に囲まれてしまった。半裸状態でサーベルを握った集団だ……。

やはり山賊だったか……だが。

「あれ？隊長！？」

ん？その声は……。

「やっぱり！カエデ隊長！！俺です！覚えてますか！？」

いつぞやのルスリア貴族討伐の時の俺の部下だった。つてことはこいつらケルベロスか？

「お前らケルベロスなのか！？」

「その通りでさあ！！ボスと一緒に忍びで逃亡中でさ！」

「アネスもいるのか！」

ここにアネスもいるのか……なら会ってみたい。

「ボスはもうずいぶん先の方にクロツドさん率いる連中と行ってや。俺らは殿軍。こうして山賊みたいなこととして食材調達するしか

なくて・・・情けないです。義賊の名が泣くでやす・・・。」

「そか、でもアネスが無事でよかった。他の連中は!？」

するとシャオも介入してくる。

「アリア兵に襲われたと？大丈夫だったでござるか？」

すると元部下は「お、新しいお仲間ですね？」なんてことを言うてから・・・

「俺らの情報網舐めないくださいよ？奴らが来る事なんて3日前から知ってましたし。アリア兵と戦うとなると義賊の名が廃るとのボスの命令で、奴らが来る前にアジトを捨て、逃げ延びました。」

「そうか、よかった。」

そうだよ、何を焦る必要があった？こいつらの情報収集能力は凄かっただろうが。

「にしても、アリアの国王はダメか。やっぱり完全にアリア兵だったのか。」

そうドレイクが呟く。確かにアリア兵じゃないという線は消えたかな。正直失望するしかないか。

「そんな!？アリア国王は立派な方だ!」

アイツが言う。どういふことかと聞くと、

「自分の力が及ばず義賊の俺らに迷惑をかけたこと、手紙で謝ってきたんですよ・・・。」

「力が及ばず？」

「はい。今の王城は大変なようで、貴族派と王族派で戦っているそうですが、貴族派が優勢なようで・・・義賊討伐も無理やり貴族派が通したとか・・・噂では貴族派はルスリアと繋がっているそうで・・・。」

なるほどな。ま、王城へ行く理由の一つにはなった。  
貴族つぶす。

「分かった。アネスによろしくと、伝えておいてくれ。」

「はい。また一緒に戦いましょう！」

そういつて、奴らはずらかつて行った。

「さて、いきますか。」

「ずいぶんと仲がよかったようですね。」

「共に戦った仲間だからな。」  
「そうでござったか。」

山の中の道を抜けると、東と南、つまり左と真っ直ぐに道が分かっていた。

だが、東に行く道には兵士が立っており、通行はできないらしい。

「こまりましたね・・・ここから東へ行かないと、王都へつくのは難しいです・・・。」

「その兵士に通してもらえないか聞いてみよう。」

「すまないが王城へ行く道はこちらか？」

「ええそうです。ですがこの先大規模な土砂崩れが起きており、今は余波が懸念されるのでお通しする事ができません。」

「そうか・・・別ルートで王城へ行く道は？」

「そうですね・・・だいぶ遠回りになってしまいますが、この南への道を道なりに行けば、U字をして王都に到着することは可能です。」

「そか、分かった。」

「なんなら地図をお渡ししますよ。」

「助かる。」

地図を受け取った俺は、イリスたちの所へと戻る。

どうやら、南に行くしかないようだ。自然災害となれば、さすがの俺たちでもどうしようもない。

「南にいこう。それしかないようだ。」

「分かりました。カエデさんの判断なら従いますよ。」

イリスがにっこり笑ってそう言った。

「そうか。」

夕方。

俺たちは村についた。地図を見ると、ハムリツトの町と書いてある。なんだかストークタウンをよりうらかにしたような町で、道行く人々みな笑顔。だがメインストリートでさえもたいしたもののは売っていないというのが印象強い・・・そんなことより。



「黒い希望の方々ですよね!？」

「憧れです!握手してください!！」

「先日はたった三人で関所を守ったとか?サインください!！」

俺とシャオはもみくしゃにされていた……。どうやらこの町の人々は嗜好が多いらしく、情報の回りが速いらしい……。ってか昨日のことまで知ってるってどーよ?

ドレイクはイリスと一緒にいる。どうやらあの二人はもみくしゃというより丁寧な質問と受け答えのようだ。なじめ?

「あれえ?お前らもしかしてえ?」

ん?今日は聞き覚えのある声ばかり……。ってこの声は!

まずドレイクとシャオが反応する。メインストリートの向こう。逆光でシルエツトが見えたのは、槍を担いでこちらに向かってくる毛皮フードの男だった。

第28話 通行禁止!?(後書き)

§Character Profiles IX

name ランド・ノアルカッツ

hair color 黄緑

eye color 緑

height 175cm

weight 60kg

older 17歳

main arms レイピア

## 第29話 5人目の仲間（前書き）

（報告）

- ・アストさん感想ありがとうございます！
- ・ブレイズさん感想ありがとうございます！
- ・第一章のフローチャート書きました。第50話にて終幕する予定です（笑）

## 第29話 5人目の仲間

「てめえ!! なんでここに!?!」

ドレイクが息巻く。その様子に周りの村人は騒然・・・少しずつ遠ざかってゆく。

シャオも怒鳴りはしないが、様子を伺うという点では同じだ。ま、ドレイクはこの前の時は最後気絶状態だったからな。その分最後を知ってるシャオは落ち着いている。

「なんでつてえ・・・ここ俺の故郷だぜえ?」

「ここが?」

俺が聞く。段々と近づいてくるシルエットはやがて逆光を受けなくなり、顔が見える位置まで来た。もっともコイツはフードをかぶっているからあまりよくは見ていないが。間違いなく、コイツはフォーリ・バイカウント。最凶の槍使いだった。だがフォーリは俺の姿を見るなり、いきなり土下座した。

「カエデの兄貴!!」

な、なんだあ?つてか兄貴つて・・・?

周りの人々はがやがやとざわめき始めた。そんなことお構いなしにフォーリは続ける・・・メインストリートのと真ん中で。

「俺は今日まで、馬で北アリアを飛び回り無駄に殺めてしまった人々への供養をしてきたあ!その上でアンタの殺さずの生き方・・・命の尊さを学んだあ!!あん時は次は認めさせてやるなんていったけど、そんなのとても恐れ多いこと知ったあ!!俺はいま・・・

アンタの旅について行きたい！旅の目的・・・その意味が改めて分かったんだあ！！未熟な俺だけど、ついていかせてください！！！！兄貴と呼ばせてください！！！！！！」

こ、公衆の面前でようやるわ・・・。周りが俺とフォーリに好奇の目を向けている・・・。シャレにならん。だが、俺の言いたかったことは伝わったようだな。

「お前は今日までの旅で何を見てきた？」

そういつて俺はフォーリに近づく。するとフォーリは顔だけ上げて答えた。

「俺が殺めた連中の家族や仲間、友人たちは、皆泣いていた・・・返してくれ、俺たちの仲間を帰してくれと、叫んでいたあ・・・。俺は取り返しのつかないことをしてしまったんだと知ったあ。死ぬかとも思った！でも、兄貴の言葉を思い出し、償って生きることにしたあ。そして償いに一番適しているのは兄貴たちのしている旅だと考えたあ。だから、ついていかせて欲しい・・・。」

コイツなりにいろいろ考えてたんだな・・・だが、北アリア回ってくるの速すぎないか？

「お前、北アリア回ってくるの早過ぎないか？」

「アジリティアップ使ったんす。」

ここだけ魔法クオリティかよ。まあいい。俺はコイツを連れて行くと考えた。そして後ろを振り返ると・・・。

「拙者は連れて行っていいと思うでござるよ。もともと実力的には

申し分ないでござるからな。」

「私も同意見です。ですが決めるのはカエデさん。お任せします。」  
「。。。。。」

ま、ドレイクにしてみればしょうがないか。よし。

「フォーリ、これから一緒に来い。」

正座しているフォーリに手を差し伸べた。すると・・・

「あ、兄貴い！！！！！！！！！！」

泣きながら抱きついてきた。やめる！そういう趣味はない！！周りの女の子たちがキヤーキヤー言ってるからやめる！！っーかその槍下ろせマジ危ない！ん？コレ前にもあったような・・・て関係ないからはなせええええええ！！！！！！

俺が身をよじって振り払おうとしているのを見て、イリスとシャオは笑っていた。

そしてドレイクはというと・・・

「カエデ。」

「ん？」

「ソイツと俺を戦わせる！俺はコイツと打ち合っつて答えを出す。」

正直この戦闘狂はそう来ると思ってたよ。フォーリにしても、そのほうがいいだろうしな。・・・最近の稽古をみる限り、ドレイクはかなり強くなっている。今回はボロボロにされたフォーリとどこまで立ちあうか、見ものではあるな。

「いいんじゃないか？場所は？」

「「ここで構わねえ。」」

ハモったよ。ついでにハモった瞬間からにらみ合いだよ。・・・面白くなりそうだ。

さて問題は町を破壊しないかだな・・・。

「シャオ！町に壁張れるか？こいつらだと町を破壊し兼ねん。」

「いいでござるよ。ウィンドバリアー！！」

するとメインストリート全体を風が覆い囲む。

さすがだな。シャオ。

「サンキュー。」

「まさか・・・土と水以外にも風を使えるとは。凄いなアイツも。サイレス使わなきゃ勝てなかったかもなあ。」

となりでフォーリが驚いている。そういえばフォーリはシャオのこ  
と知らないんだっけ？

「フォーリ、シャオは大魔道だぜ？」

「！！！！・・・なるほど。そう考えるとメンツ揃ってるなあ。あのお嬢ちゃんは？」

フォーリがイリスを指す。

「戦女神とか言われてたな。」

「おいおいやつぱりすげえな・・・。ま、コイツには勝つけどなあ。最凶の槍使い。前回と同じとは思うなよ？」

ドレイクではなく俺に向かって言うてる。どうやらあの時の敗北は身に染みているらしいな。

ちなみにこの風の中にいるのは、ドレイク、俺、フォーリの三人だけだ。後はみな、村人たち含めた全員がバリアの外だ。さて、試合開始と行きますか。

「お前の心が本当かどうか、俺が刀で聞いてやる。」

ドレイクが村正宗を抜刀する。

「馬鹿にするな。俺も今日までの数日間、地獄を見てきたんだあ。」

フォーリが槍を構える。

さて、俺が声をあげればスタートだ。

「試合開始！！！！」

「アジリティアップ！」

「ヒートアップ！」

二人同時に強化魔法をかけ、突進する。

うおおおおお！！！！

ガキーン！

鏢迫り合いの後ち、二人とも飛び下がった。

「これが、俺がシャオとカエデを見て編み出した技だ。

えんりゆうはちがたな  
焰龍八刀！

四の太刀、土龍！！！！！！」



ドレイクが仕掛ける。刀を片手に持ち、下から後ろに持つていく。そして素早い動作で縦回転させ、地面をこすり、あたかもドライバースイッチのように振り上げる！

すると土が衝撃波を起こし、フォーリへ向かってとてつもないスピードで突き進む！

「うお！？」

フォーリはそれを横に飛んでかわす。土龍は風のバリアにぶち当たると、爆発して霧散した。

おいおい、凄い技だな・・・ギャラリーも驚いている。

フォーリはかわしたあと、猛スピードでドレイクに突進していく。

「いいぜえ！お前がその気ならあ・・・雷らいてい挺たい！！」

突如フォーリはそこからスピードを急速に上げ、雷のように突撃した。槍は前方に突き出し、あたかも魚雷！

「ッッ」

ドカーーーーン！！

トンでもない金属音が鳴り響く。ドレイクはあの一撃を避けられないと判断したのか、村正宗で受けたのだ。土煙が凄かったが・・・段々晴れてくると・・・あの雷撃のような攻撃を、ドレイクは刀の刃で受けていた。そのまま力押し勝負が続いている。

「おいおいすげえな・・・。」

つい俺も声に出してしまふ。そして大技を放ったあとは、お互いまともな剣戟でしのぎを削っていた。それを十数合打った後ち、今度はドレイクがフォーリの懐へと潜り込む。

そして逆袈裟斬りを放った！

ギーン！！

それは出鼻にフォーリの矛先によって防がれるが、ドレイクが笑う。

「くらえ！5の太刀！嵐龍！」

矛先をはずし、そのまま逆袈裟を放つ。それ自身は空を切るが、なんと、その刀身から鎌鼬が放たれたのだ！

「ぐー！」

ズシャ！！

フォーリは半身でかわしたのだが、それでも鎌鼬が左肩を襲う。かなりの出血だが、フォーリは試合を続けるようだ。

「やってくれたなあ・・・紅蓮！！！」

フォーリが槍のリーチを生かし、逆巻くように槍を横に一閃。するとどうだろう、その矛先に炎が宿る。なんで？

「くらええええ！！！」

フォーリのラッシュが始まる。だが槍の“突き”を活かしたものはなく、縦横無尽に流れる剣のような攻撃だ。それもリーチが長い。

「つく！」

ドレイクは全てをいなしていくものの、炎が残り身を焦がす。

そしてドレイクが見せた一瞬の隙を、フォーリは見逃さなかった。

うおつりゃあああ！！

炎を纏った矛先がドレイクの腹目がけて飛ぶ。

慌ててドレイクはかわそうとするが、それは叶わず横っ腹を炎が貫く。

すると炎は消えたが、まだ戦いは終わらない。

延々と続く剣戟の嵐。村人も固唾を呑んで見守っている……だが、俺には見える。ゼウスチートだからかは分らないが、あいつらの顔が苦痛に歪んでいる。これは……まずいな。

俺はやめさせることに決めた。

「終わりだ！！！！」

村人達も、シャオ達もこちらを驚いたように見る。だが、戦っていた二人は俺の声が掛かると、ゆっくりと崩れ落ちた……。

夕方。

宿の一室では、気がついた二人がベッド越しに口げんかを始めていた。

最初はどちらが勝ったとかそういうことだったのに、なんだか小学生もしないような喧嘩になってしまってきている。イリスは、「聞いているほうが恥ずかしい」と食料の買出しに行ってしまった。シャオも付き添いで出かけている。

「バーカバーカ!!」

「バカって言うほうがバカなんだぜえ!!」

「んだとてめえ!!」

「バーカア!!」

「お前だって言ってるじゃねえか!!」

「俺はいいんだよお！！」

マジでガキだ……。

俺は呆れて部屋を出る事にした。このバカどもなら、明日には復活してるだろう。

それに……ドレイクの瞳にはもう、フォーリに対する憎悪の感情は消えていた。

これなら旅にも支障はなさそうだ。

「おいお前ら、明日には南に向かうからな。準備しておけよ。」

「おう！」

「ん？」

「ハモってんじゃねえよ！！」

もう知らねえ。

パタン。

俺は扉を閉め、それに寄りかかる。背中から喧騒が聞こえるが気にしない。

明日から、よりにぎやかな旅になりそうだ……。

第30話 廃墟の村 アリアの王(前書き)

〈報告〉

・アストさん、アリア王の登場です！

### 第30話 廃墟の村 アリアの王

今朝、ドレイクは俺を稽古に起こすことはなかった。

不思議に思ってたドレイクのベッドを見ると、いない。ついでにフォ  
ーリがないのを見て、笑みがこぼれた。・・・なるほどな。

そして外に出てみると、案の定戦う二人の姿があった。昨日のよう  
に大技を使うわけではなく、地力の勝負。強化系魔法を使っている  
ようにも見えないことから、お互い心を許したのであるということが伺  
える。ん？なんでそれを本人達に聞かないか？は！否定するに決ま  
ってんだろ？ライバルができたようで、二人とも顔色がいい。なん  
というか活き活きとしていた。ま、飛び交う言葉はアレなのだが。

「お前がバカだコルア！」

「うるせえ！てめえにバカといわれる筋合いなんかねえよお！」

「筋合い？知らねえよバーカ！」

「筋合いって言葉も知らねえお前がバカだあ！」

「んだと!？」

・・・やっぱりガキだ。

「楽しそうでござるなあ、二人とも。」

いつの間にか隣にシャオがきていた。なんだかシャオの蒼穹の瞳に  
は、羨望の色も見て取れる。

ライバルがうらやましいのだろう。

「魔導士仲間も増えるといいな。」

「？ そうでござるな・・・。」

一瞬コチラを向いたが、バカ二人に視線を戻してそう言った。そのままあいつらを見ていると、今度はイリスが出てきた。

「皆さん！朝食ができたそうですよ！食べたら出発しますから！」

「……おう！」

「……あれ？兄貴来てたのか？」

「カエデにシャオか。これからはコイツと稽古して、お前を抜く！  
見てろよ！」

宿の入り口で待っていた俺とシャオを見て、二人は口々にそういう。  
マジで楽しくなりそうだな。

「一生かけて努力しても勝てねえよ。」

「んだと！？絶対に追いつくからな！！！」

「それは俺も同じだあ！いつか兄貴に追いつく！」

「ムリだな。ブラックカーズで逃げるから。」

「……びよ！？」

反応が同じだな……。

ま、いいか。イリスにいじられるのは後にも先にもドレイクだけだ  
ろうし。

あ、そうそうフォーリのフード、コレは今日の朝から脱いでいた。  
もちろんフード付きの服はきたままなのだが、あまり部外者に素顔  
を知られたくないのと、“最凶”のトレードマークだったそうだ。  
つまり、俺達の前では関係ない、と。村や町では被るらしいが。改  
めてコイツの顔を見ると、第一印象が、日焼け。かなり焼けて  
んだよな。フードのくせに。それで結構鼻筋の通ったイケメンなの  
だが……性格がなあ。

「イリスちゃん！！！！あ〜ん！好きになっけてくれるまで頑張るよ



「！！！」  
「自分で食べてくださいね。」

イリスに惚れたのか、はたまた女好きなのかは分からんが、極度にイリスに詰め寄る・・・笑えるほどスルーされているのだが。今もイリスに自分の分のから揚げを食べさせようとして撃沈。イリスのスマイルが冴える。

「このバカはどうするかな・・・。」

「だろ！？カエデもバカだと思っただろ！？」

「そ、そんな！？兄貴！俺はバカじゃねえよ少なくともコイツよりは！！！」

「んだとコルア！」

「筋合いも分からないお前がバカだあ！」

「まだ引きずってるお前がバカだ！」

ほらな、にぎやかだろ？他のお客さんの多大なる迷惑だ。なのにシヤオは一人美味しそうにお茶をすすり、イリスは相変わらず、

「とりあえずドレイクさんはいちいち声がでかいので黙りましょうか。」

「ちょ！？」

つてな感じ。ほんと、役割がすっかりしてるよなあ。

騒がしい朝食が終わると、準備を整えて出発する。あ、そういえば馬なんだが、この村昔人狩りに遭ったせいで男手がなかなか足らないらしく、なら畑に使う動物くらいと、フォーリが泣いて頼んだため、あげることにした。特にイリスは、今までありがとう、と感慨

深そうに別れの言葉を言っていた。……つまり全員で歩き旅である。

「さて、ここから南に向かいますよ。」

「「「おう!」「」」

「南かぁ……。」

フォーリのため息が聞こえる。

「どうしたフォーリ？」

「兄貴……実は今のこのハムリットの町って、元々はここより南にあっただなあ。人狩りにあつた思い出を払拭すべくこっちに移っただけだあ。だから今から向かう南には、旧ハムリットの町がある。それを思うと、なあ。俺の本当のふるさとだからなあ。」

「なるほどな。だがちょうどいい。決意を固めなおすため、人狩りに遭った人々への供養のため、そこに寄ればいい。俺らも墓前に花を添えるくらいのは、してやりたい。」

「兄貴……。」

「そうですね。では今日はその旧ハムリットを第一目的地としまし  
よう。」

イリスの声で俺らは歩きだした。フォーリはさっきより清々しい顔をしていた。

「ここが旧ハムリットの町か。」

俺らが歩き出してからずいぶん経った。今はだいたい昼下がりだが、今日はいいにく曇りでよく分からない。そして前を見ると、まさに廃墟と呼べるような場所にいた。カラスのような魔物が巢食い、木造であつただるう住宅は黒く焦げていたり、崩れていたり。何かの骨さえ散らばっている。

「確かに、廃墟だな。」

「。。。。。」

フォーリは黙って歩き始めた。俺らはそれに着いて行く。

彼が足を止めたのは、墓場だった。だが墓場といつても現代日本でよく見かけるものではなく、十字になつた木だったり、剣が突き刺さっていたり。確かに墓石もあつたはあつたが、何も書いていない岩だった。

だがそこを見渡すうち、俺らはあることに気がついた。

「誰か、居ますね。」

墓前に置いてある花も真新しく、そして何より線香がともっている。……この世界にも線香という風習があるのか、とは思ったが、そんな場違いなことを長く考えていても仕方がない。まあ墓前に花を添える敵はいないだろうから、俺達も摘んできた花を添えることにした。

フォーリはその間泣いていた。人知れず、泣いていた。まあこのメンバーなら気配でフォーリが泣いていることぐらい分かったかも知れないが、本当に静かに泣いていた。

俺達が全ての墓を見てきたあとフォーリの所に戻るともう泣いてはいなかったが、目を赤く腫らして、「ありがとう。」と言っていた。そうだよな。自分が生まれた町、育った町がこんな風になっていたら……俺だってこうなるわ。

「あなた方も、墓参りでございますか？」

遠くの方から声がした。男だ。別に警戒するような声ではないが、周りを見渡していると物陰から人が二人現れた。

「お前らは？」

「無礼な！頭が高いぞ！？この方は「黙れやオツサン。」な！？」

礼儀正しいほうは上流階級の出であることを彷彿とさせる出で立ち。旅装ではあるが、どこかの貴公子と言われたら頷いてしまう。銀髪、というのであるうか。短いのだがそれが美しい。騒いでいたほうはなんか……護衛みたいな奴だ。30代くらいだろうか。正直うるさいと思ったので殺気を発して黙らせた。

「さて、まずは俺らが名乗ろう。俺達一人一人の名を言うのも面倒だから、今世間で騒がれてる名前だけ言って置く。“黒い希望”だ。さあ、アンタは？」

すると礼儀正しいほうは、「ああ、あなた方が噂の……。」「言ってるから、」

「わたくしの名はレオール・アルス・アリア。一応この国の国王をさせていただいております。」

「……国王!?」「……」

俺以外が驚いたようで叫ぶ。だが、嘘か?と疑えない気品を持っているな、こいつ。

「んで?その国王がどうしてここに?」

「貴様!!国王と知ってなおその態度か!!無礼にもほどがある! ! 跪け(ひざまずけ)!!!」

オッサンが斬りかかろうと剣を抜く。  
うぜえ。

「創造 ピ」お止めなさいグライド!!」「」

遮られたが、一応創造だけはしておいた。国王のお叱りとあって、そのオッサンも引き下がる。

「わたくしの不甲斐なさで人狩りに遭ってしまった皆様に対し、謝罪をしに来ていたのです。」

「なるほどな……でも一国の王がこんなところに来て平気なのか?それもこのオッサン一人を護衛に。」

するとグライドと呼ばれたオッサンはピクピクと震えだす。おっおうキレ気味だ。

国王は気付かずに答える。

「お忍びですよ。わたくしが外に出ていることが知れたら、貴族派が騒ぎ出しますから。」

そういえば今、貴族派と王族派で大変なんだっけ？

それにアネスに手紙を出したのもこいつってわけか。

「お前、人としてはいい奴だな。」

「国王相手に何を無礼な！！止めないで下され。この無礼者をたたききる！！」

そういつて俺に斬りかかってきた。おっせえ。これじゃガンドロフのおっさんのが力量上だろ。

俺がベレッタを撃とうとすると・・・眼前にドレイクとフォーリが現れる。

「俺らのリーダーに何するつもりだ？」

ドレイクが村正宗でオッサンの剣を叩き折り、

「兄貴に手え出してみる。お前のノド貫いてやるぜえ？」

フォーリがオッサンの喉元に槍先を突きつける。

「ぐう……。」

お前ら・・・カッコイイな。  
ちようどいいや、二人ともソイツおさえといてね。

「悪いな王様。俺は誰にも敬語なんて使わない質たちでな。」

「いえ。グライド、お止めなさい。・・・さて、リーダーの方。“人としては”という意味をお聞かせ願えないでございましょうか？」

「俺はカエデ・ミナモト。カエデと呼んでもらって構わない。・・・まず王城から離れたこんなところまで足を運び、死者を供養するという姿勢は一人の人として俺は尊敬する。だが、お前が王城で取り仕切らないことで新たに兵士たちが死ぬ可能性があるということをお忘れるな。王つてのは国民全員の命を預かってるんだ。それを自覚しろ。」

すると王はつつむき、呟く。

「そうですね・・・。」

「ちなみに言っておく。グライドといったか？オッサン！」

「!？」

ドレイクとフォーリに抑えられた状態でオッサンはこちらを向く。

「お前は王か10000人の民の命、どちらを選ぶ？」

「!？ 当たり前だ！国王をお守りする!!」

その返答を無視し、俺は王に向き直る。

「俺なら、悪いが10000人の民の命だ。「!？」 なぜか分かるか？」

オッサンが殺気を放ってくるが、この程度の殺気、ドレイクやフォ

ーリの1/10にも及ばない。  
だが王は平然とこう答えた。

「人の命はみな平等でございますから。貴方の意見が正しいですよ。」

お？コイツ・・・分かってる。

まあそんな言い方すると俺が偉そうに聞こえるな。王としての見方を自覚している、とっておくか。そうだ。王は自分の命が尊いなどと思っちゃいけない。人の命は平等なんだ。王は民を動かすもの別に選ばれた存在ではなく、統率にはソチラのがいいから。というだけの話だ。

周りを見ると、オッサンは啞然。それ以外のメンバーは王に感心の目を向けていた。

・・・俺の目標一つ果たされたんじゃないかねえか？

いい王を見つける。これはコイツでいい。

「なあ、レオールって言ったっけ？」

「はい。わたくしはレオールと申します。」

「黒い希望の目的は知ってるか？」

すると一瞬きよとした表情になり、首をかしげた。



「いえ、存じ上げません。」

「そうか。俺達は、強いやつを見つけて仲間とし、いい王を見つけてソイツを支え、ルスリアを潰して天下統一することだ。」

「!?!」

「はっはっはっは!?!」

王の反応は分かるが、なんだオッサン笑いやがって。

「お前らはバカか？自分達を見る。何人で天下を統一するつもりだ？身の程を知れ。俺達騎士団が王の夢はかなえる。部外者はすっこんでいろ!?!」

プチ・・・

どうやらキレたのは俺だけではなかったようだ。

「国王陛下。自己紹介をいたします。」

イリスが出てくる。王の前に現れ、こういった。

「私は戦女神と申します。」

ほう、面白い。オッサンは一瞬驚き、王は「貴女が・・・。」と言っている。

「拙者は大魔道でござる。」

今度はシャオの自己紹介。オッサン、血色悪くなっている。王もイール教国の脅威と呼ばれていた彼が目の前にいるので驚いている。何故すんなり信じたかって？7つの属性のボールでシャオが遊んでい

るからだ。

「次に俺が、焰龍だ。アンタの親父には何度か世話になっている。」  
ドレイクが笑って答える。今度こそオッサンは焦りだした。王は、  
「だからどこかで・・・父がお世話になりました。」なんて言っているが。

「俺かあ。俺は“最凶の槍使い”だあ。よろしくなあ？」

ドレイクに続き、フォーリも笑う。オッサン青ざめ状態だ。王もこれにはビックリのように、「何故貴方が？」と呟いていた。  
さて俺か・・・と自己紹介しようと思ったが、ネタがない。異名もない。これは残念だ。するとイリスが俺の紹介をしてくれた。

「最後に我らがリーダー、カエデです。ここにいるのは皆、彼の力、信念に憧れ、信服を抱いた者たち。そして私が知る限りたった一人の、創造魔法の使い手です。」

「「！！！！？？？」」

オッサンの驚いた顔がいい。だがイリス、いくらなんでもおだて過ぎだぜ？

「ば、バカな！創造魔法の使い手なんているはずがな「創造 デュアルディオスクロイ」！？」

むかつとしたのでやってしまった。今は反省している。

創造で愛武器を取り出すと、オッサンと王は驚いたようだ。

「さて、話戻すけどな、レオール。俺は今、そのいい王を見つけた。どうやらアネスにも手紙送って謝罪してくれたみたいだしな。時期が来たら、仲間を集め終わったら、俺らは全員お前の味方になる。」

レオールはさらに驚いたようだ。「アネスさんとも知り合いとは・・・。」と呟き、

「いいのでございますか？わたくしは若輩。そのわたくしが天下統一など夢の又夢なのに・・・そのわたくしに力を貸してくださいさると？」

「ああ。俺達の目指す目標は、いい世界にすることだからな。それにはお前みたくない王がいないとダメだからな。」

レオールは、もう一度こちらを向いた。

「わたくしの夢は、この世界を正すことでした。わたくしは心より、あなた方“黒い希望”をお待ちしております。」

「ああ、その時は必ず天下統一しような！」

友達同士の約束のような形で、ずいぶんなことを言ってしまったな。まあいい。

さて、仕えるべき王も見つかったことだし、これからも頑張るか。

・・・王様に対する態度じゃなかったけどな。

### 第31話 南へ！

レオール王はあのあとグライドとかいうムカつくおっさんと一緒に馬車で北の関所へと向かっていった。本来は戦う兵士たちへの激励の為だったそうだが、途中で俺らが戦争を終わらせてしまったことを聞いたらしい。それで、兵士たちへの慰労のためという理由に変え、北の関所へと向かっていった。

さて、その翌日である。  
俺は地図を睨みながら、シャオとともに先頭を歩いていた。

「むづ。」

「どうしたのでござるか？」

地図を見ると、俺らは南下して、アリア南部にまで向かってからUターンして東部を通り王都につく手はずとなっているのだが……。

「これ、俺らが通るべき最短ルートに色付けてみたんだけど……。」

「あ、Uターンしてから真ん中まで行かないと町がないでござるな……ひとつも。」

「そうなんだよ……。」

正直このアリア王国はいびつなハート型。だが、南下する分にはそんなに時間がかからない。現に今、3日程度でアリアを北と南で分けたら南に区分されるところまでは来てしまっている。簡単に言えば、つぶれたようないびつなハート型なのだ。だが、Uターンのカーブ部分には、ハート型の右半分にも関わらず4日くらいは費やしてしまうような長さなのだ。そこをひとつも町無しはつらい。

俺が考えている間に、シャオは後ろにいるイリスに意見を仰ぎに行

っていた。  
そして戻ってくると、

「ではUターンする高度を下げ、商業都市バイゼル、イグニシヤスの町経由で行けばどうでしょうか？だそうでございます。」

商業都市バイゼル・・・あ、ここか。

Uターン開始予定の道は三叉路になっており、まだ南に向かう道が存在した。そこを行くと商業都市バイゼルに到着する。バイゼルはハート型の南端に位置し、なんと海に面しているらしい。この世界にも海が・・・少し感動である。さて、そしてイグニシヤスの町はというと、バイゼルから海面沿いの道を北東に進んでいったところに存在し、そこを北上すればUターン終了予定の道に合流するのだ。つまり、イグニシヤスの町からひたすら北上していけば王都に到着するという寸法だ。それにさっきシヤオが言ったように、Uターンしてからは一つ町がある。パズリカという町だ。  
なるほどな。

「よし、分かった。このルートで行こう。」

そして俺は振り向きざま、

「まず最初の目的地は商業都市バイゼルだ！」

と言ったのだが、フォーリとドレイクはマンガのような喧嘩の最中で、気にしてもくれなかった。  
イリスとシヤオは苦笑である。

もうバカは気にせず、向かうとするか。

俺はため息混じりに歩き出した。

その1日後

「そういえば、商業都市ってどんなところだ？」

「そうですね。はつきり言えば、全ての品物が揃う場所。海の向こうにある、この大陸の反対側からも貿易船が来るのでサンゼルスシティよりも凄く賑わってますよ。この国では王都の次にぎやかな町です。」

なるほどな。この世界、大陸一個だけで島は存在しないんだっけ？大陸はこの形をして、アリア王国は上部分の東側にある。東と北

がルスリア、西にはアルテナ王国があるんだっただな。  
まあそれはそれとして、商業都市か。楽しみではある。  
何が売っているのか・・・新たな異世界が見られるかも知れない  
しな・・・。

「そういえば、バイゼルではブラックマーケットもあるようですね。」

「闇市か。」

「はい。そこにもいろんなものが売っていると思います。」

「俺らの装備みたいのも欲しいな。“黒い希望”のトレードマーク  
って感じでさ。」

「いいですね。足輪アングルだと分かりにくいですから、やっぱり腕輪バングルかネ  
ックレスっていうのもいいですね。」

「ネックレスか・・・悪くないな。あとはイリスの武器？ま、それ  
はみるだけでそのあと俺が創造するけどな。」

笑いながら言う。するとイリスは呆れたような顔で、

「相変わらずチートですね、創造魔法は。」

とため息。だがそうでもないんだよな、コレ。少なくともサイズに  
制限あるし、生き物や食料は創造できない。ま、武器やら防具で充  
分か。俺はブラックカースとセイレーンっていうチートコンビがあ  
るから平気だけど、他はみんな私服ってか旅装だし、イリスは単体  
で戦えないから武器のひとつでもないと辛いだろうし・・・あとシ  
ヤオも接近戦できるようにしないとな。

「とりあえず、イリスの装備かな、見なきゃいけないのは。」

「ほえ！？私ですか？」

「そりゃそうだろ。唯一戦闘に参加しない分、単体で戦えるように

しないと。」

「そうですね……。」

にしても軍師か……俺としては軍師つてえとアレを持ってないと締まらないんだが……。

ま、バイゼル行つてから決めても遅くないか。

お？

三叉路に出た。

「ここを真つ直ぐ行けばいいんだつたな。」

「そうでござるな。」

「ん？シャオ？イリスはどうした？」

「イリス殿なら……。」

そういつて後ろを振り返ると、フォーリVSドレイクの喧嘩に入つて遊んでいた。あいつ腹黒いからなあ……。どうせドレイクいじつてんだろ。

「まあいいか。じゃあ、行くか。」

「承知。」



### 第32話 商業都市バイゼル（前書き）

（報告）

・お気に入り件数205件！！ご愛読に感謝です！！皆様これからもどうぞこの愚作に目を通していただければ光栄です！！

### 第32話 商業都市バイゼル

「ここがバイゼルか!!!」

俺は思わず感嘆の声をあげた。この坂を下ればバイゼルに入れるのだが、ここから町が一望できる。カモメのような生物たちが鳴き、港を中心に広がる繁華街はどこを見ても人人人人……客を呼び込む店員の声は絶えず、青空に反響するような海にはひっきりなしに船が着き、離れる。そして何より、暑い。ここだけ夏が先に来たのか？ってほどだ。確かにこの町が熱気で溢れているというのもあるが、それを差し引いても暑い。凄い町だ。

「凄いですねえ……まずは宿の確保に向かしましょう。」

「……おう!」「」「」

イリスも同じことを思ったのだろうか。

そう思いながら、俺は最後までこの景色を眺めていた。午前中ならではの空が、またこの心地よさに拍車をかけている。もう少し、見ていたい。

「兄貴!行くぜえ!」

「おう。」

フォーリに呼ばれてやっと、皆を追いかけ坂を下った。

宿につくと、イリスが部屋の予約をしに受付へと向かった。宿というよりリゾートホテルの領域だ。ロビーで俺達はくつろぐ。ロビーからは海が望める設計になっており、ここからの景色もすごくいい。商業都市バイゼル・・・旅の目的がなければ、いつまでも滞在していたい都市だった。

しばらくのんびりしていると、イリスが戻ってきた。

「さて、宿の予約は取れましたが、これから皆さんどうします?」

イリスは俺の隣のソファにちょこんと座ると、俺達に意見を求めた。まずドレイクが口を開く。

「俺は商業都市の品揃えを見てみたい。村正宗に勝る武器はないと思うが・・・武器防具も見たいしな。ついでに食料の買出しも行ってくる。」

「拙者は内陸国出身で海を見たことが初めてゆえ、海を近くまで見に行きたい。」

「俺はとりあえずぶらぶらしてきてえなあ。」

「三者三様か。俺はとりあえず商業都市をみてきたいな。隅々まで。」

俺も最後に意見を述べる。するとイリスがこう切り出した。

「では夕方まで皆別行動でどうでしょう?」

「なるほど。それでもいいな。」

「そういえば、ドレイクさん、皮袋を貸していただけますか?」

ドレイクが腰につけていた皮袋をはずし、イリスに渡す。それをイリスはごそごそといじってから、一つのイヤリングを取り出した。あれは・・・GPS!じゃねえや、場所が分かるイヤリングか。

「フォーリさん。」

そういつてイヤリングを差し出す。するとフォーリはなぜか・・・泣いた。

「カンゲキなあ!!イリスちゃんが俺にプレゼントをお!!!!」

「はい。」

うわ、イリススマイル・・・。なんかフォーリはその笑顔を違う意味でとってるし。

「その笑顔がステキだよイリスちゃん!!!これはもしかして俺に  
対す「それは仲間全員の位置が分かるイヤリングですから、大切に  
つけておいてくださいね。」そんなあ。」

遮った。これは素じゃない。意図してやったことだ・・・。

さて、別行動か。どこに行こうかな。まあ隅々まで見ることは決定  
だが。

全員ホテルを後にし、ドレイクは商業地区へ、シャオは海方面へ、  
フォーリは住居地区へと、それぞれ散っていった。・・・ん？

「イリスはどうするんだ？」

「特に目的はないので、カエテさんについて行きたいです。」

「そか、分かった。」

その時イリスの頬がほんのり赤かったことに、俺は気付かなかった。

まず商業地区の武器、防具を売っている店に行く事にした。そこへの道も人は多い。物凄い人数で、正直埋もれそうだったので、イリスとはぐれないように・・・アレしかないか。

イリスの手を握る。

「ほえ！？・・・はう／＼／＼」

GPSがあるから問題ないかとも思ったが、正直合流するのが難しい。これしかなかったんだ！リア充爆発しろとかゆるーな！！

さて、そして人ごみをかいくぐって武器や防具の商店街に行くと、そこは比較的人は少なかつた。まあメインストリートに比べればの話だが・・・手は放したほうがいいのか？これ以上罵声浴びせられたくないし・・・。

そしてイリスの手を放すと、

「別に・・・いいのに・・・。」

何か呟いていたが、聞こえない。

「何か言ったか？」

「ほえ！？なんでもないです！！」

顔を真っ赤にして言うところ・・・凄くカワイイんだよなあ。

さて、武器を見る。店によって様々だが、やはり剣が主だった。他にも投げナイフや槍、短剣や大剣など様々あったにはあったが。そんな中、一風変わった店があり、面白い武器が売っていた。腕輪に8つの鋼線が巻かれているのである。それもその鋼線は凄く長い。

「店主、これは？」

するとじいちゃんが歯の抜けた口を広げて豪快に笑いながら、

「兄ちゃん、いいものに目を付けるねえ。これは“エクセリオン”。使い手は魔法を使役できる人間に限られるが・・・ソイツの持つ属性の鋼線が反応し、自由自在に動く“切り裂ける鞭”になるのさ。」

凄いな・・・。これはもしかしたら。

「もし、もしだ店主。これをあの大魔道に使わせたらどうなる？」

すると店主は驚く。次いで青ざめたような、好奇に溢れたような、そんな顔になり、答えた。

「兄ちゃん、顔に似合わず恐ろしいこと考えるね・・・大魔道なんかに使わせたら、6本の鋼線を操り、燃やし、凍らせ、枯らし、切り裂き、打ち据え、シビレさせ、なんでもできる。大魔道に接近戦も付けるってこと。鬼に金棒もとい、大魔道にエクセリオンだよ・・・。」

きた・・・。これをあとで創造して、シャオにあげよう。

鋼線を操る魔導士・・・カッコイイな。

「店主、ありがとう。じゃあな。」  
「いつちまうのか!?!?・・・いつちまったよ・・・ん?黒髪に黒瞳、黒マント・・・大魔道にどうのと言っていたが、まさか・・・噂の“黒い希望”の・・・。」

さて、武器屋にはイリスに適した物はなかったもので、もうイリスに渡すのはアレに決めた。

さて、次は防具屋だ。

どうやらこの通り、右が武器、左が防具と決まっているようで、分かりやすかった。

防具もプレートメイルだの、皮鎧だのとか無さそうだな・・・。  
ん・・・物色してみるものの、ピンとくるものがない。そう悩んでいると、イリスが話しかけてきた。

「もしかしたらこの道だけじゃなくても、掘り出し物屋やブラックマーケットで何か売っているかもしれないよ?」

確かに。よし、次は掘り出し物市だ!

「イリス、行くよ!」

「ほえ!?!あ、はい!」



掘り出し物市は武器防具屋街より遙かに賑わっていた。何より、海の近くだというのが大きい。

ここは港に近くなるほど人が増える。それは、さっきバイゼルに入るとき眺めた景色で一目瞭然だった。

・・・またここでもイリスの手を握っている。正直俺も顔は真っ赤だと思う。

まあ、行幸だ。

さて、掘り出し物市ではたくさんの品物が売っていたが、目を惹いたのはマントのような代物だった。これは俺のセイレーンに似て、魔法のダメージを緩和する効果があるらしい。だがセイレーンと違ってダメージは受ける、と。面白いのが、このマント、再生機能があるとのこと。つまり斬られても時間で直るというのだ。これは凄いな。ここで皆に創造したいのだが、問題があった。俺の創造魔法、どんな代物も一つしか作れないのだ。つまり、いま村正宗を作るのは不可能ということ。全員にこれを渡すことができない・・・それにこれ一つ一金貨もする化け物なのだ。諦めるしかない。後はコレといって、目ぼしいものはなかった。

「イリス、俺もう見るものは見たけど、どうする？」

「じゃあ、“このまま”散歩がしたいです・・・／／／／／」

そういつて自分の右手を上げる。握っているのは俺の左手。・・・

「“このまま”？」

そう聞くとコクンと頷く辺りがもう愛らしい。

そのまま俺達は何も言わず、“このまま”の散歩をすることにした。

夕方。

海岸沿い、あまり人が来ないであろう場所を、俺達は“あのまま”散歩していた。お互いに口数は少ない……。だってさ！だってさ！ムリ！！

「あ、カエデさん。」

「な、なになんでしょう!？」

「そんなにビックリしなくたって……。。」

そういつてイリスはうつむく。え？イリスはいいの？俺とで？……。そりゃあ彼女経験くらいありますけど……。その女の子と初めての手は誰だって緊張するものでしょ!？何人と付き合っつてようが、そ

の新しい子と手をつなぐ時は緊張しない!?!?!? . . . しない? そうですか。

「ごめん、で何?」

「あ、いえ。もし初めて出会った頃、真っ直ぐ行くルートじゃなくて大きくUの字を描いていくルートだったら、あそこから出てきたんですよって話です。」

そういつて、西側にあるバイゼルはずれの道を指差す。そういえば、別ルートだったらバイゼルは元から通る場所だったんだな。

「そうだったのか。でも、こっちのルートで良かったよな。」

「ほえ? あ、そうですね。ドレイクさんにシャオさん、フォーリさんとも出会えた。それに王様やアネスさん、キアラさんやガンドロフさん. . . いろんな出会いがありましたよね。」

「ああ。それに俺のこの世界での目的が出来たのも、こっちの道だったからだ. . . . それに楽しかった。」

「楽しかったですね. . . . でも、楽しいのはこれからです! 張り切っていきましょう!」

「はは、そうだな。」

そうして笑いながら歩いていると、その反対側. . . . 俺達が向かうべきほうの道から、奇妙な集団が現れた。数人の屈強そうな男たちが、鎖や足枷あしかせ、手錠をはめられた人々を連行している. . . . なんだ? 横を見ると、明るかったイリスの顔が一変。手にも力がこもり、震えているのが分かる。

「奴隷にされる人たちです. . . . !」

正直俺はイリスのように怒ることはしなかった。それより、その手

錠をされた人が皆絶望に打ちひしがれた顔をしているのに、一人瞳に強い光を持った女の子が居た事に気が行っていたからだ。緑色の髪をした、まだ幼さが残る女の子だ。

「こいつらはこれからどこに?」

「ブラックマーケットでしょう。どうしたんですか?」

「いや?行くぞ。」

「ほえ!?!まさか……。」

「多分、そのまさかさ!?!」

そういつて俺達は手をつないだまま駆け出した。

### 第33話 ブラックマーケット

俺とイリスは、ブラックマーケットの前に来ていた。

体育館のような場所。その前にも頑丈そうな男が立っており、入場料を求めてきた。

イリスが二人分を支払い、中へと入る。するとそこは薄暗く、奇妙という言葉が似合うような場所だった。まず、俺はその緑の髪の子を探すため、奴隷市を当たって見ることにした。

驚いたのは、奴隷市だけで3つあること。一つ目には居なかったの  
で、二つ目の奴隷商会を当たる。

そこは北東の端に位置する場所で、一件目よりもたくさんの檻があった。

「アンタ。」

俺はそこにいた店員らしき男に呼びかける。

「へい、なんでございましょう?」

もみ手をして寄ってくる男にイリスは嫌悪を感じていたが、俺は慣れた態度を装い、男と話す。

「アンタ、今日はいいのが入ったかい?」

「お、今日は生きのいいのが一人、入りましたよ。生きが良すぎてこまりものですが。」

困るのはてめえらの商売だ、と心の中で毒づくと、俺は最後の確認に移る。多分ここで当たりだ。

「どんなのだ？」

「緑の髪をした、女ですぜ。」

「案内してくれ。」

「いいですが、値は張りますぜ？」

ここで合っていたな・・・値が張ると言われて、金がないとも言えないので、あえて嘘をつく。

「フ、構うものか。」

「兄さん、やり手ですねえ！」

何がやり手だ。「こちらでございます。」と一番奥の牢を指差す。話を聞かれては困るので、店員を追っ払う。

「もういい。ありがとう。あとは俺とこの子の交渉だ。」

「いや、もし知り合いだった場合面倒なので、店員がいるのがルールでございます・・・。」

「ああ！？奴隷と俺が知り合いだ！？舐めたこと言ってるじゃねえ失せる！！！！！」

本気の殺気を放ってみた。すると男は「ひい！！！」と逃げていった。さて。

「君、名前は？」

「・・・。」

プイッと横を向く。まあ、これじゃ買い手もいいところだからな。

「俺は君を助けに来た。」

「・・・。」

「なぜかって、君の目には強い光を感じたからだ。さっき連行されるところを見た。」

「……？」

「まあ、信じてもらえないのも無理はない。だが、俺の特徴を探して見る。君みたいな子なら、俺の噂くらいは聞いてるんじゃないか？」

「……！！」

「気付いたか。俺は君を助けに来た。」

「……本当？」

「ああ、本当だ。君の瞳に宿っていた光の正体を聞かせてもらえれば、助ける。」

交渉は順調だ。あとはこの子の瞳の意味次第。

「あたしは、皆を人狩りから助けようとした。でも、捕まっちゃった。だから脱出する機会をうかがってたんだ。」

「なんで、助けようとした？」

「？ そんなの、間違ってるからに決まってる。人狩りなんて、間違ってる！」

俺は見た目で人を判断したりはしない。この子はもしかしたら、強い。そして考えも俺達と似ている……。いや、まだ子どもだ。さすがにこの発想はまずい。

「よく分かった。今日の夜中、助けにくる。まずは、俺達が今居なくなったら、ずっとこの壁をノックして欲しい。じきに俺が反対側からノックする。そしたらやめていい。そのあとは……この壁から離れている。分かったね？」

「？……コクン。」

「俺はカエデ・ミナモト。君は？」

「アリシア・クロノ・イグニシヤス。」

「分かった。迎えにくるよ、アリシア。」

この子は助けなきゃいけない予感がする。勘だが、それでもだ。さて、じゃあ行くか。

「じゃあまた後でな。」

そういつて、俺らは奴隷商会をあとにした。そのあと、緑髪の子は眩いていた。

「黒い・・・希望かあ。。。クス。」



店主には交渉が決裂したとかそういう適当なことを言って、俺らはブラックマーケットを出た。

イリスは終始黙っていたが、ブラックマーケットにずっと嫌悪を感じていたらしい。まずは……

。ブラックマーケットをぐるっと一周して、ノック音を探す。

……

……

……！　ここか。よし。

まず、創造したペンキでバツ印をつけ、コンコン、とノックをする。そして、向こうのノック音が止んだのを確認すると、イリスに言った。

「さて、一回ホテルに戻ろう。作戦会議だ。」

「なるほど。カエデ殿の決めたことならば従いましょう。」

「俺も問題ない。食材は買ったことだしな。」

「俺も兄貴の言うことなら何も問題ないぜえ。」

三人に事情を話すと、ことのほか簡単に了承してくれた。すると、イリスが歩いているときに考えたという作戦を説明する。

「作戦、というほどでもありませんが、まずフォーリさんとドレイクさんには見張り全員を気絶させてもらいます。そのあとで合流してから、シャオさんにアリシアちゃんの檻の壁を爆破してもらい、助け出します。そして最後ですが、全員違う方向に逃げたあと、私達が元から行くはずだった道で合流し、ダッシュで逃げます。それだけです。あ、あ、ではドレイクさんと私は逃げる方向一緒で守ってくださいね？」

「……分かった。」

第34話 アリシアちゃん救出作戦！（前書き）

（報告）

・PV1000000突破！！！！

・「兄貴ともども、これからも“とあもの”をよろしくどうぞえ。」

### 第34話 アリシアちゃん救出作戦！

俺達はアリシア救出作戦の準備をしていた。あ、そういえば。

「シャオ。」

「？ なんでござるか？」

「創造 エクセリオン」

俺は今日見てきたあの鋼線が巻かれた腕輪を創造した。

「これは・・・？ 凄まじいルナを感じるでござるが・・・。」

「今日武器屋で見ってきた。まあいいから着けてみ。」

言われるがままにシャオはエクセリオンを右腕に装着する。すると、7色に輝く鋼線たちが踊りだす。鋼線も長いな、俺の身長よりも一本一本が長い。

「これは・・・凄いな。」

「凄いでござるよ・・・7つもあるのに、拙者の手足のように自由自在に動かせるでござる。」

「それ、シャオの近接武器にしようと思って。店主に大魔道に付けさせたらどうなるか？ って聞いたら青ざめてたよ。」

俺はカラカラと笑う。シャオも笑い始めた。ヒュンヒュン！と鋼線を纏いながら。シャオって何だか無駄にキまるよなあ。

「そうでござるな。これは使える属性に反応して動く鋼線のようにでござるからな・・・。」

「ま、今回は出番ないと思うが、とりあえず持っておいてくれ。」

「ありがたく、頂戴するでござるよ。」

「さて、準備はできたか？」

「「「「おう！」「」「」

真夜中のホテルの一室から、黒い希望は飛び出した。

さて、外に出ると、さすがに真夜中。バイゼルといえど人がほとんどいない。

大都市なだけに、静寂がより寂しく感じる。

夜も漆黒に輝く海は美しく、星空を映した水面が波を打っている。

キレイだな・・・。

ブラックマーケットの前についた俺達は、まず近くの茂みに隠れた。見張りは4人ほど。フォーリとドレイクが躍り出る。

まずはあの屈強そうな男4人を片付けなければならぬのだが……

「あいつら、息ぴったりじゃねえか……。」

日ごろ一緒に稽古しているからか、絶妙なコンビネーションで3秒経たずに叩きのめしてしまった。それも素手で。二人は茂みに帰ってくる、俺達に言った。

「もう見張りはいないようだ。」

「あいつらは明日まで目え覚まさないぜえ。」

「お前ら、凄いな……さて、行くか。」

俺達は俺が今日バツ印を書いた場所まで向かう。ここにはもう見張りは居ず、正直拍子抜けだった。さて、バツ印は消えておらず、見張りはこれに気付かなかったと推測できる。さて、あとは。

「シャオ、ここ爆破。」

するとシャオはこの壁を一瞥し、コンコンとノックをして強度を確かめると。

「これには強い結界が張られているでござるよ。耐魔法結界。おまけにこの壁自体も堅固に出来ており、武器で破壊もムリでござるな。」

あれ？ここにきて作戦失敗？

「じゃあムリなのか？」

「上級魔法程度では傷一つつかないつくりになっているぞいぢやるよ。」

シャオはそう呟く。俺も皆もため息。ここに来て失敗かよ……。

「拙者で無ければ、破壊はムリでござるうな。」

シャオは笑ってそういった。この野郎……！

「お前、またそのパターンかよ！」

「そうお怒りあるな……さて、いくでござるよ。古代呪法　メテオ・ブラスト！！！」

くアリシア side く

牢獄の夜は静かだった。真っ暗な上に、奴隷たちの寝息しか聞こえない。

あたしの前にあるのは鉄格子だけ……。

イグニシャス家の令嬢として生まれてこのかた、こんな牢獄に閉じ込められるのは初めてだった。でも、あたしのしたことは正しかったよね？皆を守るうとしたんだもん。

間違っただけじゃなかったよね？パパ……

『おいアリシア！黒い希望って知ってるか？』

『くろいきぼう？なにそれ？』

『今ガンドロフの野郎から手紙が届いたんだが、噂好きのお前なら知ってるかと思って。』

『ガンドロフのおじちゃん？なんだって？』

『黒い希望ってのは、黒髪黒瞳黒マントの男が率いる、正義の集団だそうさ。なんでも戦女神や大魔道、焰龍なんていう名だたるメンバーらしくてな。それでガンドロフの北の砦で1ヶ月続いていた戦争あったろ？あれを、旅の途中だった黒い希望が「民や兵士の命がもつたいたい」とたった4人で終わらせてしまったらしいんだ。凄いだろ？』

『4人で戦争終わらせたの？』

『ああ。しかもだな、敵であるルスリア兵も、自分の意志で戦っているわけじゃないから、という理由で、全員殺さなかったらしいんだ。俺はこいつらを尊敬する。自分の正義を最後まで貫いているじゃないか。お前も、そういう人間になれよ。』

『うん！』

その会話のあとだったかなあ。町の東で人狩りがあって、あたしはそれから人々を守るうとした。黒い希望のように。でも、力が足りなかったかな……。つかまっちゃった。みんなは諦めるって言うてたけど、あたしは最後まで抵抗した。それでも、ダメだったけど



さ。

そして牢獄に入ってから。足枷をされて動けない。もう何もできない状態だった。そこへいろんな人間が来て、あたしを見てきた。見下されているような、見世物にされているような気分だった。

そこへ次に来たのは、黒マントの男・・・青年だった。

「助けに来た」最初バカじゃないの？と思った。

「俺の特徴は？」何言ってるの？と思いつつも、見てみると、黒髪黒瞳・・・パパの話に出てきた人？

「気付いたか」！ やっぱり！！黒い希望のリーダーって人だ。あのパパが尊敬する人啊。

「君を助けに来た」今度はバカだなんて思わなかった。なんだか、救われたような気がした。

カエデ・ミナモトって名前だったっけ。・・・クス、変な名前。

「カエデ・・・カエデ・・・カエ兄にい。なんてね。」

今日初めて笑った気がする。本当に助けに来てくれる保証なんてどこにもない。でも、あの人なら助けてくれる・・・直感でそんな気がした。

そして今真夜中。言われたとおり壁から離れてるあたしが居る。本当に信じてるから笑っちゃうよね・・・。

すると、コンコンとノック音が聞こえた。もしかして、来たのかな！？あふれ出す高揚感をそのままに、期待して壁を見ていた。すると・・・

ドグアアアアアン！！！！

壁が・・・消滅した・・・吹き荒れる風に、奴隷数人も起きたようだ。それにこれ、あたしの檻全体を吹き飛ばしてる……。土煙がやまない外のほうで、話し声が聞こえる。

「制御を間違えたでござるよ。」

「このバカ！音がでか過ぎんだよ！！！」

「お前の声もうるさいと思うぞお？」

「そんなことよりアリシアちゃんは無事でしょうか？」

「大丈夫さ。心配ない。」

！！ 最後の声・・・カ工兄だ。あの人を安心させる声色、やっぱり助けに来てくれたんだ・・・！  
土煙が止み始め、見えたのは5人のシルエット。その真ん中の人のマントがたなびき、口を開いた。

「アリシアを救出するため、黒い希望参上」

土煙が止んだとき、笑顔でそういったのは、他でもないカ工兄だった。  
ちよっぴり涙が出そうになった。

（アリシア side out）

さて、十二分にかっこつけたセリフを吐いたところで、俺はアリシアを抱きかかえる。

そしてドレイクは足枷を叩き斬り、逃亡した。

すると少し経たないうちにバイゼルの警備システムが鳴り響く。

やべー！

「当初の作戦通り、四散するぞ！」

「くくくおう！」「くくく」

俺はアリシアを抱えて走る。追ってくる奴らは速いが・・・ふん、ゼウスチートに掛かれば！

「アリシア、しっかり？まってる。飛ばす。」

「うん・・・。」

ゼウスチート発動！逃げろ！！

新幹線もビックリのスピードでひた走る。

「おいまてええ！！！」

「はや！！！！！」

後ろから声が聞こえてくるが、そんなこと気にできるか。なんてったって、俺が一番遠回りなルートなんだからな！

「あ、来た来た!!」

「こっちですカエデさん!」

アリシアを抱えたまま俺が走っていると、イリスたちはもう待ち合  
わせ場所で待っていた。

「よし、このままイグニシャスに向かうぞ!」

### 第35話 逃避行

逃げ出してから少し経つと、後ろから騎馬隊が追ってきた。  
ヤバイな、このままだと追い着かれる。

「あたしに任せて!!」

アリシアが叫ぶ。任せるって……だが試すしかない。

「おいカエデ本気か!？」

「もちろん!」

止まって正面を向く。騎馬隊が段々と迫ってくるが、俺はいったんアリシアに賭けてみる。

「いつくよー!スロウ!!」

「」「」「!？」」「」

とたんに騎馬隊のスピードが亀みたいにスローになる……魔法か?

「アリシアちゃん……あなたまさか……!」

「はい、時空魔導士です!!このまま逃げよう!皆避けなくてね!」

避けないでって……?

「ヘイスト!!」

俺ら……アリシアを含めた5人に抹茶色の小さな球体が当たる。  
なんだ?体が軽い。

「これで皆の行動スピードは格段に上がったよ！！今のうちにダッシュで逃げよ！！」

よし、ダッシュ！！おお！？

ゼウスチートほどではないが、かなり速い！高速道路入れるな！その速さでみんな走る。そんななかフォーリは……。

「ははは！これにさらに！アジリティアップ！！おお！速いぞ！！！！」

バカが遊んでる。確かに速く、みんなからぐんぐん遠ざかる。なんとなくムカつくので。ゼウスチート重ねがけ。

ダーーーーッッシュ！！！！

おお！？一瞬でフォーリの横へ！！

「ようフォーリ！！」

「！？あ、兄貴！？」

そのままダッシュ！！やべえマジコレ瞬間移動だ。流れる景色の速度が尋常じゃない！

ヘイスト×ゼウスチートハンパないな……。

「ちょっと二人とも速すぎます！！」

「少し待てエ！！」

「どうしたらそんな速くなれるのー！？」

アリシアだけは好奇心丸出し。

さて、そんなこんなで軽く3時間は走った。もう日が出てきている。朝焼けというのだろうか。だが、何故だかあまり疲れない。それに、あと少し歩けばイグニシャスの町だ。

「さて、ここまで来れば追っ手もそう簡単に追いつけないだろう。」  
「そうですね・・・疲れましたあ。」

そういう割にイリスも疲れてないし。  
・・・見れば右手に海がある。そうか、海岸沿いを走ってきたんだよな。

「少しここで休憩するか。」  
「了解。」

みんな道端に座り込む。俺は海を眺めながら、一人みんなを背にして立っている。

「皆さんありがとございました!!」

ん？後ろを見ればアリシアがみんなに向けて頭を下げていた。まあいいってことよ、的な雰囲気でみんな笑っている。その中でイリスが口を開いた。

「時空魔法が使えるってことは、貴女がその家系と考えていいのですか？」

「うん！パパとママも使えるよ！」

改めて見ると、アリシアはだいたい15歳くらいか。充分幼いな。。

緑の髪は戦闘において荒れてしまったらしく、毛先はボサボサ・少し長髪気味ではあるが、シャオの髪のほうが長いかな。

「そうですか。カエデさん、アリシアちゃんは前に話したエンシエントスペルの時空魔法の使い手です。覚えていますか？」

「ああ、言ってたな。」

「拙者、エンシエントスペルに二つも出会えるとは、カエデ殿と旅してて良かった!!」

シャオが興奮している。久々に見たな。シャオの魔法ヲタぶり。

するとアリシアが、「え？二つ？」とか言っていたので、イリスがなぜか自慢げに、

「カエデさんは創造魔法と闇魔法の使い手です。」

「創造魔法！？凄いなカエ兄！」

「カエ・・・兄・・・？」

「うん！カエデだからカエ兄。」



なんか、キアラに続きこの子にもあだ名を付けられた。  
周りはみんな笑ってるし。

「さてアリシアちゃん。私達はこれからイグニシヤスの町に行きますが、どうしますか？」

「どうするって、あたしの家もイグニシヤスだから、着いてっぺいっ？」

「偶然ですね・・・そういうことなら。」

イリスがにっこりと微笑む。まあアリシアを送る分には問題ない。そういえば、アリシアの本名ってなんだっけ。

「アリシア、本名は？」

「アリシア・クロノ・イグニシヤスです！ちなみにクロノって言うのは時間って意味だよ。」

元気よく答えていただいた。イリスは俺が聞いた意味を理解したようだ。それ以上の答えが帰ってきたが。

「イグニシヤスってことは、あの町の公爵の令嬢ってことですか・・・。カエデさん、イグニシヤスの町は貴族の町。イグニシヤス公爵が統括する町なんです。この子はその令嬢ですね。」

町のリーダーの娘さんか。それがよく人狩りから守ろうなんて発想に至ったな。普通貴族の令嬢なんて、怖くて逃げ出すものなのにな。

「パパはね、黒い希望を尊敬してるって言ってたんだ。だからあたしも黒い希望に負けないような正義を貫きたくて、人狩りをやめさせようとしたんだ。」

なるほどな。そういうことか。貴族の町だからって堅苦しくはならず済みそうだが・・・そういう意図があつてこの行動に出たわけか。詳しい話は親父さんに聞くとして・・・。

「じゃ、アリシア、俺達黒い希望を、君の家まで案内してくれるか？」

「うん！いいよ！」

「カエデさん！？」

何考えてるんですか？みたいな目で見られたが問題ない。さて、休憩はこのくらいにして、イグニシャスの町に向かおうか。

### 第36話 イグニシャスの町（前書き）

（報告）

・ftpさん感想ありがとうございます！！

・ブレイズサーーん！！！！レビューマジで感謝です！！もうホント、感動というか感激というか・・・これからも“とあもの”を見守ってやってください！！！！！！！！私が書くこととしている物語をそのまま写したようなレビューです。皆さん一度そちらのほうにも目を通していただければ幸いです。あらすじのような感覚で読んでください。

### 第36話 イグニシャスの町

午前中。

俺達はあるあとイグニシャスの町に到着し、そのまま領主邸に案内された。・・・アリシアン家って領主だったんかい。

そしてそのまま応接間へ通された。

「パパがあいさつしたいって言うから、ちょっと待っててね。」

とのアリシアの言葉により今現在、5人全員応接間で領主を待っている。

応接間の南側の壁は全てガラス張りになっており、そこから海の景色が見られる。4人が手前側のソファで座っているなか、俺だけはそのガラス際で外を眺めていた。

昨日寝ていないせいか、後ろからあくびの音がいくつか聞こえるが気にしない。それよりも飲み込まれるような海の景色に魅了されていた。バイゼルとは違う、自然味溢れる海岸線に、ひっきりなしに波が打つ・・・美しいところだな。ここも。

「お待たせしました！」

領主らしからぬ転がり込むような体勢で扉を開けて入ってきた・・・どれだけ急いできたんだ？

ついでアリシアも入ってくる。こちらはさっきよりシユンとしていた。まあ、怒られるわな。

「まずは娘を救っていただいたこと、感謝のことはありません！

！！！！」

扉近くで土下座してきた。おーい、せめて入って来い……。  
イリスが立ち上がり応対する。

「とりあえず顔を上げてください。奴隷として売られそうだった未  
来ある少女を助けるのは、当然のことです。」

近くまで行き、立ち上がるよう手を差し伸べて促した。娘のために  
ここまでなれるっていうのも、いい親だな。俺にはうらやましい。

「あ、ありがとうございます……おお、貴女が戦女神様ですか。  
噂はかねがね聞いております。」

一目見て分かるのか。

イリスの手をとって公爵は立ち上がると、俺達をぐるりと見渡す。

「いやぁ……あなた方が黒い希望ですか。私は先代アリア王の時  
代に宰相をしております、皆様くらいの方々になると、一目で誰  
だか分かります。いやはや、こついつてはなんです、凄まじいメ  
ンバーでございますな……。」

めっちゃめっちゃ褒めてくれるな……ま、どうせ俺は入ってないだろ  
うけど。

さてこの男の容姿を説明してなかったな。パツと見、優しいおじさ  
んだ。髪は緑色で、顔はいつも笑ってそうなくらい朗らかである。  
……宰相をしていたのか。なぜ今はこんなところに居るのだろう。

「あなた方の話はそれはもうガンドロフよりたくさん聞いておりま  
す。それはもう素晴らしいご活躍だったとか。」

ガンドロフ……ああ、北の関所のオッサンか。

知り合いなのか。ま、あのオツサンなら先代から仕えてそうだしな。そんなことを思っていると、公爵は俺のほうを向いて止まった。ん？

「あなたがリーダーのカエデ・ミナモト様ですか！！　ここだけの話、私以外にも王城や他国に黒い希望の噂は伝わっております。そして、こんなトンでもないメンバーを率いるのは、経歴が一切分からない謎の男・・・いったい何者なのかと騒がれていますよ。いやあ、そんな方に出会えて光栄です。娘を見つけてくれたのも貴方だとか・・・本当にありがとうございます！！」

なんか、ランドに会った時のような気迫だな・・・正直こういうタイプの対応の仕方が分からない。すると今まで空気だったフォーリが口を開いた。横にいるドレイクはと言うと・・・寝ている。相変わらずだなこの野郎・・・。

「兄貴、とりあえず面会も済んだしアリシアも届けた。今日の宿探さねえと。」

「お、そうだな。じゃあ公爵、俺らはこれで。」

「と、とんでもない！！私の屋敷でよろしければ、いつまでなりと御逗留下さい。」

公爵はそういつて話を遮った。まあそれが叶うならそのほうがありがたいが。

アリシアを見ると俺達に期待のまなざしを送っている。これは泊まっただけでいいという解釈でいいのだろうか？

イリスがこちらに頷いてくれたので、了承することにした。

「そうか。では一日宿を貸してもらいます。」

「おお、そうしてください。少しでも恩を返したいですからな。」

ハツハツハと笑う公爵。アリシアも笑顔でこちらを見ていた。どうやらこの選択肢で間違いなかったようだ。さて、もうしばらく海を眺めているとするか。

バイゼルで買い物を買って済ませていたので、この町でする必要もなく、各々屋敷内のあてがわれた部屋でくつろいでいた。

俺は応接間に似た南側の部屋を借り、ずっと海を眺めていた。

コンコン。

「どうぞ。」

そう言うが入ってきたのは公爵だった。

入っても構わないですか？というので、とりあえず入ってもらい、お互いそこにあつた椅子で対面した。

「俺に対して敬語はやめてくれ。俺も慣れてねえし、年上に使われるのは気がひける。」

「いやしかし、恩を受けた身ですから……。」

「関係ねえよ。じゃあその恩がある俺からの頼みだと思ってそうしてくれ。」

「……分かった。これでいいんだな？」

敬語をやめたたん、元宰相の風格が漂ってきた。なるほど、凄い威圧感だな……さて。

「それで、何かあつたのか？」

「いや、改めて礼を言いに来た。娘を救ってくれて、本当にありがとう。」

「・・・まあ、いい目をしてたからな。」

俺は海を眺めながらそう言った。すると公爵は聞いてくる。

「目？」

「ああ、真っ直ぐで、諦めてない目だった。絶望的な状況でも諦めない。それにアリシアは俺達のように、弱者を守るべく戦って捕まったらしいからな・・・。俺としては、もう少し。そうだな、イリスくらいの年齢だったら仲間を誘ってた。実力も申し分ないし。なにより覚悟がある。」

俺が話している間、公爵は黙って話を聞いていた。そして俺の口が止まると、言った。

「そこなんだ。」

「どこ？」

「いや・・・私は応接間で君らと会うまでの時間にアリシアと話していた・・・いや、叱っていた。だが人々を守って捕まってしまうたという話に関しては、私はまるで怒っていないんだ。それで捕まったのは力不足と自覚していたし、なにより安心感のほうが強かったからな・・・。だがアリシアは、認めてくれるなら力エ兄・・・カエデくんのことだな。君達について行きたいと言ったのだ。私は奴隷狩り相手に捕まるような娘を、連れて行って欲しくはないんだ。まだ弱い。それこそカエデくんの言うように、もう少し年がたって魔法を磨いていたら送り出していたかも知れないが・・・。足手まといになるし、命を危険に晒す旅だ。君らの負担も大きくなるだろう。」

なるほどな。アリシアは俺達に着いて来たがっているのか。

・・・正直欲しいが、親がああ言うのであれば仕方がない。むう、



補助が出来る人間が参加すれば、俺達にとってもメリットは多いんだがなあ。

「分かった。アリシアが頼んできたら断れ、そういうことか。」

「ああ、なにからなにまで済まない・・・お礼といっってはなんだが、私は資金面で黒い希望を全面的にサポートしよう。どうだ？」

「本当か？」

資金面でのサポート・・・これがあるのは大きい。それが可能なら頼みたい。

「是非お願いしたい。」

「分かった。ではこれをまず渡そう。」

公爵が俺に渡したのは、黒い箱だった。中を開けてみると、通信機のようなものが入っている。

「これは最新型の魔導通信器だ。これで欲しいものがあれば連絡してくれ。私に直接通じる。」

「助かるよ。ありがとう。」

そのあとしばらく談笑し、公爵は部屋をあとにした。

夜、夕食時。

俺らは招かれ、公爵家族と食事をする事になっていた。

アリシアのお母さんもいて、あいさつしておいた。緑髪を肩に流した女性で、15歳の娘を持つ母にしては、ずいぶん若い……。

さて、ドレイクとフォーリが大食い選手権をするなか、イリスは小動物のようにはぐはぐと食べながら俺に話しかけてきた。

「ふおふえ、ふおい」飲み込んでから喋れ。「もぐもぐゴクン。これ、美味しいですね。」

「ああ。」

「それは良かった。」

公爵も喜んでおり、そこにアリシアも参入してきた。

「ねえねえ、これからどこに行くの？」

「そうだな、アリアの王はなかなか面白い奴だった。俺達はアリアに着くと決めたからな、まずは王城へ行く。」

「仮にも一国の王を“面白い奴”か！カエデくんは凄いな……！」

公爵は笑う。王宮でそんなこと俺がいつたらたちまち抗争が起きるだろうな。ま、勝つが。

「そうかぁ王城か・・・ついていっちゃ、ダメ？」

「アリシア！！」

アリシアが小言で俺に囁いたのだが、それを公爵は聞いていたようだ。

「何度言ったら分かるんだ！？そんなことしても黒い希望の足を引っ張るだけなんだぞ！」

公爵が怒鳴る。だが、アリシアも食い下がる。

「でも！あたしも人々を守りたいんだ！！」

「その力がまだないと言っているんだ！！」

「力があればいいの！？力だけを行使してる人がいるからこの世界は・・・！！」

「子どもが偉そうなこと言うな！！！！」

最後に放った公爵の言葉に、アリシアは涙を溜め、叫んだ。

「もう子どもなんかじゃない！！」

「アリシア！！」

そう叫ぶと、アリシアは飛び出していった。最後のは公爵がアリシアを呼び止めた言葉。

「すまない。食事を続けよう。」

公爵はそう言ったが、俺はなんとなくいやな予感がしていた。その少し後である。従者が食堂に駆け込んできて叫んだのは。

「アリシア様が家を飛び出しました！！！」

### 第37話 ようこそ黒い希望へってか？兄貴。

「アリシアが家出した!？」

公爵は立ち上がると、使用人たちに叫んだ。

「探してくれ、今度こそあの子は何をするか分からない!!」  
「はい!」「」

使用人たちは慌てて部屋の外へと出て行った。さて。

「俺達も探すよ。」

「そんな、使用人たちに任せておけば安心だ。」

「あのさ、公爵。俺、今の喧嘩でアリシア欲しくなっちゃったんだ。  
…旅の仲間に。」

「!? 足手まといに「ならねえから。」!!」

「あとは公爵さんが娘を危ない旅に出したくないかどうかだよ。  
…さてお前ら、アリシア探しにいくぞ!フォーリ!ドレイク!いつ  
までガッツいてんだ!」

「」「」「おう!」「」「」

俺達も飛び出していく。

取り残された公爵は一人呟いていた。

「カエデくんの言うとおり、私も子離れできていなかったのかもし  
れないなあ……。」

俺達黒い希望も、今全員一緒に搜索をしている。  
さて、探すとしたら・・・

『お前にはまだ力がない!』

バイゼルに残された奴隷を助けに行くんじゃないか？  
よし。

「バイゼルに通じる道に向かおう!」

「「「おう!」「」」

「カエデ殿。」

走っている最中、となりからシャオが話しかけてきた。

「公爵殿にあんなこと言って・・・本当にアリシア殿を仲間に入れるおつもりか？」

「別に揺さぶるためじゃない。最初に会った時から欲しいと思ってた。それに公爵の言動からは、少し子離れできてないところがかがえる。足手まといと言いつつも、やっぱり我が子が心配なんだ。」

「なるほど・・・ところでカエデ殿？そのまま走って追いつけるとお思いか？」

「？ どゆこと？」

「いや、拙者がアリシア殿なら確実にヘイストをかけてバイゼルに向かうと思うのでござるが・・・。」

「あ。」

そうか！あいつにはそれがある・・・間に合うのは俺とフォーリだけか？

「みんなはここで待機！フォーリ、アジリティアップをかけて俺に着いて来い！！」

「わかったぜえ！アジリティアップ！！」

ゼウスチート、発動！

皆が後ろで段々小さくなっていく。前方の景色は流れるように換わるが・・・

「フォーリ、腕を上げたな。」

「素早さが取り柄だったからなあ、兄貴にそれで負けちゃまずいんだよ。」

ゼウスチート発動の俺に対し、頑張って着いて来ているのだ。これ

は多分ドレイクとの稽古で修行したな。

海岸線の道を走っていると、前方に人影が見えた……アリシアだ！  
だが、止まっている。様子がおかしい。

「フォーリ止まれ。アリシアがいる。」

「連れ戻すんじゃないのかあ？」

「いや……。」

アリシアの眼前には、5人の男がいた。多分山賊であろう。対峙している。

ここで俺達が助けなくてもいいのだが、アリシアがこれからの旅で足を引つ張らないか……試す必要があるのかもしれない。それにこれでアリシアが頑張れば、公爵を説得する材料にもなる。

「ばれないように近づくぞ？」

フォーリも頷く……声が聞こえるところまでは近づいた。やはり敵は5人。もう会話している様子は無く、殺気が渦まいていた。アリシアの右手には……短剣。ダガーと呼ばれるものだろうか。そして左手にはたくさんの投げナイフ。それで戦うのか……。

「ヘイスト！ヘイスト！」

アリシアが自分に速度魔法を2度かけする。どれだけ速くなるんだ？するとアリシアは目にも留まらぬ速さで動き、三人に分身したようにみせる。

「なんだあ！？」



そしてそのまま三人に分かれたアリシアがナイフを立て続けに三本投げつける。

残像かと思っただが、それは山賊三人の右肩、横っ腹、足の甲に突き刺さる！

ぐあああ！！

「てめえええ！！」

一人が斬りかかるが、ヘイストをかけた彼女の敵ではない。これもとんでもない速さでダガーナイフを一閃、腹を薙ぐ。

ドサ。

その男が倒れたと同時に、アリシアは言った。

「命が惜しくば助けてあげる。失せて。」

「ツツ！に、逃げる！！」

倒れた男を引きずり、投げナイフを刺された男たちは片足だちで逃げ出す。

さて、俺達も行くこうか。

「アリシア！」

俺が呼ぶと、アリシアは振り返る。

そして驚いたように言った。

「ど、どうしてここに！？」

「悪いが今の戦い、見ていたよ。・・・公爵から言われて連れ戻し

に来たんだが……。」「

「!?! やっぱり! あたしはもつと強く「黒い希望に君を迎える。」  
!?!」

俺が微笑んでやると、アリシアは驚きを抑えられないまま、聞いてきた。そりゃ、話が全然違う方向に進んでるんだからな。

「なんで!?! え!?! 本当!?!」

「兄貴は嘘つかねえぜえ?」

フォーリが言ってくれた。ま、嘘自体は吐くことあるが。

「じゃあ……。旅につれてってくれるの?」

「公爵は多分了承する。」

「!?! あたしも、仲間として?」

「ようこそ黒い希望へってか? 兄貴。」

「ま、そういうことだ。」

フォーリのチャチャ入れがあるが、そのとおりだ。

「や……。やったああああ!?! ありがとうカエ兄!?!」

そういつて抱きついてくるアリシアだが……。ヘイスト中だという事を忘れるな!?! 速いし体当たりが激しい! 痛い!?! ちよ! ダガーしまえ!?! ってかこのパターン何度目だよあーもう!?!

フォーリはその様子を見て腹を抱えて笑っていた。

### 第38話 北上と東の関所

「じゃあパパ、いつてきます!」

結局あのあとアリシアを連れて行く旨を伝えると、公爵はあつけないく了承してくれた。元々娘には黒い希望のようになってもらいたいと望んでいたらしく、少しじぎが早いと思っていた、と言っていた。アリシアはそれを聞いて公爵に抱きついていたが。まあいいんじゃないか？

「ああ、皆さん娘を頼む。」

「任せろ、俺が誘ったんだ。」

そついうと公爵は微笑んでいた。さて、いくか……。俺達は公爵に別れを告げ、イグニシヤスの町を後にした。

「そついえばシャオちゃん！」

「「「シャオちゃん!?!」」」

「拙者は男でござるよ……。」

「え!?!そーなの?髪あたしより長いから女の子だとばかり……顔も可愛いし。」

「ははは!?!シャオちゃんか、俺もそう呼ぼうかな。」

「勘弁してくれでござるよカエデ殿……それで何でござるか?」

「ん?あ、あたしも髪長いほうだから、シャオちゃんみたいにまとめたいなあって。」

「シャオちゃんは確実なのでござるか……。」

なるほどな、アリシアは今ロングを背に流しているだけ……旅には邪魔だと思つたのかもな。

「では私が貸してあげますよ。アリシアちゃん、後ろ向いてください。」

イリスが髪ゴムでまとめ始めた。後頭部の高いところを両サイドで……ツインテールか。

アリシアはツインテに結ってもらいご満悦であつた。

「かわいくなつたなアリシア……。」

「フオーリお前また……バカが。」

「は!俺はイリスちゃん一筋だ!ドレイクテメエがバカだ!」

「あ！？テメエがバカだろが！！」

・・・また始まったよ。後ろのバカ兄弟は置いて、

「イリス、次の目的地は？」

「そうですね。このペースでいけば夕方には東の関所に到着します。

」

関所かあ。またドンパチやってんのかな？

「あ、そうだアリシア。」

「何？ カエ兄。」

「ドレイク！取り込み中すまないが、皮袋投げる！」

マンガの絵みたいなの喧嘩の煙の中から、ポーンという効果音つきで皮袋が飛んでくる。それをキャッチすると、中からイヤリングを取り出しアリシアに手渡した。

「カエ兄・・・／／／」

アリシアが頬を染める。なんで？・・・するとイリスが何か慌てたように介入してきた。

「か、勘違いしているところ申し訳ありませんが、それは仲間の証です。このメンバーはみんな持ってますよ！」

どうしたイリス？

「そうなんだ。ありがとカエ兄。」

にっこり笑ってこっちを見るアリシア。

「さてカエデさん。東の関所は北の関所よりもルスリアの攻撃が激しいです。関所自体が堅固ですから持ちこたえています。……助けに行つたほうがいいですね。」

ほう。やっぱりそこも戦争中か。嫌んなるぜまったく。さて。

「シャオちゃん。」

「カエデ殿……その呼び方はやめてくれでござるよ!」

「いや悪い。東の関所では活躍してくれよ!」

「ん?なんで拙者だけ?」

「集団系はやっぱりシャオが中心だからな。」

「そうでござるか。また今度時間ができればみんなにも集団魔法教えるでござるよ。」

そうだったな。サンゼルスシティ以来教えてもらつてないもんな。

そこで会話が途切れる。でも、にぎやかになつたな俺達も。

「そついえばカエデさん。」

「ん?」

イリスが話しかけてきた。

「私達もまだ、仲間集めるつもりですか?」

「そのつもりだが、仲間を集めるのは王城までだ。」

「確か東の関所が持ちこたえている理由、“癒しの魔女”という人がいるからだそうです。藍色の髪をした女性だそうですよ?もしかしたら。」

「!!!まさかキアラか?」

「だといいですね。」

そういつて笑うとイリスは前を向いた。・・・あ、ここ三叉路だ。本当はこっちから出てくるはずだったんだよなあ。

夕方。

本来なら野宿の準備をする時間だが、もう少し関所につくというので、今日は歩いた。意外にもアリシアがへばらない。

これは計算外のラッキーだな・・・んで、相変わらず後ろは喧嘩を

繰り返し広げているのにぎやかさはアレから絶えない、と思っていたのだが、馬鹿ドレイク一号が話しかけてきた。

「今物凄い失礼なこと言われた気がするんだが。」

「気のせいだ。どうした？」

「・・・カエデ、“黒い希望”って俺らの名前なのか？」

「さあ？でもそういう風に言われてるよな。俺としては名前なんてどーでもいいから気にしてないが・・・どうかしたのか？」

確かに俺らの正式名称ではないが・・・なかなかカツコイイと思うのだが。

「いや、俺はどうもしっくり来なくてな。それに俺らが決めたわけでもないだろ？」

「そんなに言うなら、ドレイクが考えとけば？俺はなんでもいいからさ。」

「ん、分かった。」

そのあとドレイクは一人でブツブツ言っていた。そんなことをしていると、右手にバカでかい関所が現れた。ここか・・・。確かに北の関所よりも堅固なイメージはある。

「さて、入るか。」

「どーやって？」

・・・アリシアナイス。確かにどーやって？俺はそのままイリスのほつを向く。すると、

「適任者がいるでしょう？こつという仕事は・・・ねえドレイクさん？」



「俺!？」

「またこの前みたいに叫んでくださいな。」

「マジで!？」

出た、イリススマイル・・・そーいやそんなこともあつたなあ。あれはサンゼルスシティの前だったか。俺がそんな感傷に浸っていると、ドレイクは叫んだ。

「オーーーーーイ！」

・・・しばらくすると関所の見張り台らしき場所から兵士が顔を出す。するとドレイクは俺を掴み・・・なんで? って感じたが。

「俺達は“黒い希望”だ! 目印はこの黒髪の男! 一日ここに泊めてくれ!」

「く、黒い希望!?! 少々お待ちを!」

そついうと兵士は引っ込み、待つこと数分。

関所の門が開いた。これまた無駄にでかい扉だなあ。これで入れるかと思いきや、出てきたのは意外な人物だった。後ろにはたくさん兵士を従えている。

「あれ? レオールじゃねえか!」

「?????!?」

王様その人である。俺がこんな呼び方をしたせいで兵達は物凄く驚いているが・・・

「カエデ!!! お久しぶりです。お元気でしたか?」

『友達感覚~~~~~!?!?』

と兵達がツッコんだとかそつでないとか。

「確かにこの方々は黒い希望の皆さんです。入れてあげてください。」

兵達は戸惑いながらも従った……。

「しかし、なんでレオールがここに？」

俺とレオールが先頭を歩き、その後ろに兵と仲間がついてくる。 関

所の廊下はなかなか広い。そういえば、黒い希望のリーダーがこう  
いう無礼者だという話はグライドのオッサンからいつているらしく、  
割って入る人間は居なかった。ちなみにそのグライドのオッサンは  
今回、最初に「お前のタメ口には目を瞑ろう。それとこの前は悪か  
った。」と言っていたから、まあいいんじゃないか？

「わたくしは北の関所に行った後そのまま馬車でこちらの激励に  
来ていたのです。途中でカエデ達と会うか楽しみだったのですが、ど  
うやらバイゼルに向かっていたようですね。」

なるほど、俺達がバイゼルとかに行っている間に手前のU字の道を  
通っていたのか。

「まあ結局会えたので嬉しいですよ。お仲間も一人増えていらっし  
やるようですし。」

「ああ。アリシア！」

俺が呼ぶとツインテールの少女がひよこひよこことこちらへ来る。

「こつちがレオール。俺の友達で、王様。」

後ろから、紹介の順序が逆だろ！？とツッコまれた気がするが気に  
しない。

「んでレオール、この子は……そうだな、“時空少女”のアリ  
シアだ。」

勝手に異名をつけてみた。

「あたし、そんな二つ名ないよ？」

「今付けてみた。レオール、この子は時空魔法の使い手だ。」  
「そうですか！だから時空少女……。」

まあアリシアもまんざらじゃなさそうだし、いいか。

「そいでさレオール、なんで城門に出てきたんだ？」

そう聞くと、レオールはさも当然のようにこう言った。

「黒い希望が来た、というので。唯一の友人が自分のところに来たと言われたら、誰だって迎えるでしょう？」

唯一の友人か……王族も苦労してるなあ。

「そうか。俺もレオールみたいな友人が居て心強い限りだよ。」

「それはお互い様です。」

二人で笑いあう。そうこうしているうちに俺らはもらった部屋に着く。

すると兵長を名乗る茶髪の男が話しかけてきた。

「カエデ・ミナモト殿。こちらから言うのもなんですが、泊める代わりに戦争に協力していただけないでしょうか。」

ふうん。まあそんなことだろうと思ったし、最初からそのつもりだったからな。だが。

「少し違うな。戦争を終わらせる協力をしよう。会議の時に呼んでくれ。」

すると兵長は「そうでしたな。」と軽く自嘲すると、「分かりました。」といって部屋に俺を置いて去っていった。俺は少し部屋でくつろぐことにした。

「国王様！」

「なんですかスコット兵長？」

「いえ。黒い希望のリーダーの態度は……。」

「それはグライドから聞いているはずでは？」

「そうですが……立っているだけであの殺気と威圧感。彼は何者ですか？」

そう聞かれてレオールは、こともなげに答えた。

「カエデは私の唯一の友人ですよ？」

### 第39話 キアラと(前書き)

〈報告〉

・健太郎さん感想ありがとうございます！

・ナナシさん感想ありがとうございます・・・返信いらないとのことなので、この場でお礼をさせていただきます。ホントにありがとうございます！b

### 第39話 キアラと

俺が部屋でくつろいでいると、ノック音がした。

「どござ。」

ガチャ・・・

俺が振り向くと、そこには見知った女性がいた。

「キア「カエちゃんっ!」おお!？」

俺に抱きついてきた。・・・なんだかキアラとアリシアの精神年齢は変わらない気がする・・・。

「久しぶりだねっカエちゃんっ!」

とりあえず椅子を勧めて、お互い座ることにした。

「俺もキアラの噂聞いたよ。“癒しの魔女”だっけか？」

するとキアラはにっこり微笑み、続けた。

「うんっ!なんかこの関所に来たのはたまたまなんだけどっ、傷の治癒とかしてたらそう呼ばれちゃったっ!」

エヘヘ・・・と藍色の髪を掻きながら言う。

「そうか・・・それで覚悟ってのは出来たのか？」

俺が聞くとキアラは真面目な顔になる。

「うん・・・こんな殺し合いなんてロクなことない、早く終わらせたい。それにはカエちゃんたちが一番近いし可能性もある・・・それに関所内の士気も上がってるよっ!“黒い希望”がきた!もう安心だ!って。」b

そうか。だが兵の気が緩むのはまずいな・・・。

「それで、どうする?俺達は次の戦いでこの戦争を終わらせてやる。そのあとキアラはどうすんだ?」

「あれ・・・?カエちゃんが連れてってくれるんじゃないの・・・?・・・くすん・・・。」

なんか泣きそう!?ちょ!?いや着いてくるかを聞きたかったんだがちょっとキアラ泣くな!ってか落ち着け!ってその前に俺が落ち着け!!!!

「え、え〜っとそうじゃなくてだなその、なんだとりあえず落ち着けキアラ。俺は着いてくるかどうか聞きたいだけだから!!!」  
「・・・ホント?」

その涙目で上目遣いはやめてくれ!凶器だぞ!

「ああもちろん!来るか?」  
「うん!!!!」

めちやくちや元気よく頷いたよ・・・さっきの涙、分かかってやってんだったら犯罪だあー!!!



さて、それじゃ……でもキアラは戦闘能力ないよな。攻撃受けたらたまんねえし……しかたない。

「キアラ、これやるよ。」

一旦セイレーンを消し、藍色にして創造する。

「これは……?」

「俺からのプレゼントだ。セイレーンと言ってな、どんな魔法攻撃も物理攻撃も無効化するんだ。まあ、衝撃は受けるがな。」

「ありがとう!!!」

キアラは俺からセイレーンを受け取ると、嬉しそうに身に纏った。

「似合うかな?」

藍色の髪がセイレーンに映える……あげてよかったな。

「かなり。」

「やったあ!」

あとは……

「創造 フロウ」

この前店で売っていたものを創造する……名前?俺がつけたが?それでも創造できるらしいからいいんだよ!もちろん黒だ。創造したフロウを俺はまとう。

「やっぱりカエちゃんはそういうもの着てたほうがシまるねっ!」

「そうか？ありがとう。」

さてそれからイヤリングか。

「キアラ、ドレイクのとこ行くからついてきて。」

「うんっ！」

そして俺達はドアの前まで行き、開こうとした。

ふぎゃー！

「・・・イリス、何やってんだ？」

「だってキアラさんとカエデさんが二人きりだって言うから・・・」

ドアの裏にイリスが居た。開けた瞬間倒れたのだ。顔を真っ赤にしているが、何を言っているのか分からない。

キアラにイヤリングを渡すと、ことのほか喜んでいた。イリスが面白くなさそうだったが、何かあったのか？

さて、今は呼ばれての会議だ。メンバーはレオールと俺、イリス、そしてさっきの兵長だ。

最初に兵長が今の状況を説明してくれた。

向こうの軍勢は30000で、大将がガウディとか言う結構有名な奴らしい。とんでもなく強いとか。

それに対しこちらは兵長率いる5000のみ。

それでも持ちこたえているが、そろそろ限界だそうだ。

まあ俺らが潰しゃいい話か。

それにしても30000とは、ずいぶんと無駄な命使ったな。仕方がない。その大将とやらは俺が狩る。

「そのガウディというのは五剣帝の・・・？」

五剣帝？五賢帝ちゃうん？

兵長が答える。

「はい、五剣帝の一人、剛剣のガウディです。」

俺置いてかれてるわ……。なんかイリスはそのまま作戦立ててる

し、みんなも俺にフォローくれない。

「剣兵30000ごとき、我ら黒い希望の敵ではありませんので安心を。ガウディにはリーダーカエデをぶつけます・・・はつきり言って秒殺できますよ。」

そう言っつてイリスはにっこり笑う。レオールも明るくなり、兵長は俺に対して怯えていた、なじえ？  
だが結局俺は放置だった・・・。

30000の軍勢が関所の西に現れた。

やっと五剣帝についてと今日の作戦について教えてもらったので、俺は待機中だ。

まず五剣帝とは、神剣のマルスを筆頭としたルスリアの誇る5人の剣士のことらしく、どうやらずいぶんとルスリアご自慢の剣豪らしい。ちなみにその5人にはそれぞれ異名がついており、

神剣や剛剣といったそれぞれのスタイルに由来したものらしい・・・神がスタイルって、なんなん？

そんで今日の作戦。

まずアリシアが黒い希望全員にヘイストをかけ、速度を上げる。敵が攻め寄せてきたら、右からフォーリ、左からドレイクが突っ込み、散り散りにする。

正面はシャオが敵を進ませないよう足止めし、それでも抜け出してきた兵はアリシアが最後の砦としてつぶす。そしてその間に俺が敵将を狩る、と。

おっけ。ガウディとやらの実力が気になるが、ま、頑張るさ。

30000の軍勢が関所に向かって押し寄せる。  
そんな中、30000の軍勢と関所の間にもったり座っている青髪の青年がいた。

「おい！あそこに人がいるぞ！！」

「構わん、斬って通れ！！」

軍勢が近づくと青年は立ち上がり、

「おやおや、物騒なことを言うてござるなあ……。それ、ブラスト！フレアストーム！タイダルウェイブ！」

いきなり3つの呪文を唱える。するとどうだろうか。青年の目の前からドデカい津波が襲い掛かり、軍勢の中心部では獄炎が渦巻き、後方からは凶暴な竜巻が迫ってくる。

うわあああああああ！？

「安心するでござるよ、死にはしない。」

ありえない自然現象にも、隙があった。両サイドである。森羅万象を免れた兵士たちの大多数は、両サイドに分かれて避難していた。・  
・だがそこも程なくして阿吽の鬼神が襲い掛かる。  
左では、

「オラオラオラオラア！！！！来るなら来い！好きなだけ遊んでやるからよ！！！」  
右では

「ティハハハハハハ！俺の突き、避わせるものなら避わしてみろお！！！！」

次々に兵士が吹っ飛ばされ、気を失っていく。

「喰らえ、焰龍八刀、四の太刀“土龍”！！！」

その剣士の大地の衝撃波に直線上にいた兵士はあえなく飛ばされ。

「ティハハハハハ！！“雷挺”！！！！！」

その槍使いが突き進むところ、兵士は全て地を舐めた。

だが倒れた者たちが聞こえた言葉があった。

「「安心しとけ、殺しはしねえよ・・・バーカ。」」

森羅万象を逃れる手は、まだあった。それは津波よりも先に前へ出ることである。運良くそれに成功した者たちは、必死に閨所へと向かっていった。あの青髪の青年に見つかったら、次は何をされるか分からない。……そして閨所にたどり着いたのだが、目の前には緑髪の小娘が……いっぱい居た。何なの!?

すると少女たちは一斉に口を開く。だが声は一つだけだった。

「通さないよ。あたしが居るから。」

可愛らしいセリフだが、それは今かえって兵士の怒りを買う。

「んだと?」

「こんな小娘やっちまえ!!」

すると少女たちは微笑み、一斉にナイフを投げた。その数100は越えるだろう。

「うわああああ!!」

ナイフは足の甲や手の先といった、激痛が走り急所でない、というところに大量に刺さる。

そして痛みで全ての兵士が地に伏すと、“少女たち”は“少女”になり、呟いた。



「安心しなよ？死んでないんだから。」

「さてと、みんな頑張ってるなあ。俺もやるかあ。」

修羅場のような場所にいて、ただ一人やる気なさげな少年がいた。黒髪に黒瞳、そして黒マント・・・珍しい容貌をした少年である。

そしてその少年は、そのトンでもない怒涛の竜巻を必死でしのいでいる大剣使いの男を見つけた。

「アレかな？お〜いオッサン！！」

するとオッサンと呼ばれた大剣使いは、その少年を一瞥すると、竜巻から逃げつつ近づいてきた。

「お前は？」

よく見ると無精髭を生やしてはいるが、まだ30くらいの白髪の男である。

少年はにやりと笑うと、「こう言った。」

「この騒動を起こした、リーダーさ。」  
「!? 貴様が!? いいだろう、殺してくれる。戦争なんてさつさと終わらせたいのに!?」  
「余計な事をしゃがって!!」  
「へえ・・・まあいいや。」

大剣使いは大きく振りかぶると、うなる大剣を振り下ろした!

ドゴオン!!

だがそれで起こった土煙の中に、少年はいない。

「どこだ!？」

「後ろ。」

大剣使いが振り向くと、いきなり頬をトンファアの柄で殴られた。

ドガ!

「うっ!お!？」

かろうじて倒れず、大剣使いは少年を睨みつける。するとどうだろう。そのトンファア使いの少年から、さっきまでと違い、異常なまでの威圧と殺気を感じる。

「オッサン、もしかしたら俺と一緒に考えかもしれない。だから生かしておくよ。今回は撤退しな。」

「な、何!？」

すると少年は一瞬で大剣使いの横を取ると、トンファアの柄でみぞ

おちをアッパーのように殴り、大剣使いは中に浮く。そして少年は片手のトンファーを空高く投げあげると、右の腰からよく分からない武器を出し、その武器が火を噴いた。そして大剣にカンカンカンという三回の音がしたかと思うと、少年はそれを腰にしまい、落ちてきたトンファーをキャッチし、またも俊足で大剣使いに飛び掛る。そして、

「守式弐之型」

そういうと、右足を大きく振り上げ、大剣使いの得物に向かって振り下ろす。と同時に両腕のトンファーを下から縦回転一閃。まるでトンファーと右足の三刀流で大剣を打ったかのようだ。銃弾による大剣の疲労で、もろくなっていたようだ。

バッキーン！！

大剣が二つにへし折れた。

「そんなー！！」

「出直してこい。生かしてやるといったら？」

そして少年は背を向け去っていった。

さて今回の戦闘でみんな疲れたらしいので、  
その夜の関所はお祭り騒ぎだった、とだけ言っておこう。

## 第40話 北上！まだまだ続く旅（前書き）

（報告）

- ・アストさん感想ありがとうございます！
- ・シンシアさん感想ありがとうございます！
- ・お気に入り登録数315名様！これからも“とあもの”をよろしく願います！

## 第40話 北上！まだまだ続く旅

東の関所のお祭り騒ぎは、夜中まで絶えなかった。

そんな中そういう騒ぎが苦手な俺は、関所の見張り台を散歩していた。

「ここにいらっしやいましたか。」

「？・・・レオールか。護衛もつけずにどうした？」

「わたくしとて、護衛が居らずとも自分の身くらい守れますゆえ。」

レオールが、見張り台へと上がってきた。国王が護衛も付けずに散歩とは、よくやるわ。

今頃関所内は大騒ぎだろうに。

「あなた方の今日の戦いを見て、味方をしてくれることの心強さを感じましたよ。あの時味方になってくれると言ってくれた事、今更になります。御礼申し上げます。」

そんなことか。前も言わなかったかな。お前のためじゃないって。

「俺らがレオールを守る事が、人々を守る事に直結するから味方するんだ。礼を言う必要はないさ。」

「フフフ、だからですよ。」

「？」

「わたくしはあなた方の目的を理解しているつもりです。最初にカエデが言っていたではありませんか。わたくしの命と10000人の命は10000人のほうが重い、と。わたくしもそう思いますよ。・・・わたくしは民を守りたい。でもそのための武器がない。そしてあなた方はわたくしの武器になると言ってくれたようなものでし

よう？ だから礼を言っているのですよ。」

こいつやっぱ、良いよ。この宵闇のなか、レオールだけは輝いて見える。こいつはやっぱり全ての王になるべき器だ。俺はその武器か・・・いいだろう。レオール、お前は今、最強の武器を手に入れたぜ・・・。

「あのと時の言葉、撤回するよ。」  
「？」

「お前の命を守る事が、将来の数百万、数千万の命を救うことに等しいと俺は思った。期待を裏切るなよ？」

「・・・そうですか。わたくしも頑張らないといけませんね。フフフ・・・。」

レオールが微笑む。コイツがどの程度の手腕の王なのかは知らない。だが、人々の忠誠を一身に集めることができる器であることは間違いない。俺達は、こいつと未来の人々のために戦ってやる。

「カエデ。わたくしは貴方を信頼しています。」

「おう、最強の武器を手に入れたと思いな、レオ。」

「レオ？」

「お前の愛称。レオールだからレオ。いちいちレオールって呼ぶの面倒くさい。」

「フフフ。そうですか・・・レオ。悪くないですね。」

「だろ？レオ。」

「はい・・・フフフ、ハツハツハツハッハ！」

「どうしたレオ、お前がそんなに笑うところ、見たことないぜ？」

レオが大口を開けて笑った。月夜に響くが、不思議と耳障りではない、いい声だ。

「ハツハツハ・・・失礼。いえ、愛称なんて初めてなもので、つい嬉しくて。ちなみにこんなにあつたのは久しぶりですよ?」

「だろうな。ま、俺がいりやあいくらでも笑わせてやるよ。」

「ええ、楽しみですよ、カエデ。あなたのような人に会えて良かったです。浮世の苦勞を忘れます。」

お前それ何歳の吐くセリフだよ。俺のような人、か。そんな大それたなもんじゃねえけどな。

「貴方といると、とても楽しいんですよ。これが友人というものなのですかね・・・。」

「オイオイ、他の国には友達とかいねえのか?友好国とかよ。」

レオの身分なら、国家間のパーティとかありそうなもんだが。

「フッフ、たくさん居ますよ。でも上辺だけ。王族というのも辛いものでして。」

「そうか。じゃあ俺達は友人じゃない。レオの友人はそいつ等だ。」  
「・・・?」

「俺はお前の相棒、もしくは親友だぜ。俺の仲間も俺と似たような考え持つてて、それぞれに色々な事情がある。だがレオは、俺と全く同じ考えだから・・・俺には親友は居たが、そいつもそうだった。腹を割つて話しても傷つかない。考え方が一緒だから楽しい。そうじゃねえか?」

「親友・・・ですか。フッフ、それはいいですね。」

そうしてレオはひとしきり笑つと、こちらを向き直り、こう言った。

「明日から馬車で王城へと戻り、また王として仕事を始めます。待



っていますから、早く来てくださいね、親友。」

レオは笑った。俺も笑みを返して

「おう。」

応えてやった。

翌日。

晴天だった。レオはもう馬車で王都へと向かっており、今度は俺達が東の関所のメンバーから見送りを受けていた。

「じゃあな、兵長。」

「お世話になりましたカエデ殿。」

「カエデでいいよ。また何か・・・緊急事態でもあったら呼んでくれ。命の危機ならいつでも駆けつける。」

「そうですか！助かります・・・カエデ。ではまたいずれ。皆さんも。」

みんな口々に別れの言葉を言いつつ、関所を離れた。ことキアラに  
関しては・・・

「本当にお世話になりました!!!」

との兵士の声が多数。俺達と旅すると決めた時、かなりの兵士が引きとめたらしい。なんか申し訳ない気もするな。さて。

「これから一緒に旅するキアラ・クレストだ。まあ紹介する相手はアリシアとフォーリだけか。」

「よろしくねっ!」

元気よくキアラがピースサイン・・・相変わらずだな。

「よろしく!」

「おお!?これは美しい・・・」

「てめえ今度は・・・。」

「ちげえよバアカ!」

「んだとバカが!!」

「とりあえずドレイクさんはバカですから黙ってください。」

「ちよ!?!」

だんだん誰がどのセリフだか、分かってきたな。声色とか聞こえなくても字幕で分かる自信あるわ俺。

「ところでキアラさん、その藍色のマント・・・なんですか？」

「これっ？カエちゃんがかれたよっ！」

「!?!?! 私には何もくれないくせに・・・。」

「イリ姉！嫉妬？」

「違います!!!」

後ろで女の子たちの会話が始まっている。

「イリスも女友達できてよかったなあ。」

「カエデ殿・・・それ本気で言っていたら貴殿は犯罪者でござるよ？」

「なんで!?!」

シャオがめちゃくちや呆れてる。

俺とシャオが先頭で会話。

その後ろで女の子談義。

さらに後ろバカがバトル。

まさかこんな旅になるとはな・・・。

そう思つて俺は苦笑する。だつてさ、これが30000の軍隊を退けた精鋭だぜ？笑っちゃうだろ？

ハタから見たら、同級生たちの卒業旅行くらいにしか思われないうだろうなあ・・・まあ前世の話だが。

「さて、このまま行くとどうなるのかね？」

「確か・・・パズリカの町と、あとはその奥に小さな集落があつて王城でござるよ。ようやくでござるな。」

シヤオが苦笑する。確かに長かったなあ・・・まあ、おかげで楽しかったよ。

さてパズリカの町か。

「その最初の町までどのくらいだ？」

「そうでござるな。明日の昼前には着くと、イリス殿が言っていたでござるが？」

「そうか。じゃあこの喧騒をバックミュージックに、旅を楽しみますか！」

「ハハ、そうでござるな。」

その夜。

アリシアとキアラにとっての初の野宿だったが、どうやら前より野宿がスムーズだ。

ドレイクが薪を取り、フォーリが肉を調達。アリシアとイリスが調理に励み、キアラがその間に鍋やら何やらの洗い物。シャオが魔法を使って竈<sup>かまど</sup>係。調理の間はドレイクとフォーリが自分の得物を手入れている。

ん？俺か？俺は鍋とか包丁を創造してお払い箱。まあ皿並べたりはするがな。

人数が少なかった時よりも量が多いが、それ以上に早くできる。うん、この気持ちをなんというかな。うん、心地よい。これが当てはまるかな。気の置けない仲間との旅っていいものだな。

「カエデ、どうしたそんなにニコニコして。」

ドレイクが話しかけてくる。手には村正宗を携えて。こいつ本当に大事にしてたんだな・・・輝きが少しも失われていない。

「いや？大人数の旅っていうのもいいものだと思って。」

「そうだな。お前ってさ、意外と感傷に浸ること多いよな。」

「兄貴！バイゼルの入り口でも思ったけどよ、そういう時の兄貴、なかなか様になってるぜえ。」

もう仕事がない三人で語る。悪くないな。

・・・そうか。俺感傷に浸ること多いか？

「そんなに多いか？」

「まあ、そうだな。結構。」

「そうか・・・そんなことより、お前ソレ大事にしてんのな。」

村正宗を見て俺は言う。するとドレイクは笑顔で話し始める。

「分かるか？いや、カエデには感謝してもしきれねえよ。コイツを使い始めてからの俺は、かなり強くなつてんだぜ！身を任せると、それはいい太刀筋になるんだ。本当にありがとうな！」

「そうかあ、その武器は兄貴に・・・。まあ俺にはコイツがいるけどな。」

自分の槍を立てるフォーリ。コイツの槍先もかなり輝いている・・・。

「その得物には名前あんのか？」

「ないぜえ・・・というより、これは俺の姉の形見だあ・・・姉貴が名前をつけていたかも知れないが、姉貴はもういねえからなあ。

死んだんじゃねえよあ？イル教国のsecret unitって組織の一員だあ「!?!?」

「フォーリ殿!!その姉上殿のお名前は!?!」

「テイウリ・バイカウト。天空槍フルキューレのテイウリって言えば、分かるかあ?」

「!?!?!? secret unitのII・・・とんでもない姉弟でござるなあ。」

さて、竈を放置して飛んできたシャオ（バカ）のせいで、また俺が置いていかれる話題だぞ・・・?こんどは忘れられないぞ!?!?!??

「シャオ!secret unitつてなんだ!?!」

「な、な、カエデ殿?なんでそんなに必死でござるか?」

「気にするな!」

「は、はあ……。secret unitとは、いわばイル教国の秘密部隊。情報操作や要人の暗殺、はたまた戦争への介入を行う部隊でござるよ。イル教国の選抜部隊。それはもう、とてつもない実力を持つ者ばかりでござる。」

「……シャオは？」

「拙者は目立ち過ぎるでござるからなあ。ちなみにsecret unitの人数は10人。それぞれ数字のコードで呼ばれてござる。まさかその副隊長がフォーリ殿の姉上殿とは……。」

ふん。まあ強い部隊なんだね。どーでもいいや。

「姉貴はスカウトが来るとイルに旅立ったあ。その直後に人狩りに遭って……。姉貴が居れば凌げたかもしれないのになあ。」

「今言つてもしょうがない。それよりもルスリアをつぶすことだ。」

「！ そうだな兄貴！！」

「出来ましたよー！！」

イルスの声がする。どうやら食事が出来たようだ。

食後、キアラとイリスが来た。

「キアラさんにはセイレーンあげて、私にはくれないんですか？」

え！？いきなり泣きモード！？ちょい待て！！

「あ、ああ悪い。イリスとアリシアにもあげるものがあつたんだ。」

すると遠くでシャオの髪を引っ張って遊んでいたアリシアが振り返って走ってくる。

「呼んだ？」

「ああ。ちょっと待ってな。」

「・・・本当ですか？」

そこにキアラがいる・・・まさか、俺あのときもキアラに遊ばれて今もそれを伝授されたイリスがやっているのか？・・・なみだ目の上目遣いをお！！

「本当だから！ちょっと待ってる。」



イリスの顔が明るくなる・・・確信犯か！？

さて。

「創造 白羽扇はくひんせん」

手のひらに、純白の羽毛で出来た扇が現れる。これはかつて名軍師  
諸葛孔明が使っていたとされる代物だ。まあそれだけじゃ意味ない  
から、ちょっとしたギミックも入れてあるが。

「キレイ・・・。」

お、満足そうだ。

「それは、いわば名軍師の証だ。んで、いざという時はそれにルナ  
をこめると、セイレーンレベルの防御を誇る羽毛のベールが出てく  
るようになってる。」

へえ・・・と嬉しそうに白羽扇を抱きしめるあたり、気に入って  
くれたようだ。そのしぐさも凄くかわいいし。さて。

「次はアリシアな。」

「うん！何くれるの？」

凄い期待した目で見てきた。やべえ、好奇心丸出しだ。

「創造 ミゼリコード」

今度はダガーナイフだ。刀身は柄よりも細く、剣先にいたっては針  
のようなつくりになっており、斬ってよし、突いてよし、おまけに

切れ味は凄まじい。

「凄おい！あたしにくれるの？」

「ああ。そのダガーは突いてよし、斬ってよし。俺の知る限りダガーナイフの中では最高の武器だ。」

「ありがとうカエ兄！」

アリシアも喜んで腰に差していた。  
すると……

「ああ！！！」

「……どうしたドレイク。」

「いや名前だよ名前。このメンバーの！」

ドレイクが切り株に座って急に叫んだのでみんなそつちを向いた。  
ドレイクは話しながら俺のほうへ寄ってくる。

「虹！！虹ってどうだ！？」

「虹……？なんで？」

「みんなの髪の色考えてみるよ。俺が赤、フォーリが橙、イリスが黄、アリシアが緑、シャオが青、キアラが藍……。」

「じゃあ聞こう。俺の存在と紫色はシカトかコルア？」

「あ……カエデ紫に染めて？」

「死ぬ。」

俺はベレッタを創造してドレイクに向ける。

「ちょ！？そ、その武器はしゃれにならんって！！ごめんその武器マジで怖いからねえホント！！」

「安心しろ。苦痛はない。」

「びよ!？」

ドレイクが慌てているのを見てみんな笑っているが、俺のベレッタにも関心があるようだ。

するとドレイクは、「あ!」と呟く。

「居たよ紫!！」

「はあ? 誰が？」

「アネス! そんなでチーム名は黒虹くろにじでどうだ!？」

「・・・アネスか。確かに欲しいが。まあ黒虹くろにじつてのは悪くないな。アネスが仲間に入ることになったら、それでもいいかもな。なかなかシャレてるし。あとはみんな次第だが。」

そう言つて俺は周りを見る。

「そういうことでしたら。カエデさんがリーダーっていうイメージも引き立ちますし。」

とイリス。

「そうだねっ! 私が入ってるのも嬉しいよっ!」

とキアラ。

「バカにはおもしろいこと考えたなあ・・・黒虹か、悪くねえ。」

とフォーリ。

「あたしは何でもいいよ。みんなと旅ができるなら!」

とアリシア。

「そうでござるな。その暁にはみんなのコードネームをその色にする、というのもカツコイイかもでござるよ。」

とシヤオ。

なるほど、「黒虹の黒」・・・イカすぜ。え？微妙？うるせえよ。

「だってよドレイク。あとはアネスが入るか次第だな。」

「ああ。我ながらいい案だと思うぜ!!」

その夜、アネスの存在と俺の武器について話した。そういえばフォーリヤアリシア、キアラは、俺の存在について知らないんだっただから、そこも話したさ。俺が異世界人だということ、今ゼウスによると歴史の変わり目で、危険な状況であること。それから、俺がそれを覆そうとしていることも。

反応はそれぞれだったが、みんな信じてくれたし。何より、覆す話をしたときのみんなのやる気の入りは嬉しかった。

第40話 北上！まだまだ続く旅（後書き）

§Character Profile§

name レール・アルス・アリア

hair color 銀

eye color 青銀

height 170cm

weight 56kg

older 17歳

main arms 剣（護身用）

## 第41話 盗賊の町パズリカ

俺たちは朝飯を終え、今は歩いている最中。

「なあイリス、パズリカの町ってどんな町だ？」

「盗賊の町パズリカ・・・文字通り、盗賊たちの根城となっている町です。」

うわぁ・・・面倒くさそう。

でもイリスは続ける。

「まあこのメンバーなら絡まれないでしょう。黒い希望、かなり有名になってますから。」

「なるほどね。あとのくらい？」

「そうですね・・・まあ昼前には着きますから、お昼ご飯が食べられるのでは？」

「了解。」

さて、今朝の稽古でどちらが勝ったか、という喧嘩が後ろで始まっている。

もう知らん。

「お前2発かすつただろ！？」

「うるせえ！だったら一発当たった俺の勝ちだあ！！！」

「は！ヒット数は俺のが上だバカが！」

「あんなの当たったうちに入るかバカがあ！」

「んだと！？お前にだけは言われたくねえ！！！」

「てめえごとき、槍の錆にしてやるぜえ！！！」

「槍が腐るからやめたほうがいいですよ？」

「ちょよ！？俺なんかした！？」

「そうだなあ！イリスちゃんいつも味方してくれて、もしかし」では私はキアラさんと話があるので。「そんなあ。」

イリス・・・黒いなあ。ついでにお前ら学習しろ。

さて、俺のとなりではシャオが美味しそうにお茶をすすりながらその騒動を眺めている・・・おい、そのお茶どっから出した？

「イリスちゃんっ！話ってっ？」

「あたしも聞きたいな。」

「いえ、バカ二人から逃れる口実ですの。」

「「ぴよ！？」」

「まあいいじゃんっ！何か話そっ！」

「そうだよ。その盗賊の町の話とかさ。」

「そうですね・・・」

なんか、うちの近接部隊は不憫だなあ・・・。

シャオ、さっきお茶なくなったよな？2杯目か？

「イル教国原産の、緑茶という飲み物でござるよ。飲むでござるか？」

やっぱり日本だろイル教国！！！？???

絶対行くし！！イル教国だけは絶対行くし！！！！

「そんな難しい顔してどうしたのでござるか？」

「いや。なんでもない。」

「そういえば。イル教国には純米吟醸という酒があって、これが拙者の好物なのでござるが、米から作る酒なのでござるよ。」



イル教国「……………！！！！！！てめえらの教祖は日本人だ！！  
絶対そうだ！！！！

「なにかさっきより険しい顔しているでござるよ？」

「な、なんでもない。その酒は是非いたどころ。」

「そうでござるか。ではイル教国の観光ついでに一杯やりに行くでござるよ。酒の肴みかなにつまみというのがあ「どっせ……………い！！！！」……………なんでござるか？」

「いやもう突っ込むしかなかった。」

「は、はあ。さようでござるか……………それが枝豆といって、酒に合うのでござるよ。」

イル教国の代表者出て来い。ポコポコにしてやるよ。

「今度ぜひ行こうな。どうせ機会はあるだろうから。」

「そうでござるな……………なんで観光の話題でそんな険しい顔なのでござるか？」

「なんでもない。マジで気にするな。」

「さようでござるか。」

うん。イル教国には行こう。

固く決心した俺であった。

「ここか。」

「はい。」

壁が土で出来た町並みといえば伝わるだろうか？町の雰囲気は黄土色だ。さらに屋上同士が橋で繋がっていたり、しょっちゅう短いトンネルに出くわす。細い道も多く、確かに盗賊の町だ。

「まずは宿の確保ですね。」

「ああ、頼む。」

「俺も付き添うぜえ。」

「私も行くっ！」

イリスとフォーリ、キアラが宿を探しに出た。

「武器屋あるかな？投げナイフの補充したいんだけどな。」

「じゃあ俺も買出し行くから一緒に行くか？」

「ありがとドレイク！」

そういえばアリシア、ドレイクとフォーリは呼び捨てなんだよな。ま、ドレちゃんとかよりましか。

「では拙者と情報収集でも行くでござるか？」

「ああ、そうしよう。」

さて、俺らがまず出たのはメインストリートだった。盗賊の町とか言ってたが、意外と賑わっている。さて情報を聞くため、人の多そうな酒場へと足を運んだ。

カロンコロン

「いらっしやい。」

「ういゝす。」

マスターがゴツイ。俺は適当に返事をする中を見渡した。いやはや・・・

「荒くれ者の町でござるなあ。」

そうなのだ。扉を開けた瞬間から喧騒が耳に入ってきており、正直うるさい。

さて、奥へと入り、適当なカウンターに座るが・・・

「よう兄ちゃん！お前らみたいな弱そうな奴が入って抜けられると思っなよ？」

酒臭い男が数人、絡んできた。やっぱりな・・・。シャオも同じことを考えていたようで、ため息を漏らす。

「なあ、最近ここで変わったことなかったか？」

「ああ！？なんだ？それより金寄せせよ。酒飲みすぎちゃって俺達金ないんだわヒヤハハハ！」

「変わったことは？」

「うるせえ！金寄せつつつてんだよ！！」

めんどくせえ……。こっちは我慢して情報提供望んでのに。

「てめえらにやるほど裕福じゃねえんだよ。」

「んだとテメエ！？誰に向かって言つてやがる！？」

「知らねえよ誰だお前。」

すると周りがざわめきはじめる。アイツに喧嘩売ったぞ？とか、あの優男死んだな、とか。

「ほお。俺に喧嘩売るか？俺はスカル！こころじゃあ喧嘩ナンバーワンだぞコルア！」

「へえ、スカルねえ。知らねえな。」

だりい。潰していいものかな？

「もういい！テメエ表でろ！！」

「じゃあお前は聞いた事ないのか？この黒髪見て思うことないか？」

俺どんくらい有名なんだろ。酒場で番張ってるような奴なら情報網もありそうなものだが。

「お、お、お前まさか・・・黒い希望？」

「ああそうだよめんどくせえな。殺すぞ。」

「ひいひいひい！！！！」

スカルとやらは酒場の外に逃げていった。さて。周りがさつきより静かになっており、啞然としてこちらを見ている。

「おいお前ら！ここらで変わったことは？」

すると近くにいた一人が話します。

「今まで好き勝手やってたんすが、つい最近現れた連中にあのスカルもコテンパンにされちゃいまして・・・あっしらじゃあお手上げつすよ。」

お、おもしろそうな情報だな。

「さっきのゴミをボコした奴ってのは？」

「さあ？でも組織の名前なら知ってるつすよ。ケルベロスとか言ってますね。ボコした奴は茶髪の優男つすね。」

ケルベロス！！　ってことは茶髪の優男は・・・クロッドか！？

「悪いな、ありがとう。そいつ等は今どこに！？」

「何するつもりつすか！？」

「いいから！！」

「へ、へえ。確か宿屋の裏道を東に行つたところにアジトを作つてるつすよ。」

「ありがとな！シャオいくぞ！」

「承知！」

俺らは酒場を飛び出し、宿屋のほうへ駆け出した。

## 第41話 盗賊の町パズリカ（後書き）

### §Character Profile§

name アリシア・クロノ・イグニシャス

hair color 緑

eye color 翡翠

height 144cm

weight 4「こらああ！！ あたしの体重なんか言ったら許さないから！！」

older 15歳

main arms ミゼリコード 投げナイフ

## 第42話 再会！

酒場で情報を聞きつけた俺達は、ひとまず宿屋に行ってみみんなを集めた。酒場から宿屋までの道にアリシアとドレイクもいたので、今は全員集合状態だ。そしてその裏の細道を東へ向かう。

「クロツドさんですか。懐かしいですね。」

「ああ、みんな元気かな。」

すると細道の最奥に扉があり、その前に見張りが一人。見たことない奴だ。

「おい、ここは入れんぞ？」

「あ？新入りか？俺らはアネスに用があるんだ、どけ！」

ドレイクが息巻くが、その見張りも下がろうとしない。

「お前らみたいによく分からない奴らを入れられるか！」

「よく分かってないのはためえだよ！俺の元部下を連れて来い。お前ごときじゃ話にならん！」

「落ち着けドレイク。」

「ドレイク・・・？」

「なんだよ！？」

見張りが首をかしげる。そして・・・

「少々お待ちください！」

そういうと慌てて中へと入っていった。

待つこと数分。いつかの俺の部下が出てきた。

「よう、久しぶりだな！」

「隊長！……！！ どうしてここに！？」

「アネスに会いに。居るか？」

「はい！どうぞ皆さんこちらへ。おいロイド！案内しろ！」

「は、はい！……あなた方はいったい？」

「元仲間だ。」

「そうでしたか！さつきは失礼しました！！」

そういうと中に通された。

ドレイクはまだ面白くなさそうだったが、知らん。

入ると、中はイメージよりも広く、天井も高かった。

「へえ、意外と立派なところに住んでるんだな。」

「はい。ここは盗賊団から強奪したところで。」

「お前はいつから？」

「この町です。だから一番の下っ端ですよ。」

頭を掻いて言う。よく見れば確かに細いし弱そうだ。ケルベロスの連中にこんな奴はいない。みんな屈強な連中だ。

「さて、ここです。ボス！つれてきました！」

バタン！！

扉が開いた。出てきたのはアネスにクロッド、そしていつかの6人衆だった。一人は俺が銃をぶっ放した相手。今はそいつの目も澄んでいる。うん、成長したかな？さらに1人増えている。7人衆と呼



ぶべきか？

「カエデ君！！久しぶりだな！何でここに！？」

「まあいろいろあゝ立ち話もなんだ、中へ入ってくれ！皆もだ！」

おい。」

アネスがハイだ。珍しいな。さて、中へと案内されたが、いつかよ  
りずいぶん広い会議室だ。

俺らが全員座って、クロツドや7人衆が座ったところで椅子があま  
る。

「ロイド、ありがとう。下がれ。」

「はい！」

そういつて見張りは戻っていった。

「ずいぶんと機嫌がいいなアネスは。どうしたんだ？」

「何を言っている！旧友が尋ねてきた、こんな嬉しいことはないだ  
ろっ！」

「そうか。嬉しいことだな。さて、俺らも仲間が増えたんだ。自己  
紹介していこう。」

「いや、結構だ。全員の素性も全て把握している。カエデの武器に  
ついては少しは調べがついたしな。」

「ハハ、相変わらずだな。それで、ここに根付いてんのか？」

アネスは俺に合わせて少し笑うと、続けた。

「そうだ。君達が居なくなってから少し増えてな。まずあの時助け  
た連中に、ここに来るまでに加えた連中、それに昔からの野郎ども  
総じて240人になったぞ。」

「40人も増えたのか。良かったじゃねえか。」  
「ああ。」

さてと。

「やっぱりアネスは俺らに加わる気は起きねえか？」

「悪いが、な。私にはこいつらがいる。」

「そうか……。」

「どうしてもダメですか？」

イリスが頼む。すると……

「ボスのスカウトなど認めない。」

新入りの奴がそう言った。ムカ。お前新入りだろ。するとドレイクが突っかかる。

「新入り、お前は関係ないだろ？引っ込んでろ！」

「うるさい。お前に新入り呼ばわりされる筋合いはない。それに俺らのボスだ。関係はある。」

確かに関係はあるな。さて。

「おい、いつかの喧嘩男。」

「か、カエデ兄貴……俺にはタイガって名前がありますわい。」

「そうか。この前おまえ名乗らなかつたじゃねえか。」

「タイガにそういう言葉遣いをするな。」

「あ？」

こっちに新入りが突っかかる。今からタイガにコイツのこと聞こう

としたんだが、まさか俺にまで突っかかるとはな。するとフォーリが槍を立て、新入りに言う。

「おい、てめえ。兄貴に何偉そうなこと言ってるんだあ？そんな奴は許さないぜえ。」

「やめるフォーリ。で、タイガ、こいつは？」

「だから言葉遣いを改めると言っている。」

ムカ！！！！てめえに話してねえよ。もうシカトだな。

「タイガ、喋れ。」

「黒いの口を閉じる。」

「こいつは実力を買われて入った男で、名をガルラという。ボスへの忠誠は厚い。」

「なるほどな、サンキュタイガ。」

「黒いの！！！！！」

シカトに切れたなこいつ。うざいなあ……。アネスが何で何も言わないのかと思えば、イリス……。いまだにアネスを口説いて、こちらの様子を見ていない。

もういい。こいつつぶす。

「……タイガ。こいつにはお前と同じ目に遭ってもらって良いか？」

「黒いの！口を閉じる。」

「創造 ピエトロブレックタム93」

「！？」

「黒いの黒いのうるせえんだよ……。なんだ？お前は俺に命令できるほど偉いのか？」

「ボスと先輩に対しての傲慢は許さん。」

「なら俺がタイガより先輩と知ってていつてんのか？ああ！？」

「なんだと？タイガ先輩は最年長だ。ましてお前より少なくとも俺は年上だ。」

「ほう。だったらなんでお前が先輩たちさしおいてこの場に居られるんだ？」

「それは・・・実力主義なんだよ。そして俺はお前より100倍強い。お前流に言ってる。俺への言葉遣いを改める。」

「強いかどうか試して『ドオン』ぐああああ！！！」

「試したが？」

右肩に一発。安心しろ。死にはしない。

「お前・・・何を・・・言葉遣いを改める。『ドオン』『ぐああああ！！！」

左の太腿。

「実力主義＋俺お前よりケルベロスにいたの前だもん。先輩だよな？」

「・・・。」

「そういうことだ。お前しばらくそうやって反省してる。タイガ、俺が悪いと思ったらソイツを医務室に連れて行って構わない。だがそうでなければそのままだ。どっちにしろ死にはしない。」

「・・・ならこのままにします。」

「先輩・・・？」

「お前が悪い。」

「・・・。」

さて、と。アネスとイリスもいつからか俺を見ていた。

アネスが口を開く。

「相変わらずの武器だな・・・だがカエデ君が武器を抜いたのなら、こちらが悪いのだろうな。すまない。」

「!?!」

ガルラとやらが驚いている。

だから言ってる。

「あゝあ、お前のせいでボスに迷惑かけたな。どうするよ?」

「・・・。」

「いいか?お前の考えが矛盾してた。それを貫くのはいいが、そうだったら俺はその考えを打ち壊すね。他の人間に迷惑が及ばないように。」

「・・・。」

「まあいい。もう俺の気は収まった。」

そしてベレッタを消す。

「さて、アネス、やっぱりダメか?」

「ああ。こいつらを置いていけない。」

「ねえねえ。」

アリシアが介入してくる。

「どうした?」

「要は、ケルベロスが解散しなければいいんでしょ?だったら、いい考えがあるよ。」

第42話 再会！（後書き）

§Character Profile§

name ガンドロフ・スコツティーネ

hair color 白

eye color 茶

height 180cm

weight 70kg

older 29歳

main arms 長剣

### 第43話 黒虹結成！！

「その考えてって？」

俺が聞くと、周りもこっちを見る。

アリシアはにっこり笑うと・・・

「パパに頼んで、資金出してもらって、ケルベロスをあたしたちに併合するの。でもそれはアネス姉が了承すれただけど。」

・・・その手があったか。だが、問題は頭が二つになることだ。

要はケルベロスの頭のアネスと、黒い希望リーダーの俺・・・どっちが上になるかということだ。正直俺はどうでもいいが、それでもそこは揉めるだろう。

「そうか・・・だったらお前らが了承するなら私は黒い希望に入ろう。正直私はこの、世界を浄化する集団には入りたかったからな・・・。それにこんなにも私を求めてくれている。こんなに嬉しいことはない。だがそれでケルベロスが崩れるのは嫌だ。それが解消されるというなら、私に異存はない。」

そこでみんな一度押し黙る。仕方がないので俺が声を発した。

「タイガ、どうだ？」

「・・・カエデの兄貴がリーダーということに異存は全くありません。ですが、迷惑では？」

「は！アネスが加わるんだ。迷惑なわけないだろう。というよりこれは俺らから出した条件だ。俺達のこととは考えなくて良い。」

「そうですね。でしたら俺は異存ありません。」

「俺もない。」

「俺もだ。」

「オレツチも。」

「ああ。」

「ない。」

「・・・ボスがそう言うなら。」

お、7人衆満場一致か。なら問題ないな。  
でもクロツドは？

「クロツド。お前は？」

「私達をここに残していただければ。私とこの7人で今の指揮を執ります。有事の際はお呼びください。そしてもし王城に上がった暁には私達を迎えると約束していただければ、喜んでボスを頼みましよう。」

そうか。それは問題ない。

だったらトランシーバーもらった奴、あれを創造して渡そう。

「お前ら・・・いいのか？」

「「「「「「「おう!」「」「」「」「」

「分かった、ありがとう。」

「クロツド、コレを渡して置く。」

「カエデさん、これは？」

「魔道通信器だそうだ。それで王都についたら呼ぶ。王のレオは俺の親友だから、容易だよ。」

「王と親友って・・・貴方は本当に何者ですか・・・？」

それについてはスルーする。  
さて。



「じゃあアネス、明日の朝。ここの町の前で待ち合わせな。」  
「分かった。楽しみだ。」

その夜、アネスのお別れ会をしたそうだ。みんな意外と涙はなく、俺の元部下なんかは「どうせ隊長が迎えの連絡よこすって。」とか言って笑っていたそうだ。全く、どんな自信だよ。

翌日。

晴れ渡る空の中、俺達は出発した。どういわけか、ケルベロスの

メンバーが大勢見送りに来ており、俺もいろいろ言われた。早く連絡寄せたの、今度は俺の管轄下に入れるだの、うるさかったけどま、嬉しかった。

さて、俺達は今パズリカの北でアネスの歓迎会を兼ねた昼食をしている。ドレイクが上機嫌なのは気にしない。

「みんな！黒虹の結成だ！！」

「黒虹？」

アネスが聞く。・・・ああそういえばアネスが入ったらその名にするって決めてたか。

なんかドレイクが小突いてくる。つまり、俺から言えということだろう。・・・めんど。

まあいいか。今度は自分達でつけた名前だ。そうだな、黒虹。良いかもしれない。

「みんな、聞いてくれ。」

全員がこちらを向く。

キアラ・・・口元に米粒がついてるぞ・・・。

「今日、アネスが仲間となった。そしてここからは王都に向けて突っ走ろうと思う。つまり、仲間集めは終わり・・・これで世界を平定するメンバーは揃ったということだ！・・・それに先立ち、ドレイクから提案があったように、組織名を“黒い希望”改め“黒虹”とする！そして・・・まあ俺がおもしろそうだと思うたからだが、コードネームを色でつける。異論は認めない！」

“赤” 焰龍

ドレイク・ベルナス

“橙” 最凶の槍使い

フォーリ・バイカウント



### 第43話 黒虹結成！！（後書き）

やあつと黒虹結成にこぎつきましたあ・・・長かったあ。

onedear7さん、期待していただいていたのにこんな形ですみません。黒虹結成と相成りましたあ。

## 第44話 キアラVSイリス(前書き)

〈報告〉

・噂さん感想ありがとうございます!!

・ナナシさん感想ありがとうございます!・・・第一章はスピード上げて書きますが、第二章からは落ち着いて書いていくと思います

(汗)

## 第44話 キアラVSイリス

結成翌日。そういえばアネスにイヤリングを渡していないのを思い出し、毎度喧嘩中のドレイクから皮袋をもらいアネスにイヤリングを渡した。

「ほい、あげる。」

「カエデ君・・・？／／／」

「はいストリープ！！」

イリスが飛び込んできた。何？てかアネスもどうした？

「カエデさん！説明不十分です！！ちゃんとこれの意味を説明してください！！」

「え？おお。なんだよ急に。アネス、これはGP・・・じゃねえや、メンバーの居場所が分かるイヤリングだ。仲間の証。ちゃんと持つておけよ。」

「・・・なんだそういうことか。早く言え！！」

ええ！？アネスにも怒られたんですけど！？

すると二人は後方に行ってしまった。シャオが呆れてこちらを見る。

「カエデ殿も重症でござるよなあ。」

「だあら、俺なんかした？つてかまたソレかよ。」

「シャオ、俺にも一杯くれ。」

「粗茶でござるが。」

く女所帯く

「イリ姉ってさ、カエ兄のこと好きでしょ？」

「なななななにいつてるんですかアリシアちゃん!？」

イリスが顔を真っ赤にして言う。かなり慌てて。

「そうなのか……。だから今の私の時も慌てて……。」

「違いますってば!!!」

「嫉妬でしょ？イリ姉。」

「っ~~~~~~~~!!!」

アリシアはかなりニヤついている。アネスも納得の顔だ。





助け舟~~~~!!もといイリス~~~~!!これで俺は救われた  
あ~~~~!!

「お、イリス！なんかキアラ酔ったらしいからおんぶしてあげて！  
じゃあねー！」

ダッシュで逃げた、俺でした・・・チキン野郎とかいわんでくれ。

く女所帯く

「キアラさん・・・なんの真似ですか？」

「ん？イリスちゃんが嫉妬するか実験！！」

「つ~~~~!!」

おどけた様子で内巻き髪を払うキアラと、拳を握り震えるイリス。

すると少し離れたところにアリシアとアネス。

「ねえ、女の戦いだよ？」

「そ、そうだな・・・男所帯で育ったから、こついうのは新鮮だ。」

「そうなんだあ。第二ラウンドが楽しみだねえ。」

「・・・カエデ君が不憫だ・・・。」

くえんどく

夕方。俺は相変わらず鍋とかを創造して用済み。フォーリとドレイクは薪やらを取りにいった。そしてシャオはまだ竈が関係ないので、俺と一緒にお茶をすすする。

「いいわぁ……。」

「さようで……。」

すごい良かったりムード。切り株に座って、二人でお花を咲かせている。

……熾烈な戦いがあるとは知らずに。

〜女所帯〜

「今日は私が料理作るよっ！」

「どうしたのキアラ姉？」

アリシアが聞くとキアラは耳打ちでこう言った。

「……イリスちゃんからかう。」

「……わっかりましたぁ！」

耳打ちが済むと、アリシアはアネスを誘って鍋やら何やらの洗い物や、水汲みに出た。

するとイリスがやってくる。

「イリスちゃんっ！今日はわたしが料理作るよっ！」

「……なんですか？」

もはや今日のイリスは疑心暗鬼！疑いの眼差しでキアラを見る。

「カエちゃん誘って一緒に料理！！」

「！！ でしたら私がやりますよ。こっに見えてもなれているので。」

「そっつ？ 私料理得意なんだよっ？」

「・・・どちらがうまいか試します？」

「フフっ。いいよっ！ 審査員はカエちゃんね？」

「いいでしょう。」

ゴゴゴゴゴゴ・・・という効果音が聞こえそうなほどのにらみ合い。それを遠くから見ていたあの二人は・・・。

「水汲みに行くのではなかったのか？」

「あれを見るために決まってるじゃん！ また面白くなってきたよ。」

クスクスと笑うアリシア。アネスは横目で花畑カエテたちを見て、ため息をついていた。

くえんどく

フォーリたちが帰ってきて、食材がそろっつ。シャオが竈に行っつてしまったのでまっつたりはおしまいだ。バカ二人と共に話す。

「カエデ、今日はなんか・・・料理人が違っつようだぞ？」

「ん？・・・ああ、ホントだ。」

キアラとイリスが食事当番だな。

「兄貴……あの二人の間に火花が散って見えるのは俺だけかあ？」  
「ん？……ああ、ホントだ……なんで!？」

確かにバトってるよ……マジでなじえ？聞いたけど二人も知らないらしい。

「まあそんなことよりカエデ。俺達強くなったぜ？」

「ああ、強くなったぜえ。」

「ほおう。じゃあ今度手合わせ願おうか。二対一で構わんが、魔法使ったら俺も使うからな？」

「おおう。」

久々にこいつらと、か。楽しみだな。

「キアラがいるから、武器は木製じゃなくてもいいよな？」

「!?! いいのかカエデ？どうなっても知らねえよ？」

「は！構うもんか。まだまだ負けねえよ？」

そんな風に俺らが勝負魂を語っていると、どうやら食事できたようだ。

「「できました!！」」

そうか、二人だったな。

夕食なんだが……。

今日はどうやら二つ料理があるようだ。

みんなはもう食べ始めていて、特にバカ二人はがつついている。

「さて、いただきます！……なんだお前ら？」

キアラとイリスがこちらを凝視しているのだ。

そして、

「どっちが美味しかったか言ってくださいね？」

「!? は、はあ……。」

食い入るように俺を見てくる。本当になんなんだよ！

と思い、恐る恐る二つとも食べて見る。

一つはハンバーグのような肉餅。

もう一つは肉野菜炒め。

……うま。

いや両方うま、え？何これ味のダンボーじゃねえや宝石箱やあ。

ごちそーさん。

「悪いが甲乙付けられん。両方うまい。」

「決めてください!」

「ムリ! ドレイクにでも決めてもらえ。」

「え? 俺?」

「結構です。」

「ちょ!?!」

・・・なんだ? どうしたんだこの二人・・・。

「お前ら、何かあったのか?」

とりあえず真面目に聞いてみる。

すると二人とも黙ってしまい、少し沈黙。

しばらくして、アリシアが口を開いた。

「キアラ姉がイリ姉をからかったんだ。そしたら段々ヒートアップしてきて・・・。」

そういうことね。で、料理で決着つけよう。

「ふうん。まあいいや。喧嘩に首突っ込む気はねえし、自分達で解決しな。」

俺はそれだけ言ってシャオとお茶会しに行った。

く女所帯

夜、男どもが寝たあと。

「別に喧嘩したつもりじゃなかったんだけどなっ。」

「キアラ姉、からかい過ぎかもね。」

「そういうアリシアも楽しんでたようだが？」

「あれ？ごめんちゃい！」

「・・・私は・・・私はカエデさんのこと好きです！だから・・・他の人がべたべたしてると嫌だっっていうか・・・。」

「それ分かるよ。だから嫉妬っていったじゃん。それに、イリ姉がカエ兄のこと好きなのなんて、知らないのバカ二人とカエ兄自身くらいだよ？」

「へ・・・？うそ？なんで？誰にも言ったことないのに！」

「私ですら今日だけで分かったぞ？見え見えなんだよ仕草がな。」

「はう・・・。」

イリスが顔を真っ赤にして、押し黙る。するとアリシアは話す相手をキアラに変えた。

「キアラ姉はさ、カエ兄のこと好き？」

「うん！好きだよっ？」

「！！ やっぱり、そうだったんですか。」

「これは・・・アレか？恋のライバルって奴か？」

なんか初めて見るもののようにアネスが言う。ま、仕方ない。

「恋？」

キアラが首をかしげる。みんなアレ？って感じでキアラを見た。

「カエ兄のことは好きだけど、みんなも好きだよっ！」

ドガッ！

イリスがこける。アリシアもずっこけた。

「キアラ姉まさか・・・あたしより精神年齢低いのかも・・・。」

小声で言ったのでイリスにしか聞こえなかったらしい。

イリスは又も転んだ。

「いった〜い・・・アリシアちゃん、それってもしかして・・・。」

「キアラ姉、もしかしてさ、今日カエ兄に絡んだのってさ、全部イリスをからかうため？」

するとキアラは満面の笑みで・・・頷いた。

「うんっ！」



その夜イリスはいろいろ悔しくて一人、夜空を眺めて泣いていた。

「なんであんなこと言っちゃったんだろう・・・私のバカ。」

第44話 キアラVSイリス(後書き)

§Character Profile§

name ガウディ・アクセローク

hair color 白

eye color 灰

height 188cm

weight 80kg

older 27歳

main arms 大剣

## 第45話 闘技訓練

キアラとイリスの騒動があった次の日のことである。  
俺は久々にドレイクに起こされた。

「おい起きろ！戦う約束だろ！？」

「ん？それ今日かよ・・・。」

俺が立ち上がると、フォーリももう準備万端だった。

ドレイクも村正宗を帯剣し、俺と戦う気満々といえる。

・・・仕方がない。やるか。

「創造 デュアルディオスクロイ」

「創造 ピエトロベレッタmur」

「ちょ！？その武器も使うの！？」

「兄貴、やる気だなあ。」

「お前らと本気でやり合うんだ。そのくらいはな。」

朝もやのなか、俺と二人は対峙する。

腰にベレッタを差し、トンファーを両手に。向こうも槍と刀を構え、殺気を放つ。

「来いよ。どつからでも。」

「行くぜ！ーうおうりゃあああ！ー！」

右からの袈裟切り。俺はそれを右トンファーで防ぐと、その勢いで両足を浮かせ、右トンファーを軸に飛びドレイクの顔を蹴る。するとそれをドレイクは紙一重でかわし、横薙ぎに斬りかかってくるが……！俺は慌ててそこから飛ぶ。すると俺が居た場所に槍が突き刺さった。フォーリが空から奇襲してきたのだ。

「しゅれにならんな……。」

ゼウスチート、発動！

さて、行くか。

「！ 雰囲気が変わった！」

「おい、俺とやったときのあれがくるぜえ。気をつけろお。」

フ。ずいぶん警戒してくれるな。まあいい。行くぜ！

俺は一瞬で間合いを詰めると、ドレイクに向かってトンファーの回転一閃！

「ぐー！」

それをかわしたドレイクは素早い動作でさがると、居合いの構えを取る。抜刀はしているが。

「くらえ！嵐龍！」

ツツ！鎌鼬か！

鋭い刃が俺に向かって飛んでくるが、距離があるので軌道が読める。その鎌鼬を飛んでかわす。

すると、フォーリが空中に掛かってきた！

「兄貴喰らえ！  
いわなだれ“岩崩”！！！」

俺より高く上がり、上からの槍のラッシュ！！仕方ねえ！

「攻式六之型」

俺は頭上でトンファアを交差し、そのまま槍のなかに飛び込む。そして槍の一つに目がけて交差部分をブチ当てると、そのまま上に重なっている右トンファアを回転させた。槍の軌道がずれ、フォーリがバランスを崩す。そこに左のトンファアで袈裟切りに回転一閃！！

「ぐあ！！！」

フォーリはそのまま落ちる。だがそれを見逃すわけには行かない。空中で方向を転換すると、

「攻式三之型」

スクリューのように回転しながら、フォーリに突っ込む。

「やべえ！！！」

フォーリを狙った一撃だが、そこにドレイクが飛び入ってきた！

「一之太刀、火龍かりゅう！！」

「うお！？」

自分の腰に刀の峰をあて、そのままこすって火をつけた。  
そして火のついた刀身が俺を襲う！！

「くー！」

仕方がないので、左トンファアの剣先を投げつける！するとトンファアのほうに気が行ったドレイクはそれを弾くため火龍の標的をトンファアへと変える。ソレを狙っていた！

すばやく左腕でベレッタを抜き、ドレイクの右腕・・・武器を持つ手に放つ！

ドゥーン！

「が！？」

ドレイクはたまらず落下。次いで俺も地に足を着ける。  
フォーリはとつくに倒れており、勝負はあった。

「俺の勝ちだな。・・・ふうあぶねえ。」

「・・・くそう。」

「・・・ぐう。」

「それじゃ、俺はキアラを呼んでくる。」

そして俺は野宿場所へと戻っていった。

「あゝあ．．．また負けちまったなあ。」

フォーリとドレイクは大の字になっていた。

「ああ．．．やっぱまだ勝てねえぜえ．．．。」

「でも俺達、成長したよな．．．あの速度のカエデと渡り合えた。」

「まだまだ．．．成長できるぜえ。俺達はあ。」

「は！．．．あつたりまえだぜバカ野郎．．．。」

「バカはお前だあ．．．。」

その後この二人は近接においてカエデよりも恐れられる存在となり、黒虹の二大剣豪として恐れられることとなる．．．のはまあまだまだ先の話だが。

キアラの治療を受けた二人はすぐに元気になり、俺に再戦を誓うと  
また訓練に戻っていった。

・・・俺もガキの時はそんなことがあったなあ。親父の傭兵仲間にも鍛えられたっけ。

おかげで異世界にきても戦いで遅れをとることはないしな。

「朝ごはんできたよ〜!」

「分かった! すぐいくよ。」

まあその話はまたいずれ・・・ね。



## 第46話 とある異世界人の一日

朝食を食べ終えて、俺達は歩き出した。

今日もいい天気だ。イリスとキアラの仲も復活しているようだし、俺としてはそのほうがいいからな。・・・昨日の夜はイリス寝てなかったようだが、大丈夫かな？

「イリス、昨日寝てないだろ？」

「ほえ！？そ、そんな・・・いえ寝ましたよ！」

「だってさ、居なかつたじゃん。最低限お前が居ないところにも避難して寝てるんだぞ？そのお前がいなかつた事ぐらい分かるんだよ。」

「ひ、避難つてなんですか！？」

「寝相悪すぎて危険極まりない。WARNINGだぞコルア。」

「わ、わーにんぐがなんだかは知りませんが、いい気持ちはしないです・・・というより私そんなに寝相悪いですか？」

「「「「「うん。「。「。「。「」

全員が頷いた。

「え、満場一致！？ だからいつも皆さんが寝るところ見てないんですか！？」

「そうそう。今日は久々にフォーリがかかと落とし喰らってたな。」

「ほえ！？」

「痛かつたぜえ・・・。」

「「ごめんなさい！」

「最初のころはドレイクも喰らってたな。」

「ああ、あん時は痛かつた。」

「それは・・・別にいいのでは？」

「ちょ!?!」

はは、ドレイクは相変わらずだな。全く、キャラ設定がすっきりしてんなあ。

みんなも笑顔だ。いいね、こういう旅は。

「んで、イリス。あとのくらいで次の町だ?」

「そうですね、明後日の午前中には次の村につくと思いますよ。そうすれば1日経たずに王都です。」

そうか・・・長かった。でも別に王都いくのに緊張はしてない。・・・ま、なんせ友人が王様やつてるしな。

イリスはそれだけ言うつと女所帯に戻って行った。

さて・・・今日も喧嘩が冴えるねお二人さん。

「テメエ!今日の朝飯少しテメエのが多かったのはどういうことだあ!?!」

「は!今日の闘技訓練で俺のが長く生き残ったからだバカめ!?!」

・・・朝飯のことかよフォーリ。そして話題は俺との戦闘か。

「んだあ!?!バカはてめえだあ!?!俺のが必死で戦ったってことだあ!?!」

「それでスタミナ切れじゃあしやあねえなバカが!?!」

「んだとこんのバカ野郎があ!?!」

「朝飯少なかったくせに頭に乗るんじゃねえよ!?!」

「関係ねえだろ朝飯はあ!?!」

「さつきテメエが言い出したろうが!?!」

「俺はいいんだあ!?!」

「だからバカなんだよテメエ!」

おうおう・・・バカどもが。ん？アネス？

「やめないかお前ら！！」

お？仲裁に入る奴なんざ初めて見たぞ？

「うるせえよバカが！！」

「・・・なんだと？バカはお前らだろうが！！」

あれ？

「関係ねえのに首突っ込んで来るな！」

「バカだとテメエおい！！」

「関係あるさ！朝食の盛り付けは私だ！！」

「テメエが原因じゃねえか！！！！」

なんか・・・混ぜてない？もういいや。あ、シャオがいつの間にか隣で・・・

「お茶くれ。」

「粗茶でござる。」

ずず・・・やっぱりこれが一番だあ。

「シャオちゃん！」

「げ・・・アリシア殿・・・。」

「ねえねえその髪またさわりたいあい。」

「い、嫌でござるよ！アリシア殿に何本抜かれたことか！！！」

シヤオは逃げ出した！　しかし、周りこまれてしまった！！

シヤオは、全滅(?)した・・・

俺はお茶をすすっていた。

「こいつらはこいつらで面白いよな。さてあちらは？」

俺がバカ+アネスを見ると、イリスとキアラも介入していた。

「アネスさんをバカ呼ばわりなんてドレイクさん最低です！」

「え！？ちよ！俺だけ？」

「はい。」

「即答！？・・・キアラもか？」

「なんだかよく分からないけどイリスちゃんに一票っ！」

「よく分からねえのかよ!？」

「いつも味方してくれてありがとなあ。キアラちゃんも優しいぜえ。もしかして・・・」

「ですがお断りです。」

「まだ言つてねえ!？」

「ねえフォーリくん何言おうとしたのかなっ！」

「え？ああ。ひよっとして俺の事好きなのかなあって。」

「うん、好きだよっ！」

「・・・!？」(イリス以外)

「お、おおお!?俺にも春が・・・ねえキアラさん、私はどうですか?」

「うん、イリスちゃんも好きっ。」

「・・・!？」

「ええっと、キアラちゃん？それはどーゆー・・・。」

そこへアリシア登場。なんか面白い具合にフォーリがパニくってるな・・・あれ？アリシア？じゃあシャオは・・・そう思つてシャオを見ると、痛そうに頭を抱えて泣いていた・・・可哀想に。また抜かれたのか。

「フォーリ！！キアラ姉に恋愛はまだ早いよ？」

「！？ ちょっとまで、どゆこと？」

「そういうことですよ・・・昨日は私も酷い目に遭いました・・・」

切実なイリスの発言に、フォーリは固まった。

「友達としてつてことかぁ・・・」

みんな黙る・・・キアラは？を浮かべていたが、さて俺は。

「シャオ、大丈夫か？」

「あ、ああ・・・なんとか。拙者の髪たちがまた犠牲になり申したが・・・」

「いっそばっさり切っちゃえば？」

「そ、それは！！・・・ダメでござるよ。」

何かありそうだが・・・まあいいや。

「お茶くれ。」

「またでござるか・・・まあいくらでもあるでござるから、一緒に飲むでござるか。」

「ずず・・・やっぱり俺も日本人だからなあ。お茶はいい。」

フォーリが膝をついていたが、気にしなかった。

夕方。

定番になってきた食事当番。今日はイリスとアリシアのようだ。キアラは洗い物に戻ったが。

・・・あれ両方美味しかったんだが、結局どっちがどっち作ったんだろう？

「拙者もたまには料理の一つでもしたいでござるな。」

竈係でフォーリとドレイクがいない今、シャオは暇人だったらしく

俺に話しかけてきた。

「ほう。昨日のに負けない自信が？」

「それはもう。拙者の国の料理で……」

嫌な予感しかしないのはなじえ？

「寿司というのが「どっせーいーい！！！！」……またでござるか？突っ込む要素なんかあったでござるか？」

大有りだバカたれ。今度ゼウスに聞いたです！！  
ん？何って、イル教国と日本の関係をだ。

「……まあいいでござるが。寿司はうまいでござるよ。まあそれは海鮮料理でござるから、ここではなく湖で作るべきでござるがな。」

さいでつか……何度も言うようだが、イル教国には絶対行こう。

「シャオちゃん！！竈お願い！！」

「分かったでござるよ。……ではまた。」

「おう。」

シャオは竈係に行ってしまった。  
入れ違いに来たのは

「よう、今日俺に惨敗した二人組の諸君。」

「「ちよ！？何いきなり！？」」

おう。息もぴったり。

「武器の手入れか？」

「ああ。お前のトンファー打ったせいで少し・・・な。」

「俺の槍もだあ。槍先にぶち当たったからなあ。」

攻式六之型ぶち当てたからな。あ、ちなみに俺のは攻式八之型まである。守式は五之型までだが。

「ま、精進しろよ。一応ルスリアとアリアーの剣士だろ？」

するとドレイクは普通に頷いたが、フォーリは暗くなった。

「いや・・・俺より強いのが三人いたあ。」

「ほう。ルスリアでか？」

「ああ。イル教国の奴にも勝てないのは4人いたあ。」

おうおう。凄いなやっぱり。セカイは広い。

「ルスリアの神剣のマルス・・・あれには勝てる気すらしなかったぜえ。」

「そんなにか・・・どっかで聞いた名前だな。ああ、この前東の関所で戦った奴の仲間か！」

「！？その男は？」

「ん？なんかバカでかい大剣使い。五剣帝の一人とか言ってたが。」

「剛剣のガウディ・・・。」

「そうそうそれぞれ！」

するとさらにフォーリの顔が曇った。



「やばいぜえ・・・近いうちにマルスが動くかも知れねえ。ガウデイは五剣帝の4番手・・・それが倒されたとなれば・・・。」

なんか暗いな。

「は！そんなの俺が倒してやるよ！！」

「！！ そうだったな・・・兄貴がいるんだ。なんとかなるよな！  
！」

「夕飯ができました！」

「「「おう！！」「」」

にしても、マルスねえ。神の剣、か。

後に三国の三雄として名を連ねるカエデとマルス・・・出会いはまだ先である。

## 第47話 旅の終わり

ドレイクたちと戦った翌日、今日ものんびりと歩いていた。

くだらない会話にドレイクいじり、そしてシャオとお茶してキアラとアリシアはイリスをからかう……。そんな感じで今日も一日を終えた。

夜、野宿場所は低めの山の上だった、みんなは寝静まったあとだったが、俺はどうにも眠れなくてこの満天の星空の中、一人散歩に繰り出していた。

「ほう……。」

俺は思わず感嘆の声を漏らす。開けた場所からは、西南の方角……つまり今まで旅してきた道が丸分かりだったのだ。この山の西方には、フォーリが泣いた廃墟の町があった。ここではレオとの出会いもあったな……。あの奥にまだ明かりが見えるのはバイゼルかな。アリシアと出会った場所だ……。あすこの景色は壮観だった……。ま、アリシアは二度といきたくないだろうが……。目をそこから東に向けていくと、小さな明かりが見えた。あれはイグニシヤスの町か。公爵元気がいな？あのおっさんにもまた会いたいものだ……。そこから北へ……。つまり手前へと目を運ぶ……。東の関所は……。見えないな。明かりがわずかに見えるのはパズリカか。黒虹結成、か……。おのドレイクの喜びようは笑えたぜ……。

「カエデさん？」

「ん？」

後ろからイリスが歩いてきていた。

あれ？でもみんな寝たはずだったが……。

「いい眺めですね・・・私たちの旅の記録・・・なあって。」

隣にきて、俺の眺めていた方角を見るイリス。クスクス笑っているところが愛らしい。

「寝たんじゃなかったのか？」

「一度は。でもよく考えてみると、明日には集落へ到着。すると一日せずに王都についてしまいます・・・みんなと野宿しながら旅するのは・・・というよりみんなで野宿するのは、今日で最後なんですよ・・・。そう考えると寂しくて、ちょっと夜風にあたりに来てました。」

視線を前から離さず、イリスは呟いた。そうか、今日で最後なのか。確かに感慨深いものはある。楽しかったな。

イリスと出会い、ドレイクと出会い、アネスと共闘し、シャオを助けた。

フォーリと戦い、キアラに会い、関所でみんなと戦った。

そしてフォーリが仲間になり、レオと出会う。アリシアを助け仲間にして、東の関所ではキアラと再会を果たし、レオと親友になった。そしてパズリカ。なんだかんだあったが、アネスを仲間にできて、黒虹を結成した。・・・長かったように短かった。

「色々あったな。」

「はい、とつても。でも・・・。」

「楽しかったよな。」

「！はい！」

イリスはにっこり笑ってそう言った。異世界に来て最初に出会った仲間・・・イリスに出会えてよかった。その笑顔を見て、そう思っ

た。

「俺、この世界に来てよかった。」

「？ 私もカエデさんと出会えて嬉しいです。」

「そか・・・ありがとう。」

なんだか立っているのもアレなので、腰をかけることにした。  
・・・？

「イリス？」

「ダメですか？」

俺にびったりくっついて座っていた。まあダメなわけではないが・・・。

「空がきれいですね・・・。」

「ああ。俺のいたところじゃあ、こんな星空は見えなかった。」

俺の居たところは都市部だったから、明るすぎて星が全く見えなかったのだ。

「そうなんですか・・・。」

なにか物悲しそうにイリスが言う。唇に人差し指を当てるところがまたかわいい。

するとイリスは頭を俺の肩に預けてきた。

「？ イリス？」

「湖で野宿したこと・・・覚えてますか？」

「ああ・・・マグロが無駄に釣れた場所な。」

「クス・・・そうでしたね。その時カエデさんと湖のほとりで、こ  
うしていたかったんです。今それができて、幸せです・・・。」

イリスがいいなら構わないが・・・。っていうかこれ、俺役得？あ  
あなんか、殺意の目を向けられてる気が・・・。ん？誰に？・・・知  
るかよ！

「俺となんかでいいの？」

「・・・？はい。その・・・カエデさんがいいんです・・・。」

「ん？」

「な、なんでもありません／＼／＼／」

たまにイリスの声って聞こえない時があるんだよなあ。

「これから、王都に行ったら忙しくなりそうだな・・・。」

「・・・話題変わった・・・。」

「ん？」

「ほえ！？あ、はいそうですね・・・。」

「その時は、サポートよろしくな。イリスにしか任せられないし。」

「！はい。・・・フフ」

「どうした？」

「いえ・・・あの・・・ずっとこうしてもいいですか？」

「ん？ああ、眠くねえし・・・みんなが起きるまでなら。」

「あ、・・・そうですね恥ずかしいし・・・。」

「起きたら朝飯の準備しなきゃだからな。」

「あ、そっちですか・・・。」

その夜、イリスは今までで一番幸せだったそうなの。

・・・そうそう。カエデが感じた殺気が目だが・・・殺気でなく好

奇の目ならあったと言っておこう。

二人の背後の草むらでは、

「お！イリ姉やった！肩に！肩にいいいい！！」

「なんで私がこれに付き合っただ？」

「いいじゃん！面白いし！」

「まあ、そうだがな・・・フフフ。」

色恋沙汰は、絶えない。

朝、俺はあんまりお腹すいてなかった。やっぱり寝ないとダメなん

だなぁ。フォーリとドレイクが修練に出たのは知っていたので、ここから俺とイリスで朝食の準備を始めた。イリスもお腹はすいてないようだったが。

朝食を食べ終わり、出発することにした。

相変わらず俺とシャオが先頭、女の子たちが真ん中らへんで、バカ二匹は後ろで喧嘩・・・もう決まった構図だな。

「イリス、到着まであとどのくらいだ？」

「そうですね、昼前には集落に到着しますよ。」

そう言うとイリスは女の子の輪へ戻っていった。

「イ〜リ〜姉!!!」

「なんですかアリシアちゃん？」

イリスが問うと、アネスもニヤついて言う。

「昨日の夜は楽しかったか？」

「!？」

「何を話していたのか、あとでゆっくり教えてね？肩枕とか!」

「ツ~~~~~!!!み、見ていたのですか!？」

イリスの顔は、今までで一番赤かったそうなの。

**第48話 王の危機！ 前編（前書き）**

さあ、第一章も終盤です！！



## 第48話 王の危機！ 前編

集落についたのは午前中だった。・・・だが。

「何かあったのかなっ？」

町の中が騒然としている。そして人々はなにかにおびえているようにも見える。

そして・・・女子どもしかいない。これは何かある。

するとドレイクが大声を出した。

「皆様失礼します！！我々は黒虹！旧名黒い希望という者ですが、貴方達の様子を見てると何かあった様子・・・説明していただける方を求めます！」

ドレイク・・・よく言った。黒い希望という言葉に、村人はざわつく。  
すると近くにいたおばちゃんが話しかけてくる。

「あなたたちが噂に聞く・・・おお、本当に黒髪黒瞳黒マントだわあ・・・。今ね、王城で反乱が起きてんのさ。それでこの村にいた人間も連れて行かれた。戦争のための駒にね。首謀者は將軍と宰相さ！！頼むよ、あの若い王が危ないし、あたいたちの亭主が・・・。」  
「わかった。安心しなよ。俺らがどういう集団か知ってるか？」

なるほどな、ヤバイなそれは・・・。

俺が問うとおばちゃんは胸を張って答えた。

「ああ。滅多に殺しをしない、アリア最強の集団だろ？・・・でも





レオールside

わたくしは今自分の部屋・・・最上階の一番奥の部屋で、グライドとともに敵の警戒をしています。私も護身用の剣を抜き、敵を迎え撃つつもりです。奥の部屋にいる母上と妹には触れさせない。

それにしてもうかつでした。貴族派の筆頭、宰相は敵だとわかっていましたが、まさか將軍まで敵に回るとは・・・。城に帰ったときからおかしいとは思っていたのです。どうやらわたくしの居ない間にいろいろ抱き込まれたのでしょうか・・・。わたくしの味方はグライド率いる近衛騎士団のみ。その彼らが応戦中ですが、わたくしをかくまい、次々に倒れているのでしょうか。

宰相はルスリアと内通していたのですね・・・。でなければこのような兵数をそろえることは不可能でしょう。さらに將軍の兵士・・・5000対60では、結果は比を見るより明らかです。

残念ですがカエデ・・・わたくしは貴方が思うほど大した器ではなかったようですよ？

部下ですらも統率できないようでは仕方ありませんね。

わあああああ!!!

喚声が聞こえますが、これは敵のそれでしょう。ふう、わたくしの代でアリアを終わらせるわけにはいきませんが……洒落になりませんよ。

バタン！！

ドアが開いた。誰だ……將軍か……。深い緑色の髪、少し年のいった男ではあるが、アリアの正規兵の中では最強の男だ。

「まさか貴方が敵に回るとは……うかつでしたよ。」

「それは国王の度量と考えてもよろしいかと。」

「！！ この売国奴め！！」

「さて、貴方の望みはなんですか？」

「国王。貴方の発する言葉はいつも、軍を動かさないものだった。私は国の盾となり戦いたかった。それなのに防戦一方で……拳句の果てに貴方が激励に？我ら軍が援軍に向かえばよかったのに！！私の望みは貴方の首、そして軍を利用する国だ！！」

「すなわち貴方はルスリアのような国家が良いのですね？」

「ああ、そうだ！！」

「そうですか……。」

「おのれ下郎！！！！」

グライドが剣を向けて突進する。確かにグライドは強い。だが。將軍も抜刀すると、その細身の剣で上手にグライドをあしらう。

「くそ！！」

「ふん！！」

見事な剣捌きで將軍はグライドの剣を叩き折ると、グライドを袈裟切りにした。

ぐああああ!!

「口ほどにもない。」

「・・・がは。」

グライド・・・仕方ありません。わたくしは武器を捨てた。

「將軍、わたくしの首など差出しましょう。ですがグライドや母上、妹への手出しは認めません。いいですか？」

すると將軍は笑った。

「ハハハ。私は無条件降伏を求めています。何も聞いちゃいませんよ。さて、首をもらっていきましようかねえ。」

くそ・・・この男も所詮・・・。

すると、グライドが窓を見て笑い出した。

「ハハハハハハハハハハ！こりゃあいい！！ハハハハ！！陛下！首を差し出す必要などありません！！」

「なんだ？まだ生きてたのか？」

將軍がグライドにトドメを刺そうと近寄る。まずい！

「グライド!!」

「さあて死んでもらおう!!」

将軍が細剣を振りおろす。その時！

ガシヤアアアアン！！

キイイイイン！！！！

「オツサン、俺の親友を守ってくれたこと、感謝する。」

「ゲホ・・・その言葉遣いも相変わらずだな・・・。」

窓を叩き割って、さらに将軍の剣を受け止めたのは、黒マントがはためく私のたった一人の親友だった・・・。

## 第49話 王の危機 後編

カエデside

城下町の荒れようは酷いものだった。壁が砕かれ、路上で人がうめき、家によっては燃えている。

悲惨すぎるだろ！

さて、そこはキアラとイリス、アネスに任せ、俺達は場内に突っ込んだ。

「うお！？」

そこにはたくさん兵士がうごめいている。

俺らが来てもお構いなし・・・国王を探しているのか？

「！？ 兄貴！ルスリア兵もいるぜえ！！」

「ツツ。フォーリ、アリシア。ここは後から来る二人に任せ、俺達は先を急ぐぞ！」

「あたし王城は行ったことあるからだいたい分かるよ！！」

「！？ 本当か？」

「うん、王様は玉座か王の部屋、それか地下通路にいると思う！！」

「！ 分かった。じゃあフォーリは地下！アリシアは玉座！俺は部屋へ向かう！」

「了解！！」

「部屋は最上階の一番北側にあるよ！！すぐに分かると思う！！」

「分かったサンキュー！！」

さて、行くか！！



俺は駆け出す！廊下にもたくさんの兵士がいたが、フン、通路の邪魔だぜ？

「おい、そこに誰がいるぞ！！」

「ひつとらえろ！王の居場所が分かるかも知れん！」

おう、敵さんか。じゃあ容赦しないでいいな。

ここを真っ直ぐ行ったところに階段がある。そこまで飛ばすか。敵の数はだいたい30・・・よし。

うおおおおお！！！！

こちらに向かって飛び掛ってくる。ご苦労なこつた。

「攻式三之型」

スクリューとなって突っ込む。目指すは階段だ！

うわああああ！！

「なんだコイツ！？」

スタ・・・階段前に着地。ご丁寧に全員気絶してくれた。

「誰かって？黒虹だ。よく覚えとけ！」

それだけ言つと階段を駆け上った。

「黒・・・虹・・・？」

ありゃ！？まずったな・・・。

俺の目指す北の最上階は、どうやらここからはいけないらしい。こちらには東か。東の塔の最上階に出たが、北の最上階は別なものとしてある。・・・アリシアめ。説明しろ。

ん？  
そこに凄くでかい大木があり、それをわたれば北までいけるのでは？と思いつく。

パリーーン！！

俺は窓ガラスを割ると、大木の枝に飛び乗った。

そのまま北の塔へと近寄る。するとそこの窓から見知った顔が見えた。

お、グライドが倒れてやがる！！

だがグライドはこちらに気付くと笑い出した。・・・なんとなくムカ。死に損ないのくせに。

するとその時、グライドの横から剣を振り上げる影。やば！殺す気か！？

ガシャーーン！

俺は窓ガラスを割って飛び込んだ。そしてその凶刃を防ぐ。

キィィィン！！

ふう間に合った。ん？お、レオ発見。

〈カエデside out〉

〈レオールside〉

受け止めたトンファアを回転一閃！！  
將軍が吹っ飛ぶ！

「があああ！！！」

壁際にブチ当てられた將軍は痛そうに立ち上がる。

「レオ、待たせたな。」

「……遅いですよカエデ。」

わたくしは遅すぎる親友の登場に苦笑した。全く、助けに来てくれるとは……早く言ってくださいよ……。ああなんでしょうかこの脱力感。

少し……気を張り詰めすぎましたか。

「……貴様は？」

將軍が立ち上がり、聞く。するとカエデはニヤリと笑ってこう言った。

「ああん？・・・黒虹。」

〈レオールside out〉

〈カエデside〉

どうにか間に合ってよかったぜ・・・。で、このオッサンが問題なんだな？

「・・・つたく。グライドよりオッサンじゃねえか。もはやジジイだな。」

「！？ お前・・・言ってくれるじゃねえか・・・。」

グライドが笑う。が、力尽きる寸前だな。

「レオ、オッサンの手当てをしてやれ。」

「分かりました。」

「・・・国王に向かってその態度。もしか黒い希望の・・・？」

「だから、今は黒虹つつってんだろ？で、よくもオッサンをやってくれたな。」

俺はグライドを一瞥して言う。やっぱり知り合いがやられると腹立つな。

「そうか・・・では仕方ないが、ここで死んでもらう！」

そういつて俺に飛び掛ってきた。

「やってみ？」

その剣を右トンファーで受けると、そのまま回転させて弾いた。  
オッサンが吹っ飛ぶ。

「うお！？」

「相手になんねえな。ドレイクと比べるとただのザコだお前。」

俺はベレッタを取り出すと、その弱そうな細身の剣の根元を撃つ。

ドオン！

バキーン！！

「！！？」

「な・・・なな？」

そういえばグライドとレオも初めてか？まあいい。

將軍は折れた自分の得物を見て呆然としていたが・・・

「ツツ！だがルスリアと我々の兵がまだ5000はいるんだ！！お前一人でどうにかできる相手じゃ「將軍！！」・・・なんだ！」

ポロポロになった部下が転がりこんでくる。顔面蒼白だ。

「申し上げます！！場内に入り込んだ黒虹と名乗る一味により兵士

全滅！！そして鋼線を操る魔導士の手により、私の隊もルスリアの兵士も全て気絶させられました！！！！」

「な！なんだと！？」

「俺の仲間なめんじゃねえよ。」

にっこりと笑ってそう言っただけ。すると將軍は青ざめ、

「貴様はいつたい……？」

「黒虹のリーダー、カエデ・ミナモトだ。よく覚えとけジジイ。」

「つく……。」

「うわあああ！！！」

その部下の男が叫ぶ。すると、

ヒュンヒュン……

「よよ？国王にカエデ殿でござるか。コイツを追って正解でござったな。」

「こ、この男です！！私の隊を全滅させたのは！！！」

部下の男はおびえて將軍のそばへと駆け寄る。

シヤオは構わず続けた。

「カエデ殿、とりあえず場内にいる兵士は全滅させたでござるよ。

もうじきこの部屋に他のメンバーも来るのでは？用が済んだらカエデ殿のところへ集合と、言っておいたでござるか「おい！入れコルア！！」「ほら。」

ドレイクがよく分からん人相の悪いジジイを引っ張ってきた。

すると將軍と部下がまたも驚く。そしてレオも、

「宰相！！！！」

「カエデ！こいつが主犯のようだぜ。もう一人將軍つてのがいるらしいが……。」

「それなら俺が片付けた。」

「な……え、焰龍……。」

「あ？コイツか？カエデ。」

「ああ。」

將軍がドレイクに驚いている。

すると宰相が苦痛に歪みながら叫ぶ！！

「無礼者が！！ワシを誰と心得る！？この国の宰相だぞ！？」

「……だから何？」

「な！？」

マジでそう思った。謀反起こしといて身分持ち出すとか……バカ？

「自分で何したか考えてからモノ言えよ？」

「ひい！」

ドレイクが刀を喉元に突きつけると、ビビって黙る。

「お仕事終わりー！！」

「疲れたぜえ。」

アリシアが陽気に歩いて登場。その後ろからフォーリ。

「兄貴！とりあえず倒れてた兵士はみんな縛つといた。王様、あとは誰が味方か勝手に見当つけてくれえ。」

それって敵味方関係なく縛ったってことか？・・・まあいい。

「これで医療班以外は揃ったな。レオ、黒虹がことを全て解決いたしました。」

俺がおどけて言うと、レオは苦笑して、

「本当にありがとう。さて、宰相に將軍・・・どうするつもりでしょう？」

「私は・・・ただ戦いたかっただけだ！」

ブチ！！

「おいジジイ！！」

將軍に向かって叫ぶ。すると全員がこちらを向いた。

「そんなに戦いたいなら一人でやりやがれ！！兵士や住民巻き込むんじゃねえよ！お前バカか？そのわがままのせいで苦しむ人間がどのくらいいると思ってるんだ！！」

すると將軍が笑う。

「ハツハツハ！知ったことか！兵士とは雇われている身。命は自分のものではない！上司の駒となって戦い、勝利を目指すんだ！！」

「じゃあ住民はどうなんだ！？それに兵士の命は自分のものだろうが！！雇われている？この国は徴兵制だろう！？無理やり兵士にしてふざけたこと言ってんじゃねえよ！！！！」

「黙れ！黙れ黙れ黙れ！！勝てればいいんだ！！お前も偉そうな



「こと言つて戦つてるじゃねえか!!」

「・・・レオ。」

「なんででしょうか?」

俺はレオに話しかける。するとレオも怒りに震えた声で答える。

「コイツ殺す。」

「後で断頭台ギロチンに立たせます。」

「ドレイク。死ぬほどきつく締め上げる。」

「了解。」

ドレイクもだいぶキているようだ。このジジイ・・・ずいぶんなこ  
と言つてくれたな。

「何をする・・・ぐあああ!!痛い!!!!」

本気でドレイクが締め上げる。俺の怒りは収まらない。

「テメエのふざけた考えのせいで、どれほどの人間が犠牲になるか  
・・・その身で思い知れ!!」

俺はベレッタをその局部・・・右掌に打ち込んだ。

ぐああああ!!

「いたそうだなあ。だがお前が兄貴を怒らせたのが悪いんだぜえ。」  
「カエ兄怒ると怖いからね?あ、ついでにあたしも怒ってるから、  
少しカエ兄のベレッタに細工しようと。ヘイスト。」

俺の銃にヘイストの力が宿る。ふうん、もしかして・・・

「ためしうち。」

「どうぞ。」

ドオン！！

ぐああああ！！！！

次は右足の甲に打ち込んでやった・・・やはり速度が格段に上がっている。

「サンキューアリシア。」

「いえいえ。」

「カエデ。そろそろいいですか？」

「？俺はまだコイツを許せないんだが？」

レオが止めに入る。俺に向けて強い視線を放った。

「宰相についてがまだでしょう？それに、カエデ、落ち着きなさい。」

「・・・そうだったな。悪い。」

なんだろう。人に有無を言わせない力がある。将軍はそのまま気絶してしまった。

「さて宰相。なぜ謀反を？」

どつやら将軍のことを見てだいぶおびえているようだ。

「わ、ワシはこの国のためを思って・・・。」

・・・それはあながち嘘じゃないだろうな。現にルスリアから攻めこまれないようにいろいろ工作をしている。だが、こいつには私腹を肥やしていた感が否めない。

「では何故、ルスリアから金をもらっていたのですか？」

「そ、それは・・・。」

「レオ、俺にも話させてくれ。」

「どうぞ。」

「宰相さんよ、あんた戦争怖いだろ？」

「！？　そういうわけじゃない。ただ戦火に巻き込まれないように・・・。」

「あんな？ルスリアにはめられたんだよアンタは。」

「！？？」

「戦争をしない代わりに王都から金を出したり、そういうのってお前、脅迫と一緒にだぜ？それに多分、申し訳ないとか言われて金もらつてたんだろ？」

「な、何故ソレを？」

「だからな、“アリアの宰相は戦争嫌い”って思われて、いいように扱われてたんだ。あげくの果てにはこの謀反。結局お前は利用されただけだったんだよ。」

「そ・・・そんな。」

宰相は膝をついて愕然とした。

「さて、謀反の罪は重いぜ？それも全てお前の責任なんだ。自分の犯した過ちに気付いたか？下手すりゃお前のその手でアリアをぶっ潰してたんだよ。」

宰相はすでに茫然自失だった・・・。

「ありがとうございます。」  
「いいんだよ。」

今は夜、食後。戦勝会ということで、みんな騒いでいるなか、俺とレオで席をはずしていた。城下町に関してはキアラやイリスの奮戦とグライドの兵士が色々と働いて、城の整備と城下町への解放令が出され、なんとか落ち着いていた。  
俺はレオと二人、夜のバルコニーで語らっている。

「さて、約束どおり俺らが来たぜ。戦わせてくれるよな？」  
「もちろんです。．．．それで言いにくいのですが．．．。」

凄く申し訳なさそうに頭をかくレオ。片手には俺と同じワイングラス。もちろん中身は酒じゃない。俺ら酒呑まないからな。

「なんだ？」

「あした、城下に向けて謝罪と侘びを述べるのですが．．．その席

でカエデに宣言して欲しいのです・・・黒虹が平和にすると・・・俺達が居る限り安全だと。」

「うわ、めんどくさ!!!・・・まあいいや。分かったよ。」

「ちなみにその時將軍は断罪にします。宰相に関しては少し悩みどころです・・・。」

その時俺の頭の中には、二人の人物が頭に浮かんでいた。

「なあレオ、將軍の後任には北の関所の総指揮官ガンドロフがいいと思うんだが。」

「!?!? なるほど。確かにそれはありですね。」

「んでさあ、宰相を宰相補佐に降格させてさ、もっといい宰相の下で学ばせるべきだと思うんだ。」

「もっといい宰相ですか?」

「ああ。イグニシヤス公爵。」

「!!! 確かに!でもカエデ、なんでそんな人物がほいほい出てくるのですか?」

「ん?みんな知り合い。」

「・・・凄いですね。本当に貴方と知り合えてよかったです。」

レオが微笑んだ。

「ああそれから。貴方の城での立ち位置になりますが、わたくしの補佐・・・そしてエリア専属特殊部隊“黒虹”のリーダー、ということでしょうか?この国のNO.2です。」

「別に階級なんかどうだっていいよ。だがまあ、動きやすくなるからありがたいな。」

「そうですね。良かった。あ、そうそうそのことについては明日の集会で発表させていただきます。」

「お好きに。」

戦勝の夜は更けていく。この二人は自分たちがじきに、教科書に記載されるくらい有名になることは知る由もなかった。

これから黒虹とアリア王の英雄譚が始まるのである。

## 第50話 第一章エピローグ（前書き）

（報告）

- ・PV230000突破！ありがとうございます！
- ・お気に入り件数377件！皆様のご愛読に感謝です！

## 第50話 第一章エピローグ

翌朝。

俺の知ってる顔、知らない顔が昨日俺とレオがいたバルコニーに集まっている。

言わなかったがこのバルコニー、相当広いのだ。そして、そのバルコニーの下……つまり中庭なのだが、そこには城下町に住む人々がこれでもか！というほど押し寄せている。

それはもう凄い量で……バイゼルよりも人数は多いだろう。数にすれば50000人はくだらない。

「は、凄い人だなあ。」

「そうですね。カエデさんはスピーチもあるのでしょう？頑張ってくださいね？」

俺がため息をつく、隣にいたイリスがもつと萎えることを言うてくる。もうホント、スピーチとかヤダ……。

人々の喚声が騒がしいなか、シャオはバルコニーの壁に寄りかかって眠っている……いつものごとく、呑気でいいなあ。

フォーリとドレイクはといえば、いつものごとく喧嘩喧嘩……仲裁に入ったアネスと共にバルコニー上でただ一つづるさい集団である。今日の喧嘩のネタは……どっちが早く眠ったか？もういい加減にしてくれ、恥ずかしい。

アリシアとキアラは楽しそうに女の子のおしゃべり……おや？見ない顔が一人混じってるな。銀髪を伸ばし、可愛いドレスを着た女の子だ。アリシアより少し年上か？

ま、そんなこんなで俺以外、いつもの黒虹だ。

するとなかなかカツコイイタキシード？のようなものを着たレオが歩いてきた。



「ようレオ。」

「おはようございます。今日はわたくしが最初から最後まで話せばなしなので疲れますよ。」

トホホとレオは笑っていた。

「わたくしが紹介したら、わたくしの隣に出てきて話してくださいね？」

「はあ……分かったよ。」

レオは微笑むとみんなの方へと向かっていった。

……いつ始まるんだ？民衆待たせすぎだろ……。

するとキアラとアリシアが、女の子を連れ立って俺のもとへとやってきた。

「ねえカエ兄、スピーチするの？」

「ああ……レオに頼まれてな。」

「レオ？」

銀髪の女の子が聞いてくる。

「んあ？ああレオール。国王のことだよ。」

すると銀髪の女の子は驚いた。

「ではあなたがお兄様の言っていた……。昨日は大変お世話になりました。あなたが黒虹のリーダー……クス、お兄様の愛称はレオでしたか。」

「お兄様!?」

「申し遅れました。わたくしの名はシエラ・アルス・アリア。レオールの妹でございますわ。」

「へえ、レオに妹なんていたんだ。俺はカエデ・ミナモト。よろしくな。」

「クス・・・お兄様の言うとおり、王族相手に言葉遣いを改めないというのは本当でございますのね。」

「悪いが敬語は苦手だな。」

「いえ、構いませんこと。これからお兄様ともどもよろしくお願いいたしますわ。」

「おう・・・ってかあんなに仲良さそうに話してたのに、名乗りすらしてなかったのかお前ら。」

俺がアリシアとキアラにそういうと、アリシアが申し訳なさそうに、

「だってキアラ姉が親しそうに話してるから友達かと思って・・・。」

キアラ・・・やっぱりお前か。

「だってだって！かわいいねって言ったら会話できたんだもんっ。」

・・・は？理由になつたらんわい。

「まあいいや、シエラだったっけ？こいつらは俺の仲間、黒虹の緑と藍だ。」

「緑と藍・・・。」

「緑こと、アリシア・クロノ・イグニヤスです！」

「藍って呼ばれてる、キアラ・クレストだよっ！」

「よろしくお願いいたしますわ。」

なんかお互いやつと自己紹介が終わったところで……。

「アリシア、なんのようだ？」

「え？ああ。遊んでちゃダメ？」

「どう考えてもダメだろうが、俺は許す。」

「わーいー！！」

「さすがにダメですわカエデさん……。」

「そうか？じゃあダメ。」

「ぶう。」

「……キアラ姉、そんなに感情さらけ出さなくても……。」

ぱー！ー！パパパパパッパーン！ー！！

「始まりましたわ。皆さんお静かに。」

レオがバルコニーの一番前に立つと、割れんばかりの喚声があがった。

わあああああああああ！！！！！！

レオがころあいを見て右手を高く上げると、一瞬にしてしずまる。

……すげえ。

「さて皆様！！！わたくしはまず、皆様に謝罪せねばなりません！  
！わたくしの不届きゆえ、謀反を起こすような者をのさばらせてしまったことです！！その者のせいで犠牲になった兵士、民、そして皆様の家屋や所有物……それら全てに謝罪をいたします。申し訳ございませんでした！！……そしてわたくしは親友とその仲間の協力を得、その者を捕らえました。この者を今から断頭台にて処刑

し、皆様のお怒りを少しでも静めたいと思います!!」

おおおおおお!!!!!!

喚声上がる。・・・にしても王ってこんなに謙虚なものか？

するとバルコニーの端に断頭台が出され、将軍が引きずられてきた。さようなら、クソ将軍。

しばらくして、ギロチンが落とされた。その首はバルコニーの下・・・つまり民衆のいる庭へと落ちて行き、そこにいた民衆は寄ってたかって踏み潰していた。

わあああああ!!!!!!

おえ。あんまり首が落ちるのって気持ちのいい物じゃねえよな。かなり民衆は盛り上がっているが。

「さて皆様!!お怒りは少し静めていただけたでしょうか？そこで、わたくしを助けてくれた、わたくしの親友をご紹介したいと思います！今後彼はわたくしの補佐兼アリア国属の特殊部隊、“黒虹”を率いるリーダーになってもらいます!!」

う・・・きた・・・。

「頑張ってくださいね。」

「頑張れよカエデ!」

「しっかりスピーチしてくるでござるよ?」

「兄貴の名演説期待してるぜえ。」

「カエ兄ガンバ!」

「カエちゃんガンバってね?」

「カエデ君、好き放題喋って来い！」

口々に応援してくるが・・・俺の身にもなっしてくれ。

「まあ、頑張ってくるわ。」

そしてレオのいるところまで歩く。するとレオは少しどいて、俺を誘導してくれた。

「好きに喋ってくださいって結構ですよ。」

「それが一番困るんだよ……。」

レオは苦笑していた。

さて、俺はレオのように声を荒げるのは苦手なので、マイクを創造した。つつつてもこの創造魔法、電気を媒介するものはたいていダメらしく、エコーマイクである。それでも充分ではあるが。

俺が前に立つと、みんな静かになっている。ここに立つとまた違った景色だ……。ああ俺、とうとう王城に来たんだなあ……。さて何を話そうか。

「あゝ皆さんこんにちは。レオ・・・じゃねえや国王の親友、カエデ・ミナモトだ。誰？って思う奴もいるかも知んねえが、“黒い希望”って知ってるか？」

俺がそう言った瞬間、中庭だけでなく俺の後方もざわめく。

「黒髪黒瞳黒マント・・・その特徴を見てくれりゃ納得できるかもな。俺はその黒い希望のリーダーだ。そしてな、今回自慢するわけじゃねえが、そのクソ將軍を潰したのは俺なんだ。なんでか・・・それは王を殺そうとしていたからだが、はっきり言っておく。本来

俺は王様一人の命なんかより、みんな100人の人間を守る。なぜならそのほうが守れる人数、命が多いからだ。」

俺の言葉によりまわりがざわめく。

「それでもこの王を守った理由、それはこの王を守っておけば将来、その何十倍もの人間の命を救うことに繋がると思ったからに他ならない。みんな！この王は凄い王だ！！支持しておいて絶対に損はない！俺が保証しよう！！」

おおおおおお！！！！

「さて、その王の親友として、このたび黒い希望は国の管轄下になった。だが、少しでも命の危険を感じたり、友達や親の命が危なくなったら俺のところに来い！！必ず助けてやる！！・・・まあ、外出中は許してね？」

クスクスクス・・・

会場内が笑う。お、意外とうけてるな。

「俺の仲間はみんな凄いぞ？だから安心しろ！！・・・さて、ここで改めて言おうか。俺たちは改名して、黒い希望から“黒虹”となった！改めてみんなのために戦っていくからよろしくな！！」

うおおおおお！！！！黒虹！黒虹！黒虹！

「ありがとう！！さて、最後になるが、俺は戦争なんて大嫌いだ！俺達黒虹とアリア王は、この世から戦争を無くすため戦っていく！！応援よろしく頼むぜ！！！！」







**幕間 1 とりあえず後始末。 (前書き)**

第二章までの幕間が続きます。

主に二章までのつながりですので、幕間といってもストーリー中の出来事となります。

## 幕間 1 とりあえず後始末。

ただ今玉座の間で内政管理の真つ最中。

レオもあすこの玉座に座ると風格でるなあ。

にしても王城内のお偉方が集まつてるらしいが、昨日のバルコニーに比べるとやつぱり少ないな。

シエラ王女もいねえし・・・というより黒虹で出席してんのは俺とイリスだけだ。

めんどろだなあ、この会議。

と、俺が立つたまま白河夜船を漕いでいる間、次々と内政が決まっ  
ていく。

内政に関してはレオも長けているようだ・・・だが。

レオの奴、今回の件で重役達を洗ったな？

レオの下す決断に反論する者が一人もない・・・貴族派と割れて  
るらしいからかなり会議も長引くだろうと思つたのに、そんなそぶ  
りは一切ないのだ。ま、潜伏している輩はいるかも知れんが。

今回の会議で決まつたのは、この地区の整備予算やら、兵士の徴募、  
それから宰相將軍不在における臨時体勢。最後に俺らの組織の紹介  
とあいさつであった。俺も大臣たちも適当に話は流したし、特にこ  
の会議ではもめることもなかった。

「お疲れさん。」

「ふう、疲れますよ・・・ことあの会議においては。」  
「だらうな。」

レオはいま、俺の部屋に遊びに来ていた。どうでもいいことだが、この部屋はなかなか広く、快適だ。というかレオが快適だからといって俺の部屋に来たのだ。・・・お前の部屋はどうしたよ王様・・・。

そうそう、俺達黒虹はこれから一人一部屋借りて王城内に在住することとなった。ちなみに黒虹の階級は相当高いらしく、俺がこの国のNO.2というのも笑えるが他の連中も大臣達に並ぶ権力をもっているのだそうだ。・・・すげ。

アリシアとかキアラがこの国のトップクラスとは・・・世も末だと思ふんだが。ま、そこはほっとくかな。

506

「にしてもよく俺らにこんな部屋くれたな・・・。」

「当然ですよ。それにここから階段を上れば私の部屋はすぐですから、いつでも遊びに来てくださいいね？」

「・・・仕事はどうしたよ国王。」

「そんなものシエラが朝のうち完全に片付けてしまいます。」

「・・・まあいいや。つといても、遊びに来るのはレオのが多そうだな。」

「そこは言わないお約束・・・フフフ。」

和やかな談笑だ。だが。

バタン！

・・・ノックぐらいしろ。

「おお、ここに「ノックぐらいしやがれ」の野郎。」も、申し訳ございません!!!」

俺は転がり込んできた兵士に文句をつける。

「で、何のようだ?」

「え、あ、はい!国王さま、とうとうルスリア帝国が北西のニルグ  
イア皇国を併合いたしました!」

「!!! そうですか。ではイルとアリア、アルテナは完全にルスリ  
アに囲まれた形になったのですね?」

「そ、それが・・・アルテナ皇国もイル教国によって併合された  
模様です!!!」

「わ、わかりました。仕事に戻ってもらって結構です。」

「はい!失礼いたしました。」

バタン

さて、訳が分からないぞ?

「レオ、説明プリーズ。」

「ぶ。プリーズ?まあいいでしょう。まずニルグイア皇国というの  
は、イル教国の北、ルスリアの西南に位置する国のことです。それ  
がルスリアに併合されました。そこでまず、我がアリアとイル教国、  
アルテナ皇国は南以外を完全に囲まれた形になります。」

3国まとめて囲まれたってことね?元々北と東はルスリアに囲まれ  
てんだろ?

「続いて二番目に言われたことですが・・・その囲まれた3国は西

からイル教国、アルテナ皇国、アリア王国となります。そのイル教国がアルテナ皇国と交戦中だったので、今しがたアルテナの敗北・・・併合されたようです。つまりアリアは西をイル教国、東と北をルスリアに囲まれたということです。」

oh! Pinch!

・・・それで確か大陸はCっぽい形してるんだよね？

「下のほうはどうなってるんだ？」

「知らないのですか？下は西が砂漠地帯と東に密林地帯。密林にはドラゴンが出るなどという話もあるくらいで、今となっては誰も近づきません。その先つまり先端には、そこに住む人々との交易もあります。・・・まあそれくらいですね。」

へえ・・・ドラゴンか。会ってみたいものだな。

「まあいいや。とりあえずアリアピンチってことな？」

「か、簡単ですね・・・でも、そういうことです。」

コンコン

「どござ。」

ガチャ・・・

「あ、いたいたカ工兄！アネス姉がクロッドたち呼んだってさ！到着まで時間掛かるけど王様に許可・・・って王様だあ！」

にぎやかだなアリア。・・・そうか、クロッドたちが来るのか。楽しみだな。

「どうしましたか？」

「あのね、クロツドたちが来るんだ！王城に入れてくれない？」

「く、クロツド？」

ダメだ、アリシアじゃ舌足らずだ……。

「つまりは……まあ黒虹の下部組織が来ると思ってもらって構わない。それで、王城のどこかにおいてもらえないか？」

「なるほど、そういうことですか……。分かりました。では空いている塔が西にあるので、そこを黒虹の本部としてはいかがでしょう？」

「お、それいいな。」

「ありがとうございます！」

「いえいえ。でも皆さんの自宅は今の部屋でよろしいですか？あくまで黒虹の本部がそこ、ということまで。」

「分かった、ありがとうございます。」

最後に俺が礼を述べると、レオは微笑んだ。

## 幕間2 王城散歩(前書き)

〈報告〉

・アストさん感想ありがとうございます……!

## 幕間2 王城散歩

迷子になった。

王城の地理を覚えようとしたのだが、どこに行ってるのか分からない。

「っていつかここどこだよ!?!」

晴天の中庭、俺はその中心で叫んでいた。

「あら？貴方はカエデ様じゃありませんこと？」

振り返ると、しなやかな銀髪を肩まで伸ばし、可愛らしいティアラをした少女が立っていた。

「シエラか。」

「名前を覚えていただいて光栄ですわ。この中庭で何を？」

「いや〜・・・ハツハツハ・・・はああ。」

「その様子だと、迷子ちゃんですわね？」

クスリと笑ってそういうと、シエラは続けた。

「確かにこの王城は広いですから・・・どこかへお急ぎですか？」

「いや・・・地理を覚えようとしてこのぎまだ・・・。」

「フフフ・・・ではわたくしがご案内いたしましょう。」

「いいのか？」

「ええ。貴方のこともいろいろと知りたいですし。わたくしは王城を案内いたしますから、その代わり貴方のことを教えてくださいますか？」



見据える瞳にはレオ同様、有無を言わせないものがあつた。といっても俺の何を知りたいのやら。

そういえばこの前、夜のバルコニーでレオには俺の事、全部話したんだよな。異世界人だと言つても大して驚かなかつたし、こと銃ヘレッタに関しては何も言わなかつた。・・・多分このお姫様も何を話そうとそんなに驚いたりはいしないだろうな。

「まあいい。じゃあ案内頼むぜ。」

「はい。」

シエラはにっこりと微笑んだ。

それがどことなくレオに似ていた・・・顔はあまり似ていないのだが。

しばらく歩いていると練兵場に出た。たくさんの兵士が訓練しているが・・・。

「みんな頑張るのはいいんだが、何でドレイクとフォーリが教官な

んだ？」

「わたくしが頼みましたの。練兵には、強い教官が居たほうが効率的・・・そう考えると黒虹は一般事務がないのでその分お願いできないかと。幸い彼らはやる気でしたので。」

「そうか。だがどうやら鬼教官だな・・・。」

俺らが眺める方角には兵士のダツシユする姿と、後ろから“雷挺”で追い詰めるフォーリが居た。

そしてドレイクは別の兵士たちに剣術指南をしていた。身体強化で尻を蹴飛ばしながら・・・。

「そのようですわね・・・兵士の皆さんが次々と吹っ飛んでいきますわ。」

クスクス笑いながら言うことじゃねえだろ。

「では次の場所に行きましょう。」

「おお、分かった。」

「ここが武器庫ですね。」

「あれ？カ工兄！」

「アリシア？」

武器庫といわれて来た所は、薄暗くあまり明かりの届かない部屋だ

った。すると後ろから声をかけられ、振り返るといたのはアリシアとアネスだった。

「おう、どうした？」

「こんにちは。」

「あ、シエラ姫も居たんだね？あたしは投げナイフを仕入れに来たんだよ？カエ兄は？」

「迷子になってたところをシエラに助けられた。」

「カエデ君、迷子って……。」

「うるせい！」

「クス……さて、わたくし達は別のところを周りましょうか。」

「じゃあねカエ兄。」

「また後で会おう。」

「分かった、またな。」

その後俺はシエラに通りの地理を教えてもらい、迷子になる心配は無くなった。

現在は元の中庭で俺は草の上に大の字になり、シエラは足をそろえてベンチに座っている。

「それで……貴方はいったい何者なのですか？出身を正直に教えてください。」

「……異世界だ。」

「……信じると？」

俺の言葉に、いささか疑問をもったシエラは俺に問うてくる。

「お前らの知り合いに創造魔法の使い手がいるか？シエラの知ってる武器にコイツはあるか？」

「……そうですね。でも、本当ならば、とても興味があります。」

「……あんまり良い世界じゃなかったぜ？俺はここのが好きだし楽しいからな。」

「そうですね……それでも、聞かせていただけませんか？」

シエラが食い下がる。ベンチから降りて、俺の顔の前にしゃがみこむ。おい、ドレスから中が危うく見えそうだぞ？……仕方ないか。

「まず、魔法がない世界だった。」

「！？ 考えられませんね……生活はどうしていたのですか？」

「正直俺のいた国はここより生活は楽だった。科学つてのが発達していてな。」

「……でも貴方の目は、故郷を思い出す時あまり寂しそうではありませんね。」

「まあな。あまり未練がないというか……でも、楽しかった思い出もあるし、悔いはあるけどな。」

「そうですね……できれば貴方の出で立ちについても教えていただけませんか？……お兄様から貴方の話を聞きたび、気になって眠れないんです……。」

そんなにか。ってかレオ……何はなしたんだよ。あんまり思い出したくないが……話すか。

俺の幼少時代と少年時代を……。

### 幕間3 少年時代（前書き）

今回はカエデの少年時代の話です。

カエデが語っているという形ではなく、その時代のカエデの視点で書いていきますのでよろしくお願いします。

### 幕間3 少年時代

「ぐあああ!!」

「卒業式にまでケンカふっかけてくんじゃねえよ……クソ野郎。殺してやるうか?」

卒業式の日も、俺はケンカに巻き込まれていた。っというか俺が絡まれただけなのだが……。

日本に俺を置いてけぼりにした母親から連絡があつたのは、俺の小学校の卒業式の前日だった。

それまで俺は親父から教え込まれたトンファー術ケンカでいろいろと問題を武力解決していたが、それを問題と取った教師陣が親に連絡したらしい。

「今から空港に迎えに行く。中学一年なんて大した勉強量じゃないんだから、そんなの捨てて一回死線をくぐりなさい。アンタに敵う小学生なんてそうそういやしない……でもそれで天狗になられても困るからね。どうせなら命の尊さ、大事さを学びに来なさい。良い講師がいるから」

……なんのこつちや。

俺に歯向かってくる奴はつぶす。その何が悪い? 天狗? は! 知ったことかよ。

にしても母親とは何年ぶりになるんだろう。空港まで行くだけなら、仕方ないから行ってやるか。

その時の俺は、こんなことになるなんて思いもしなかった……。

空港。

「おお、居た居た！ カエデ！ こっちだ！！」

タバコをくゆらせ、女にしては恐ろしい体格を持つ母は、俺に向かって大きく手を振っていた。……恥ずかしいからやめろ。

黒髪を短髪にまとめ、胸は多分さらしを巻いている。服装は軽装だが……中にチョッキを着込んでいることは間違いない。

俺が母親の元へと行くと、見たこともない、小学生のガキから見たらとんでもなくデカイ金髪のアメリカ人が横にいた。

「姉御、このガキがアンタの？」

「ああ、あたしのカワイイ一人息子さ。今まで一人暮らしだったから礼儀を知らんがよろしく頼むよ」

「母さん、この兄ちゃんは？ ……まさか母さん」

「オイ、アホガキ！ 俺がこんな年増……なんでもない姉御！！」

金髪が言い終わらないうちに、母さんがものっそい睨んでいるのが見えた。結論としては、新しい父親ではないらしい。……んなのどーでもいいが。

「さてカエデ、なんでそんな軽装なんだ？　これからあたしと来るんだよ？　ほら行くよ！！！」  
「うわ！？」

俺の体を軽々担ぎ、連れて行く母親……おい、まさか行くって、母さんの仕事場か！？

「はは！　姉御、相変わらずだな！」

金髪は笑っていた。しっかしこの金髪も若い物が凄くいいガタイをしている。……母さんの傭兵仲間か？

そんなことを思っていたが、何もいえなかった。  
後ろ襟をつかまれて担がれているおかげで、全然声が出なかったからだ………苦しい。



結局飛行機に乗せられてしまった……何がただか分からないまま。そして母親は俺の後ろの席。となりには金髪が座っていた。

「なあ、兄ちゃんは母さんの傭兵仲間なのか？」

「ああ。後輩、だな。傭兵という職に関しては。俺の名はオルソン・ピアース。よろしくな」

「後輩……まあそうだろうけど。俺は源 楓だ」

「元気だな。だが普通世界で名を名乗る時は、ファミリーネームを先に言うもんだぜ？ 覚えときな」

そうなのか。じゃあ俺は楓 源か？ まあいいや。にしても思ったより明るい良い奴だな。

なんて年上に不謹慎なことを思っていると、

「なあ力エデ、お前はこれから戦いの中に身を投じることになる。今までの生半可な強さじゃやっていけないからな？ 頑張れよ？」

……は？

ごめん意味が分からない。俺に戦争の中で生きると？ 冗談じゃねえ！

俺が脳内で悲痛の叫びを上げる中、飛行機は飛び立った。

何故だ!?

オルソンの鍛え方は鬼だ! 何で俺がこんな目に遭わなきゃいけないんだ!?

「ほらどうした!! 誰が休めと言ったあ!?!」

「イエツサー!」

「yes, sir! だバカ野郎!」

「yes, sir! ……なんで俺が」

こんな重装備を持たされて、腕立て500回とか……俺まだ12歳だぞ!?

そしてさっきは全力疾走2分間。なんなんだよこのメニュー!!! この国……名前なんだっけ? に来てからすぐ、オルソンが俺を森に

連れ出し、訓練と称して拷問を始めた。死ぬよこれ……。しかも訓練中に言っているのは yes, sir! だけ。もう意味がわかんねえ。さらに、やはりこの国も紛争地域らしく、母さんもオルソンも物騒な武器を担いでいる。

そんな訓練が、夕方まで続いた。

そして夜。夜は母さんによる中一の勉強。……これってつまり、当分帰れないってことですか!?

その夜、俺はオルソンにいろいろ話をした。  
ホテルの談話室のようなところで、ソファに向かいあつての対話である。

「なんで俺は連れてこられたんだ？　オルソンは知ってる？」

「……姉御がな、俺に頼んできたんだ。命の尊さを教えてやれって」  
タバコを吸いながら、オルソンは話す。

「命の尊さ？」

「ああ」

どういうことだ？　でもあの母親のことだ。絶対俺にも分かる日が来るのだろう。  
さて次は……。

「オルソンは、何で傭兵に？」

「……元々俺は軍隊に居たんだ。アメリカの海兵隊。そこに居た時に、イタリアの海軍潜水奇襲部隊コムスレン COMSUBINに居た姉御と知り合つたんだ。そして姉御がそこを抜け、傭兵になつた事も知つた……そんな時、俺は祖国の掲げる正義に失望したんだ。そこまで昔の話じゃない。今でもその時の記憶は鮮明に残ってる。……それで俺も傭兵になつた。別に姉御が引き金な訳じゃないがな。きつかけの一つにはなつたさ……」

暗く話すオルソン。まじいこと聞いちゃったかな。

「二度目に戦場であつた時は偶然味方でな。それがつい最近なんだ。俺が海兵隊に居たことも知っていたから、このことは姉御にも話したさ。そしたらお前の教育を少しして欲しいっていうじゃねえか。」

知らない間柄じゃねえし、少しノツてやるうとも思ったわけよ。姉御の息子つてのも見てみたかったしな」

そついえば母さん俺が生まれてからも、軍隊生活続けてたらしいからな……。

「なるほど…… 出会いの経緯も教えてくれてありがとな。俺の教育か」

途方もないほど長い期間というわけでもなさそうだ。正直俺はそこにほっとした。

にしてもオルソン、正義に失望した、か。オルソンの正義についても聞きたいが、あまり触れていいところでもないだろうな。

……訓練生活を続けて5日後。仕事が迫っているというので、今日が最後で俺は国に帰れるらしい。  
やったああああ！！ ん？

「お父さんの形見だよ……ピエトロベレッタm93r。大事にしてね」

「それは装弾数21発の銃だ。一発ずつ撃てるし、初心者じゃないんだろう？ 撃ち方は分かるはずだ」

「はあ、どうも」

「じゃあ私のいる街までこの森を抜けて来い！ どんな困難もそれで切り抜けるんだよ？」

「そうそう、この森だけど、俺らの敵の兵士とか、普通に巡回してるはずだから。しっかり身を守っていけよ。まあ戦争区域じゃねえから狙撃兵なんかはいねえだろうが……それでも慎重にな」

「はああああ！？」

……そのまま母さんはいなくなるし。オルソンは同行してくれるらしいが、何もしないとのこと。しゃ……洒落にならん。

確かに俺は初心者ではない。小さいころに親父に借りて、子どもでも使える銃を使用したことがある。

だが、それとこれとは違うだろう！？

「ほら、行くぞ」

「……分かった」

だが結局街に着くまで巡回している敵兵とやらにも、毒蛇にも遭わなかった。……脅かしやがって!!!

「ははは！ 運がいいなお前！」

「笑うな……こっちは満身創痍だ」

疲れ果てていた俺の目線の先には、街が既に見えていた。よかった、ゴールだ。

「！ おい待て！ 様子がおかしい」

俺の背後でオルソンが言った。何を言ってるのかと思いい目を凝らしてみようと……。

「ツツ。市街戦の真つ最中だ。だが俺の雇われてる軍じゃねえな。というよりこれは正規軍じゃねえ。私兵か」

後ろでオルソンが何か言っているが、俺はそれどころではなかった。

「……なんだよ、コレ」

虐殺だった。必死に逃げている人々が、容赦なしに殺され、残酷にも足の遅い老人などは生きてままだま焼かれていたり、足などを撃たれ動けなくされてから、零距离で脳をぶち抜かれたり……。

凄惨な光景だった。俺はしばらくの間、街から目を離せずに居た。  
……するとオルソンが後ろから俺の両肩を掴む。

「これが俺達のいる世界だ。そして、人を殺すというのはこういうことだ。生半可な強さでは生き残れない。それはこんな修羅場で生きていけるかということなんだ。人の命はこうも簡単に消えるもの……それをお前に理解して欲しい。だからお前をここに呼んだんじやねえか？ お前の母親は」

俺は視線をそらさず、オルソンの話を聞いていた。いや、そらせなかったのかも知れない。

だが、オルソンの言葉は胸に響いていた。だが。

「俺は……戦争なんて大嫌いだ。人を殺したくなんかない！！ お前もこんな虐殺をするのか！？ オルソン！！」

オルソンはしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「俺はこんなことはしない。だが金で雇われている以上、こちら側にならないとは限らん。だがな力エデ……お前がこれを悪だと言うなら、その対極にお前の正義があるはずだ。それを貫け。分かったな？」

オルソンの言葉には、説得力があった。あたかも自分が、オルソンが掲げる正義の対極を見てきたような……。

『祖国が掲げる正義に失望して』

そうか……オルソンはもう、それを見ている、いや経験しているんだ。……俺も経験したんだ。俺は俺の正義を、貫く。



「分かったよ。ありがとう、オルソン」  
「ん」

母さんのバカ野郎。この状況になるのを知っていて俺を送り出し、あの街には居なかったらしい。もちろん森に毒蛇や巡回兵などもいなかったそうだ。クソが。今は空港。俺の修練は終わったのだ。まさか小六にして修羅場を見るとはな……。だが俺の中には、一つ見えたものがあつた。

「じゃあな、母さん。オルソンも、世話になりました」

「おう！ カエデ、一つ言っておこう」

「？」

「彼女が出来たら、お前がどこに居ようと殺しに行く」

もの凄い真顔で言われた。目には殺意すらもっている。

「……は？」

「オルソン！ 別れ際にくだらない事言ってるじゃないよ！ さて、カエデ、またね。次に会ったとき、お前が心も強い人間になってることを祈るよ！」

オルソン……もしかして残念な奴なのか？

思わず失笑してしまう。だが俺はこの男から大切なことを学んだ。

正義を貫く、俺の正義は、人の命を守る事。それだけだ。……重ね重ね、アンタには世話になったよ、オルソン。

「さて、じゃあまた。オルソンもまた会おうな！」

「ああ！」

「じゃあ、またな」

金髪の屈強な男、オルソン。俺の人生の師であった。

「とまあ、こんな感じかな」

「凄まじい世界ですわね。カエデさんが人を殺さないのも、そういうことがあったから、なのですか」

「ああ」

晴天の昼下がり。俺は空を見上げて大の字になりながら、シエラに俺の少年時代に出会った人生の師について話していた。

「ありがとうございます。貴方のお話は飽きませんわ。わたくし異世界には憧れていましたの。また今度……二人でお茶でもしながらお話しくさいな」

「分かった。悪かったな、こんな残酷な話で」

「いえ。ではまた」

そう言ってシエラは去っていく。

俺はしばらく大の字になり、空を見上げていた。

「俺は正義、貫けてんのかなあ。ゼウス、俺は異世界で新たな暮らしを楽しんでるんだ。オルソンを、お前につれてきてもらえないかなあ。別の神でもいい。オルソンは凄い奴なんだ。俺なんかよりずっとな。だからあんな悲惨な世界じゃなくて、別世界に連れて行ってやってくれ。俺の……大切な師匠だから」

俺ははまだ空を見上げている。

青空だ……雲ひとつない。

キレイだな……。

なあオルソン、お前もどこかで、同じ空を見てんのかなあ……。

### 幕間3 少年時代（後書き）

はい。

『なんでも屋ローランドへようこそ』

の主人公の相棒は、カエデの人生の師匠でしたあ！ あらビックリ。

……え？ 許可？

借用届出したから大丈夫！ はははは……

ブレイズさん、マジでありがとうございました！

く天界く

「兄さん！」

「きつみのつ手、で〜 きつり裂いて〜」

「兄さん！！」

「ん？ どうしたゼウス。ノリノリだったのに」

「カエデの師匠に一度合わせたくて地球覗いて探したのに、オルソ  
ンって人間が地球から居なくなってるじゃないか！ 兄さん何かし  
た！？」

「ああ、死んだから異世界に送った」

「げ！ 兄さんの世界に！？」

「ああ、どうした？ で、カエデって誰？」

「いや……なんでもない」

「あそ？ んじゃ。さあ、愛に焦がれた胸を貫け〜」

なんて会話があったりなかったり（笑）

#### 幕間4 ルスリアとイル教国の現状（前書き）

（報告）

・300000PV突破！！ありがとうございます！！

## 幕間4 ルスリアとイル教国の現状

カエデが空を見上げたまま、昼寝を始めてしまったところ……

「ソルキア王国の制圧は終わったかい？」

「はい、楼剣・死剣様のお二人により、戦いは終結いたしました。」

「そうか。二人は？」

「はい、お戻りになっておられます。」

「そう……じゃあ呼んで？ 五剣帝の皆で話したい。」

「分かりました……神剣様。」

神剣と呼ばれた男は、薄く笑うと窓を眺めに戻った。

先ほど、自国以外に残っている4つの国の一つを制圧できたことを知り、少々満足げなようだ。

「残るはアリアとイル教国……それから南の国サントロか。」

そう呟いていると、ノック音がした。

「どござ。」

すると4人の人間が入ってくる。

「どうしたのですか？マルス様。」

桃色の髪をした可憐な少女が、神剣に問う。

「やあミリア。それにデスも、今回の制圧お疲れ様。」

「いえ・・・マルス様のおっしゃることですから。」

ミリアと呼ばれた少女は、頬を染めてそう言った。

マルスは、白髪の屈強な男に視線を向け、もう一度口を開く。

「それに引き換え・・・ガウディ、剣を折られるってどういうこと  
だい？」

「申し訳、ありません・・・。」

ガウディは深々と頭を下げ、謝罪する。が、マルスは続ける。

「僕は、どういうことだ？と聞いている。君より強い剣豪にでも出  
くわしたかい？」

鋭い眼光に、ルスリア最強の戦士の一人であるガウディでさえも一  
瞬怯む。

「その男は黒髪黒瞳黒マントで、トンファー使いでした。ですが私  
を相手としても余裕の表情でそれどころか・・・生かしておいてや  
る、などと暴言を吐き、謎の武器を使って私の大剣に穴を開け、そ  
こに寸分たがわぬ技を入れられ、簡単に・・・。」

黙って話を聞いていたマルスは、やがて口を開いた。



「その男、珍しい容姿をしているね。でも聞いた事がない・・・もしかすると危険だな。そういえばそんな男がアリアでのクーデターに絡んでいると聞いたな。その男は確か・・・“黒虹”のカエデ・ミナモトといったか。」

「私の知る男は黒い希望と名乗っていたが・・・。」

「！？ 黒い希望＝黒虹だぞ！？ ガウディ、もう少し情報網を広げておけ。・・・だが、カエデ・ミナモト。これ以上のさばらせるわけにはいかないな・・・。アーバルトを潰した盗賊も結局残っているし、大義名分はある。アリアに宣戦布告をしよう。」

「・・・了解！」「」「」

その日マルスの顔はそれ以降、明るいものとなっていた。

「カエデ・ミナモト。久々に本気を出せる相手だと嬉しいが・・・俺の相手になるのは今のところ、ローグレスしかいないからな・・・。」

ルスリアがアリアに宣戦布告をすることが決まった。

「ローグレスくん。」  
「ティウリか……。」

城の廊下を歩いていた抹茶色の髪の子に、橙色の髪をポニーテールにまとめた女の子が駆け寄る。  
この二人はついさつき、ルスリアと内通していた宰相と將軍を片付け、アルテナ皇国を制圧したところだ。

「そういえばアリアでも宰相と將軍がルスリアと内通していたらしいな……黒虹と名乗る組織に潰されたらしいが。」

「え！？……そのことを連絡しようと思って追いかけてきたのに。」

「そりゃ悪かったな。ハツハツハ！」

高らかに笑うローグレスと、ため息をつくティウリ。二人は背中に大きな得物を背負っていた。

ティウリは槍。ローグレスは薙刀……。それもかなり長い。

「これからどうするの？」

「はああ……どうすつかな。アリアがこれ以上力をつける前に潰したいが、それよりも情報を知られたルスリアを潰したい……。俺とティウリが居ればなんとかなるかも知れないが……。」

暗い顔で言うローグレス。それにティウリが納得する。

「シャオくんが居てくれれば・・・絶対勝てる自信があったのにな。」

「ああ・・・惜しい奴だった。」

「彼の消息は分かったの？」

「そうだ。どうやらシャオらしき男がアリアの“黒虹”の一員として戦っているらしいんだ。」

「！！ シャオくんが隊長かな？あそこまで凄い人間、私ローグレスくんくらいしか知らないし。」

「・・・いや、リーダーは黒髪黒瞳に黒マントの男だな。カエデ・ミナモトというらしい。」

「・・・聞いた事ないですね。」

「そんなことはない。シャオを追いかけていた一等兵が殺気だけで逃げ帰ってきたことがあつたらう？」

「ああ、ありましたね。」

「その殺気を放った男が・・・黒髪の男だったらしい。それも魔法を弾く能力があるとか。」

「！！！？ なんですかそのチートな能力！！！？？」

ティウリが驚いて声を出す。だがローグレスはいたって冷静だ。

「あと・・・これは言っていないのか分からないが・・・。」

「？」

ローグレスが珍しく渋い顔をしてそう言った。ティウリは首をかしげる。

「黒虹には、橙色の髪をした槍使いがいるらしい。」

「フォーリ！？」

「それはまだ調査中だ。だが、年齢的にも一致する。ティウリがルスリアの陰謀でこちらに来た時、人狩りに遭った君の弟とな……」

「……もしかしたらフォーリが……？」

「だが、それを伝えてアリアに帰ってしまわないか、教皇はそれが心配で何も言わなかったそうだ。」

するとティウリの目が殺気を帯びる。凄まじい気迫だ。

「……バカにしないでつて教皇に伝えてよ。私はもうイルの人間もしアリアと戦うことがあっても、フォーリと対峙しても私はためらわずにこの槍を振るうわ。」

「……分かった。そう伝えよう。」

ローグレスは少しほっとしたようにそう言って笑った。ティウリは少し怒ったようだったが、そのまま言う。

「それで？ このあとどうするの？」

「決まってる。この時点でもう、残るはイルとルスリア、アリアの3つ。両方潰してイルが天下統一する。それが俺の夢だ。」

「そうだったね。secret unit総動員して、全面戦争で構わない？」

「とにかく、サントロは気にしないでいいんだ。それ以外はつぶす。まずはルスリアへの報復だ。」

ここに、イル対ルスリア対アリアの構図が定まった。  
両国から危険視されている黒髪の男は、昼寝の真つ最中であつたの  
だが。

## 幕間5 ケルベロス来る！

俺が昼寝を終えて目を覚ますと、やけに城内が騒がしかった。

なんだ？と思つて喧騒が凄いほうによつてみると、どうやらガンドロフが城に到着したらしい。

懐かしいな。つていうか、いつの間にレオは呼んだんだ？

ガンドロフは数人の部下を引き連れ、レオの待つ玉座へと向かうようだ。でれ、あいさつでもするか。

俺はガンドロフの進むほうに進路妨害するように立つ。するとこちらに気付いたガンドロフが叫んだ。

「カエデじゃないか！！よくぞ国を守ってくれた！話はきいてるぞ！！」

ダッシュで俺に寄ってきた。その髭面は相変わらずだな。

「ガンドロフ、元気してたか？」

「ハツハツハ！お前の口調も相変わらずだな！！みんな俺を見るとビビって敬語になるというのに！！」にしても、ランドの奴、お前に言われてから必死で肉体鍛え上げてな。俺の関所はアイツに任せてきたんだ。」

ランドか・・・アイツ、俺の言った事ちゃんと覚えてんだな。鍛えないと死ぬぞつて。

「そうか、アイツにもまた会いたいところだ。」

「・・・にしても、お前が俺を将軍に推薦したのか？俺には荷が重たいと思うんだが・・・。」

「心配すんな。アンタの関所での指揮は大したもんだ。単体でも強

いしな。問題ない。」

「そうか……。さて、じゃあ国王に会ってくる。」

「おう、またな！」

ガンドロフはそういつて去っていった。

「あ！カエ兄いた〜！！！」

アリシアが、ガンドロフを見送る俺に駆け寄ってくる。

「どうした？」

「あのねあのね、パパが来たよ！！呼んだのカエ兄なんだってね！  
ありがとう！！！」

こいつも案外親離れできてないのかもな。そう思っていると、見覚えのある緑髪の男が歩いてきた。奥さんも一緒だな。

「やあ、カエデくん。久しぶりだな。」

「ああ。公爵も元気そうで何よりだ。んで、宰相は引き受けてくれるのか？」

「そうだな。町はもう、子爵……。私の部下に頼んである。」

「すまない。ありがとう。」

「いやあ、礼を言うのはこっちだよ。何せ前国王を諫めただけで左遷されたんだ。返り咲けるなら光栄だよ。」

確かにな。元宰相、なんていう割りには若すぎるもんな。そういう

ことだったのか。

「じゃあ、頼む。レオの力になってやってくれ。」

「ハハハハ！君が国王の親友というのは本当だったか。いや、ありがとう。頑張るよ。」

公爵も去っていった。

その後二人は正式に将軍と宰相となり、ランドは北関所の長官を任せられた。

「カエ兄、このあとどうするの？」

「そうだな・・・。」

「あ、居た居た兄貴い！！！」

フォーリが歩いてきた。こちらに向かって手を振っている。

「ちょうどクロッド達が到着したぜえ！迎えに行こうぜえ！」

「アリシア、行こうか。」

「うん！」



「隊長!!!!!!」

「カエデの兄貴!!」

「カエデさん!!」

アネスとはもうあいさつを済ませたようで、元部下やタイガ、クロツドが俺のところへ寄ってくる。

「約束は守ったぜ？クロツド。」

「そうですね。ありがとうございます。・・・まさか王城に本当に招いてもらえるとは・・・。」

あれ？王城に呼べつつったのお前じゃなかった？

「カエデの兄貴！噂は広まってるぜ！？今度はアリアの將軍を軽くあしらったそうじゃねえか。さすがはカエデの兄貴ってどこか！ハッハッハ！」

タイガの大笑い。さて、アネスが俺のところに来た。

「カエデ君、重ね重ね、ありがとう。これでケルベロスも安泰。私も黒虹の一員として戦えそうだ。」

「いや。別に礼を言うことじゃないさ。それとクロツド、今城には警備が足りない。だからケルベロスはこれから城の警備だ。大丈夫か？」

「・・・仕事なら受けましょう。それに有事の際は黒虹の下部組織として働くのでしょうか？」

「そうのことだ。頼むぜ。」

するとクロッドはニヤリと笑い、俺に言った。

「義賊の本領は戦闘ですよ？任せてください。」

「おう。」

その後ケルベロスの連中は案内された西の塔へ行き、夜は再会を祝う宴をした。

これから黒虹として戦うための、絆を深める宴を……。

## 幕間6 これからのこと。

俺はケルベロスとの宴での疲れをそのままに、部屋に戻ってベッドに突っ伏して寝てしまった。

「ん？この相変わらずクソ面白くない白い空間は……。」  
「俺の部屋の説明酷すぎない！？。」

ゼウスの部屋(?)の中だった。俺の正面には相変わらず高校生染みたヤツがいる。

「？付けんなし。」

うるせえ。お前といると喋らなくていいから楽だわ。

「いや喋れよ少しくらい。」  
「だりい。」

「おい！」

……まあいいや。何で俺はここに？

「ああ、そうだね。実は歴史が少し変わった。」

！？

「これは喜ぶべきかも知れない。この10年でのルスリアの専横はなくなった。」

・・・そうか。よかった。

ゼウスは大きな茶色い本を取り出すと、パラパラとめくりながら話す。

「だが、この10年間は戦争が終わらない。」

！？ それじゃ大して変わらないじゃねえか！

「イルとアリア、ルスリア……。この三国が血みどろの戦いを繰り広げる。」

「どうすればいい!？」

「まあ落ち着けよ……。俺も焦ってるんだ。まずお前が立ち上げた組織……。『黒虹』だっけか？アレがアリアの中心勢力だ。それがルスリアの五剣帝、イルのsecret unitと激突する。」

それって確か……。機密部隊どうし？

「そうだよ。お前がそれをどうにかして避ける……。この世界のイレギュラーはお前だけなんだ。頼むぜ。」

俺だけ……。そういえば。オルソンを連れてくれば最強だと

「悪いな。俺もお前がそういうと思って、オルソンを地球で探したんだけど……。」

けど？



へえ、どうだった？

「メリッサ歌ってた。」

・・・ポルノグラフィイの？

「うん。相変わらずだった。」

どんな兄貴なんだろう。メツチャ会ってみてえ・・・。

「まあいいじゃん、兄さんの話は。さて、話題を戻すよ？この事態をどうにかするには、カエデの技量に懸かっている。頼むよ。」

頼むって・・・。俺がどうしろと・・・？

「どっち道黒虹っていう組織自体がイレギュラーなんだ。黒虹の皆で、歴史を変えてくれ！」

なるほど・・・。まあとにかくルスリアを潰せばいい話だ。イル教国はひとまず関係ない。

「そうか、分かった。後は頼むよ？」

了解。

「頑張ってるね。」

そういつてゼウスは俺の肩に触れ、俺はまた地上へと戻された。エレベーターのような感覚を味わって。

「カエデ、起きてください。」

ん？この声は・・・レオ？

「レオか？」

「起きましたね？少し行政についての会議があるので、要人だけ集めて話をしますから、後でわたくしの部屋までお越しください。」

「分かった。」

それだけ言うとレオは部屋を出て行った。レオの部屋は俺の部屋を

出たところの階段を上ればいいだけだから、特に問題はない。  
俺はベッドを這い出ると、身支度を整えて部屋を出た。

時刻は昼前である。・・・よく寝たな、俺。

廊下を歩き、階段を上る。階段途中の窓から見える景色は、特に感動するほどでもない。フォーリ達が兵士をふっ飛ばしているだけだ。無視して階段を上り、俺の部屋よりひと回り大きい扉の前に出る。ここがレオの部屋である。俺が割った窓は、もう修繕されているそうだ。

コンコン

「どつぞ。」

中からレオの声がしたので、俺は入る。

ガチャ

入って一通り目を通すと、公爵にガンドロフ、それからレオにシエラ、見たことない銀髪の女性、そしてイリスにアネスが円卓のような席に座っていた。

「ちす。相変わらず広い部屋だな。」

「落ち着きませんよ。」

レオが笑う。俺はイリスとレオの間に座る。



「さて、レオ、話の途中だったか？」

「いえ。これからですよ。それより。母上、こちらがカエデ。わたくしの親友でございます。」

「レオールがお世話になっております。」

なんと。レオの母さんか。・・・俺の親とは偉い違いだな・・・。

「カエデ・ミナモトです。よろしく。」

「ソアラ・ロルト・アリアですわ。」

ソアラさん、ね。

「さて、レオ、じゃあ話してくれ。」

「分かりました。まず、とうとう国が3つになってしまいました。残っているのはイル教国、アリア、ルスリアです。」

ゼウスが言ったとおりの展開か・・・。これからどうするか、問題だな。

「まずわたくし達が一番小国であることは間違いありません。ですが、降伏する気など全くないことは、戦争になる前から言っておきます。民のためには絶対になりません。」

なるほどな。すると隣でイリスが話す。

「まずは西の関所の強化が必要です。これからルスリアと戦う以上、イル教国も必死で地盤を築こうとすることは必至・・・だとすれば、アリアを乗っ取る以外に道はありませんから。三国入り乱れての戦になるでしょう。」

「なるほど・・・わたくしもお話してよろしいですか？」

シエラが進言する。レオが促すと話し始めた。

「まず、この国とイル教国が生き残った理由、それはルスリアの内通を防いだ事です。そこには人外の力を持つ特殊部隊がいました。こちらは黒虹、イルはsecret unit・・・これからの戦いで、三国の部隊がどれほどの実力を持っているかにより戦争が左右されると見て間違いないでしょう。そしてそれは、ルスリアの五剣帝も同じこと。この3つの実力差で、戦の行方が決まると思いますわ。」

なるほど・・・俺がどうにかするしかないか。

イリスが話す。

「まずはルスリアの氣勢を削ぐことです。我々黒虹がアリアの東方のルスリアを潰しましょう。そして大陸の東端を全てアリアのものとして、地盤を築くことができます。その間、黒虹の残る兵力でイルと北のルスリアを牽制すれば攻められても不安は少ないですし。」

「なるほど・・・それが良いですね。その間わたくしとシエラ、公爵で内政を徹底します。奪い取った土地に関しても迅速に管轄できるようにしましょう。」

「わかりました。」

「了解ですわ。」

まずこちらはルスリアの東を奪う、ということが決定した。

## 幕間7 シャオの魔導教室！2

あの会議のあと、久々に黒虹メンバーに召集をかけた。そして今、黒虹本部と銘打たれた西の塔で、軍議を行っている。

「とにかく、これから世界単位の戦いになるらしい。アリアの命運は俺達が握っているといっても、過言じゃないんだ。まず、戦力強化がしたい。皆も王城での生活に慣れてきただろうし、ちょうど少し暇な時期だと思う。だから、シャオ。もう一度魔導教室を開いてくれないか？」

俺はシャオに目を向ける。するとシャオは一通りみんなを見て、口を開いた。

「全員魔法を使える才能があるでござるよ。そして驚きなのは、全員それぞれ違う属性の波動があること。ドレイク殿が火、フォーリ殿が風、イリス殿が土、アリス殿が木、キアラ殿が水、アネス殿が雷、そしてカエデ殿が闇・・・残る光は拙者が使える、と。ずいぶんバランスのよいメンバーでござるよ。」

そういつてカラカラと笑うシャオ。確かに凄いな。ひとつも被らず・・・シャオはまあ置いといて、8属性全部が揃っているのだ。

「というわけで、拙者が後で、使えるであろう魔法をリストアップするでござるから、それを元に練習するでござるよ。イリス殿とドレイク殿も、前よりルナの波動が強いでござるから、別の魔法も使えるでござるよ。」

少し経って、リストアップされた魔法を見る。

ドレイク、フォーリ、イリス、アネスの4人は、使える魔法が3種類ずつらしい。

キアラはシャオの1属性と同じ数の魔法が使えるそうで、6つ。エンシエントスペル組・・・俺とアリシアはなんと8つも使えるそうだ。ってか通常魔法はだいたい、下級魔法が2つ、中級が3つ、上級が2つ、古代呪法が1つの合計8種だそうで、俺とアリシアは1属性全ての魔法が使えるらしい。さすがエンシエントスペル使用者ってところか・・・。

さて、あとは個人練習。

俺がまず使いたいのは・・・っと。  
どれ、

『下級：ヴァニツシュボール・イビルゲート』

『中級：アンティマジック・ダークフォース・ブラックカーズ』

『上級：ダークネスウェイブ・ヘルサザンクロス』  
『古代呪法：ゼーブル・ファー』

リスト自体が暗い気がするの俺だけか・・・？  
ってか古代呪法怪しすぎるだろこれ！怖！？

まあいいや、とりあえず、下級の二つとブラックカーズは覚えてんだ。中級は補助魔法主体らしいから、上級の攻撃魔法どうにかするか。

練兵場に一人、たたずむ俺。とりあえず上級魔法の一つ、ダークネスウェイブをやってみよう。

標的がないのは残念だが、惨事になっては困るので建物のないほうに手を向けて叫ぶ。

「ダークネスウェイブ！！！」

ズガガガガガガガガガガ！！！！！！

なんだろう、闇の波動が津波のように、俺の手をかざした方向に襲い掛かっていったんだが・・・

K O E E E E E E E E E E E

しかもその津波が通った場所が、いや比喻表現なしに消えてるって無いよ！練兵場が消えてるよ！

シャオに防御壁張ってもらってて助かった・・・。多分、これシャオの防御壁が解けたら直る。

さて、次行ってみよう！！さて、ヘルサザンクロス。何々、両腕を対角線に振り下ろしながら唱える？つまり最後はクロス状態ってことね。

今度は空高く飛び上がり、地面に向かって放つ。  
さあ行くぞ、

「ヘルザザンクロス!!」

クロスした両腕から、×印をした黒いものが、巨大化しながら地面に向かって飛んでいく……そして、

ズガーーーーーン!!!!!!

土煙の後には……おうおう、とんでもない魔法だな。十字型に地面に穴が開いてるよ。切り裂く呪文か？

なるほど、上級呪文はなかなか恐ろしい。

……古代呪法、やってみたいなあ。

うん、ちよつとだけなら良いよね？

魔が差してやってしまった。今は後悔している。地面に手をかざして、叫んだ。

「古代呪法!ゼーブル・ファー!!!!!!!!!!!!!!」

ドゴオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!

俺の手から漆黒のトンでもなく太いレーザービームが飛び出した!  
!家一件すっぽり入るよこのレーザー!  
しかも止まらない!!このまま操作できるな。  
悪戯心でなき払う!



## 幕間8 宣戦布告！！

「いやあ、まったりだあ……。」

「ほわほわするでござるよ……。」

「美味しいものですねえ……。」

現在俺とシャオ、レオの三人でまったり緑茶タイムを満喫中。

場所はなぜか、俺の部屋である。部屋の窓際にある4人席に腰掛け、男三人でほわほわと……。

コンコン

……無視。

コンコンコン

……お茶の邪魔するな。

コンコンコン……

……ん。収まった。

ガチャ。

おい、誰が入っついていい「三人ともいらしたのですね！？何故ノックしているのに返事も何もないのですか！？」……と言った？  
シエラがお怒りのご様子で立っていた。

「何か御用でしょうか……？」



レオがまったりムードのままシエラに言う。

「全く、男三人で何をしているかと思えば、お茶会ですか！．．．ん？そのお茶はなんですか？わたくしとしても一王族としてとても興味が．．．じゃない！！お兄様！！大変ですよ！！」

「これは緑茶という、イルのお茶でござるよ．．．。」

「緑茶というのですか．．．いい香りがしますね．．．って違う！！大変ですって言うているでしょう！！？」

「一口いかがでござるか？」

「そうですね．．．いただきます．．．ずずつ。甘みの中に渋みがあり、まるやかな味わい。素晴らしいお茶ですわ．．．じゃなくてえ！！！シャオ様いい加減にしてください！！！」

あ、なんだシャオからかったのか。さて、そろそろくどいから．．．

「シエラ、どうした？」

「え？あ、失礼。お兄様、ルスリア帝国がアリアに宣戦布告！イル教国がルスリアとアリアに宣戦布告！つまりアリアは双方の国から宣戦布告されたことになりました！！！」

マジか。つっ—かイルは地盤固める前にルスリアに挑むのか。それでアリアも片手間で潰せると？

にしてもアリアヤバイな．．．ルスリアとイル、両方相手にしなきゃならねえのか。

「．．．まずいですね。カエデ、黒虹の準備は出来ていますか？」

「．．．つまり？」

「ルスリアの東を制圧するチームと、北西を牽制するチームに分け、

まずは地盤を築かねば。」

「そうだな。まずイリスとシャオの二人は、制圧チームに入れる。フォーリも姉貴とは戦いたくないだろうから、制圧チームか。後は俺が行こうかな。牽制チームは残りの、ドレイク、アリシア、アネス、キアラに任せる。」

そういうと、レオは頷いた。あ、そうそう。

「それが終わって東の地盤が築けたら、一回バイゼルから海に出たい。」

「？ それは何ででしょうか？ 黒虹全員で？」

「ああ。だから内密に頼む。」

「分かりました。」

シャオは頭に？マークを浮かべていたが、気にしない。  
今後の俺の方針が、脳内ではもう決まっていた。

「イルの宣戦布告は気にせず、ルスリアにはこちらからも布告してとにかくこれから、世界大戦勃発だ。」

「了解です！ さっさと終わらせて、この世界に安定を戻しましょう  
！！！」

## 幕間8 宣戦布告！！（後書き）

幕間はこれにて終了です。次に第一章までのキャラクター紹介をいれ、その次、第61部から第二章が始まります。

これからもどうぞ、とあものをよろしくお願いします！！！！

キャラクター紹介 〓 黒虹 + 〓 (前書き)

シェイドという人物が出てきますが、作者のことです。

キャラクター紹介 く黒虹+

「ようカエデ!!」

「ん? な... シエイドじゃねえか!! 久しぶりだなあ!!」

「ああ、高校からお前が突如消えたって、大騒ぎだったぜ?」

「... なんでお前がここに?」

「親友だろ? お前に会いたくて来たんだよ。」

「会いたくて来られる場所じゃねえだろ!! どうやってきたんだよ

!!」

「... 作者だから?」

「へ?」

「いや、作者だから。ちなみにお前を異世界に放り込んだのも俺。」

「... にわかには理解できないんだが?」

「いやあ、やっぱり主人公はカエデでよかったあ!」

「てめえの仕業で俺はこんなところにいるいいいい!!?」

「うん。そいでこれからキャラクター紹介するから、んじゃまたな。」

「

「おうまたな... ってちゃうわ teme 半殺しにしてやるコルア!!」

!!」

「“半”ってところがカエデらしいね。さて、キャラクター紹介い

きましよう!!」

「無視すな teme!!」

「あとでゆっくり話そうぜ。今は少し忙しいから。」

「分かった。地球の話も聞かせるよ。」

「はは! 昨日チャリでマツクのドライブスルーやったら怒られた。」

「相変わらずバカだなお前。」

カエデ・ミナモト 黒虹の黒

ゼウスに頼まれて異世界で活躍する、本作の主人公。

両親を傭兵に持ち、その仕事先で生まれた。幼いころから父親に拳銃とトンファアの扱いを叩き込まれ、母親からは格闘術と日本語を教えられた。

しかし父親は、カエデが5歳の時に戦死。その後母親はカエデを日本に残し、傭兵を再開する。

小学校時代のカエデは、類稀な格闘センスとその叩き込まれたトンファア術で、逆らった奴を片っ端からつぶすトンでもないガキ大将だった。邪魔する奴は殺す、とまで言っていたのは小学校6年のころ。その時のカエデは、一般人には手も付けられないほどの問題児になっていた。

母親から連絡が来たのは、卒業式の前日。その春休みに、カエデの人生観はガラリと変わる。

人生の師、オルソンとの出会いである。

そこでまた体を鍛えなおされ、そして見た虐殺により、カエデは人の数倍人の命を重く見る人間へと成長する。

中学時代はその後、元小学校の連中とも次第に馴れ合い始め、別の小学校から来たシェイドと出会い、考えをともしにする親友として互いを認識しあうようになる。

そして高校。近ければどこでもいい、と思って入った進学校で、中学とは違い人生の空白を感じた。

そんな時、に出会った先輩と作ったクラブチームで楽しく過ごすのだが、とある日の練習帰りに死亡、ゼウスと出会う。思考としては、どちらが人の命を多く救えるか・そのためには自分の犠牲をもちとわれない性格をしており、それが周りの支持を得るのだろう。

イリス・ハーミット

黒虹の黄

黒虹の軍師。

カエデが異世界で最初に出会う仲間。

家が代々戦争に携わる家柄で、二人の兄も戦闘のセンスを買われ武者修行へと他国に旅立つ。

女としてバカにされることが多く、それを見返すため軍師となり、戦女神と称されるまでになるが、そこで人を殺めることしか出来ない戦争というものを知る。そして二度目の召集に応じて移動する馬車が山賊に襲われ、命の危険に見舞われるが、そこでカエデと出会う。

救われた恩、と言って旅に連れ出すが、実はその時から少しカエデに気があった。

そしてともに旅をするうち、カエデの人間性と思考回路に惚れ、恋焦がれるようになる。

性格は基本しっかり者で常識人だが、腹黒い一面もあり、カエデに一途な姿をからかわれる時もある。

ドレイク・ベルナス

黒虹の赤

黒虹の近接部隊。

故郷の村がルスリアとの国境にあり、ドレイクが小さい頃に焼き払われる。自分が強ければこんな事にはならなかった、という自責の念から剣を振るうようになり、やがて開花した才能により、アリア一の剣豪“焰龍”とまで言われるようになる。

そして戦争を嫌うドレイクが、前アリア王に召集され、仕方なく戦争に参加した理由は、そのほうが早く終わるから。それでもたたくさんの人間を殺めてしまい、一人全く歯が立たなかった人間がいたドレイクは、また武者修行の旅へと戻る。そして、故郷の村に花を供えにいった帰りに挑まれた戦いに勝利したところで、カエデと遭遇した。

剣を折られ、勝つまでついて行く、と言ったドレイクは、カエデに戦争の時勝てなかった男レベルの技量を感じていた。

現在黒虹での最高のいじられ役にして、フォーリと並ぶバカ。だが今のそんな暮らしを、本人は楽しんでるようだ。

シャオ・シルヴァンス      黒虹の青

黒虹の魔導士。

幼少から神童と呼ばれ、4つの波動を持つ魔導士。

その後我流で鍛え上げ、6つの波動を操るまでになる。そしてそのままイル教国の魔導部隊隊長にまで上り詰め、ルスリアから攻め込まれた際3つの古代呪法を発揮し、実質4人で軍を追い返し“大魔道”と呼ばれるようになる。が、国王の豹変に気付き、黒幕と王を殺害。

残っていた敵国ルスリアとの内通者の手により追われる身となるが、サンゼルスシティでカエデ一行と出会い、そのまま仲間となる。

今もまだ自分の部下・・・副隊長であった男の行方を案じているが、黒虹を抜ける気はないようだ。

普段はまったりとした古風な青年で、騒ぎがあっても冷静なところ



をみせる。だが魔法とアリシアの脅威に関しては敏感なようで、慌てた一面もある。

フォーリ・バイカウント      黒虹の橙

黒虹の近接部隊。

幼いころから姉の槍術をまね、懸命に姉の背中を追う。

だがルスリアの陰謀が渦巻く姉のスカウトにより、村人とともに人狩りの目に遭う。そこで晒した恥を払拭すべく、魔物の皮で作ったフードを被り、顔を見せないようにした。

そこで鬼のように鍛えられ、もともとの槍術と組み合わせてルスリアの幹部にまで上り詰め、自由を得る。ルスリアへの忠誠などまるで無く、残っていたのは復讐の念。そこでの戦いぶりが復讐のオーラしかなかった事から、“最凶の槍使い”と称された。

カエデー行に出会うまで、ルスリアの民というだけで人々を傷つけていたが、完膚なきまでに叩きのめされて目が覚める。そしてその後早くカエデを見返したい気持ちを抑えながら、傷つけた人々に謝罪をして周り、人の命の重さを改めて知り、フォーリの胸中はカエデに謝罪したいという気持ちに変わる。そしてひとまず自分の村へと戻った際、偶然再会したカエデを兄貴と慕う。

少し語尾を延ばす口調が目立つ。ドレイクと並ぶバカであり、イリス一筋とは言っていたものの最近ではキアラのことも狙っている。ようするにその年代の女性なら誰でもいいのでは？

アリシア・クロノ・イグニシヤス      黒虹の緑

黒虹のサポート役。

宰相の娘として生まれ、物心つくまで王城で過ごす。

その時の国王に言った言葉が問題視された父が左遷され、もともとの家がある地、イグニシヤスの町へと引越すことに。

ここでしばらく暮らすうち、父から時空魔法を教わる。コレがエンシエントスペルだと聞いた時も驚いたらしい。アリシアには才能があり、すぐにソレをモノにする。そして投げナイフとダガーナイフとの併用術を叩き込まれ、現在の戦闘スキルに至る。

町に移ってから数年後、父から黒い希望という組織の噂を聞いたその日に人狩りを見つけ助け出そうとするが、助けるべき人の数が多すぎてあえなく失敗。奴隷として送られたブラックマーケットでカエデと出会う。

性格は明るく好奇心旺盛。その元気に一行が笑顔になったことは多く、また年相応に色恋沙汰も大好き。イリスとカエデの恋路を、満面の笑みで見守っている。

キアラ・クレスタ      黒虹の藍

黒虹の医師。

治癒魔法の使い手の家に生まれ、凄まじいルナに家族が驚いた。それを道具として使用しようとする父親に反抗し家を飛び出し、辺境の村に町医者として開業する。

数年経ったときに現れたカエデたちと出会い、その後町が臨時徴収の憂き目に遭う。

必死でみんなを治療するも、途中で精根尽きてしまい、カエデのスカウトを断る。

そしてしばらく放浪の旅を続け、東の関所で苦しんでいた兵を助けたのが始まりで関所づとめをすることに。それからしばらく経ち、カエデと再会すると、すんなり仲間入り。治癒魔法以外にも医療術に長けた医師で、水魔法も使役する。

精神年齢が低い・・・元気いっぱい、毎日楽しく動く女の子。これ

が時にイリスやカエデを悩ます種となるのだが、本人は気付いていない様子。そしてなぜか、男の扱い方を分かっている悪女な一面もみせる。

アネス・フィードウッド      黒虹の紫

黒虹の遠距離部隊。

弓の使い手でその実力は人外。貴族の令嬢であったが、父親の掲げる正義によりその貴族は義賊となる。そこでかき集めた仲間達に育てられ、その頭領にまでなってしまった。リーダーシップをとることができ、なかなかの常識人。だが“女の子”をどこかに忘れてきたようで、口調だけ見ていると男にしか見えない。カエデの誘いを断る理由は、ケルベロスを手放すわけにはいかないから。

そこにもリーダーとしてのアネスの技量が見て取れる。黒虹となって日が浅いが、バカ二人の仲裁をしたり、アリスアに連れられて色恋沙汰に首を突っ込んだり・・・意外と暮らしを楽しんでいるようだ。

レオール・アルス・アリア      アリア国王

父親が凄まじい暴君で、戦争好きの男であったためか、それをよしとしないこの人格が出来上がった。礼儀正しく謙虚であり、国王としての内政の実力も申し分ない。惜しむらくは、極度の戦争嫌いであり、カエデが現われるまでは外政を貴族派に押されていた。

だがカエデを手に入れてからのレオールの進撃ぶりには目を見張るものがあり、国王の器を遺憾なく発揮している。

カエデを親友と言っており、確かにこの二人なくして200年後の世界は成り立っていないことから、この二人は最強の親友と言

えるだろう。

「終わったぞ！」

「そうか。じゃあ遠慮なく 創造 ピエトロベレッタM93」。

「えゝ！？ちよ・・・なんで俺ぎゃああああ！！」

「当たり前だバカ野郎。」

第51話 始まりの夜明け（前書き）

これより第二章のスタートです！！

## 第51話 始まりの夜明け

歴史は今、大きく動きだそうとしていた。

イル教国では、大魔道による国王の殺害を皮切りに、secret unitが將軍と宰相を始めとする貴族らを一掃。教皇の新たな政治とともに、アルテナ皇国を飲み込むと、ルスリアへの復讐と、地盤作りのためにアリアとルスリアに宣戦布告。

ルスリア帝国は、とうとう9つの国の併合を果たし、天下統一の機会を眈々と狙い、障害になりそうなアリアを除くべくアリア王国に宣戦布告。

アリア王国は内戦の末貴族派を撃破。世界に仇名すルスリア帝国を倒さんと、牙を剥きつつイル教国を牽制していた。

・・・アリア王国はこのとき本来ならばルスリア帝国に併合されるはずであった。歴史を変えたのはゼウスいや、彼が放ったイレギュラー分子による組織だろう。その名も・・・

黒虹。

これからゼウスの歴史書によれば、怒涛の戦国時代に突入していく。  
それは、黒虹VSsecret unit・魔導隊VS五剣帝・四  
聖獣の構図と言っても過言ではないだろう。

さあ、その幕開けだ！！

くカエデsideく

「スコット兵長、これから俺達は制圧に向かう。この砦は不要になるから、お前らも一緒に来い！」

「正気ですか！？・・・まあ貴方のことですから正気なのでしょうが。分かりました。砦の兵5000名を直ちに集めます。」

「お願いしますね？」

スコットが駆けて行く。

ここはキアラが仲間になった東の砦、その見張り台の上である。スコット兵長に頼んで制圧のため、全軍始動の声をかけてもらった。まずはここに居る黒虹の黒、橙、黄、青の四人でルスリアを東の端まで制圧し、アリアの地盤を作る。それが今回の任務である。

「それにしても、牽制班の皆さんは大丈夫でしょうか・・・？」

「さあな。ま、信じて頑張るしかねえよ。」



・・・数日前・・・

「ふわああ〜・・・。」

「あくびをしている場合ではないでしょう？カエデさん。」

ここはアリア王国王城西の塔・・・黒虹本部。

今この部屋には黒虹のメンバーが集結していた。

「えと・・・どこまで話したっけ？」

「まだ何も話してません！！」

俺の隣でイリスはお冠である。大会議室の中、俺がリーダーとして話している。・・・いやこれから話すんだっただな。

「ええつと・・・まず、イル教国から宣戦布告が来た。それからルスリアからもだ。俺達は完全に包囲された状況にある。」

「おいおい、洒落になんねえぞお？」

フォーリが若干汗をかきつつ言う。するとアネスが頬杖をつきながら、

「で、私達はどうするんだ？カエデ君。」

「レオと話して決めたことだが、まずはアリアの東を一掃する。この大陸の東は全てアリアのモノにするんだ。そうすると地盤ができれば、ルスリアとも対等に渡り合える。」

「なるほど、ではルスリアの東端・・・つまりアリア東の関所からルスリアの東を制服するということですか？」

さすがはイリス。飲み込みが早い。

「そういうことだ。そこで、制圧班と、北西の牽制班の二つを作りたい。ま、もう決めてあるんだがな。」

「牽制・・・かあ。確かに黒虹全員で制圧に向かうとその間に攻め込まれたら・・・。」

「そうですね。まだ内戦から国力が十分に回復したわけではありませんから、苦戦は必至でしょう。」

アリシアが納得した表情で言った。

「レオがどうにかしてくれから、5ヶ月も経てば国力は回復する。ま、俺は正直その発言に驚いたがな。信じることにした。」

地球の戦争の話で言ったら、5ヶ月で内戦から国力を戻すなど到底ムリな話だ。

「・・・話を戻すぞ？まず牽制班だが、アネスおよびケルベロス、ドレイク、アリシア。キアラも、多分ケルベロスにけが人が出るだろうから残ってくれ。」

「お、俺もかよカエデー!!」

ドレイクが不満そうに言った。ようは制圧に加わりたいのだろうが・・・。

「近接部隊がないのは辛い。頼む、こいつらを守ってやってくれ。」

「

「・・・そんな風に言われたら頷くしかねえけどよ。」  
「悪い。・・・さて、制圧チームは俺とイリス、フォーリにシャオだ。さつさと制圧して、合流しような？」  
「「「「「「了解!!」「」「」「」」

・・・えんど・・・

その日の内に準備を済ませて出立したものの、その後の連絡は取っていない。俺とアネス、イリスとドレイクは魔道通信器を持っているし、イヤリングが場所を教えてくれるので問題ないのは分かっているのだが・・・。だからイリスの心配もムリないよな。そんなことを思っていると、スコット兵長が戻ってきた。

「全員の招集が終わりました。外でカエデ様から号令をお願いします!!」

「分かった。行こうイリス。」  
「はい。」

見張り台の上に、追い風が吹いた。良い香りがしたような気がする。それは後ろにイリスが立っていたからか、それとも・・・これから  
の戦いへの吉兆なのか・・・。

くマルスsideく

今日も僕はいつものようにつまらない日常を、美味しい紅茶とともに過ごしていた。  
すると、

コンコン

「誰だい？」

「は！報告があります！一般兵の者であります！」

若干警戒するも、扉の向こうから感じる気は、一般兵のソレだ。油断していても負けはしない。

「入って良いよ。」

ガチャ・・・。

白い軍服に身を包んだ兵士であった。

「マルス様！アリア王国がルスリアに宣戦布告してきました！！」  
「そうか・・・アリアはどう出るつもりなのかい？」  
「ただ今連絡が入ったところによると、ルスリアの南東方面・・・  
ガウデイ様が敗北したあの砦から攻め込む模様です。」

紅茶をくゆらせながら、ふと考える。

黒虹が来るのかな？本来ならその隙に攻め入っちゃうのもありだけど・・・僕はカエデ・ミナモト・・・黒虹リーダーの実力が知りた  
いな。

ルスリアに攻め込むのにアリアの一般兵だけな訳が無い。そうだと  
すれば黒虹が来る事は決定事項・・・カエデ・ミナモトがいる可能  
性がかなり高いね。

机においてあつた愛剣3本を腰に差し、僕は部屋を出ることにした。

「死剣・・・デスを呼んで？あとは玄武も。」

すると報告に来た兵は驚いて言った。

「四聖獣も使うのでございますか？」

「うん。だって、未知数の相手だよ？わくわくするじゃないか。違  
うかい？」

「は、はあ・・・。」

僕は無視して歩き出した。この高揚感、強者としか共用し得ない。  
僕はプロンドの髪を肩に流して廊下を進む。会議室に向かうのだが、  
心はもうルスリア南東に向かつて全力ダッシュしていた。

（マルスside out）

（ローグレス side）

和室にて精神統一をしていた俺のところに、兵士が転がり込んできた。

何事かと思う。正直ビククリしたぞ。

「なんだ？」

「ローグレス様！我々の布告に、アリア、ルスリアともに応じました！」

！　そうか。では遠慮なくアリアを潰して糧としよう。その上でルスリアをつぶすか。

「そうか、分かった。教皇様は？」

「は！ローグレス様のご意向で全て、兵を動かしても良いそうです。」

「よし！これで遠慮なく・・・待てよ？アリアを攻めている間にルリアに攻め込まれるのはまずい。最悪マルスの野郎が攻め込んだ場合、太刀打ちできるのは俺だけだから・・・。  
ツツ。仕方がない。アリア攻めはティウリのチームに任せるか・・・。

「ティウリを呼んでくれ。」  
「は！」

そういつて兵士は駆けていった。  
・・・しかし、黒虹、か。シャオだけでも厄介なのに、それ以上の奴・・・カエデ・ミナモトがいると聞く。危険極まりないな。願わくば、我らが夢の障害とならん事を願うばかりだ・・・。  
涼やかな鳥のさえずりを聞きながら、俺はそう感じていた。

（ローグレス side out）

世界大戦勃発、前日のことであつた。



## 第52話 制圧任務開始！！（前書き）

（報告）

- ・ 死の恐怖さん、感想ありがとうございます！
- ・ きつねごさん、感想ありがとうございます！
- ・ お気に入り件数502件！皆様本当にありがとうございます！これから頑張ります！！

## 第52話 制圧任務開始！！

「どこを制圧すればいいんだ!？」

「まずはここを東南東に行った海岸沿いの、ルスリア最南端の関所を制圧しましょう! 続いてそこから北北西に向かって砦を制圧し、最後にそこから真つ直ぐ東に向かった関所を制圧。この3つが無くなれば、ルスリア東南方面の制圧任務は成功です。」

俺達は騎乗して、道なき荒野を全速力で東南東の関所とやらに向かっていた。隣を走るスコットがいろいろと教えてくれる。

「なるほどな、まずはその制圧か。そこまであとどのくらいだ!？」

「だいたい昼前には到着します!！」

「安心しろ、3分で片付ける。」

「3分?」

今は午前中、だとしたらあと1時間足らずで着くんだな。・・・そういえばこの世界、数字の概念はあっても時計って代物がないんだっつたな。

「お前が180数える間に片付けるってことだ。」

「そんなですか!？」

「黒虹なめんじゃねえぜえ!？」

隣の馬からフォーリが口をはさんでくる。まあ確かにな。さて、

「イリス! 作戦は!？」

後方からイリスの馬が疾走してくる。つてか俺も馬慣れたなあ。

「まずはカエデさんがジャンプして、関所の上に立って敵兵を壊滅してください。その間にシャオさんが城門を叩き壊して全軍突入。敵将の打破はフォーリさんにお任せします。」

「了解!!!」

そういえば。

「なあスコット、南の砦を片付けたら、お前から5000の兵だけで北東の砦に行け。その間に黒虹が西のほうの砦を潰して、そちらに向かう。」

「・・・相変わらず無茶ですね。さすが黒虹でしょうか？分かりました。まずは南の関所を潰しましょう!」

段々と潮のにおいがしてきた。・・・近いな。もうじき南の海、イグニシヤスとかの北東の海に着くな。

「見えました!あの関所です!」

「ほう、アレか。じゃあまず作戦通り・・・シャオ、いくぞ!!」  
「承知!」

俺とシャオの馬だけが前方に突き出る。俺は振り返って叫ぶ。

「シャオが城門ぶち壊したらお前ら突入して来い!いいな!?!」

「おう!!!」

全軍の声が響く。よし、士気は充分だ。・・・ま、一度実力は見せてるしな、ガウディ戦で。

俺とシャオの馬だけがどんどん先へ行く。後ろのほうでは・・・

「黒虹かつこいいいな……。」

「ああ、俺はカエデサンに一生着いていきたいぜ……。」

「あの人の戦いぶりがみてえ……。」

などという声かしていたそう。それを聞いたスコットはため息をついていたのかなんとか。

関所に向かって疾走する俺に、矢が次々と飛んでくる。射撃場所は・  
・あの上か。俺らが攻めて来ることを知ってる情報網は大したも  
んだが……それだけじゃ俺達は止められねえぜ？

「よし。」

関所の前にたどり着いた俺。シャオは既に別行動っつーか待機だ。俺が射撃兵を壊滅させないと、いくらシャオでも怪我するかもだからな……。ま、心配はしなくても良さそうだが。

さて、ざっと10メートルくらいか……。チョロイな。

ゼウスチート発動！

足に力を込め、思いつきり飛ぶ。おお高い高い。

シユタ……。マントが遅れてふわりと降りる。

関所の上に降り立った。兵士たちがビビって震えている。だいたい100人くらいか。

「き……。貴様、何者だ!？」

俺はニヤつくのを必死でこらえながら、

「ああ?……。黒虹。」

ドス黒い笑みを浮かべる。

「く……。黒虹?ひ、ひいい!!緊急事態!!黒虹が来たぞおお!!  
!!!」

兵士が叫んで皆に知らせる。

さて俺は、飛び上がって宙を舞い、ターゲットを関所のある一点へと定めると両腕を振り上げ、思い切りクロスしながら振り下ろす。

「ヘルサザンクロス！！！！」

漆黒の十文字が、巨大化しながら関所に突っ込む！

ズガガガガガガ！！！！

うわああああああああ！！！！

誰もいない場所を狙って打ち込んだ鋭い十文字のおかげで、関所は半壊を始める。もちろん、上に居た連中は落下・・・ま、死にはしないさ。俺は再び足場のしっかりしているところに舞い降りる・・・  
・この兵力はどの程度なんだろうな。またたくさん兵士が現われた。

「や、闇魔法・・・。」

俺を囲んだうちの一人が震えた声で呟く。さて。

「俺は“黒虹の黒”カエデ・ミナモト。無駄な殺生は嫌いだね、自らの欲望や忠誠で戦っている人間以外は殺したくないんだ。さ、今の状況を見て、逃げるか、向かってくるか・・・選択しな。」

そう言うと、兵士たちはかなり動揺しているようだ。もう一押しか？

「・・・現にこの前ルスリアがアリアに攻めてきたとき、兵士は死んだか？それが一番の証拠だぜ？」

「お、俺は逃げる！！」

「俺も！！」

「俺もだ！！」

次々と俺の周りから兵士が逃げていく。ここには指揮官はいないのか？

まあいい。そろそろシャオが仕事を始める頃だろう……。

俺は赤く染まり始めた空を見て、そう思った。

「カエデ殿は……相変わらず派手でござるなあ。ヘルサザンクロスも、完璧にモノにしているとは……。さて、拙者も動くべきでござるかな……。少なくとも、お茶をすすっている場合ではないでござるうな。」

シャオはそう呟くと、湯のみを仕舞って茂みから出た。正面には、  
アリア王城並の城門がそびえている。それを少しの間じつくりと眺  
めると……。

「この程度であればチョロいでござるな。さて、古代呪法　メテオ・  
ブラスト!!」

シャオの上空が赤く染まり、そこから一つの家ほどもある隕石が次  
々と城門に降り注ぐ。

ヒュードゴオン!!ヒュードゴオン!!

シャオが静かに右腕を上げると、空はもとの青空に戻り、眼前には  
跡形も無くなった“関所跡”が存在していた。

「まあたやりすぎたでござるよ。」





「俺死に掛けたぞ！メエエエエエ！！！！」

「いやあ……これでも加減したのでござるが、予想以上にこの関所がもろくて……」

「なんじゃこりゃああ！！！！」

俺とシャオの後方、俺達が来た方向から、スコットの声がした。俺達が振り向くと、そこにはイリスをはじめ5000の兵士たちが到着したところだった。

「ごめん、このバカがやりすぎた。」

「申し訳ないでござるよ。」

そう言うと、やっと俺らの存在に気付いたスコットが青ざめる。

「あれ！？何かあったのかと思って慌ててきたら……二人でやったのですか？」

「だから、コイツがやりすぎたんだよ。」

「この関所がもろいのが悪いでござるよ。」

もうシャオは開き直っていた。兵士たちを見ると、みんな

K O E E E E E E E E E E

つてな顔でこつちを見る。さて、仕事は。

「な？スコット。180経たなかったら？さてみんな！この“関所跡”から人が探してやれ。こいつのせいなのに申し訳ないが……頼むわ。」

「いや、数えてはいなかったが……」

「……了解！！」「……」

みんななぜか震えた声で返事をする、ダッシュで関所跡に向かっていった。  
残るは黒虹とスコットである。

「おおい！シャオ！俺の出番がないぜえ！！」

「関所がもろ「んなわけあるか！！」・・・すまんできてるよ。」

フォーリが食って掛かっている。まあしょうがないよな。

「さて、スコット。俺達はこのまま北北西の砦に向かおうと思う。

この処理が終わり次第、当初の予定通り、お前らは北東の砦に向かってくれ！」

「了解！」

「おい、みんな！！いくぞ！！」

俺はメンバーに声をかけ、みんなで馬にまたがる。そして

「じゃあまたあとで合流しよう！！」

そうスコットに叫ぶと、俺達は疾駆して行った。目指すは北西の砦だ！！

「マルス side」

馬にまたがつて今、草原をかけている。目指すは次にアリアの標的になりそうなドリドの砦。ルスリア南東・・・東端の砦だ。南の関所は間に合わないだろう。だが関所の北西の砦も間に合うか怪しい。なら最東端のドリドに向かえば間に合う可能性はある。

にしても・・・首都から遠い南東から狙うとは。戦女神・・・デスの妹の仕業か？

まあいい。とにかくこの不利な状況をひっくり返すんだ。

カエデ・ミナモト・・・楽しむ相手であることを祈ってるよ？

僕は腰に下げている3本の剣を眺めながらそう思った。すると横から声がする。

「マルス様・・・わざわざ俺を呼んだ意味は・・・？」

となりで馬を駆っている死剣・・・デスである。

「ああ、アリアといえば君の生まれ故郷じゃないか。それに・・・



〈ローグレス side〉

テイウリたちにアリアへ攻め込むよう言ったが・・・何か不安だな。マルスはこちらへ来るのだろうか。来ないとしたら？

・・・待てよ？

来ても来なくても、南は砂漠だし西は海・・・北さえ気にしていれば平気ではないか？

残りの secret unit・・・俺の部下でルスリアに攻め込むことも可能だ。

よし・・・ルスリアに攻め込もう。

「誰か!!！」

ガチャ

「お呼びですか？」

「うむ、我が部下を結集せよ。」

「は！」

・・・マルス・・・今度こそルスリアを潰してやる。

↳ローグレスsideout

↳テイウリside

50000の軍を連れてきたは良いけど、もし黒虹が私達みたいな部隊だったら・・・兵の意味なんてないのよね。

事実上、secret unitのメンバーだけで戦うしかないか。にしても、フォーリ・・・無事でいてくれたら嬉しいけど、やっぱり戦いたくないなあ。

聞いた情報では、毛皮のフードを被った橙髪の槍使い。フードは知らないけど・・・フォーリだといいな。でも黒虹のメンバーだとし

「たら、戦うしかないのね？  
イルに連れて行きたいけど、聞いた情報ではその黒虹のリーダーを  
“兄貴”と慕っているとか。  
ムリよね……。」

「NO・II<sup>ッ</sup>？」

隣で声がする。こうしてコードネームで呼ばれると、仕事しなきゃ  
！って思うからあまり好きではないのだけれど。

「どうしたの？」

「このまま行けば夕方にはアリア西の関所にたどり着きます。情報  
では、黒虹が待ち構えているとか。」

！?……そっか、黒虹も勢力を分けているのね。

カエデ・ミナモト、それにフォーリはいるのかしら……?

「分かった。NO・VI<sup>シックス</sup>、貴方も気を引き締めて。夕方、到着した  
らそのまま攻撃とはいかないけれど、あちらから来るかも知れない  
わ。」

「分かりました。」

スキンヘッドのNO・VIはそのまま向こうへと行った。

黒虹……一触即発はいつかしら？



＼ティウリスィデオット＼

＼アリシアside＼

カエ兄に言われて西の関所に来てみたけど、何だか静かなところだね・・・。

でも兵もいるし、年下のあたしにも敬語を使ってくるあたり、ここも治安が悪いわけではなさそう。

黒虹ってやつぱり権力あるなあ。カエ兄凄いや。・・・さて、アネス姉がさつきから危ないんだよね。魔術の練習とは言ってたけど。

「サンダーボルト!!!」

弓から雷の矢が放たれる。

ズガーーーン!!!

「ふむ、良い感じだな。」

こんな感じなの。しかも関所の見張り台から西の地面に向かって撃

つもんだから、揺れは凄しいし地面がボコボコよ……。ドレイクは情けないことにグロッキーだし。さらに問題なのは……

「さすがボス！雷の矢もモノにできてまつさあ！」

「オレッチカンゲキでやす！」

「……さすがボス。ケルベロスは安泰……」

なんて言つてあおるもんだから、アネス姉が気をよくしちゃって何発も撃つんだもん！これから戦いなのに、ルナ消費してどうするの！？

……まったく、イリ姉の気苦労が分かる気がするよ……。

……あれ？キアラ姉は？

横にいた兵士に聞く。

「すみませ〜ん、キアラ姉知らない？」

「キアラ……ああ、藍様でしたら、先ほど通ったトンボを追いかけて外に……」

わあああああああ！！！！キアラ姉のばかあああああ！！！！これから戦闘だつて言つてんのに！なんでこのメンバーはこんなに呑気なの！？

「うぷ……」

「酔つてんじゃねえ！！」

「ぐあ！？」

猛烈に突っ込みたくなつたからドレイクを蹴飛ばした。

ああもう早くキアラ姉連れ戻さないとおおお！！

あたしはダツシュで外へと向かった。

くアリシアsideoutく

こんなメンバー相手に・・・ティウリが不憫である。

くミアsideく

はあ〜い！五剣帝の一人、桜剣さくらけんのミアです！

この前デスと二人で国一つ潰してきたミアです！

マルス様大好きなミアです！

テヘツ！自己紹介しすぎちゃった！

あ、昨日ね、マルス様とまた離れ離れになっちゃったの。いい加減

一緒に戦いたいよう。

それでえ、ミリアの任務って言うのがルスリア南西の警護。ミリアの他にも四聖獣が二人居るけどね？ローグレスが攻めてきたら足止めしといて？だって！もう信用されてるのが分かるよね！？

あゝ、マルス様あゝ！！

・・・ってごめんね、頭の中マルス様でいっぱい・・・さっきね、ローグレスが来るって連絡受けたんだあ。だからあ、足止めミリアに掛ければ、誰だって動きを止められちゃうのだあ！

「楼剣様、先ほどからニヤついてどうしたのですか？」

「？　　そうお？ミリアマルス様のこと考えてたの！」

「またですか・・・。とにかく、ローグレスの足止めを任されている身ですから、ローグレスが来た事、神剣様に知らせたほうが・・・。」

「あ！そうだね　　でも、ミリア、緊張しちゃうよあ。」

「はあ、顔が見えないのだから平気でしょう？」

「ローグレス来る・・・だけでいいかな？」

「いいですよ。」

フフ、またマルス様の声が聞ける

また期待にこたえるためにも、ミリア頑張るよ

〈ミリアside out〉

レールside

さて、どうやら南の制圧は完了したようですね。ですが情報が入ってくる度、貴方の身が危険になっている気がしますよ、カエデ……。

どうやら五剣帝の神剣とsecret unitのIEIが動き出しましたからね……黒虹といえど苦戦は必至……頑張ってくださいね。

「陛下、会議の時間です。」

「わかりました、すぐ行きますよ公爵。」

「一緒に行きましょう。」

「そうですね？アリスアなら、大丈夫ですよ。心配ですか？」

「いえ……ハハ、強いて言うなら、アリスアに黒虹が勤まるかが心配です。」

「それも、大丈夫ですよ。さて、では行きましょう。」

公爵とともに廊下を歩く。正直一番心配なのはわたくしなのですよカエデ？

必ず生きて戻ってくださいね・・・。

レールsideout

第53話 制圧任務遂行中！（前書き）

（報告）

- ・肉丸さん感想ありがとうございます！！
- ・とあもの連載を始めて一ヶ月が経ちました、皆さんこれからよろしく願います！！

### 第53話 制圧任務遂行中！

パカラッパカラッパカラッ……

「カエデ殿、アレではござらんか？」

「お、見えてきたか。イリス、間違いないか？」

「はい、大丈夫です。今度こそ作戦成功させてくださいね？」

「へっ！腕が鳴るぜえ！」

荒野を駆ける俺達の前方には、砦とおぼしき建築物が顔を出していた。

まだ時間は昼過ぎ……。そう考えるとやっぱり馬って速いよな。あ、違う、この世界では魔物だったか。

俺達が南の関所を出てすぐ、スコットたちも南の関所に1000人だけ駐屯させて発ったらしい。と考えると距離的に、俺らがここを制圧して東端の砦に向かうころにはスコットたちは到着してらっつて計算か。

「兄貴！迎撃に出るみてえだぜえ！兵士がぞろぞろ出てきたあ！」

「あ？」

目を凝らしてみると、確かに兵士たちが出てきている。総勢7000人はいるだろうか。一砦の数にしては多いな。しかし……。アリアが攻めて来ると知っていて、俺達が黒虹だと警戒しない限り、こんな少人数で砦に向かっている人間を出迎えるわけないよな……。ま、警戒には値するが、黒虹舐めんなよ。

俺は軽く笑うと、隣を駆ける長髪の青年に向かって叫ぶ。



「シャオ！任せたぞ！」

「フ、承知！」

シャオは軽く笑うと、馬上から、向かってくる軍勢の中心部に手を向けて呪文を唱えた。

「グレイヴ！」

ズゴーーーーーン！！！！

突如そそり立つ土の巨塔！

それは地面がうねってできた産物であり、敵の軍勢のほとんどを宙に舞わせる。

うわあああ！！

「打ち所が悪くなければ生きられるでござるよー！！」

その間も俺達は駆ける。段々と砦に近づき、土魔法グレイヴにやられた兵士たちを横目に砦に向かって猛進する。

「兵士たちが消えてくれてラッキーだったな。」

「ええ、そうですね。今回カエデさんはほとんど出番ありませんから、そのつもりで。」

「分かってる。」

俺が毒づくといリスが返してくれた。俺の出番がないというのはつまり、砦の破壊をする必要がないからだ。ここの砦は制圧後、修理してアリア側の防衛線に使う予定なので俺が破壊しちゃうとダメらしい。それはシャオに言えて、全く。

「兄貴い！皆の前に100人ほどの敵兵と、大将らしいのがいるぜえ！」

「ん？」

本当だ。敵将っぽい一段気取った服を着た男・・・オッサンだな。それを囲むように敵兵が100人ほど・・・ま、蹴散らすまでだ。どんどん距離は短くなっていく・・・あと10秒、9、8・・・

「黒髪に黒マント・・・貴様が黒虹とか言うルスリアの覇道を阻む者か！！」

5秒を切ったところで、オッサンが叫んだ。うわあ、コイツ説教くせえ爺さんタイプか・・・。

「だつたらなんだよ・・・フォーリ！」

「へへ、先に行ってる兄貴い！ 見てろよお・・・100人くらいをまとめて潰せる技があるんだあ・・・！」

そう言つてフォーリは俺達の後ろに行き馬から下りる。

俺は振り返つてフォーリの動作を見た。フォーリはニヤリと笑うと背中に背負っていた槍を携え、フードを取った、そして・・・

「しんそつ森槍”！！」

そう叫んで回転させた槍を地面にドス！と突いた。

ズドドドドドドドド！！！！

するとどうだろう、敵兵連中の足元から槍のように鋭い木のような物体が何十本も、勢いよく飛び出てきた！

ぐわあああ！！

凄い……のは分かるんだが、どういう原理だ？

「こんなもんだぜえ。」

そう言っつて槍を引き抜くと、フードを被りなおして呟いた。

「クスリが塗つてある、安心しろお、死にはしない。」

さて、俺達はフォーリを置いて説教爺に迫る。いまだに何が起こつたのか理解していない爺は、慌てて叫んだ。

「わ、ワシはルスリア筆頭貴族に名を連ねる者にして、その名も……」

聞きたくねえ、こつこつ貴族染みた輩やたいは……嫌いだ！

俺はベレッタを抜き放つと、ジジイの脳天目がけてぶつ放した。

ズドン！……ドサ。

断末魔の叫びを上げることもなく、ジジイは崩れた。さて、ミッシェンコンプリートつてところか。俺達は馬を止め、振り返って呻いている兵士たちに叫ぶ。

「俺達は黒虹！！命をとろうとは思わない、逃げてもらつて結構だ！俺達は戦争を止めるため……無駄に死んでいく人々のために戦っている！だから、お前達も死ぬ事なく、平穏な生活に戻ることを望む！……さあ、自分の村に帰れ！！」

そう言うと、兵士たちはしばらく何を言ったか分からないような顔をしていたが、意味が分かるとすすすこと逃げ始めた。

この時のカエデは知るよしも無かったが、戦争の度にこのような態度をとるカエデの行動によって、この先“カエデと戦う”それだけで士気を下げることができるようになる。それはカエデへの感謝の念と、プライドと精神を破壊されることへの恐怖の二つによるものだったらしい。

俺達は兵士たちがほとんどいなくなったのを確認すると、砦に入っ  
て今後の方針を検討していた。

「さて、じゃあシャオとイリスはここに残れ。レオの任命した部隊  
が、このあと来るはずだ。そしたら東端の砦で合流しよう。」

「……大丈夫でござるか？」

「……心配です。」

「は！俺を誰だと思ってやがる？最強“黒虹”のリーダーだぜ？」

二人を残すことが決まると、不安そうな顔をして聞いてきたのでそ  
う答えてやった。するととたんに二人の顔がほころぶ。そう、俺達  
は最強だ。そう思うと、なぜか自信が湧いてくる。

「さて、じゃあスコットの応援に行くか。フォーリ！」

「分かってるぜえ……へ、こんな簡単に南東制圧ができるとはなあ。」

「気を抜かないください。イルとルスリアが大規模交戦中ですか  
ら、ルスリアもそちらに力を注いでいるのかも知れません。それに  
五剣帝……何をしてくるか分かりませんから。」

イリスの表情が曇る。……五剣帝ねえ。だが、イリスが寂しそ  
うな顔をしているのは何故だろう。

「さて、じゃあ行くぞ！フォーリ！！」

「おうー！！」

フォーリが槍を取り、俺も創造したベレッタを携えて外に出る。

だが……俺が砦をあとにしたこの時、二つの事件が起こっていた。  
……。

（イリス side）

カエデさん、行ってしまいましたか……。あれ？

「よよ？カエデ殿、通信器を忘れてござるな……。」「

「そういえば、牽制のほうは大丈夫なのでしょうか……。？」

ツーーー、ツーーー！。

「！通信器が鳴ってござるな……。『赤ピンチ フルキューレ 天空槍 危険』

……。！！ドレイク殿が危ない！？ティウリ殿か！！」

「ティウリって……。フォーリさんのお姉様？」

「そしてsecret unitのNO・IIでござるよ……。何故一騎打ちを！？」

「落ちて着いてくださいシャオさん！キアラさんがいるでしょう？」

慌てふためくシャオさんを見ていられなくて私は叫ぶ。……。ティウリさんとシャオさんは、同僚でしたね……。

「そうでござったな……。しかし心配でござるよ。ティウリ殿と一騎打ちして勝てる相手は、指で数えるほどしかいないでござるからな。」「

そんなに強いのですか。でも、フォーリさんのお姉様なら納得いか

ないわけではありませんが、大丈夫ですかね・・・

私は皆の空を眺めながら、そう思っていました。

〈イリス side out〉

〈スコット side〉

さて、到着したな。確かここはドリドの砦といったか・・・。  
黒虹がいるわけではない、手堅く攻めよう。

「よおし、じゃあまずここに陣を張れ！」

5000の兵士が散り、それぞれ準備を始めた。コーンコーン、と  
テントを張るうららかな音が響く。

ドリドの砦はどの程度の兵数がいるのだろうか・・・。斥候を放っ  
たが、いい加減戻って来い。

しばらくして、陣が完成した。さて、じゃあ様子見に行ってみるか。  
・・・。

敵の数は分からないから、一度砦に出向いてみる必要があるからな。

「よおし！二千はここに残れ！二千は私とともに砦の様子を拝みに  
いくー！！」

そう叫んで二千の軍を編成する。よし、これでなんとかなるだろう。  
しかし斥候二人は遅いな。

陣を出てしばらくすると、砦が近づいてきた。さて、俺の軍略家としての腕をみせてやる。

すると、慌てた様子で斥候の一人が帰ってきた。

「おう、どうだった？」

「も、もも申し上げます！！ししし神、神剣が！神剣のマルスが居ました！！さらに死剣のデスや四聖獣の玄武と言った猛将が顔をそろえています！！！」

な、なんだと！？

まさか五剣帝のリーダーに3番手、おまけに四聖獣が……？

カエデ様の勇名がこの猛者どもを呼び寄せたというのか？

か、勝てる見込みが……ない。

軍略家、用兵家としてもなかなかだと自負しているが……仮に十  
万の兵士が居たとしても、俺は神剣相手に勝てる見込みがつかめな  
い。

だが、カエデ様が来れば話は別だ。……早く、来てくれ。

そう思い、俺は一旦陣へ引き返すことにした。

「すまない！一旦引き返すぞ！！！」

そう俺が叫んだ時だった。残るもう一人の斥候が戻ってきて俺の目の前に膝をつくとき、こう言った。



「申し上げます！！神剣率いる軍勢が、こちらに向かって皆から打つて出ました！！」

「なに！？」

しまった！これでは引き返すことも叶わない・・・敵に背中を見せることは行軍で最もやってはいけない、死を表す行為だからだ。終わった・・・カエデ様、間に合っていた良かった・・・。心の中で、己の不覚をのろった。

くスコットsideoutく

## 第54話 最後の攻略戦開始！

村々では春の風が流れる中、ルスリア・・・否、大陸の東端のとある荒野には、修羅場が広がっていた・・・。

騎士服をズタボロにされ、いたるところから出血してひざを着いている男が一人、そしてそれを平然と見つめるブロンド長髪の青年が一人・・・残るは無数に散らばる二千の骸<sup>むくろ</sup>。

「ガハツ・・・ハア、ハア、くそ・・・。」

レイピアを杖代わりにして、やっとこさ立ちあがるスコット。見つめる先には、二刀流の金髪・・・神剣。

「やれやれ、まさか一般兵だけで攻めて来るとはね・・・黒虹、カエデ・ミナモトが来るといふから期待してこんな辺境まで来たんだけど。カエデ・ミナモトはどこにいるんだい？」

余裕そうに、笑みまでたたえて言葉を発するマルスだが、目は笑っていない。カエデが見れば、失望に満ちた目、とすぐに分かる事だろう。

「カエデ様・・・ぐ、カハ！・・・カエ、デ様は、すぐにここに来て・・・お前など一瞬で・・・。」

スコットは必死に・・・力を振り絞って喋る。マルスはそれを聞くと二本の剣を納め、疲れたように話した。

「なんだ、来るのか。安心したよ。いや、一般兵に混じっているのかと思って必死に探したのにいないからさ、がっかりしてたんだ。」

「く……探した、か、探すためにお前は……本当に一瞬で二千の兵を……」

憎憎しげにそう言ってマルスを睨みつけるスコット。だがそんなことはお構いなしに、マルスは続ける。

「命の危険に晒せば、強い人間は出てくるだろう？結果みんな弱かった、それだけのとき。……それにしてもキミ、今僕を一瞬で殺せると言ったかい？ハハハ！嬉しいよ、カエデ・ミナモト、早く来てくれ！」

戦闘狂……この男はそれをはるかに凌駕した境地に立っている。そうスコットは思わずに居られなかった。それはそうだ。目の前の男の嬉しそうな顔からは、本当に殺意や警戒心の欠片もなく、ただ純粹に喜んでいるようにしか見えなかったからだ。荒野の中、一人の高らかな笑い声だけが痛いほど響く。するとマルスは何を思ったか、スコットに親しげに話し始めた。

「キミは黒虹を知っているんだろう？カエデ・ミナモトは噂を聞く限り大そう強いそうじゃないか。僕はね……自分の剣が強すぎてライバルが居なくなる事が怖かったんだ。だが、カエデ・ミナモトは何かこう、僕とライバルになりそうな……そんな予感がするんだよ。おかしいと思うかい？……まあいいさ。どうやらここにはキミ以外に指揮官がないようだ……カエデ・ミナモトが来るまで、攻めて来てはダメだよ？待ってるからね。」

そういうと、ボロボロのスコットに背を向けてマルスは歩き出した。歩きながらマルスは続ける。

「僕は皆の中で紅茶を飲んで待っている。待ちきれないよ……早

「来てね？」

マルスはそのまま去っていった。スコットは二千の骸とともに、荒野にしばらくの間取り残されていた……。

スコットが命からがら陣へ帰ると、残る三千の兵士が心配そうに駆け寄ってきた。

「兵長！！そのお怪我は！？」

「全滅したというのは本当ですか！？」

「とりあえず医務室へ……。」

口々にそんなことを言いつつスコットを支えて医務室に向かう。スコットはその間、一言も発することは無かった。

医務室に到着すると、軍医が手当てを受けさせる。傷は深いものばかりで、しばらくまともにも動くことは不可能に思えた。軍医はスコットをベッドに寝かせると、連れてきた兵士たちに向かって話す。

「どうも一瞬のうちにとつもない数の斬撃を受けたようですね。それぞれがどれも同じ方向からの切り傷です。スコット兵長はしばらくの間、まともにも動くことは……。」

「俺は平気だ……。」

「……兵長!!」「……」

ベッドからスコットが起き上がる。軍医は慌てて止めようとするが、強い力でスコットにどかさね、何もできなかった。

「俺は平気だ。」

「お体に障ります!」

「構うものか……これしきの傷で一軍の将が寝てられるとも思っただか?」

そう言うとスコットは兵士たちに向き直り、これまでの経緯を伝えた。

「敵軍には五剣帝の神剣がいた……俺は全く歯が立たず、悔しい限りだ。だが奴はカエデ様のみを追い求めていて、俺は助かったのだ。二千の兵士たちには本当に、謝っても謝りきれない。」

「兵長……。」

兵士の一人が暗い顔をしてスコットに同情の言葉を呟く。だがスコットは憤然と前を向くと、三人の兵士に向かって話した。

「とりあえずしばらく総員武器の手入れなどをしている。カエデ様が到着次第、もう一度砦の攻略を開始する。」

「了解！」

兵士たちはそのまま医務室の外へと駆け出していった。

スコットはまだ痛む体に鞭打って、医務室と銘打たれた幕舎の外に出ると、空を仰いだ。

風を肌で感じ、痛みよりも心地よさが勝る。するとスコットの目の端に、二つの土煙が映った。西の方角からどんどん近づいてくる。

「あれは・・・！」

「ちゃんと確認しろ・・・黒マントだ！」

「黒髪が見えます兵長！！！」

「となりはフードを被っています！」

近くにいた兵士たちが嬉々としてスコットに叫ぶ。

スコット自身もまた、口元が緩んでいることに気付いていた。

助かった・・・心の底からスコットはそう感じていた。

「間違いない！カエデ様とフォーリ様だ！門を開ける！！！」

適当に作った陣の木製の門を兵士たちは急いで開く。

その数秒後、黒髪黒瞳黒マント・・・件の男くだん、カエデ・ミナモトが颯爽と馬に乗って入ってきた。その後ろには毛皮のフードを被ったフォーリもいる。

「遅れてすまない。待たせたか？」

そう謝罪の言葉を吐くアリア最強の男に、そこに居た兵士たちは安堵とともに全員で同じことを思っていた。

『全くだ。遅いよカエデサン。』

俺達がスコットの陣に到着すると、なんだかみんな安堵の表情をしていた。馬を降り、兵士の一人に預けるが、逆になにかあったのか不安でならなかった・・・とりあえずスコットに案内され、幕舎に入る。

「スコットお、何かあったのかあ？妙に兵士が少ないぞお？」

フォーリも異変に気付いたのか、スコットに問いかける。すると、スコットはこれまでの経緯を話してくれた……。

「そうか、二千の兵士が犠牲となったか……。」

「これも私の指揮官としての未熟さが仇となったもの……申し訳ありません。」

深々と頭を下げるスコットに、フォーリが言葉をかけた。

「五剣帝のマルスだろお？正直十万の兵士が居たって奴一人倒せるか分からない。これはしかたのないことだあ。」

そういえばフォーリはルスリア出身だったな、少し聞けることがあるかも知れない。

……にしても十万居て倒せない敵ってどうよ？

「フォーリ、おまえでも勝てないか？」

「情けない話、無理だあ……兄貴レベルの実力者でもない限り、太刀打ちできねえ……。」

フォーリでも勝てないか……。俺が太刀打ち……。ってことは少なくともゼウスチートを使わねえと勝てないってことか。ふむ、まあ正直ゼウス曰く俺世界最強レベルらしいからな……問題はないと思うが。

「神剣は貴方を探していました。ライバルになりえるかもしれないとか何とか……。要は戦いたいらしいです。」



スコットが言う。俺がライバルねえ・俺をライバルにするってのは、難しいぜ？  
まあいい、とりあえず状況は把握した。

「あ、待つてください。もう一人、五剣帝、死剣のデスが砦には存在しています。」

「もう一人五剣帝がいるってことか。フォーリ、そいつあ、お前に任せる。」

「分かったぜえ。」

それにしても、こんな辺境に五剣帝が二人もいるとはな。残り三人でルスリアの広大な土地守ってんのかよ。

「じゃ、しばらくしたら進軍するか。準備しとけよ？」

「了解！」

俺を先頭に砦の攻略チームが組まれたのはその一時間程度あと。そのまま進軍を開始し、砦の姿が見え始めた。・・・さあ、南東最後の砦攻略の始まりだ！

くマルスsideく

カエデ・ミナモトはいつになったら来るのだろう。待ちきれないよ。  
。。  
さっきの隊長にはめられたのか？。。。いやそれはない。嘘を見抜くことぐらい造作もないはずだ。ああもう、到着が遅れているとは思えない。早く戦いたいんだ。久々に一騎打ちを楽しみたいんだ。カエデ・ミナモト、早くこい！

僕は部屋で紅茶を飲みながらずっと頭の中でそんな思考を逡巡させていた。

カップの中を眺めると、いつもどおり美しい透き通った茶色。。。こうして優雅に紅茶を飲んでいる姿を見て、一般兵はみんな僕をお高い人間だと解釈する。頭の中をのぞいたら驚くだろうね。僕ほど戦うことが好きな人間はそう居ないから。

早く戦いたいよ。。。カエデ・ミナモト。キミは黒髪黒瞳なんだってね。珍しいじゃないか。天が僕にくれた、人生で最高のプレゼントかも知れないよ。。。ライバルという名の、ね。

コンコン

「入っていいよ。」

ガチャ・・・

「やあ、デスじゃないか。どうしたんだい？」

「・・・来た。」

「そうか!!」

僕は思わず立ち上がる。と同時に椅子を飛ばしてしまったが知ったことか!

やっと来たね?カエデ・ミナモト・・・決戦の時が待ち遠しいよ。

僕は三本の剣を腰に差し、デスとともに部屋を出た。

〈マルスsideout〉

第55話 1001(前書き)

〈報告〉

・きつねごさん感想ありがとうございます…！

第55話 1 on 1

行軍中、スコットに聞いていなかったことを思い出して話しかけた。

「なあ、あのまま俺達が来なかったらどうなってたんだ?」

するとスコットは自身の右胸を押さえながら、

「し、心臓に悪いことを言いますね……。多分マルスに皆殺しにされてしまったよ。」

「そうか……。」

空を仰ぐスコットを見て、俺も見上げる。もう時刻は夕方だ。まもなく夜になるだろう。

それにしても考えてみると、今日一日で大陸東端を手に入れようとしているのか……。ハハ、すげえや。

「兄貴、どうやらお出迎えのようだぜえ。砦の前に軍が陳列してらあ。ざつと一万つてどこかあ?」

「一万……。三倍以上の敵ですね。用兵家の血が騒ぎます。」

砦の前にはキレイに軍隊が整列していた。

スコットが武者震いをする。兵士のほうは任せてよさそうだな。

「じゃあ白兵戦はスコットに任せる。俺が神剣のマルス、フォーリが死剣、だったか?」

「そうだぜえ。死剣のデス……。俺も楽しみだあ。」

デス、ねえ。俺もマルス、だったか?気合入れてやりますか。

そしてとうとう敵を目の前にしたその時、スコットによる音頭がとられた。

「いいか！？正義は我らにある！世界に仇名す逆賊ルスリアの息の根を止める前哨戦だ！気合を入れていくぞ！！！」

おおー！！！！！！

逆賊か・・・確かに天下取られちゃ困る相手だよな、頑張ろう。

「突っ込め！！！」

スコットを先頭に、軍団が一万の兵に突入していく。向こうも先頭は青髪の男。ソイツの剣による合図で、こちらに向かって突進してくる。決戦の火蓋が切られたのだ。

さて、フォーリはいつの間にか忽然と居なくなっているし、俺も神剣を探しに行かないと。

そう思い、乗っていた馬を駆って戦闘の輪の中へ介入していく。

・・・なるほど。スコットの用兵術ってのは確かに大したもんかも知れない。

常に敵兵より多い人数で当たり、複数対一の状況を作り出す。そのため一丸となつて一万の兵と対峙し、スコットは中心において指示を円滑に流している。おかげで三倍以上の敵兵をもともせずに対等に戦っている。

俺にも数人の兵士が戦いを挑んできたが、足をベレッタで打ち抜いて動けなくした。

そうこうしてるうちに皆近くにまで来てしまった。さて、神剣のマルスはどこだろう・・・。

「黒髪、黒マント・・・間違いないね。キミがカエデ・ミナモトだ。」

後ろから声がしたので振り返ると、金髪を背に流した好青年が騎乗してたたずんでいた。鎧を着込んでいたのでよくは分からないが、細い割りにかなりの熟練者だと思われる。こいつがもしかして・・・？

「神剣、か？」

「おお、知っているのか！では改めて。僕はマルス・ロード。五剣帝のリーダーにして、キミとの戦いを心待ちにしていた一介の剣士だ。」

西洋風のお辞儀をされ、少々調子が狂うが・・・。

「俺は黒虹のリーダー、カエデ・ミナモトだ。・・・なんでそんなに俺と戦いたい？」

「僕は、強すぎるが故にライバルというものに憧れていてね。各地の最強と謳われる猛者を相手に戦ってきた。だが・・・どの相手も僕の好敵手には成り得なくてね。そんな時、一度手合わせをしたことがある“焰龍”をいとも簡単に倒してしまったという男の噂を聞いたわけだ。」

さほど余裕でもなかったがな。なんとなく殺したくなかったからピョンチにはなった。

マルスは俺のそんな心情を無視して続ける。

「興味を持ってキミの情報を追っていたら、イルの上級兵を一睨みで追い返したり、関所であるガウディに余裕の立ち回りをしたり・・・ここまでの人間は居なかったからね。僕は心底カンゲキして、キ

ミと戦えるこの日を待ち遠しく思っていたわけさ。」

コイツ、ただ単に戦闘狂なのか？・・・いや、目が違う。ドレイクやフォーリとはまた違った輝きがある。そしてこのナルシストぶり。ハタから聞いてりや馬鹿にするような話なのに、コイツから聞いていると真実としてしか取れないのはなんで？謎は深まるばかりだが、コイツは強い、それはオーラで伝わってくる。そして俺の第六感が警鐘を鳴らしているのだ。この男はヤバイ、と。

「神剣のマルス、か。」

「さて、そろそろ戦おうじゃないか。僕はもう、この胸の高鳴りを押さえられない！」

・・・どんだけよ。

マルスはそういうと、いそいそと馬から降り始めた。

これが大陸最強の剣士なんだろ？・・・なんだか、シールドだ。

ガチャガチャと鎧と剣がぶつかる音をさせながら、マルスは地に降り立った。

剣が、三本？

「早く降りてくれよ。さあ、やろう。」

「ふう。創造 デュアルディオスクロイ」

「うお！？創造魔法！？」

マルスが何か感動した目で見てくるが気にしない。俺は武器を手にとると、馬から降りた。

ここに来てこの男が少し分かった気がする。

純粹。この男は純粹に戦いを求めている。あたかも何かで試合をやるように、楽しむために戦いを求めているのだ。もしこの世界にスポーツがあつたなら、それにのめり込んでいたに違いない。



そして、最も欲してやまないのは、“好敵手”

ライバル

スポーツをするものなら分かるであろうこの気持ち。力を拮抗させた相手を、死に物狂いで戦い倒した時の爽快感、そして、永遠のライバルという肩書きの元、何度も何度も戦うことの楽しさ。

この目の前の男は、戦いにそれを求めているのだ。ハハ、俺、コイツ嫌いじゃない。命がかかっていなければ、友達になりたいほどだった。

だが、それは現実が許さない。こうなった以上、ルスリアという敵の一番の障壁。

「さて、じゃあやるか。」

「よし！」

マルスは嬉しそうにそう言うと、手元から二本の剣を抜刀した。・  
二刀流か。

「どっからでも来い。」

「まずは小手調べだ！」

マルスが突っ込んでくる。速い！俺のチート時並の速さだ。

「ぐー！」

右手の剣を一閃してきたところを左のトンファーで防ぎ、飛びずさる。

洒落にならないな・・・ゼウスチート、発動！

マルスを見ると、何だか驚いたような呆れたような顔でこちらを見ている。

「今のが本気だったとしたら、僕を落胆させた罪で切り刻むよ？」

「は！やってみる！」  
「いいね！」

今度もマルスからの突進。だがさっきの攻撃と違い、見える！  
同じ攻撃を繰り返し出してきたマルスの右剣を左トンファーで回転させ  
て弾くと、右トンファーで袈裟斬り一閃！それをいいタイミングで  
マルスが左剣で防ぐ。マルスは楽しそうに

「おっと！まだまだだよ？」

言うが、

「あら残念。」

左トンファーを下から回転一閃！

「ぐあ！？」

慌ててマルスは飛びずさるものの、鎧が縦に少し切れた。  
それを眺めていたマルスは、とてもいい笑顔になる。

「凄い切れ味だな、そのトンファー。やはり、僕のライバルに相応  
しいのかも知れない！」

「さあな。俺のライバルになるって言うのは難しいぞ？」  
「言うね！」

マルスはもう一度突進してくる。・・・なんだ？動きが違う！？

「ロード流剣術第十五手、双狼」

二つの剣を巧みに使いながらの双方突き（ダブルラッシュ）！さながらその剣は狼の牙のよう・・・だから双狼か！！

トンファーで全ての剣を凌いでいくも、もうバランスが保てなくて危ねえ！

チートすぎるので使いたくなかったが・・・

「ブラックカース」

「!?!」

これで全ての攻撃は俺をすり抜ける。これをやっちゃあお仕舞いだよな。

するとマルスは驚いて後方に飛び、続けて話し出した。にこやかに笑いながら。

「へえ、おまけに闇魔法使えるのかい?・・・でもね、直接攻撃系魔法以外、僕には通じないんだ。フリップスペル！」

俺に向かってマルスは呪文を唱えた。すると突如周りが白く輝き始め、気付いたらブラックカースの効果は消えていた。・・・今のは・・・光魔法？

「これでブラックカースは無意味だよ?・・・にしても、僕が光魔法、キミが闇魔法。僕たちはやはり、相対するライバルかも知れないね！」

凄く嬉しそうに言うが・・・ぶっちゃけピンチ。

だが、親父仕込みのトンファー術舐めんなよ？

「魔法が使えないのはしゃあねえが、なら肉弾戦で勝つだけだ。」

「そう来なくちゃ!」

今度は俺から行く。コイツに手加減なんてしねえ。力のほうもゼウスチート発動だ！

「攻式三之型」

スクリューのようにマルスに突進していく。力を今までと同じと思つたマルスは受け止めようとする・・・が。

「ぐあ！？」

剣を弾かれ、横に吹っ飛ぶ。なんとか空中で体勢を立て直したマルスは、右の剣を地面に突き立ててその場に留まると、こちらに目を向けた。

「ホント、いいね！楽しいよ！」

「俺もだ。」

コイツと戦っているうちに、何だか俺も熱くなってきてしまった。

「だから、僕も本気を出す。今ので、キミも本気になってくれたんだらう？」

「！？」

本気じゃなかった、とでも言うようだな。

すると何を思ったかマルスは両手の剣をそれぞれの鞘にしまうと、長髪を払い、残る一本の剣を抜いた。その剣の刀身は、先ほどの二本の二倍はあるうかと思う。だが細身の剣だ。太刀の両刃といえは分かりやすいだらうか？

「第二形態だよ。今度はこちらから言わせてもらおうか。・・・どこからでも来い！」

言うじゃねえか！

にしてもあの長剣は厄介だな、懐に入り込めれば勝てるのだが。

いや、一本が相手なら・・・

「攻式六之型」

トンファーを十文字に頭上に交差し、突進する。それをマルスは左手で切りかかってきた。

よし！

上にあつた左トンファーを回転させて長剣を弾き、右のトンファーで・・・

「甘いよー！」

！？

「ゴフ！」

鳩尾みぞおちを殴られ、俺はもんどりうって転がる。・・・クソ、長剣のリーチだけでも厄介なのに、入り込めば拳が飛んでくるのかよ！？  
さすがに強えな。だが、それには弱点があるぜ？・・・問題は、その弱点をどうさらすか。

「どうだい？これが僕の第二形態。本気の証だ。だがキミはこの形態をも破ってくれろと信じているよ。」

満面の笑みでそういうマルス。まるで第三形態があるとも言いた

げなその言動が気になった。

「第三形態が本気じゃないのか？」

軽い調子で俺が聞くと、さわやかな笑みをたたえながらマルスは答えた。

「これを破れた人間が居ないんだな、それが。」

「それで、“この形態をも破ってくれると信じている”か。」  
「そういうこと。」

マルスはいっこり笑って、構えた。

つまり、“僕のライバルになる資格があるかどうか”ってことね？  
舐めくさってこの野郎。

「行くぜ？」

「どっからでも来い！って言っただろう？」

さて、どうやって弱点をさらせるか！？

「攻式三之型」

スクリューとなって突進する。だがそれは剣を両手に構えたマルスによって弾かれ、横っ腹をぶん殴られて吹っ飛んだ。

「ガハ・・・くそ。」

さあどうする？もしこれでダメなら奥の手しかないか。

「攻式二之型」

俺は上体を低くして走り出した。ターゲットはもちろんマルス。射程距離に入ったところで、右空振り一閃！それが威嚇となっていているうちに、俺は右回転しながら左トンファアで・・・

「遅い！」

「ぐあ！！！」

回転途中で背中を拳で殴られ、俺は顔から地面に突っ込んだ。くっそいてえな・・・正直ボロボロだ。ならもう・・・仕方ないか。

「こんなものかい？キミの力は。」

落胆したように言うマルスだが・・・は！

「舐めんなよ？お前の弱点今からさらしてやるぜ。」

「フ・・・楽しみにしているよ。」

余裕な顔しくさって・・・だがもうこれ以上ダメージを受けると正直キツイ。

「攻式七之型」

俺のトンファア術の中では副將的な切り札だ。もうこれで行くしかない。

俺は全速力でマルスへと突進すると、そのまま背後に回って右トンファアで切りつける。

それを読んだマルスは前へとかわすが、斬りつけた右トンファアを押し込みながらもう一度回転一閃！今度は袈裟を逆に斬るような形

での攻撃だ。

「ッッ。」

それを左手の剣で受けるマルス・・・掛かった！

それを本来なら左トンファーで後押しして吹っ飛ばす荒業だが、今回は応用だ。

そのまま右トンファーで押ししていくと、マルスが右手を伸ばしてくる。俺を殴りつける気だ。

「っしゅあー!!」

その拳を左トンファーで防ぐ！

すると当然刃にぶち当たった拳は大量出血するわけで・・・。

「ぐああー!!」

そう、この形態の弱点は、第二の武器“拳”が、自らも傷つける可能性がある諸刃の剣だという事だ！

マルスは素早く拳を引くと、俺を睨みながら言った。・・・その目は楽しんでる勝負師そのものだった。

「やってくれるじゃないか！フッフ・・・。弱点とは、この拳のとだっただんだね？」

「ああ。そうだ。」

「なら、次に戦うときはしっかり鉄甲を持ってこよう。ともあれ弱点に気付かせてくれたことは感謝するよ。何せ・・・破られたのはじめてだから。」



手甲かよ!?

次に会ったときとか・・・まあいい。確かに戦いを楽しんでいる自分がいる。

「仕方がないね・・・最終形態といこうか・・・。おや?」

そうマルスが呟いたのと同時だろうか?

俺の足元に兵士が倒れたのだ。鎧を見る限り、味方の兵士だ。俺はふと周りを見る。

・・・そこにあるのは沢山の屍と、殺しあっている人々。そして決着がつかぬまま・・・屍は増え続けるばかりだ。

俺は何をしているのだ。

人を殺さないために戦っていたのに。

今俺が戦いを長引かせているせいで、人が次々と死んでいくではないか。

俺が優先するべきは、人の命じゃなかったのか？

本当に何をしているんだ？

頭が真っ白になった。それと同時に、数人の集団・・・アリア兵が、俺を不安そうに見ていることに気がついた。そうだ、俺が神剣を倒さなければ、この戦いは終わらない。

戦いが終わらなければ、人がどんどん死んでいくではないか。

それは黒虹の行動理念に反する行為じゃないのか！？

少し、反省が必要かもな。同時に、この戦いの終焉も。

「カエデ？どうした？戦わないのか？」

コイツとは、稽古の中で戦いたかったな。

俺は静かにベレッタを抜き、マルスに言った。

「悪いが、お仕舞いだ。俺は黒虹の存在意義を忘れていた。じゃあな・・・マルス。」

「!？」

ドオン・・・!

俺は寸分たがわずマルスの左胸・・・心臓を打ち抜いた。  
最優先すべきは、アリアの天下統一。忘れていた。マルスが生きて  
いれば、全滅する。

「本当はもっと、戦っていたかった。最終形態つてのが見たかった  
よ・・・。」

倒れているマルスに目を向け、俺は呟いて踵を返した。

「マルス様がやられた!!」

「大変だ!!逃げろ!!」

そういつた声が聞こえ始めたのはしばらく経ってから。  
俺は馬を駆ってフォーリを探していた。アイツも死剣とやらと戦っ  
ていたからな・・・。

（フォーリサイド）

兄貴にはわりいが、話の途中でターゲット見つけたんで失敬させてもらった。

俺は一度五剣帝と手合わせしたことがある。

死剣のデスはいなかったが、二番手の楼剣のミリア、四番手の剛剣のガウデイ、この二人とだ。

正直楼剣にはチートだろ！？と思われる攻撃で見事に敗北したが、ガウデイには辛くも勝利している。おまけに今の俺には兄貴や馬鹿ドレイクとの修練のおかげで身についた必殺技がある。

三番手のデスとも、良い勝負になるだろうと思っている。

「おい！死剣のデスだろお？」

「・・・黒虹か。」

長年ルスリアに居たが、こいつの顔は一方的に俺が見た一度のみ。だからちゃんとした面識はない。だから俺のことも“黒虹”としか認識しないだろう。

ま、ルスリアで取った二つ名より、兄貴や仲間と一緒に黒虹のがずつといいが・・・。

「そうだあ！勝負しろお。」

「毛皮のフード・・・“橙”か。“黒”と交えたかったが・・・。」

「兄貴なら今頃神剣を手玉にとつてらあ！」

「……？意味がわからないな……あの方は、最強だ……。」

無口な野郎だな。まあいいぜえ。

俺は槍を取ると、馬から降りた。

死剣も、盾と短めのサーベルを手に、降りる。

「行くぜえ？」

俺は槍を構えて突進した。

「デス・ハーミット……参る。」

ん？ハーミット？

その言葉に違和感を覚えていると、その隙を撃たれた。

盾で肩をぶん殴られたのである。

「が！？」

盾にも周りに棘が仕込んであり、肩からは偉い出血量だ……。

くそ、やべえ……。

「あれ？死剣様？」

！？

騎乗していた奴がいた。この男、知っている。四聖獣……五剣帝に並ぶ部隊で、総員4人の特殊部隊。主にマルスの管轄下であり、扱いとしては五剣帝のワンランク下である。

なんだってこんな奴がここに……？

スコットの野郎、言ってたかあ？

「ちょうどいい・・・コイツを片付ける・・・。」  
「な!?!」

コイツ・・・!嘘だろ?一騎打ちじゃねえのかよ!ってか五剣帝としてのプライドとかねえのか?

「よろしいのですか?死劍様。」

「ああ、別に一騎打ちなどではない。」

「ツツ!」

やべえ・・・完全に不利だあ。二対一であまつさえ俺は肩を負傷・・・  
・兄貴の救援も望めない。

クソ・・・なんでハーミットで違和感など・・・って。ハーミットでイリスちゃんじゃねえか!

「お前まさかイリ「マルス様がやられた!」何!?!」  
「・・・うそだ。」

顔には出ていないが、だいぶ焦っていた。だいぶマルスに忠誠誓ってんのな?

だが、兄貴が勝ったってことだあ・・・よかつたあ。

デスは俺を無視して騎乗すると、慌てて声の主の方に駆けていった。それを追うように四聖獣の玄武も消えていく。

・・・あれ?

なんだ?体が熱い・・・クソ、意識が・・・

「フォーリsideout」

「フォーリ!!!」

フォーリが倒れているのを見つけた。よかった、生きているようだ。あらかたの兵はマルスがやられたと見て早々に引いていった。ひとまず勝利だ。

・・・まあマルスを殺めた俺としては素直に喜べないがな。

今でも、正々堂々と戦わずに近代兵器に頼ったことを後悔しているが仕方がない。

とりあえずはフォーリだ。コイツ様子がおかしい。フードを取って見ると、顔が赤く火照っている・・・風邪か？

ルスリア兵はもう北に逃げていった。砦ももう開いているからフォーリを抱えて入る。

軍医に見せよう。

俺は祝勝会の準備に入っている兵士を無視して医務室へと向かった。

「フォーリは大丈夫なのか？」

「すくなくとも一命は取り留めたらしいです。意識は戻りませんが。」

軍医が優秀で助かったぜ。スコットと一緒に砦の医務室の前に立っているのだが、フォーリはどうやら危なかったらしい。俺が早く見つけていたから無事だったらしいがそうでなかったら絶命していたそう。マジでよかったあ……。

聞いた話だと、死剣のデスと交えてそうだったと。

アイツは武器に毒を仕込んで戦うため、“死”剣と呼ばれているとか。

胸糞悪い……。

そう俺が思いつめていると、スコットがふとした顔で俺に問いかけた。

「そういえば、なぜカエデ様はわざわざ神剣を生かしたのですか？」

は？

「へ！？心臓打ちぬいたけど？」

「左胸に心臓があるものですか！」

……は？



どーゆーこと？

「もしかしてカエデ様の国は医療が発達していなかったのですか？」  
「いや、気持ち悪いほど発達していたが？ここよりずっと……。」  
「では失礼ですがカエデ様は学がないとか……？」  
「いや、そんなはずはない。ってか今なんつった？左胸に心臓がない？」

「右にあるに決まっていますでしょう？」

そういえば……今日の行軍中も。

『心臓に悪い』

ってコイツ右胸抑えてなかったか？

もしかしてこの世界って、体内機関が左右真逆なのか？  
……ゼウス、説明しろ。

「なあスコット。アリアには右利きと左利き、どっちが多い？」

「そういえば。カエデ様は右利きでしたね。珍しく。」

はい決定！！

この方達俺と体内が逆です！キアラの家にあった人体解剖図でも見とくんだった。

「すまん、事情は理解した。」

「？　そうですか。で、なんで神剣を？」

oh—

つまり俺はみすみすマルスを逃したことになるのだ。

嬉しいやら悲惨やら……だが、殺してないとわかって安心してる

自分がここにいる。

「気にしたら負けだ。」

「そういうものでしょうか・・・？まあいいでしょう。とりあえず祝勝会です。貴方がいなければ締まりませんからね。頼みますよ！」

「はいはい。」

いろいろ力が抜けた俺は、廊下を歩いて会場に向かった。

目が覚めると、死剣と玄武が不安そうに僕の顔を覗き込んでいた。そういえば僕はカエデとの戦いで、ガウディが剣を折られた兵器にやられたのだったか？

「お、目が覚めましたか？」

「・・・よかった。」

二人に支えられて起き上がると、ここは旧南砦。

僕たちがドリドへ到着する前最後に泊まった場所だ。

体を見てみると、胸部に巻かれた包帯の左胸のあたりから、血が滲んでいるのが分かる。

はじめて、負けたのか。

にしても、僕はとりあえずあの兵器の攻略法を考えねば。あれが高速でレーザーを放つものだとしたら光魔法で跳ね返せるが、実態がまだよく分からないからな・・・。これから特訓だ。

そういえば倒れてからしばらくの間は意識があったが、カエデは何か呟いていたな。

『本当はもっと、戦っていたかった。最終形態ってのが見たかったよ・・・』

あれは“しばらく待っている。再戦を誓う”って意味か？

・・・フ。分かった、待っているカエデ。僕はキミというライバルに勝つために日々精進し、再戦のころにはあの兵器をも凌駕する力を手に入れると約束しよう。

最終形態見たかった？そうか。これがライバルなものな。カエデも

一応僕を認めたようだ・・・。

なんだろうか、この高揚感は・・・！

これがライバルを手に入れた者の性なのか！？

そうだとしたら嬉しい！嬉しすぎる！  
カエデ！今すぐ追いついてやるからな！！

（マルスside out）

盛大な勘違いをしている男が一人。

・・・カエデは眠れる獅子を殺すどころか叩き起こしてしまった。

第55話 1on1（後書き）

3/11（金）東北地方で発生した地震および津波でお亡くなりになられた方々へのご冥福をお祈り申し上げます。

そして被災された皆様に対しましても、心よりお見舞い申し上げます。

一刻一時も早い復興をお祈り申し上げます。

シエイド

## 第56話 制圧任務完了！防衛任務開始

夜。

祝勝会という名の下、現在俺とスコットは砦の中庭にて二千人数の部下を前にしている。

あとは俺からのスピーチがあればいいのだが。さて、ではアネスを習って、少し黒虹の行動理念に沿ったことをしよう。

「スコット、今回の戦死者は？」

「993名です。予想以上に被害を出してしまい、申し訳ありません。」

そうこちらを向いて謝るスコットをなだめてから、俺は改めて兵士諸君の方を向く。

兵士はみんな、俺の号令とともに酒を打ち上げる準備をしている。さて、

「諸君！このたびは本当にご苦労だった！これでアリア王国の地盤を築くことができ、戦争のない世界へ向けての第一歩を歩みだせたと思う！今宵はこの東端制圧を成し遂げた祝勝会だ！思いっきり騒いでもらって構わない！！・・・だがその前に、今回の戦での993名の犠牲、彼らの冥福を祈って黙祷しよう。くだらない殺し合いに駆り出された同志諸君に・・・黙祷！！」

静寂が砦を包み込む・・・993人のみんな、本当に申し訳ない、そして・・・ありがとう。

俺が手を叩いて、兵士を注目させる。

「これで終わり。今日は戦勝祝い、思いっきりさわげえ！！！！！」  
「「「「「おおおー！！！！！！！！！！」」」」

全員中庭で思い思いの行動を始めた。さて、俺はレオに連絡して・  
・おろ？

魔道通信器がない？なんで？

俺はポケットやらマントやらを探すが・・・ない！

どっかに落としたか？マルスとの戦闘中か？おいおい凱旋して報告するしかねえか？

俺があちこち触ってさがしていると、スコット怪訝そうな顔で見てる。

「どうかしましたか？」

「魔道通信器失くしたかも。」

「あらら・・・参りましたね。これではこの防衛線を張るのに時間がかかってしまいます。」

「だよなあ。」

そんなことを言っていると、一人警備兵が俺のところへやってきて、膝をついた。

「黒虹“黄”様が到着されました。」

黄・・・イリスか！！

軍が西の砦には到着したんだな。・・・あれ？

「一人か？“青”様は？」

スコットが聞くが、警備兵は首をふり、

「いえ、お一人でございます。」

「そか、分かったありがとう。お前もあっちに参加しな。」

「よ、よろしいのですか？ありがとうございます！！」

俺が祝勝会のほうを指差して言うと、兵士は目を輝かせて走っていった。

そしてまもなく屋内から、一人の見知った少女が歩いてくる。

「やあイリス、お疲れ様。」

「イリス様、こんばんは。」

スコットのほうを向いてイリスは軽くお辞儀をすると、俺の前へと歩いてきた。

そして目の前に来ると・・・ん？なみだ目？

「心配してたんですよ・・・？」

「！？　なななななでなくてんの！？　つてか普通に送り出してくれただじゃん！！」

「神剣とやりあったのでしょー！？」

「あ・・・。」

そついうことか。あの金髪マルスつて世界最強の剣士なんだっけ。

そら心配されてもムリないか・・・。

つてか涙目の上目遣い、しかも少し頬を膨らませてるのが凄いグッとくるんだが。

「ごめん、イリス。」

「いえ・・・無事でよかったです。グスン。」



涙を拭いて、笑顔になるイリス。うん、それでも笑っていたほうが  
カワイイな。

「さて、シャオはどうした？軍は到着したんだろ？」  
するとイリスは表情を変える。

「はい、あのあと連絡が入って、ドレイクさんが危ないと。それで  
軍隊が着き次第シャオさんが援軍に行き、私が報告にくるはずだっ  
たのです。」

ドレイクが危ない？マルスみたいのが来たのか？

「シャオさんはもう到着したようで、私に連絡が入りました。どう  
やらイルの軍隊が攻め寄せていたようですが、撃退に成功したそう  
です。黒虹に死傷者はなし、と。」

「！！ドレイクも無事だったか。まあキアラが居るから特に問題は  
ないか。」

「そうか、よかったよかった。ってことは両方において作戦は成功  
だな。」

「はい！」

イリスも嬉しそうに言う。するとスコットが、

「それではイリス様も。戦勝祝いの祝杯を挙げましょう。」

「そうですね。行きましようカエデさん！」

「分かった、すぐに行こう。」

イリスに引つ張られて俺も祝勝の会場の輪の中へ。  
ドレイクたちも無事でよかった。

しばらく兵士たちに絡まれてくだらない話をしていたが、少し気が  
それてきたところで俺は会場をあとにする。誰にも気付かれてはい  
ないだろう。

向かった先は、医務室。理由はもちろん、フォーリの容態を見るた  
めだ。

ガララ！

医務室の引き戸を開けると、軍医のオッサンも居なかった。ま、祝  
勝会に混ざっているのだろうが。

あまり明るくはない医務室の中を、俺はフォーリのベッド目指して  
歩く。すると、窓際で椅子に座って外を眺めている、橙髪の男をみ  
つけた。

「フォーリ、もう良いのか？」

「あ、兄貴……。ぼーっとしてたな。」

窓から目を離し、こちらを向いてくるフォーリ。

「まあ、座ってくれよお。」

「ああ、すまない。」

フォーリは自分のあてがわれたベッドをポンポンと叩き、俺に座る  
よう薦めた。

座ってフォーリを見ると、肩にとても分厚い包帯をしているのが分  
かる。

「その傷、痛むか？」

「いや。兄貴の兵器で攻撃されたほうが痛えや。」

軽く笑って言うフォーリだが、目はなんだかごまかしていた。

「そうか。ほれ。」

「わりいな兄貴……。」

持ってきた飲み物のコップを手渡す。素直に受け取るとそのまま口に運んだ。

「うまいな、これ。」

「そうか？まだ飲んでいないんだが。」

少しの間二人とも無言で飲み物をすすっていた。果実ジュースのような味だが、微妙に酒が入っている気がする。しばらくしてフォーリが口を開いた。

「死剣のデス……俺がやられた相手だけだよ。」

「ん？」

自分のコップを見つめながらフォーリは話し出す。

「あれ、イリスの兄貴かもしんねえ。」

「？ その男が？」

「ああ。アイツ、デス・ハーミットと名乗ってやがった。」

イリス、兄貴居たのか？

まあハーミットってだけで違う奴かも知れねえが。

「人のお家事情に首を突っ込むのはあんまし良くない。いずれいい機会があったら」

「そうですね、兄が居たのですか。」

「「!!」」

俺とフォーリが気付かぬ間に、イリスは隣に来ていた。

「イリス・・・よくここが分かったな。」

「いえ、カエデ様が会場から居なくなつたのを、私が知らないわけではないでしょう?」

どーゆーわけだよ。

イリスはフォーリを見ると、少し驚いたようであった。

「フォーリさんも、会場に居ないと思つたらこんなところに・・・。

その傷はもしや兄の?」

「一歩遅れてたら死んでたとよ。」

俺がぶつきらぼうに答える。イリスがどうあれ、フォーリを毒殺など・・・許さないつもりだ。

するとイリスは俺のとなりになんちよこんと座ると、俺達に話し始めた。

「カエデさん、私は次兄のことはよく思いませんが、敵として相対すれば躊躇なく殺すつもりです。私をハーミット家の人間として見るのはやめてください。・・・私の家は軍事の名門で、父母ともに優秀な戦士でした。そのため、私達四兄妹は武術を叩き込まれ、家の者として恥ずかしくないよう鍛えられたのです。・・・ですが、私と長兄は出来がよくなり、次兄と三兄からは馬鹿にされていましてね・・・それが悔しくて軍略に徹しました。少し経つと兄達はみ

んな武者修行に出かけ、次兄はルスリアで五剣帝、三兄はイルの secret unitのIIIとしてやっていると聞きました。長兄については連絡ありませんが。・・・何はともあれ、次兄は無口のクセにやる事が陰険。三兄は本当に根性がひねくれた人間です。長兄は優しい人だったのですが、行方は分からず。まあつまり何が言いたいかと言うと、血が繋がっていても気にしません、ということですよ。」

イリスの過去・・・って感じか。にしてもフォーリの姉貴にイリスの兄貴がいるのか secret unitは。

「分かったよ。それで・・・その次兄が死剣のデス、と。フォーリ、毒はどうなった？」

「この軍医が応急処置のプロらしくてなあ。毒をかなり遅れさせることができたらしいぜえ。あと十日は持つとよ。」

やっぱり完治はしてねえのか。十日・・・キアラに診せるには充分だな。よし。

俺はイヤリングに意識を集中する。するとどうやら、他のメンバーはもう王城に戻っているようだ。

「十日以内に一旦王城に戻るぞ。キアラに診せる。」

「それがいいですね・・・それにしても兄は、なんて毒を。」

イリスは呆れるやら怒りを抑えるやらで震えていた。そうだ。

「ついでにキアラにあの毒に対する耐性でもつけてもらうか。聞いたところ、アイツは薬剤師としても優秀だったらしい。」

「そうなのですか・・・キアラさん、本当に医学に関しては化け物ですね。」

確かにな。

「カエデさん。」

「ん？」

イリスが見覚えのあるブツを俺に手渡してきた。

「西の砦に忘れてましたよ？」

「そっか・・・良かった。サンキューイリス。」

「管理はしっかりしてくださいね？」

なくしたと思っていた魔道通信器であつた。よし。

「ツーーー。ツーーー。・・・東端 制圧 完了 フォーリ 毒  
キアラ 診せる」

この魔道通信器、単語しか届かないからな。ケータイがあれば便利なのだが。

「ツーーー。ツーーー。・・・了解 国王 連絡 解毒 準備」  
「ツーーー。ツーーー。・・・了解 オーバー」  
「ツーーー。ツーーー。・・・オーバー」

どうやらレオには連絡してくれるらしいな。ついでに解毒の準備もしておく。よし。こちらにも軍隊が到着するだろう。防衛線の管理もOKだ。

「よし、夜が明けたら俺達は出発しよう。スコットには残ってもらって、軍隊の到着とともに王城へ戻る。そしたら制圧の手柄でしか

るべき地位へ浮上するだろう。」

「了解。」

俺達は窓から、外で騒ぐ兵士達を眺めていた。

さて、話は今日の朝、アリア西の関所にさかのぼる。

くテイウリsideく

さて、ここが西の関所ね。思ったより古い建物だわ。

まあいいでしょう・・・さて、黒虹のメンバーは皆、虹の一つに数えられる髪の色をしているとのことだったけど、私の軍の目の前でちようちよを追いかけている彼女はさすがに違うわよね？

「待つて待つてえ〜！あはははは！」

ここがどこだかわかっているのかな？これから戦場となる場所よ？あれ？城門から誰かでてきた・・・またしても女の子。でもこっちは凄いい焦ってる。

「キアラ姉！！何してるのよ！ほら早く関所に戻るよ！！」

「ええ！？だつてちようちよ、いいから！！」・・・しゅん。」

うわぁ、年齢が逆な気がするの私だけ？・・・と思つたらこの男ども、前の二人がかわいいからって鼻の下のばしちやって。

あれあれ？関所に引きずられてったわ。いつたいたんなのかしら？

まあいいわ。とりあえず関所の目の前。よし、攻撃しかけよう。

「全軍！突撃ー！！！！！」

「「「「「おおおお！！！！！！」「」「」」

女の子達を見送ってから、突撃をかけることにした。さて、向こう



はどう出るかしら？

〈ティウリside out〉

〈ドレイクside〉

さあ、五万の軍隊が突撃してきたな。こちらの兵数は、だいたい一万つてところか。ケルベロスがどう活躍するかだな。

関所によじ登ってくる敵には岩石をぶつけ、煮え湯を浴びせる。古典的な方法だが、間違いはない。段々兵士が疲れたりすると敵さんが登って来てしまうのだが、こつちには癒しの魔女がいるからな・  
・どうにでもなる。問題はケルベロスの情報にあった五人のsecret unit。どうやら馬鹿フォーリの姉貴もいるらしいし、気を引き締めていかないとな。

おや？あそこにいるのは橙髪の女の子。しかも槍を背負っている。間違いはない、あれが天空槍フルキューレのティウリ！！よっしゃ！手柄は頂くぜ！！！！

俺は関所から飛び降り一路、天空槍フルキューレを目指して走り出した。

〈ドレイクside out〉

〈アリシアside〉

ここは関所内の一室。少し日が入りにくい、薄暗い部屋である。

「じつとしてよねキアラ姉。」

全く、戦争が始まるのに何してるのよ。なんだか向こうの大將が、あたし達を黒虹と認識しなかったから助かったみたいダケド・・・正直危なかったんだから！！

「戦争が始まるから、私も頑張るよっ！」

「うん、頼むからちようちよとか追いかけてね？」

満面の笑みでそう言うと、キアラ姉はまたシユンとなってしまう。なんでこうも顔に出るのかしら？

でも戦争とかは東の関所に経験があるキアラ姉のが詳しいし、平気っっちゃ平気なのかも。

「分かった。がんばるキアラ姉。」

「うんっ！」

はあ、もう。どっちがお姉ちゃんだか分からないよ・・・。さて・・・あたしは戦いに出ないとね。

二人で部屋を出て、キアラ姉は医務室、あたしは関所の上へと、それぞれ向かった。

あたしが外に出ると、戦闘真っ只中だった。

まだ関所の上にとどり着いた敵兵は居ないようね……。でもイルの兵士っていうと魔法を使ってきそうで怖いな。あたしもシャオちやんにいろいろ教えてもらったケド、本気で使ったことないからちよつと不安はあるんだよね。でもでも！大丈夫！あたし教えてもらった木魔法と時空魔法のコンボ考えたし、それにカエ兄からもらったミゼリコードがあるもん！負けないよ？

状況を見てみると、だいたい一万くらいの兵士は岩やら弓矢を喰らって戦闘不能みたいね。段々と敵の全ての軍が関所に集結してきてるし、そろそろあたし達の出番かしら？

ふと見渡して見ると、どこを見ても兵士ばかり。アネス姉はもう城門のところでもケルベロスと一緒にスタンバイしてるのは知ってるケド……。あれ？ドレイク居ないし！！

も〜！あたしとドレイクと一緒に戦うはずでしょ〜？

どこ行っちゃったのよ〜……。

あたしがため息を吐いていると、いきなり二つの影が関所の上へと飛び上がる。

「キヤ！何々？」

あたしが辺りを見回していると、急にあたしの前に二人の男が降り立った。

一人はトゲトゲの着いた棍棒を持ったゴツイ赤茶の髪。

もう一人は長いただの棒を持ったはたまたゴツイ赤紫の髪。

あたしゴツイ男苦手なだけだな・・・カエ兄みたいな好青年が好みなんだけど。

そんなことを思っていると、棍棒のほうが開いた。

「お前・・・黒虹の“緑”か？」

げ、完璧にターゲットにされてるし。ここの砦に緑髪いないもんね・・・。つてか違いますつて言ってもこんな目立つツインテールじゃ緑髪さらしてるようなもんじゃん！  
はあゝ。

「そうだけど？」

「俺は secret unit の V I I I <sup>エイ</sup> I I ! お前を倒す!!」

「やれるもんならやってみなさいよ。」

やっぱりね〜!!!

もうやだ、早く終わらそう・・・あれ？でも、secret unit っつてメチャ強なんだっけ？

棍棒を振り上げて突進してくる。仕方ないよね？

「スロウ！」

あたしの指先から半透明の球が飛び出て、突進してきた棍棒男に当

たる。よし。

「ぐ・・・お？なに・・・？じく・・・う・・・ま・・・ほう？」

動きが完全に遅くなっている。フン、こんな遅い球に当たるようじやあまだまだね？

「俺はsecret unitのX！<sup>メン</sup>恥を捨てても危険因子、黒虹を殺害する！！」

長い棒の男が突進してきた。え？二対一？ああ、だから“恥を捨てても”なのね？

・・・だっさーい。カエ兄とかシャオちゃん見習いなよ。かつこよくないよ？キミ達。

「ヘイスト。」

全ての動きが遅くなる。いや、これはあたしが速くなってるだけ。フフ とりあえず戦闘不能にしようか。えい！！

絶対かわせないような位置を瞬時に割り出し、投げナイフを投擲する。

「ぐあ！？」

右肩に当たったか。充分ね。怯んだ隙をついて・・・っと。

ミゼリコードを抜刀し、棒の男の左わき腹を切り裂く。

つてすごーい！何この切れ味！！

針みたいな細さのくせに、切れ味抜群で強度もあるって凄いね！

「ぐああ!!!」

「secret unitっていつてもまだまだね。」

「くそ!」

さて、スロウに罹っている棍棒男にも、手の甲、足の甲に投げナイフを刺し、戦闘不能にする。

「ぐお!?い・・・て・・・。」

「成す術なし?あたし強い」

ドサ!

ドサ!

二人が倒れる。

出血多量だろう。

「あたしは黒虹の“緑”にして、時空少女のアリシア・クロノ・イグニシヤス。安心しなよ?死にはしない。」

なんとなくドレイクに言われたとおりの決めゼリフを言ってみた。フフ、確かに締まるじゃない。

さて、ドレイクはどこに行ったのかな?探さなきゃ。

あたしは走り出した。

「ぐう・・・くそお・・・。」

「ちつく・・・しょう・・・ガハ!・・・時空少女・・・め。」

二人が息絶え絶えにも直後に起き上がったことを、あたしは知らなかった。

ス  
ア  
リ  
シ  
ア  
s  
i  
d  
e  
o  
u  
t  
ス

第56話 制圧任務完了！防衛任務開始（後書き）

感想待ってます！

ってか・・・マジトヤっ！...m ( \_ ) m



第57話 西関所防衛戦！！（前書き）

構想がまとまらず、二日の休載申し訳ありませんでした！

## 第57話 西関所防衛戦！！

（ドレイクside）

「おりゃー！！」

俺は関所から飛び降りると、フルキューレ天空槍に向かって一路、走り出した。  
ツツ、アネスのアホが作ったクレーターのせいで上手く走れねえ・  
。。

飛び降りた地点は関所から意外と離れており、五万の軍隊が攻城している真っ只中だった。

無論、その兵士たちによる攻撃も免れない・・・次々と俺に飛び掛ってくる兵士が現われる。

ま、俺様には関係ないけどな？

「えんりゅうはちがたな焰龍八刀、りょくりゅう三之太刀 緑龍！！！！」

俺が抜刀した村正宗で地面に円を描くと、そこから鋭い木が何本も外側に向かって生える。

当然飛び掛ってきた連中は全てそれに突き刺さり・・・

「ぐわあー！！」

「ぐお！？」

「があー！！」

その木たちを無視して俺は、とりあえず飛び越える。

「よっど。」

するとその光景を見た他の兵士は、

「あ、赤髪……！こいつまさか……！」

「く、黒虹だあ……！黒虹が現われたぞお……！」

「逃げるお！俺達じゃあ殺される……！」

殺しやしないって……。まあなにせよ、これでワルキューレ天空槍の気をひくことはできた。思いつきりこちらを向いている。

「あなたが黒虹なの？」

既に他の兵士たちは関所を攻めるなり散り散りに逃げるなりして、この場には誰もいない。

「ああ、黒虹の“赤”、ドレイク・ベルナスだ。」

「まさかシャオくんだけじゃなく、“焰龍”までもが黒虹の構成員とは。侮れないわね、黒虹の勢力は……。」

シャオを知っている……。？ああ、そういえばシャオはイルの出身だったか。んで俺のこともチェック済み、と。なるほどな。

「それで、気になることが一つあるんだけど、戦う前に聴いていいかな？」

十中八九フォーリのことだろうな。……にしても改めて見ると、ワルキューレ天空槍、キレイな女性だな……。

端正な顔立ちに、橙髪の可愛らしいポニーテール、身長は女の子の割りにや高いが、銀の鎧と戦闘用巢カートの青色がまた美しく彼女を魅せている。背中に背負った黒い槍もまた、色の調和に一役買っているしな……。

「安心しな、うちの“橙”の姉貴だろ？アンタ。いつも俺と剣戟をぶつけ合ってるよ。」

「!?!?・・・そう、質問の必要がなくなったわね。フォーリは・・・生きてたのね？良かったあ・・・フォーリ・・・。」

「ああ、ちなみに今、ここにはいない。今頃はカエデと一緒に大陸東端の制圧をしているだろうよ。」

涙をこぼしながら言う彼女の雰囲気には、弟を思う姉しかない。歴戦の勇者の欠片もない、と言ったところか。しばらく泣くと天空槍（ワルキューレは向き直り、言った。

「カエデ・ミナモト・・・危険度SSの国家標的ターゲットはいないわけね？」

危険度SSリスク? おいおいカエデ、お前犯罪でも犯したのか？

「その危険度リスクつてなんだ？」

「・・・まあいいわ、教えてあげる。イル教国では、犯罪者と敵国の要注意人物に危険度リスクをつけて、イル教国内のギルドに暗殺依頼を出しているのよ。それで、黒虹のリーダーにしてシャオより強いと言われている彼にはSSランク・・・上から2番目のランクを付けさせてもらったわ。ちなみに他の黒虹メンバーはどのような能力者でどの程度の力を持っているのか分からないから、まだ手配書も作っていないけどね。でもさつき連絡が入ってね、“緑”・・・時空少女と名乗るアリシア・クロノ・イグニシャスは私の部下を二人相手取って余裕の勝利をしたそうだから、S+決定ね。あ、ちなみに最高はSSS、神剣のマルス含める二人だけ・・・SSは、死剣のデスや楼剣のミリア、四聖獣の青龍、そして黒虹のリーダー、カエデ・ミナモトの四人。その下にS+、S、S-と続くわね。」

アリシア・・・S+かよ。暗殺者の心配もしねえとな。イル教国め、姑息なことをしてくれる。んで、俺はどうなんだ？

「俺も載っているだろう？焔龍は一応有名だろう？」

「貴方は確かS-ね。でも黒虹に入ったことでS扱いになるかもだけど・・・ここで死ぬでしょ？」

最後の文字にだけ殺気が込められた・・・コイツ、強え。

まあ喋るのはもういい。たいていの情報は聞けたしな。それにしても俺をアリシア以下とは許せねえな・・・ここで評価をカエデと同レベルにまで持って行ってやる！！

「まあいい・・・そろそろ、やるか。」

「そうね・・・。」

俺が村正宗を構えると、天空槍も槍を背中から取る。

「いつでも来い。」

「行くわよ？」

馬鹿と同じ構えだ・・・そのまま突進してくる！

・・・だがよ、これにアジリティアップがかかった相手といつも戦ってんだぜ？余裕で受けられる。

「ヒートアップ」

身体強化をかけ、そのまま槍を下から思いっきり弾く。そのまま体を持ち直し、袈裟切り！！

「ッッ！」

天空槍フルキューレはそれをギリギリでかわすと、バックジャンプで距離をとる。

その距離をとらせまいと俺はそのままスピードでつめより、もう一度一閃！！

天空槍はそれをもかわし、槍を棒術のように活かして横からの叩き付けをしてくる。

俺は攻撃を刀で受け流し、そのまま回転して斬り付け！

天空槍フルキューレは槍を前で交差させ、俺の斬撃を受けると、受けきれずにそのまま後方へ吹っ飛んだ。

は！俺がS-だ？もう一度言ってみる。

すると天空槍フルキューレはゆっくりと起き上がり、口には笑みをたたえてこう言った。

「へえ・・・フォーリと剣戟を交えているだけあって、なかなかやるじゃない。でもね？イルの本領は魔法なのよ？天空槍フルキューレの名の由来、見せてあげる！！」

「へ！そうこなくちゃよ・・・。」

（ドレイクsideout）

くアネス side く

ふむ、あらかたの敵兵は攻めるのに夢中なようだな、よし。

「いいか！これから撃つてでて、ケルベロスの恐ろしさ、痛感させてやろうじゃないか！！」

「「「「おおう！！！！」」」」

総勢240人の部下が、私の目の前に揃っている。ここは城門の裏。今から撃つて出て、強襲を仕掛けるつもりだ……。

「よし！門を開け！！」

ギイイイ！！！！

眼前が急に明るくなる。そうだったな、まだ正午だ。気合入れていこう！！

「行くぞ！！！！」

私の馬を先頭に、全員が駆け出す！目的は城攻めに夢中になっている敵の殲滅。フ・・・私の得た魔法を舐めるなよ？

関所の外に出た私たちは、眼前に城攻めをする兵士たちを見つける。

「ケルベロス！！祖国を！アリアを守るんだあ！！」

「・・・おう！！！！」

クロツドを中心に敵に突入していくケルベロス・・・壮観だな。

さて私は今まさに関所へ登ろうとしている兵士たちに向けて・・・

「ショックプラズマ！！」

私の手から放たれた電光は進み進んでいき、敵兵に直撃する。これは雷の上級魔法、敵を感電させて麻痺させることができる魔法だ。それだけではない、この電光は、操れる。

よし、コイツを感電させたら、あのハシゴと・・・

ぐわあああああ！！！！！！

そのハシゴに触れていた約30名ほどが感電する。

そうだ、これは遠隔操作魔法。中距離、遠距離を得意とする私にとつて、かなり相性がいい。

そしてこれの一番凄いところは、どんな物質であろうとも電気を通すところだ！

たとえばさつき感電させたハシゴ、あれは木製だ。それでも鉄のように感電させることができるのだ・・・。

よし、これで全てのハシゴを感電させてやる！！



よし！！ハシゴに触れていた連中は全て感電させた。関所の味方も少し休憩ができるだろう。

さて次だ。つぎはシャオ君が改良を加えてくれた、今朝練習していた魔法を使うか……。

「ケルベロス！！退避！！」

この前カエデ君が演説の時に使っていた音声拡張の魔道具エコーマイクを使い、ケルベロスを集める。ふう、ムリ言っただのあともらってよかった。これは便利だ。

少しして、ケルベロスが帰ってくる。

「全員！無事か！？」

「はい！負傷者25名！死者は居ません！！」

「ご苦労だった！城に戻り、キアラの手当てを受けさせる！」

「……はい！！！！」

よし、向こうを見れば、戦っている兵士はだいぶ居なくなっただい。。

だいたい攻めている兵士の数は、三万弱と言ったところか。

もうあとは私が一掃してやる。

私は弓を背中から取り出し、構える。

少し伸びてきた紫の長髪が邪魔なので一度払い、弓を引き絞る。矢は番つがえない。

「サンダーボルト!!」

瞬間、帯電した矢が私の手元に出現する。  
それを上空に向かって・・・放つ!!!

ビュン!!

それは大きく弧を描いて・・・敵陣真つ只中へと直撃した。  
それは小さなクレーターが出来上がるほどの威力で、その場にいた  
兵士は全て、感電して一日は身動きとれないだろう。  
さてもういっちょよう!

弓を引き絞り、帯電した矢を・・・放つ!・・・ズガァン!  
弓を引き絞り、帯電した矢を・・・放つ!・・・ズガァン!  
弓を引き絞り、帯電した矢を・・・放つ!・・・ズガァン!

・・・こんなものだろう。四発撃つたあとには、電気を帯びながら  
倒れる無数の敵兵の姿があった。  
立っているやつは・・・む?まだ50人ほどいるか。被弾しなかつ  
たのだろうな・・・。  
ま、あとは任せよう。私の仕事は終わりだ・・・ケルベロスの容態  
も気になるしな。

私は静かに門の中へと戻っていった。

〈アネス side out〉

## 第58話 防衛戦、終幕！（前書き）

（報告）

- ・ドラキュラさん感想ありがとうございます！！
- ・PV50000突破！！これからも頑張ります！！！！！！

## 第58話 防衛戦、終幕！

〈ドレイクside〉

「フルキューレ天空槍の名の由来、見せてあげる！」

「へ！そう来なくちゃよ……。」

俺が刀を構えなおしてフルキューレ天空槍を見ると、彼女はにっこり笑って槍を一振り。そして……

「古代呪法 ウィンディア・ツイスター」

「!?!」

突然ティウリの周りに球状に風が渦巻きはじめる。古代呪法だと!? 風が丸くフルキューレ天空槍を包み込んでいる感じた。……これはいったい？

「これは風の古代呪法、ウィンディア・ツイスター。この技を一番使いこなすことができるから、私はフルキューレ天空槍と呼ばれるのよ……。行くわよ！」

球状の風に包まれながら、槍を使って突進してくる……さっきより格段に速え!!

俺は槍を刀で弾こうとするが、その球状の風に触れたとたん……右肩が削られる!!!!

「ぐあああああ!!!!!!」

……カハッ、いつてえ……。なんだよこれ、触れただけで鎌鼬

を何重にも喰らったような痛み・・・肌が削られるようだ。

あの風には触れちゃいけないようだ・・・近距離の俺には厄介な技だぜ。

俺は血が滴る<sup>したた</sup>右肩を抑えながら、立ち上がる。遠距離つつたら、これかな。

風を纏わせながら平然とこちらに歩いてくる<sup>フルキューレ</sup>天空槍。

それ目がけて俺は、下から地面を削るように刀を振り上げる！

「焰龍<sup>えんりゅう</sup>八刀、四之太刀、土龍！！！」

一直線に土の衝撃波が天空槍に向かって突っ走る！

「な！？」

ドガン！！

これは修行の結果、とてつもない速さにまで成長し、カエデ並の速度を手に入れた。これを避けられる奴なんて、そうそういないさ。

当然、<sup>フルキューレ</sup>天空槍にもクリティカルヒット！風の防御を貫いたのは見ていたから、防ぐ術はないはずだ。

「やったか・・・？」

「フフフ・・・なかなかやるじゃない。まさか遠距離でも放てる技があつたなんてね・・・。」

「！？」

土煙の向こうから、不敵な笑みとともに<sup>フルキューレ</sup>天空槍が現われる。だがかなりのダメージを負ったようだ。口元からは血がたれており、当たったと思われる右わき腹は、鎧を粉碎していた。当然そこからも出血している。

すると何を思ったか、ワルキューレは話し出した。

「この技はね、シャオくんも使えるのよ。」

「シャオも・・・？」

「うん。風による物理的防御と攻撃。魔力を供給し続ける限り、この風のバリアは外れない。そこまではシャオくんと一緒に・・・でもね、私の魔法が強い理由が二つ。一つはね・・・。」

そういつてジャンプする<sup>ワルキューレ</sup>天空槍・・・が、落ちてこない!?

「私の場合は飛べるんだ」

「何!？」

風を纏い、ふわりと飛び始める<sup>ワルキューレ</sup>天空槍。これでは土龍は届かない・・・!

「これで、その衝撃波は届かないよね?どうするの?ちなみに魔法の類は弾くよ?これ。」

つく!!どうする?どうすれば・・・。  
<sup>ワルキューレ</sup>すると天空槍は

「来ないのなら・・・こつちから行くよ!」

正面上空からとてつもない速さで突進してくる<sup>ワルキューレ</sup>天空槍!  
くそ!!!

俺は避ける術を持たず、真正面から受けることになってしまった。それならば、せめて相打ちだ!!!

刀を抜くと、構える。

「焰龍八刀、七之太刀 輝龍!!!」

「へえ、私に立ち向かうんだ? いいわ、受けてたつ。」

そのまま突進の速度を上げる天空槍、俺は刀で土を巻き上げ、光速の一大刀を振るう! 渾身の一撃だ!!! これは当たるとその場で爆発を起こす諸刃の剣。だが、奥の手だ。これしかない!

「おおおおお!!!」

「はあああああ!!!」

ズガアアアア!!!

見事に俺と天空槍を巻き込み、この辺り一面が爆発した。

「・・・ぐ・・・くそ・・・やっぱり痛えな・・・ガハ!!!」

よろよろになりながらも、俺は刀を支えに立っている。だが噴煙の向こうに、天空槍の気配はない・・・殺ったか?

「いたたたあ・・・凄い一撃だったわね、死ぬかと思った。」

「!?!?」

空を見上げると、ところどころ焼け焦げた、風を纏う橙髪のポニテール・・・

「仕留められなかったのか・・・。」

足元がふらつき、倒れかけようとしたその時、

「ドレイク！無事！？」

「大丈夫じゃなさそうだねっ！」

「む、ドレイク君を持ってしてこれか……。」

黒虹のメンバーが、駆けつけてくれていた。

「お前ら……。」

渾身の力で立ち直ると、フルキューレ天空槍が驚く。

「……黒虹か。なんでここに全員？」

「アンタの兵士は全滅させたよ。私も少し疲れた。」

「！？」

アネスがこともなげにそう言うと、一度関所のほうを眺め、あちゃあ……。と呟いてから、こちらに振り向いた。

「まあいいわ。黒虹メンバーの顔は覚えた。あとはギルドに申請して……全員S+ランクに登録してあげる……。ツーー。ツーー。退却命令。」

どこから取り出したのか、上空で魔道通信器を使うと、俺たちに向かってこういった。

「また、戦いを挑みに来るわ。その時は絶対つぶすから。“黒”、弟、シャオ……。そしてスリーエエエの妹もいないみただけど、今度はまとめて相手してあげる。今日のところは、退きましよう。」

そういつて風を強く纏う。



「うわ!？」  
「くう!!！」

砂塵が巻き起こり、急に何も見えなくなつた。  
そしてその砂塵が晴れた時にはもう、フルキューレ天空槍は居なかつた……。  
まけたな……。完全に。  
それにしても恐ろしい力の持ち主だ、フルキューレ天空槍。奴はまだ実力を隠し  
持っている。

『……でもね、私の魔法が強い理由が二つ……。』

アイツはそのうち一つしか見せていない。まだ手の内がある、とい  
うことだ……。  
これからまた、修行だな。

そうして俺は力が抜け、地面に伏した……。

〈ドレイクside out〉

〈アリシアside〉

ドサ……

「あれっ？倒れちゃったよっ？」

「キアラ、治癒してあげて。」

「了解です。」

アネス姉の頼みで、嬉々として治癒を始めるキアラ姉にしても、散々にやられたんだね、ドレイク……。

そういえばあだし、さっきドレイクの爆発を見て、慌ててカ工兄に連絡しちやっただのよね……なぜかシャオちゃんが出たけど。

でもま、退却したことだし、問題ないか。すぐに行く！って言うってたシャオちゃんには謝らないと……。

体に残る傷の一つ一つが深い。にしてもこれは爆発の跡かしら？

そして右肩の、削られたような傷……これは多分、風の古代呪法によるものね。

魔力を流し続けることで、永遠に効果が続く魔法……古代呪法。エンシエントスベル

カ工兄の“ゼーブル・ファー”ほど恐ろしい呪文はないけど、風の古代呪法は体に纏わせる呪文だったのね……。

でもキアラ姉の治癒魔法は凄いなあ。アレだけの傷が見る見る治っていく。

しばらくして完治すると、アネス姉が乱暴にドレイクを担いだ。

あの体を簡単に担ぎ上げますか貴女は……。

なんだか、黒虹のメンバーってやっぱり規格外だなあ。

あたしは一人、クスクスと笑っていた。

「アリシア？どうしたんだ？」

「んーん？なんでもないよ。早く王城に戻って連絡しないとね。」

「ああ、そうだな。だがドレイク君が目を覚ましてからだ。」

「よーしっ、関所に戻ろう！」

キアラ姉の元気な一言に従い、みんなで歩いていく。

途中で「疲れた」とアネス姉がドレイクを引きずりだしたのはご愛嬌。

そしてあたしたちが関所に到着したとき、馬で慌てて東から駆けてきたシャオちゃんに会った。

あたしが慌てて連絡しちゃったせいで、物凄い怒られたけどね・・・  
。そのあとシャオちゃん、問題なかったって連絡を、カ工兄に向かってしてたっけ。

夜。

ドレイクが目を覚ましたあと、黒虹牽制班メンバーは一路、王城へと帰還した。

戻ってきたときの人々の熱狂振りは凄いもので、アネス姉は少し感動していた。

なぜかって、義賊がこんなにも自分たちのやったことを賞賛された

のが初めてだからだそうだ。  
ちよつとかわいそうよね。  
でもでも！勝ててよかった！  
国王が王城の前まで出迎えに来てくれるし、凄い嬉しいよね！  
あれ？

「ツーーー！ツーーー！」

あ、カエ兄だ！

「東端 制圧 完了 フォーリ 毒 キアラ 診せる」

！？

「ツーーー！。ツーーー！。 了解 国王 連絡 解毒 準備。」

「ツーーー！。ツーーー！。 了解 オーバー。」

「ツーーー！。ツーーー！。 オーバー。」

「ねえねえ！！大変だよアネス姉！！フォーリが毒にやられたらしい！！」

「！？本当か？キアラ！解毒準備をしておけ。」

「了解っ！」

「いつ戻ってくるかな？」

「まあだいたい明日か明後日だろうな。それでも平気な毒なのだろう。」

「東の関所にいた軍医さんは応急処置の天才だよっ！多分その人がなんとかかしてくれたんだと思う！」

なるほど……。そうこうしているうちに、国王の目の前に到着する。

アネス姉が膝をつき、報告した。

「作戦は全て成功いたしました！西関所の防衛、大陸東端の制圧、全て、完了です！！」

わあああああ！！！！！！！

周りにいた人々が喚声を上げる。

「分かりました。ご苦労様でした。さあ、王城内にておくつろぎください。カエデが到着次第、酒宴を開きましょう。」

「は！！」

国王の一言で、城門が開く。

さあ、と案内され、あたしたちは中へと戻った。

「ガンドロフ。」

「は！」

「今から10000の兵士をドリドに派遣してください。制圧した兵士たちには帰還命令を。」

「分かりましてございます！」

カエ兄も戻ってこられるんだね？良かったあ。

くアリシアsideoutく

〈ティウリside〉

敗北してしまっただか。残ったのはsecret unitのみ。不  
甲斐ない結果に終わってしまった。

それにしても、secret unitともあるつものが感電で倒  
れるとは。呆れる形よね・・・。

まあいいわ。今度は絶対、負けない。

私は決意を胸に、イル教国へと帰還した。

〈ティウリsideout〉

第59話 解毒と祝勝会（前書き）

（報告）

・月光さん感想ありがとうございます！

## 第59話 解毒と祝勝会

俺がフォーリを担いで馬を走らせる。

後ろからイリスが着いてくる・・・もう少して王城には着くな。

正直イリスにはムリを言ってしまったが、早朝から出発した甲斐があった。

「もうすぐだからな、フォーリ。」

「すまねえなあ、兄貴・・・。」

俺の背中で謝罪するフォーリ。

「気にするな・・・ほら、王城が見えてきたぜ。」

応急処置が済んだとはいえ、まだまだフォーリは安静の状態だ。本来ならキアラに来てもらうのが良かったが、城下やレオにも心配はかけたくない。

だんだんと風景が緑豊かになってくる。先ほどまでは荒野だったのに、偉い差だな。

「カエデさん、どうやら城門前で誰かが待っていてくれます！」

「マジか！ 助かる！」

後方でイリスが叫ぶ。俺は目を凝らしてみているが・・・あれはアネスとキアラにアリシア、シエラか。それに数名の衛兵。

そんなことを思っているうちに城門前へと到着する。

「お疲れ様だね・・・でも、そんなこと言ってる場合じゃなさそうね。」



アリシアがそう言うと、キアラがフォーリを一瞥するなり、

「うん、コレなら私、治せるよっ！すぐ救護室に運んでっ？」

「悪い、助かる！」

フォーリをおろすと、衛兵たちが背負ってくれた。そしてそのまま足早にキアラとともに中へ入っていく・・・頼むぞ、キアラ。

「さて、制圧は完了したぜ？」

「お疲れ様でした。わたくしも本当に感謝しておりますわ。お兄様が今日酒宴を開くおつもりですので、是非皆様でいらしてくださいな。」

「そうか・・・ありがとう。」

「ではひとまず王城へと向かいますよう。」

シエラと二言三言かわす。銀髪に純白のドレスが映える・・・かわいいいな。

そのまま城門を開けて入ろうとすると、城下町は勝利の宴に凄い熱気だった。

まだ正午を過ぎたころなのだが、メインストリートの店は全て祝勝セールと称し、客がかなりにぎわっている。それどころか、“黒虹万歳”だの、“ Ariaに栄光を”だのといった横断幕がそこらじゅうにかかっている。やれやれ、平和ボケしすぎだろ・・・。

シエラも、凄いでしょ？このような熱気は久しぶりです。とにこやかに言っている。そうだな、俺たちも楽しもうか・・・まあフォーリが無事だとわかってからだが。

「その黒髪の兄ちゃん！今日は安くしとくぜ！..」

「わりいな、あとでまた来るよ。」

「そうかい！祝勝記念だ！お前さんももつと今日は楽しみよ！」

「はは、ありがとよ。」

このような会話が続く。にしても、祝勝って・・・そんなに嬉しいか。

「フッフ、なんで一つの勝利でこのような熱気なのか・・・疑問に思っていますか？」

「図星だな・・・聞いてもいいか？」

「ええ。お兄様が戴冠するまで、お父様の天下でした。でもお父様は戦争好きだけでなく、指揮官としてはあまり良いほうではなかったので、負けを重ねたのです。それだけに今回の勝利は犠牲も少なく、あまつさえ領地を拡大できたのですから、皆さんの喜びよりも分かりませんか？」

「なるほどな。」

前で俺とシエラが会話しているあいだ、後ろは女の子談義をしているらしかった。

アリシア、アネス、イリス・・・盛り上がっているようだが、イリスが顔真つ赤なのはなんでだろう？

「昨日の夜は進展あった？」

「な、何を聴くのですかアリシアちゃん!？」

「そりゃあ、押し倒したりとか押し倒されたり・・・」

「フォーリさんも居たんですよ？できるわけないじゃないですか！  
!..」

「それは、フォーリが居なかったらやっていて、と捉えて良いのか？」

「ぐ……それは、って違う！私たちはまだそんな関係では……！」

「まだ、なのね？イリ姉？」

「あゝもう、知りません！！！」

そんな会話だったのだが、ま、俺が聞こえるわけがない。この喧騒の中じゃあな。

「クスクス……後ろは凄いことになってますよ？」

「なんかイリスの顔が赤いな。」

「そうですね・フフフ。」

シエラは聞こえるらしい。喧騒の中で会話を聞き取るって、そうそうできねえよ。

「そういえばレオは？」

「お兄様は宴の準備で忙しいそうです。あ、あと手に入れた領地の区分やら、新たな村の創設やらで。」

「“あと”のが王様らしい仕事だけだな。」

「フフ、そうですね。さあ、着きましたよ。」

目の前にはいつの間にか王城があった。どうやら今日は城門が開け放たれているようだ。

「とりあえずフォーリのところへ行くかな。」

「いえ、申し訳ありませんが、お兄様のところへ行ってあげてもらえませんか？心配していたみたいなので。」

「ん、分かった。」

そこでシエラは、お兄様は部屋にいらっしやいます。とだけ言い残

して居なくなつた。さて。

「これからレオンとこ行くけど、どうする？」

「ほえ？なんでですか？」

まだ顔赤いぞイリス・・・。

「ん？報告。」

「私たちはもう会っているから必要ないな。それよりもドレイク君やシャオ君に、カエデ君たちが帰ってきたことを知らせてやりたい。」

「あたしもアネス姉についていくよ。」

「分かった。イリスはどうする？」

そうだな、確かにシャオたちにも早く会いたい。

「では私はカエデさんに着いて行っても？」

「ん、分かった。」

「じゃあまた後でねカエ兄！」

アリシアとアネスは逆方向へと消えていった。さて。とりあえず向かうはレオの部屋だ。

「じゃ、行くか。」

「はい。」

俺たちは北の塔に繋がる階段に向けて歩き出した。

「カエデさん。」

「ん？」

女の子が横から見上げて話しかけてくる構図って良いよな。ん？身長は同じくらいがいい？知らねえよ。

「このあと・・・明日からの予定ってどうなってますか？」

「そうだな、とりあえずレオにはもう言っているが、バイゼルから海に出て、サントロクとやらに行きたい。」

「・・・！？それは、一人で？」

「まっさかあ。黒虹全員だよ。その間の工作はイリスに任せる。」

「・・・まあ、できないこともありませんが。あの・・・それで・・・」

視線をそらし、顔を赤くしてモジモジし始める・・・目福だな。

だってよ！金髪美少女が隣で恥ずかしそうにしてんのよ？ヤバイだろ！？・・・お、階段ついた。

「どうした？」

階段を上りつつ、聞く。

「少しそれまで時間ありませんか？戦い終わってすぐにまた出かけるって言うのもアレですし。」

「そうだな、みんなの様子を見て・・・特にフォーリが完全に回復するまでは待つか。」

「！！で、でしたら一緒に城下町に買い物でも行きませんか・・・？」

なんだか尻つぼみなので、最後は上手く聞き取れなかったが・・・。

「みんなで？それとも、俺とイリスだけ？」

「あ、あああの、で、できれば後者で……。」

「ん、明日？」

「はい!!!」

「分かった。朝食後に王城前で待ち合わせるか。」

「分かりました!!!!!!」

赤い顔をしながらも、小さくガッツポーズをとるイリス。何か買って欲しいものでもあんなのかな？  
さて、着いたぞ。

「おい！レオ！俺俺!!!」

「ノック、つてご存知ありません？」

中からレオが出てきてツツコミを入れてきた。だが凄く嬉しそうな顔をしているのは気のせいかな？

「カエデ！無事で何よりです。イリスさんも、あがってください。」

「失礼します。」

「お邪魔します。」

レオに通されて中に入る……ここに入るのは何回目だ……つて！

「グライドじゃん。久しぶり!」

「……相変わらずだな貴様は。“お邪魔します”も本当に何か邪魔されそうで怖いぞ。」

「知るか！まあいいや。何でここに？」

グライドはこの前見たときよりも凄く引き締まった体格をしており、正直今のグライドだったらいつぞやのクソ將軍倒せるんじゃないかと思った。

「俺は陛下の護衛だ。まあ、最近は何もなかったのだから護衛もなかったが・・・そのなんだ、貴様が凱旋すると聞いたからな。顔を拝みにきたただけだ。」

八八、カワイイとこあんじゃねえかオッサン。年上にそれは不謹慎か？まあいい。

「そうか。前よりかなり腕上げたんじゃないか？」

「まあな。今の俺はガンドロフ將軍とも互角に渡り合える。それでなんだが・・・。」

「ん？」

グライドは申し訳なさそうに手を合わせながら頼んできた。珍しい。

「恥ずかしい話、互角に戦えても勝てたことがないのだ。それで明日、“焰龍”に稽古を願いたいと思ったのだが、その旨、貴様から頼んではもらえないだろうか？」

「いいぜ。場所と時間は？」

「本当か！！助かる！そうだな、朝でも構わない。場所は練兵場だ。」

「・・・それだったら多分、フォーリが復活してないから、その時間その場所で一人で稽古してると思うぞ？」

「そうか！分かった。早朝に行こう。」

「ん。」

グライドはそこまでの話を終えると、レオの後ろに下がった。・・・正直俺このオッサン嫌いじゃないんだよな。むしろ好きだわこーゆータイプ。

「さて、とりあえずただ今戻りました。」

「お帰りなさい。ではお二人ともおかけください。」

そう言つて自分も円卓に腰掛ける。俺とイリスで隣同士に座ると、レオは話し始めた。

「まずは任務、お疲れ様でした。おかげさまで東端は制圧でき、イールの脅威も退けることができました。それでカエデ、神剣と戦つたというのは本当ですか？」

「ん？ああ。」

メイドさんが紅茶を持ってくる。お礼を言つて受け取り、それをすすっているレオも紅茶を手にする。

「それで、どんな男でしたか？」

「・・・なんでそんなことを？まあ嫌いな奴じゃなかったよ。むしろ好感が持てた。」

「ほう・・・具体的な性格は？」

「そうだな、とりあえず戦闘狂なんだけど、無邪気で・・・それでいて剣が好きなあまり、対等に戦える相手がいないことを嘆いていた。俺はどうやらライバル認定されちゃったよ。」

自嘲気味に笑つと、レオは何か納得した表情でこう言つた。

「では彼は、自分と対等に勝負ができる、ライバルを欲していた、と。」

「ああ、欲望に忠実だな。俺との戦いの間も、心底楽しそうだった。」

「マルス・ロード・・・そんな男でしたか。」

「何かあつたのか？」



俺が頼杖をつきながら聞くと、ええ、と言いながらレオは紅茶をすすする。

「父を葬ったのが、神剣のマルスですからね……。」

意外だな。親父は前線で戦う奴だったのか？

「父は戦争好きな上に、自分より強い人間に挑戦することを生きがいとしている人だったのです。それでルスリアとの戦争にて神剣を相手に敗北……大量出血で死亡しました。最後まで笑っていました。がね……充分だった、たのしかった、と。」

「ずいぶんな親父だな。まあ気にしないが。それで、仇のマルスの人物像を聞いたかった、てな感じか？」

「まあ、そういうことです。それにしても神剣に勝ってしまうとは、相変わらず規格外ですね、貴方は……。」

「あのまま続けてたら勝てたか分からんさ。散々にやられたしな。」

「そうですね……それよりあのマルスに勝ってしまったとなると……かなりの賞金がかかりますね。」

「は？賞金？」

まず意味が分からない。どゆこと？

するとレオは紅茶を飲み終わったのかカップを置く。

「イル教国のギルドでは、国家レベルの危険人物を暗殺依頼に出しているのですよ。」

宗教国だろ一応？自重しやがれ全く。

「それで？俺にいくらかかるんだ？」

「まず危険度リスクというのがありましてね、マルスが最高のSSSランクなんですよ。それに勝ってしまったからには……」

「SSSの超危険人物ってわけか。」

「賞金もマルスを超えるでしょうね。マルスはあれで歴代トップ3の賞金……金貨970枚なのですが……。」

「ちよつとまで。金貨970枚つて、国家予算レベルだろ。」

「ええ。それだけ殺したいのでしょう。」

「どんだけよマジ。つてか俺それに勝っちゃったじゃん。」

「まあ、カエデさんには金貨1000枚でもつくのでは？歴代一位ですよ、そんなだったら。」

クスクス笑つて言うレオだが、洒落にならん。

「それと、黙つて聴いていたようですがイリスさん。」

「ほえ？わ、私も賞金首ですか!？」

「おそらく。黒虹は皆S+くらいはつくのでは？それでもかなりの賞金ですよ。S+は金貨700枚以上ですから。」

「嫌ですいやです!!殺されたくありません!!」

「ごもつとも。」

「ま、気にしないよ、俺は。」

レオの部屋をあとにした俺たちは、フォーリの医務室へと来ていた。

「どうだ？容態は。」

「そうだねっ、あと2日安静にしていれば、復活すると思うよっ、毒も抜いたし！」

「さすがだなキアラ。」

「えへへ・・・まあねっ」

にしても本当に凄いよな。有名な軍医でもムリな治療をやっているんだから・・・。

「でもフォーリさん、起きませんね。」

「そうだよっ。休ませるために睡眠剤投与したからねっ。そのほうが早く治るからっ！」

「なるほど・・・。じゃ、とにかく命の問題はないのな？」

「うんっ！-！」

そうか・・・良かった。  
俺がほっと胸をなでおろしていると・・・

コンコン

「だーれ？」

キアラって個性的だよな・・・。

「シャオでござる。」

「いーよ！」

ガラ

「カエデ殿、フォーリ殿は無事でござるか!？」

「おうシャオ、お疲れ。なんとかキアラのおかげで無事らしい。」

「そうでござったか・・・。いや良かった。」

青髪を背に流し、ほっとしたように言うシャオ。

しばらくすると、ドレイクやアリシア、アネスなんかもやってきて、みんな同じようにフォーリの具合を聞いてきた。

「なあ、考えて見りゃこれって、黒虹全員集合してねえか？」

「……………あ。」

寝てるフォーリと治療中のキアラを除く全員が同じ反応。

「まあいいじゃん。黒虹はみんな仲間思いつてことでき。ね？カエ  
兄。」

「別に悪いわけじゃねえよ。凄いな、と思っただけ。」

「確かにな。そついやシャオ、俺、馬鹿の姉貴とやりあつたんだが・  
・。・。」

「ティウリ殿とでござるか?・・・よく生きて戻られた。」

背中にアリシアをくつつけたシャオが返答する。相変わらず髪の毛をいじられているようだ。

「それで、風の古代呪法を克服する練習に付き合つて欲しい。」

「拙者のは、ティウリ殿と比べたら天と地の差でござるよ?」

「それでもだ。」

「・・・承知。やるからには本気で。」

「無論だ。」

フォーリの姉貴、か。やつぱ強いのか……。ま、俺ならどうにかなるな。

ガララ!

「ん?シエラか。」

「祝勝会を始めようと思うので、皆さん大広間へいらっしやってください。」

「了解。行こうぜ。」

俺たちが廊下に出ると、それぞれメイドさんに連れられて自分の部屋に戻ることに。

祝勝会の前に、それぞれメイドさんがついて着替えなければならぬいそつだ。

どこの貴族のパーティーだよ!??って王族かレオ。

俺は黒のタキシードに、ネクタイを締めてという服装だ。メイドさんの話だとこの祝勝会では、アリアの貴族がこぞって参加するもの

だと聴かされている。・・・んで厄介なことに、俺はかなり有名ならしく、貴族の息子からは妬みの対象、令嬢たちからはとんでもなく人気らしい。それでお近づきになるうとする人間や喧嘩を売ってくる人間がいるから気をつけて、だそうだ。

めんどくさいこと極まりない。  
豪華な大広間に、みんな正装での立食会。ワイングラス片手にみんなで喋る・・・俺なんかは経験したこともないもののようにだ。

「貴方はお強いですしカツコイイですし、しかも国王の無二の親友。そしてこの国最強の組織“黒虹”のリーダー。やっかむな、惚れるな、というほうがムリな話ですよ。ま、私はもう夫が居りますから問題ありませんが。」

服装を正してもらいながら、メイドさんにいろいろ話をされていた。

「めんどくせえ、っただけだよホント。レオの奴に頼んでパスりたい・・・。」

「そんなことおっしゃらないください。勝利の立役者が居なくて何が祝勝会ですか？」

「立役者なんていねえよ。兵士たちみんなが頑張ったから勝ったんだ。」

するとメイドさんは驚いた顔をする。

「手柄を立てたら必死でアピールするものでしょう？やっぱり違いますね、他の男とは。」

「人を殺して何が手柄だ、っていいたいね。少なくとも黒虹メンバーはみんなそう思ってるよ。」

「そうですね、そうですね。これからもアリアのためにお願います。」

「アリアのためじゃねえ。人々のためだ。」

にっこり笑ってそう言ってやる。するとメイドさんは服装正しを終え、

「わかりました。では適当にこのパーティー、流してきてくださいね？」

「ああ、そうする。着付けありがとう。」

それだけ言つと、俺は部屋をあとにした。

「さすがは黒虹のリーダーね……。これからが楽しみな子だわ。次もあの子の担当しよつと。」

俺が部屋を出たあと、メイドさんは笑って呟いていた。

廊下を歩いていると、何だか今日はいつもより人が多い気がする。しかもみんな正装……。ああ、パーティー参加者か。メイドさんに言われた通り、確かに俺に向けられた噂話が耳に入ってくる。

これはストークタウン以来だな……。あんときも盗賊つぶしで目立ってたからなあ。

「あ、あの人よ……。かつこいい。」

「カエデさんでしたわね……。話しかけてみようかしら？」

「会話できたらわたくしたちにも紹介しなさいよ？」

ああ、もう早く着かないかな大広間……。

「ツツ、アイツだけ最近騒がれてんの。」

「ちよつと国王と仲良いからっていい気になりやがって。」

「どうせ大したことねえんだろ？」

こいつらは潰してもいいのかな？・・・いや、我慢我慢・・・。

さて、ここが大広間か。

扉はパーティーということもあって開かれているが、中はとんでもない広さだった。

たとえるならオリンピッククフィギュアスケートのリンクくらいの広さがある。その中に所せましと貴族のお偉方や令嬢、子息が会話を楽しんでいる。

この広さ、バスケットコート二面できるわ全く。・・・バスケットしなくなってきた。

「ヴァニッシュボールでバスケットできないかな・・・？」

思わず呟く。さて、入るかな。とりあえず黒虹メンバーとか、知り合いを探して。

歩いていると、やっぱり視線が突き刺さる。黒髪目立つよなあ。

「もし、貴方はカエデ・ミナモト様では？」

後ろから声が聞こえる。振り返ると、少し年下の緑髪をした令嬢。

ドレスがこの上なく似合っている。・・・さすがにこつこついう場では敬語にしたほうがいいか・・・？

「そうですね、何か？」

そういうとその女の子はクスクス笑い出し・・・ん？



「アリシアてめえ!!」

「だいせいかい!!フッフ、騙されたな〜カエ兄」

さすがは公爵の娘か？

ドレスと髪型の違いで、全然分からなかった。化粧も薄くしているみたいだし。

それにしても似合っている。緑の髪が青いドレスにぴったりだ。

「そ、そんなに見ないですよ。」

珍しく頬を赤らめるアリシア。

「ああ悪い。ずいぶん似合ってたからな。」

「そ、そそ、そう？ありがと。でもカエ兄もかっこいいよ。パーティーー頑張ってるね!」

「ちょ、おい置いてくのかよ?」

そのまま別のところへ行こうとするアリシアを呼び止める。

「え？だってあたしばかり一緒に居たら、他の貴族の女の子たちにひがまれるしさ。あたしも一応貴族の娘だし。」

「そ、か。悪い。じゃあまた後でな。」

「うん、またね。」

アリシアはそのまま向こうへ行ってしまった。

ふう。で、ひがまれるって何よマジで。

さて、別のやつ探すか。

・・・ん？あそこで令嬢たちに囲まれてる青長髪は・・・

「カエデ殿!!」

俺と目があったシャオは、俺を呼び止める。……だがその瞬間、まわりの令嬢たちまで

「カエデってあの“黒”様!？」

「うそ?どこですか!？」

「わたくしに相応しいのはシャオ様とカエデ様……ああ、二人をばべらせたい。」

うん、シカトで逃げようか。つてか最後の奴、おい。

俺は足早にシャオから離れる。

「あ、ちょ、待って薄情者おおおお!」

すまんシャオ。俺はキミを囲んでいる令嬢たちを相手する気力がない。

さて、ここを真っ直ぐ行くとレオの前に出そうだな。つてかレオ、大広間の一番奥に座ってたんだ。よし、あいさつ行くか。

俺が歩いていると、横のほうでどよめきが上がった。なんだ？

ヒュン!ブス!

おおおおおお!!

ん?この風きり音は……。

「私にかかればこのくらい、造作もない。」

「何をこんな会場でやっとなるか!!バキ!」

「痛!？」

アネスが弓芸を披露していた。貴族のご子息の頭の上に何かの実を乗つけて、それに数十本の矢が命中している。マジでここパーティ

「会場だぞ！？場を考えろし。  
しかもその貴族のご子息半泣き状態だよ。お前無理やりやらせてねえか？」

「ただのパーティーじゃあつまらんだろう？いつも宴の時にやってた技を披露して何が悪い？」

「王族のパーティーと義賊のドンちゃん騒ぎ一緒にしてんじゃねえよ！！」

「むっ、深いな。」

「深くねえよ！」

「まあまあ、いいじゃないか楽しかったし。」

「公爵あんたとめろよ！！」

なんとイグニシヤス公爵まで楽しんで見ていた。マジで何やってんだよ・・・。

「もういいよ。公爵とかが楽しんでんならもう何もいわねえよ・・・。」

もうよくわかんないわ・・・。

「そうか。ではもう一度。今度は目隠しでやるぞ！！」  
「自重しろ！」

アネスはもう気にしない。してたまるか。  
レオのところへ向かって歩いてみると、今度は数人の貴族に囲まれた。貴族のオッサン・・・お偉方である。

「外務大臣に法務大臣、ガンドロフ将軍か。どうした？」

「ガッハッハッハ！ほら見ただろっ！この男は俺を見ても物怖じ一

「つしない!!」

「・・・確かに。」

「ほう・・・。」

「・・・なんのようだよガンドロフのオッサン。」

ガンドロフ將軍を見て物怖じするかしないかの話だったらしい。

「いやな、この外務大臣の息子が俺を見るなり泣き出してな。カエデを持ちだしたら試すとか言い出したんだ。だからやってみた。それだけだ。ガツハツハツハ!」

「元氣いいな相変わらず・・・。ちょっと待て、その泣き出した息子って何歳だよ。」

「お前と同じ年じゃないか?」

「外務大臣、息子何歳?」

すると外務大臣は苦虫を噛み潰したような顔で答えた。

「確か17だ。」

「それがこの髭面見ただけで泣き出すってどうよ!？」

「ひ、髭面は酷いなカエデ・・・言い方が悪かった。一回切れただけ、だ。」

「だいぶちげえぞそれ・・・。まあいいや。でもま、ガンドロフのキレ顔みたら確かに怖いかもな・・・。っつかもしかして、だからさつき顔いかつかつたのか?」

「ガツハツハ、まあな!」

こんの髭面、脳みそまで筋肉か?

外務大臣は情けなさそうな顔でこちらを見ている。

「そう気をおとすなって。でも、なんでガンドロフが切れたんだ?」

「俺のがカエデより優秀だ、とか言うからだ。」

・・・ほっときゃいいのにそんなもの。

胸を張って言うガンドロフに、内心ため息をついた。

「まあいいや。俺もう関係ないだろ？またあとでな。」

「おう、じゃあな！」

オッサン三人組を放って、俺はまた歩き出す。

ガンドロフの笑い声は響くなあ。なんかまた笑ってるよ・・・。

「おい、調子のってんじゃねえよ！！！」

ん？少し右のほうで声が聞こえる。おおよ？いいの？パーティー会場で喧嘩とか。

様子見に行ってみると、数人の貴族の子息VS貴族の女の子って構図だ。おいおい、集団で女の子いじめんなよ。だがなんかおかしいな。周りの連中、みんな見ないふりだ。ひでえな。

「おいカエデ、どうした？」

後ろから声がする。振り返るとなんと珍しいツーショット。ドレイクとシエラである。

ドレイクは引き締まった体格に似合うタキシード、シエラはさっきと同じ純白のドレスだ。

なんかドレイクと同じって嫌だな。

俺はネクタイをはずし、少し胸元を涼しくするべくYシャツを第二まで開ける。

「いや、なんかな、喧嘩が起きてんだけど誰も助けようとしないか

ら。」

「なんだよソレ！カエデはそれでいいのか？」

「だから助けにいきこうとしたところ。」

むすつと俺が言うと、ドレイクは悪い、と謝って喧嘩を見る。それとは逆にシエラは、今まで喧嘩に向けていた目をこちらに戻し・・・

「あれはサルトン侯爵の子息、リトですね。侯爵は良い人なのですが、甘やかして育てたのでしょう、息子は横暴な性格と聞いています。」

「女の子は？」

「彼女はよく知りません。察するに下級貴族の娘さんでしょう。喧嘩も、一方的にリトが攻撃するだけで反撃できていませんし。」

なるほどな、可哀想に。よつするに父親の権力をかさに着て喧嘩ぶっかけてんのか。

痛い目見てもらおうかな、そういう奴嫌いだし。

「ドレイク、シエラ、・・・って感じでお願い。」

「了解。」

「クスクス・・・面白いことを考えますわね。」

「頭によさじゃイリスには敵わねえよ。」

「おい！きいてんのかよ！？何ぶつかつといて謝りもしねえんだよ！？」

「い、い、ごめんなさい・・・。」

「ああ！？きこえねえんだ、よ！」

「あー！」

とうとう手が出た。リトのほうは17歳ほどの茶短髪。対する女の子は15歳くらいか？可愛いドレス着てんに、転ばされちゃったよ。そろそろか。

俺がそろそろと言ったのは、シエラが注目を集め終えたってことだ。さて、ここまで黙ってみていたのも胸糞悪かったし、行きますか。

俺は倒れた少女に手を差し伸べて、背中を支えて抱き起こす。

「え？ちよ、あの……。」

「なんだてめえ！！ソイツの肩持つってんなら、分かってんだろっなあ！？」

「やれやれ、大丈夫？きみ。」

俺が顔をのぞきこんで聞くと、少女は頬を赤らめ、

「はい……。」

「そうか。さて、肩持つとどうなるんだ？」

俺は顔をそのリトとやらに向ける。

すると、なにやら勝ち誇った笑みをたたえて……っておいお前キモイぞ？顔。

「そうか。ならお前が二度とこんなパーティーに来られないように父上に言っつてやる。」

「それにしたってダサイよな、お前。こんな年下の女の子に喧嘩売

って……もしかしてそれしかできないんじゃないかねえの？は！だっせえ。」

するとみるみる顔を赤くする青年。俺と同年くらいだな。そして俺が抱きかかえている少女も、大丈夫なんですか？向こうは侯爵の息子なんですよ？と心配そうに言ってくる。

「安心しなつて。大丈夫だから。」

にっこり笑って言つてやる。するとリトとやらは叫んだ。

「ふざけんなよ、てめえなんかより百倍つええ！今からお前ごとく殺してやる！！」

そういつて大またで近づいてくる……が。

「おい。うちのリーダーに何するつもりだ？」

ドレイクがどこからともなく表れ、刀を下種リトの喉元に突きつける。

「……リーダー……ダー……？」

かたや怯えながらドレイクに向かって。かたやおすおすと俺の顔を見ながら。

「俺ら黒虹のリーダーを殺すだど？もう一度言ってみる。その腐った首跳ね飛ばしてやる……！」

「……ひ！く……くる……にじ？」

震えが止まらなくなったようだ。まあ、あんなキレイな刃物突きつ



けられたら怖いわな。  
すると少女は俺に向かって呟く。

「黒髪・・・黒瞳・・・貴方が噂の・・・？」

「そ。カエデ・ミナモト。よろしくね。」

もう一度微笑んでやる。そのまま抱き起こし、立たせた。

「一人で立てるか？」

「はい・・・。」

さて、下種<sup>トウ</sup>を睨みつける。

「おい下種。こんなか弱い女の子いじめて楽しいか？」

するととうとう切れたのか、下種はドレイクの刃を無視して叫んだ。

「ぼ、僕は外務大臣サルトン侯爵の息子だぞ！？黒虹だろうが階級に逆らうのか！？」

やっぱりそう来たか。ま、そのための仕上げなんだけどね。

さ、あとはよろしく、王女様。

「階級ですか・・・ではお兄様の親友に逆らう貴方はどう処分してくれましょう？」

声が出たほうをみんな一斉に振り向く。するとそこにいたのは、美しい銀髪に純白のドレス、そして王族のティアラをつけた、シエラ王女である。

「王女・・・様？」

となりで驚いたように呟く女の子。

するとシエラはそちらを見て笑いかける。大丈夫ですよ。とでも言いたげな視線だ。

「王女様！！コイツは黒虹のリーダーだろうがなんだろうが不敬罪で捕まるべきです！！」

「お黙りなさい？この会は何の会ですか？黒虹による祝勝の会ですよ？その立役者を不敬罪で捕まえる？面白いことをおっしゃいますわね・・・それに先ほども申し上げましたように、このカエデ・ミナモト様はお兄様・・・国王の無二の親友でいらっしやいますよ？どちらかといえば、貴方が国王に対する不敬罪で捕まるべきでは？」

「ぐ・・・おのれ・・・。」

シエラさすが。立役者じゃないけどな。  
さてと・・・。

「そういえばお前、外務大臣の息子だったな。さっきお笑い種になってたぜ？ガンドロフを切れさせて、あまつさえそれで泣きだしちゃった・・・とか。プフ。どこまで行ってもだせえなお前。」

「き、貴様ああああ！！！！」

「だから、もう諦める。ついでにお前俺より優秀なんだって自分で言ったらしいな。」

「あ、ああ！そうだ！」

「・・・どこら辺？」

「そ、それはその、格式、伝統・・・」

「ハハハ、おいおい。お前自身はどこ行ったよ？そりゃご先祖さんが必死に築き上げた地位だろうが。てめえはそれに甘えてるだけじゃねえか。」

「少なくとも、わたくしには天と地の差に見えますわ。と、いうよりサルトン家を雇うのはもう、侯爵の代までにしましょうか。貴方のような人間を雇っても、ろくなことになる気がしませんもの。」  
「ぐ……くそ、覚えてろ!!!」

それだけ言うと、下種は逃げるように出て行った。

……。とりあえずこつちを恍惚と見つめているお嬢さんに向き直る。

「もう大丈夫だよ。」

「あ、あの、ありがとうございました……。」

「ん。キミ、名前は？」

「エリーナ・オルエンドと申します……その、ありがとうございました！」

「ん。じゃあまたな。」

「え、あ、あの……いえ、ではまた。」

顔が赤いが、どうしたんだろう。それじゃあ行くか。

「ドレイク、シエラ、サンキューな。」

「いえ、楽しかったですし、久々にストレス解消になりましたわ。」

「俺も。なかなか楽しかったぜ?」

じゃあまたあとで、と告げてその場を去る。早くレオンとこあいさつして帰りたいからさ。

「カエちゃんっ!」

後ろから目隠しされた。なんか後ろに当たってるんだが……まあ理性を総動員すればなんとかなる。さて、こんな呼び方を俺にする

のは一人しかいない、と気付こうか。

「なんだキアラ？」

「え〜！？どうして分かったの〜！？」

視界が開けると、程なくして前に大人の女性が現われる。・・・大人なのは外見だけだが。

藍色の髪を内巻きにまとめ、それを濃い紫のドレスで映えさせている。うん、キレイだ。胸元開けすぎだと思っただが。

「カエちゃんこれからどうするのっ？」

「どうするって、レオにあいさつして帰る。」

「え〜っ・・・ぶう、遊んでよ。」

「いやいやいやいや場所考えるバカたれが。」

「バカはフォーリとドレイクだもん！」

「正論吐いたってしょうがない。遊ぶってなんだし！」

すると腕組みをして考えはじめ・・・にっこり笑ってこう言った。

「鬼ごっこー！」

「一人でやれ。」

そんな〜、と喋るキアラだが、ここで鬼ごっこなんかしてみる。大惨事になるわ。

「さっきシャオちゃんも疲れた顔で帰っちゃったし、暇なんだよねっ。」

「ドレイクで遊んでろ。」

「うんっ！そうするー！」

そう言っただけで走り去っていった。すまんど레이크。  
さて、マジでそろそろレオんとこ着きたいわ。

「カエデ、楽しんでますか？」

「あり？レオ。玉座んところにいたんじゃねえの？」

「飽きたんです・・・貴族が媚びへつらってくるだけでつまらないので。」

THE王族という格好ではなく、俺と同じようなタキシードを着ているレオ。

「おや、胸元なんか開けて・・・これ以上貴族の女性をトリコにするつもりですか？」

「はあ？なんの話だ？」

「階級や政略ではなく、純粋な恋愛対象として貴方は絶頂の人気を誇っているのですよ？アンケート結果では、一位がカエデ、二位がシャオさん、三位がド레이크さんですね。もはや黒虹以外付け入る隙なし！！ってところでしょうか？」

「王様仕事しろ。」

何アンケートとかとってんだよ。マジで暇だなレオ・・・。

「ですから、書類のたぐいはほとんどシエラがこなしてしまいますので、時間が余るのですよ。」

「もう知らんわ。」

「ハハハ、何かあったようですね。」

「まあな・・・。さて、レオにもあえたし、帰るわ。」

「そうですね。この後舞踏会があるのですが・・・。」

「誰と踊れと？」

「そうですね・・・アリシアさんでは文句を言われますし、シエラ

辺りと？」

「王族と踊るとか、後が怖いからやめとく。まあいいから俺は帰って寝るね。」

「分かりました・・・ではまた今度。またシャオさん交えてお茶でもしましょう。」

レオが笑って手をふる。俺もじゃあな、とだけ言っただけ言っただけレオの前から立ち去った。

さあ、終わったことだし帰りますか。ん、喉渴いたな・・・少し飲み物もらっていいこうか。

俺は近くにあったテーブルからグラスを取り、手近なボトルから液体を注いだ。これはなんのジュースだろうな。まあいいや、少し喉乾きすぎたしな。ツツコミの量が多かったせいでよく喋ったし・・・。

そう思っただけそのグラスを一气飲みする。

その時俺は気付かなかった。それが強い酒だということに。

その時俺は忘れていた。俺は酒に酔うというのとやらかしてしまふという事を。

「あ、やっと見つめました・・・カエデさん。」

「ん？イリスか。」

振り返るとイリスがエメラルドのドレスを着て、恥ずかしそうにこちらを見ていた。

「あ、おいしそうですね、私にもいただけますか？」

「ああ。」

グラスに注いであげる。それをちびちび飲むイリス・・・やべかわ

いい。

飲み終わるとグラスを置いて、俺のほうを向き直る。

「あの、このあと舞踏会があることはご存知ですか？」

「ああ、知っているよ？」

「そ、そのあの、私と踊ってくださいー！」

顔を真っ赤にして言うイリス。ああ、なんか頭がくらくらする……。

「可愛いキミと踊れるなら、俺は全然構わないよ？」

ん？こんなこと言うか俺？……でももういいや、頭が痛くてしょうがない。ほっとこ。

「ほえ！？そ、え？ありがとうございます……／＼／＼」

「そんなに赤くならないでよ。そんなキミも好きだけど。」

「！！！？え、やだ凄いうれし……じゃなくてすきってあわわわあの私……。」

「照れないでつて。かわいいな。」

俺は優しくイリスの頭をなでる。

「はう……そんな……嬉しいです……。」

「嬉しい？良かった。イリス……。」

「ほえ！？ええええ！！！？？」

優しく抱きしめてやる。フッフ、形だけの抵抗なんかしちゃって、かわいいなあ。

「お母様、私今、凄く幸せです……。」

俺の胸の中で、気持ち良さそうに目を瞑るイリス……ってちょっと待て、俺は何をしている!?

待て待て待て待て! ? なんかさつき俺好きとか言ってたか! ? 待てよ……こんなことが起きるのは……あの飲んだものは酒か! ! ! まずい! どうにかしないと! ! ! ってかイリスも凄い気持ち良さげだしっておい! 俺、目をさませええええええ!!

理性を総動員して酔いに打ち勝つ。よし、俺の体は俺のものだああ! なめんなアルコールめええ!

……さあ、とにかくイリスをどうしよう。なんか抱きしめ続けるのもまずいし……

そう思ってた俺は、慌てず、ゆっくりとイリスを解放する。……あれ?

「もう……終わりですか……?」

あるえ〜? イリスが凄い頬を染めて、少し火照ってて色っぽい。しかもなんだ? 少し目が潤んでない?

「あ、いや、あの終わりとかじゃなくて、舞踏会始まるかな〜なんて。」「

やっべえ冷や汗とまんねえ!

アルコールのやろう、余計なことしくさって! ! ! ! !

「そう……ですか……。残念です。でもまだ始まりませんよ? ですから……もう少しこのままで……。」

そう言っただけ俺の胸に体を預けてくるイリス。



俺の理性を崩壊させるつもりかああ!!??って俺が悪いんだっ  
た。まずーい。まどうーい。まっどうーい。どうしようこの状況。  
黒虹メンバーとかに見られたら終わりだぞ・・・あれ、今の発言で  
もしかしてフラグ？

「もう抱きしめてはくれないんですか・・・？」

キャラ変わってないイリスちゃん!?

しかも胸元で上目遣いとか・・・死ぬる!!アイルダイ!!!

いやまて俺はそんなヘタレじゃないはずだ。落ち着け・・・落ち着  
け・・・。

どうすればこの状況を打破できる?どうにかしなければ・・・って  
イリスも俺とおんなじ飲み物飲んでたよな?ってことはこの子、酔  
ってるのか?

「もう、カエデさんたら焦らして・・・そんななら私から行きます  
よ?」

間違いない、顔も赤いし火照ってるし・・・ってあれ?“私から行  
く”?

手を俺の首の後ろに回してくる。なんだこのシチュ?

そのままぐいっつと引き寄せられてちょおおつとまてええええええ  
ええええええ!!!

きす キス kiss

さすがにそれはまずいって!

さあどうする!日ごろの戦闘を思い出せ、一瞬で考えられるだろ!!  
よし!

引き寄せられるがままに、そのまま俺が抱きしめる。

よし、顔はすれ違った。あつぶねえ……。

「なんでですか……？私とはダメなんですか……？」

「そういうわけじゃない。でも、やっぱりしつかりとした関係になつてから。ましてやキミは今酔ってるんだ。落ち着いて？」

すると悲しげな顔をしてイリスは呟く。

「確かに酔っているかもしれませんが……でもこの気持ちは本当です……」

「!!」

ふらつとイリスの体から力が抜ける。寝てしまったみたいだ。

助かった、のかな？

つてか告白された？

マジ？あ、でもね、俺前世でもそうだったけど、告白されると歓喜より恐怖心が先に立つんだ。

なぜかって？

金髪で、ガタイが良くて、タバコをよく吸う……オルソンとか言う奴に見られてないかだけで頭がいつぱいなんだよ!!!

ま、今となつては異世界人なんだ。気にする必要はないんだが。

さて……イリス、部屋まで送ってくか……。

俺はイリスをお姫様だっこして、会場を出る。もう人の目なんか気にしない。

そのまま角を曲がって、階段上って……ってあれ？

イリスの部屋が分からない。だからと言って黒虹メンバーに見つかりたくない。

「どうしよう……。」

「あら。カエデ様。」

「……シエラか。」

振り返ると、たちまち不機嫌な顔になっているのは何故だろう。

「……どうしてイリスさんを抱っこしているのですか？」

「いや、酔いつぶれて寝ちゃって。」

「そうですか……。」

「でさ、イリスの部屋が分からないんだけど……。」

「でしたらわたくしがご案内しますわ。」

「わり、助かる。」

シエラの言葉に抑揚がない……怖い。

目も据わってるし……なんで？

「こちらがイリスさんのお部屋です。」

「悪い、ありがとう。」

部屋に入ってイリスを寝かせる。そして戻ってくると、シエラが腕組みをして立っていた。

「悪かったな。それで、呼び止めたのは？」

「わたくしと舞踏会で踊ってください。」

「なんで怒ってるの？」

「怒ってません。」

「なんで目が据わってるの？」

「据わってません。」

「分かりました。」

今のシエラに逆らえるやつが居たら見てみたい。恐すぎる。

「結局シエラと踊っていただけなのですね？」

クスクス笑うレオ。

シエラが少し席をはずしていたので、聞いてみる。

「なんであんなに機嫌悪いの？ってかなんで俺と踊るのあの子？」  
「二つの問いに一気に答えてみせましょう。」

凄みを利かせて言うレオ。なんか凄いのか凄くないのか分からない。

「お、おお。」

「実はシエラ、貴方のことが好きなようです。」

「・・・は？」

「言葉の通り、そういうことです。イリスさんとは火花が散りますね。」

レオは終始笑顔・・・ってかめちやくちや楽しそうなのが腹立つ。

「修羅場？」

「修羅場。」

頷くレオに俺は成す術なし。もういや。今日はなんて一日だ・・・。ちよつとなきたくなつた俺でした。

## 第60話 師匠との再会、改める信念（前書き）

この回はオルソンsideとして、『』なんでも屋ローランド』へ  
ようこそ』にも掲載されております。  
是非そちらのほうもご覧下さい。

（報告）

・げ、月間ランキング68位！？いやマジ泣いて喜べるんですけど  
！！皆様のご期待に沿えるよう、今後とも頑張っていきますのでよ  
ろしくお願い申し上げます！！

## 第60話 師匠との再会、改める信念

俺が眠りについたのは、シエラ王女に散々振り回されたあとのことだった。

既に窓から見える景色は深夜のソレとなっており、ずいぶんな時間までパーティーが続いたのであるうことが手に取るように分かる。さて、今日はいろんな意味で疲れたし、もう眠ることにしよう・・・。

「おやすみ・・・。」

誰に言うわけでもないが、そう呟いて俺の意識は夢の中へと飛び去っていった。

〈ゼウス side〉

何があるわけじゃないけど、俺は自分の世界を上空から眺めていた。近頃ふと思うときがある。最近のカエデは少し天狗になりすぎてないか・・・？

たまに言動や思惑が少し、頭に乗りすぎている節が見受けられるのだ。

発想や思考は特に変わっていないし、カエデは生前から少し尊大な性格ではあったけど。

「この世界最強の剣士を退けちゃったことが、拍車をかけたかなあ・

「。。。」

思わずため息をつく。これから確かに世界救済のタメに彼は奔走してくれるだろう。

だけどあのままだと、油断で殺される可能性がある。

そうなると俺の力ではもう彼の魂をつなぎとめる事は不可能だ・・・  
ああ、マジでどうしよう。

頭を抱えて唸るものの、善後策が見つからない。

俺が言っても、軽く流されるだけだろうし、何よりせつかくできた友達だから、あんまり強く言っつて喧嘩になるわけにもいかないよなあ。。。。

だからといって、あの世界にカエデより強く、叱咤激励できる人物がいるとは思えない。

「アイツの師匠を俺の世界に送り込めればよかったんだけどなあ」

ん？

そうか、ここに二人を連れてくればいいのか！！

そんでカエデの師匠・・・オルソン・ピアースに頼んで、もう一度性根を鍛えなおしてもらおうか！

よし、そうと決まれば即行動だ。

俺は部屋を飛び出し、兄さんを探しにでかけた。



「~~~~~」

いた・・・カラオケなんかにはまりやがって。

「~~~~~」

「兄さんー!!」

「~~~~~」

「に・い・さん!!!!!!」

「~~~~~」 Oh~~~~!!!!」

ブチ!!!!!!

俺の血管と同時にカラオケコードがブチギれる。

Oh~~~~!!と同時にドヤ顔でコチラを向いたからだ!!!!!!

「おい!せつかく90点台いけそうだったのに!!」

「知るかボケえ!何度呼んだら聞こえるんだテメエ全能神のくせに耳ぶつとんでんじゃねえか!」

「な!?!なにもそこまで言わなくても……」

「あ、悪い、良い過ぎた……」

やべ、キレるとおさまらねえ。

まあいいや。

「それで?なんのようだ?」

あ、兄さんケロっとしてる。まあそこが兄さんらしいっちゃらしいけど……。

まあそこは気にしないよ。

「あ、そうそう、オルソンをここに送れないか?」

「……………?なんで?」  
「実は……………」

俺は一部始終を全部兄さんに話した。カエデのためにも必要なことだと思って……………。

すると兄さんも頷いてくれて、すぐに連れてくる、と転送装置をつけた。

……………ん?

なんでカラオケをもう一度つなぐ?

しかもさっきの続きから?

〈ゼウスside out〉

〈オルソンside〉

「ああ……………そついや」

「あん?」

日課になりつつある愛馬達の世話の途中で懐かしい情景を思い出した。

「いやな、昔の事や」

「昔?」

相棒・シヨウがタバコを燻らせ愛馬であるスルスミの軀をブラシで擦りながら俺に視線を向けてくる。

ジユピターの手入れが一段落し、軽く愛馬の軀を叩くと厩舎の外に出て木製の柵にもたれ掛かった。

ポケットからタバコを抜いてジッポで火を点けると紫煙を吐き出して一息つける。

するとジユピターが俺の頭に自分の鼻面を軽く押し当ててくる。

甘えているようだ。

それに苦笑しながら鼻面を撫でてやる。

「で、昔の事ってのは？」

背後から相棒の問い掛け。

ニコチンとタールまみれの空気を肺に送り込み、それを吐き出した。

「なに：俺が傭兵に成り立ての頃に弟子：みたいなガキを教育した事があつたんだよ」

今になっても鮮明に思い出す事が出来る。

あの日本人特有の黒髪に黒い瞳、そして黄色い肌。

だが：平和ボケしている国柄の割には、えらく尊大で唯我独尊な雰

困気があつたガキだった。

そんな手も付けられそうにない“ガキ”が皮剥けて帰国した時の表情は：形容し辛い、そう何処かスッキリしたような、何かを見付けたような：そんな表情だった。

…あの野郎：ちゃんと“約束”守ってるんだらうか？

冗談半分本気半分だったが…。

「お前に弟子ねえ…」

「意外か？」

「意外：というより、天変地異だな」

ヒヒン、と相棒の青毛の愛馬が同意するように嘶いた。

…まったく。

アイツ：今頃、何やってるんだか。

成長していれば、ちょうど：高校生あたりだらうか？

どんな野郎になっているのか興味はある。

だが：会える訳ねえか。

自嘲の微笑が零れた。

『~~~~~』

…背後で何かが崩れる音が聞こえた。

おそらく…いや絶対に頭の中に響いた歌声(?)の影響だろう。

『~~~~~』

「ウゼエわぁ!~!」

『アアン!?その台詞は二度目…って…アゝア…折角、初の90点  
台に行けるかと思ったのによぉぉ』

…どうやら我等が神様はジャパニーズカラオケにはまっているらしい。

残念ながら…何を歌っているかは判らなかったが。

「で…何の用だ?」

まるで頭痛を堪えるかのように低い声が背後から聞こえる。

『いや、用があるのはシヨウじゃなくてよ、オルソンだ』

……は?

『お前さ、源楓って知ってるか?』

「…まぁ…」

知っている、どころではないが。

『実はさ…弟に頼まれてよ』

弟？

『おう。そのカエデって奴が異世界…まあ弟が創った世界に行ったらしいんだけど、ちょいと問題が起きてな。ここはちょいと、師匠の“有り難い”説教が必要だって頼まれた訳よ』

ちょっと待て…なんでアイツが異世界に…！？

『それはソイツに聞け。んじゃま…転送』

「えっ…なっ!？」

俺はシヨウを残し、光に包まれて既舎から消えた。

〈オルソン side out〉

〈ゼウス side〉

もうすぐオルソンがこちらに来ると言うので、俺はカエデをこちらに呼ぶことにする。都合の良いことに、カエデはもう眠ったようだ。それにしても兄さんの呼び出し方は酷いんじゃないか？

同じところから見えていたけど、オルソンの相棒、崩れ落ちたぞ……？  
そして呼び出すやいなや、指パッチン一つで革張りのソファやローテーブルやワイングラスやらを作り出し、場をセッティングする兄さん。

そこまでするか？ 普通。

さて、カエデを呼ぼうか……。

〈ゼウスside out〉

〈カエデside〉

「うづ……ここは、またゼウスの野郎か。今日は疲れてんだよ寝かせろよ……」

いきなり目を覚まされたかと思えば、いつかの白い空間……最後に来たのは、黒虹結成直後だったか？

「久しぶり、カエデ」

そう久しぶりでもないけどな。

すると茶髪を掻きながらゼウスは苦笑する。

「その俺との会話を拒絶するの辞めない？ 心読むのも意外と疲れるんだけど」

喋ったら俺の口が疲れる。

「いつも使ってたんだろその口は……！」

「……これで良いのか？ んで、今度はどうした？ また歴史が変わったのか？」

思い当たる節が見当たらない。  
正直なんて呼ばれたのか分からない。

「いや、そうじゃなくてな……カエデ、最近天狗になってないか？」  
「はあ？ 俺は言われたことをまっとうしてるだけだ。天狗になる要素なんざ、どこにもねえよ。」

コイツが何を言いたいのか分からない。  
だが、察するに説教でもしたいのだろうか？

俺は説教なんてされるようなことやった覚えはないし、それ以外にこの会話の意図がつかめない。  
するとゼウスはため息を一つ。今の俺の心は読んだのだろうか？

「ああ、じっくり読ませてもらった。最近のカエデの言動や思考は正直俺が見てても、少し目に余るものがあるからな。だから、説教を受けてもらう」

「受けてもらう？ なんだその言い方？」

「ま、しばらく待ってる。説教会場には後で転送してやる」

……説教会場？ なんのこっちゃ。

〈カエデ side out〉

〈ゼウス side〉



ふう、カエデは俺の部屋で待機させるとして、少しカエデの師匠、オルソンとも話してみたい。

アイツの師匠ともなると、どんな人間なのかかなり興味湧くからね。

兄さんの部屋に行ってみると、さっき転送してきた金髪の男と、ワイングラスを酌み交わして語り合っていた。……今度カエデともやってみようかな。

「……だろうな。腐っても元軍人だ」

「さて話を戻すか。なんでも、そのガキ……いや、源楓っていったか？ そいつが死んで俺の弟が異世界に送ったらしい」

二人の話声が聞こえたが、俺が戻ってきたのを察知したのだろうか。兄さんが話をこちらに持ってきてくれるらしい。

まだ俺はその場に出たわけではないのだが、そろそろ俺から話そうか……。

「なんでまたアイツが異世界に？」

オルソンの問いかけに答えようとする兄さん。悪いけど、これからは俺が話させてもらおう。

「それは「それは、世界の統一の為だよ」「」

俺はオルソンの後ろから声をかけ、目の前に現われる。

その声にオルソンが振り返る……なるほど、歴戦の勇者ともいえる相をしている。だが、少し軽いかな？ さて、とりあえずあいさつ

はしておこう。

「どうもはじめまして。貴方がオルソン？」

「ええオルソン・ピアース、傭兵です。そちらは？」

体格に似合わず、礼儀正しい男のようだ。確か、海兵隊に所属していたと言ったか？

その時の名残なのか・・・出身国柄、神に対する敬意を持っているのだろうか？

まあどっちにしろカエデとは偉い差だ。少しは俺のこと敬えや。

おっとトリップしてしまった。

そこで、自分が自己紹介していないことに気付く。

「あつ俺としたことが。ゴメン申し遅れたね。俺はゼウス。そこにいる、ちやらんぼらんの弟だよ」

あごで兄さんを指す。……まださっきのカラオケのことが頭から離れないからな。

それにどう考えても俺のが真面目でしょ？

でもさあ……

「ちやらんぼらんかああ、言うようになったなゼウス」

「当然でしょ、暇があればカラオケやったりゲームやったり漫画を読んだり」

「息抜きと言え。しっかりと仕事はやってるからな」

「…そうなんだよねえ…ハア…」

そうなのだ。仕事はしっかりやってるし、何より兄さんの世界のほうがスペック……基本性能は全て上だ……。おや？

オルソンが訝しそうな顔をしているので、読心術を使ってみる。兄

さんも俺の視線の先に気がついたのか、二人で使役することとなる。

『正直、目の前の御仁達が本当に神なのか怪しく思えてきた』

「……」

少し沈黙。オルソンを前に、兄さんが言う。

「失礼だなあ？」

「全くだよ」

ま、それには同感だ。兄さんはまだ読心術を使っていたらしく……

「そういうことお」

心を読まれたことに関することだろう。

続いて呆れに変わるオルソンの表情。これは読心術なんか使わなくてもすぐ分かる。

『やっぱりこのテンションにはついていけねえや』

とでも思っているのだろう。

違うかい？オルソン。

クスクスと笑みをこぼしながら、俺は心の中でそう思った。

「成る程…アイツを異世界に送ったのは、世界の統一と歴史を改善するため」

「…まあ要約すると、そうなるね」

兄さんの座るソファの横を少し開けてもらい、オルソンと対面して一部始終を語る。

俺がカエデを送り込んだ理由が主だ。

オルソンはそれを本当に真剣な表情で聞いてくれている。助かるな。やっぱり自分の弟子のことだからだろうか……？

さて、そろそろ本題に移りますか。

少しソファに深く座りなおし、オルソンの双眸を見つめて話す。

「それです…ちょっとカエデに問題が起きてね」

「まさか…と思うが…」

さすが、自分の弟子のことか？

もう感づいたか……。

「…たぶん、貴方が想像しているのは間違いじゃないと思うよ」

「…ハア…」

俺がため息を吐こうとした瞬間、先をオルソンに越されてしまう。そんなにも手に掛かる弟子だったのか。カエデよ……。

「あの野郎…。まったく、覚えたてのガキは…」

本当にしようがない奴だ・・・とても言いたげな表情だ。確かにな・・・やっぱり教育してきたのは自分だから・・・

「そうそう…“覚えてたて”？」

あれ？なんか・・・？

「いくら治外法権だからって女子と気兼ねなく、くんずぼぐれつ」「って違う！なんでその答えに行き着くの!？」

「ギャハハハハ!！」

ツッコミを入れる俺のとなりで、腹を抱えて笑い出す兄さん。兄さん、笑ってる場合じゃないよ・・・。

こんなところで・・・あ、でも昨日のカエデは危なかったな。思わず苦笑する。

「ジョークですジョーク。…ここからは真面目にいきますが…天狗になっっているってところですかね」

まあ、ジョークだろうな。それにしても、やっぱり分かってるんだな、じぶんの弟子の事・・・。

「…そうなんだよねえ。…まったく最初からそう言ってくれれば」「ガハハハッ…ゲホッ」

俺が話してんのに、こんのちゃらんぼらんはあ……………!もう、無視だ。

「それで他でもない師匠である貴方にカエデの更正をお願いしたいなあって」

やっと本題に入れたよ・・・。  
オルソンも同じようなこと思っているようだ。  
分かってないのは隣でツボってるバカ兄貴だけ・・・。  
するとオルソンは腕を組み、俺のほうを見て話し出す。

「…そもそも、あの時に全て教え込んだ相手を再教育するってのは面倒なんですよ。男は15過ぎたら自分の尻は自分で拭かないとならねえでしょうに」

「うん…まあ間違っちゃいないけどさ…」

確かにそうなんだよな・・・自分でどうにかしろって言いたいけど、さっき話したとおり自覚無し、だからなあ。

「だが…カエデの奴には問題あり、と」

「うん…」

分かってるんだな、やっぱ・・・はあ、情けない。  
なんだかオルソンが哀れみの目を向けている気がするが、気にしたら負けだ。

「…まあゼウスが創った世界は、あんまり良い世界じゃねえからな  
かといって俺達みたいな神が直接介入するのはご法度。やって良いのは間接的にだけ」

悪かったな・・・兄さんより基本性能が劣るんだ。  
どうにかしてこの怠け者の兄貴を抜かしたいよなあ。このままじゃ悔しいよ。

でもま確かに、俺が介入できたらいいんだけどな。ご法度。

「…その世界はその世界の住人の物？」  
「その通り」

分かってるな、オルソンで。やっぱり賢いんだろうなあ。  
兄さんも笑って頷いていたけど、さすがの兄さんも、もう真面目に話してくれている。

「…このまま行くと歴史が繰り返されてしまう。その先には幸せな世界なんか待っていないんだ。頼むよオルソン。カエデに喝を…いや彼の眼を覚まさせてやってくれ！」

もう懇願するしかないよなあ。後はオルソンに全て任せよう。  
少しの間オルソンは色々思いを逡巡させているようだったが……。

「…判りました。引き受けましょう」  
「本当に！？ 良かった、ホントに良かった！ 待ってて直ぐに連れて来るから！！」

助かった！これで何とか、カエデも少しは……。俺は脱兎のごとく、カエデがいる部屋へと駆け出した。

「…フウ…悪いな面倒を掛けて」  
「いえ…」

「本来ならアイツの仕事なんだろうが、いかんせん優し過ぎるんだよ」

「……………」  
「その上、愛着というのかな？ 生み出した世界が、いくら酷い物になろうと消滅させねえ。壊して新しい物を創る事も可能だろうに…」  
「弟思いなんですな。」

「そう言われたのは初めてだな…。だが…まあ…うん…悪くはねえ」

か  
」

実は、少しの間会話が聞こえていた。走りながら、思った。

「ありがとう、兄さん」

〈ゼウス side out〉

〈カエデ side〉

しばらく待たされたかと思えば、息も荒くゼウスが帰ってきた。  
何々？何事？

「さあ、説教会場へ連れてってやる！俺はここで待ってるから、  
思う存分説教されて来い！！」

「ちよ、は？ え！？」

俺がテンパっている間もなく、視界が真っ暗になった。

最後に見たゼウスの顔は、どことなくほころんでいるように見えた。



次に視界が明るくなった時、目の前には革張りのソファとローテーブル、二人の金髪の男が目に入った……って！！！！

「えっここ何処！？って、オルソン！！？」

久々に見るオルソンは、あんまし変わっていなかった……なんでいるの！？

「よお、カエデ。久しぶりだな。そうだな……5年と2ヶ月ぶりくらいか？」

「なんでそこまで覚えてるんだよ！？」

気楽に言うオルソンってか、オルソンとは二度と会えないとか言っ  
てなかったか！？ ゼウス！！

「それは俺が優秀な奴だからだ」

答えになってねえよ……。少々呆れる。すると、もう一人。オルソン  
ほどとは行かないが、丈夫そうな金髪の男が、声をかけてくる。

「ヨツ、はじめまして。お前がカエデだな？俺はゼウスの兄貴だ。  
名前は……まあ長い付き合いになる訳じゃなし必要ないか」

ああ、この男がメリ○サ歌ってたっていう、ゼウスの兄貴か。  
兄弟のくせに髪の色違うのな。

「細けえ事は気にすんな」

なんか、俺とオルソン両方を見て言われた。心読まれたみたいだが、オルソンもなのか？

「ん？ ゼウスの野郎はどうした？」

ゼウスの兄貴は俺のほうを向くと、弟の行方を聞いてきた。

「あつ向こうで待ってるって」

「ああ成る程ねえ…。なら俺も少し場を外すかな。終わったら呼んでくれや」

何かなるほどねなのは分からないが、それだけ言うと一瞬でゼウスの兄貴はきえた。

正直、もうこいつら兄弟が何をやっても驚かない。

結局取り残されたのは、白い空間内に置かれたソファやらローテーブルやら、そして俺とオルソンだった。

「…さあて。改めて久しぶりだなカエデ」

いまだ状況があまりつかめていないが、どうやらゼウスの兄貴の世界に飛んでいるという話は本当だったようだ。いやしかし、まさか本当に再会できるとはな…。

俺が感傷に浸っていると、オルソンが声をかけてくる。

「ここに居るって事は…お前も死んだんだな？」

も、か。

「ああ…オルソンは？」

一瞬考えたようだったのでマズったかと思ったが、軽く話してくれた。

「…とある戦場で、非戦闘員しかいない村を所属部隊が襲撃してな。それを本隊に伝えようとしたら後ろからズドン！ だ」

「じゃねえ！全然軽い内容じゃねえ！！」

「は！？それ裏切りじゃん！意味わかんねえ！！  
しかもオルソンみたら笑ってるし！」

「なんで笑ってられるんだよ！？ オルソンは正しい事をしたのに殺されたんだぞ、悔しいとは思わないのかよ！？」

正直俺は驚いていた。このオルソンみたいな人間が、そんなところで死んで良いものかと。

少し激昂しすぎたかもしれないねえが、正直怒り心頭だ。

するとオルソンはポケットからタバコを取り出し、啜って火をつけ、息を吐いてからこう言った。

「人間は遅かれ早かれ、いずれ死ぬ。必ずな。あがく事も逃げる事も出来ねえよ」

「…んなこと言ってたって。」

俺が言葉にできないでいると、オルソンはもう一度紫煙を吐き出す。

「俺の事はどうでも良い。実はな、カエデの所の神 - ゼウスにお前の再教育を頼まれた」

「再教育？」

「ああ」

・・・そういえば、説教会場にご案内、だったな。アイツ曰く。せつかくの再会になんで説教なんだよ。

「お前は異世界で使命がある。それが世界の - 天下統一。間違いないか？」

「ああ」

「本当に遂行できるのか？」

……は？

いやいやオルソン、アンタと親父にしこまれてんだぜ？俺は。遂行できるに決まってる。いや、やらなきゃならねえんだ。

「当たり前だろ？ 俺は、この能力で世界を - 皆を救ってみせる。誰も傷付かない世界、誰も悲しむ事がない世界にしてみせる！！」

俺の目標を語ると、オルソンは表現できないような複雑な笑みを浮かべながら、何度も頷いていた。・・・何が言いたい？

「何を寝ぼけてんだ馬鹿野郎が」

「えっ！？」

寝ぼけてるだ！？

ふざけんなよ！

するとオルソンは口元からタバコをはずすと、一息に言う。

「全てを、皆を救う？ ハッ笑わせんなよ。テメエは神にでも成り上がったつもりか？んなモンは、あの良い加減な神様だけで充分だぜ」

「何を言ってるんだよ！これが俺の正義、俺の力だ！！」

神にできないからこうして俺が代行してんだ！！

そもそも正義を貫けと言ったのはオルソン、お前だろ！？  
するとオルソンはタバコを啜えなおし、呟くように言った。

「へエ…。なら聞くが…その能力を何故もつと有効に使わない？」

「えっ…？」

何を…？言っている意味が分からない。

「まあ色々と聞いたさ。お前…人を殺したくないそうだな？」

「当然だろ！俺は…アンタと一緒に見た、あの虐殺の光景なんか見たくないんだから！！」

「…それが甘いつてんだよ馬鹿弟子が」

「なっ！？」

傭兵のアンタと違って、俺はあんなもの見せられてハイ次の仕事…  
なんていかねえんだよ！！

するとオルソンは俺の身長にあわせて少し背を落とすと、俺をたしなめる。

「良いか、その耳をかつぽじつてよく聞け。お前はなんで、お前が  
いる世界の統一に乗り出しているんだ。俺から言わせれば“最大多  
数の最大幸福”。それが統一っていう形なんだろうよ。理解は出来  
る。だが…それだけだ」

「なにを…？」

「何個か言っておくぜ。成り上がるのも大概にしゃがれ。そんで…  
…お前には“覚悟”が足りない」

オルソンはそう言い切ると短くなったタバコを、ポケットに有った  
携帯灰皿に放り込み、新しいタバコを啜えて火を点ける。

なに・・・？

「…“覚悟”だった？」

「ああ」

「なんだよそりゃ？ 人を殺す覚悟か？」

俺には覚悟ができています。それに、さっきから俺にはオルソンの意図がつかめない。

「違えよ。“意志を貫く覚悟”だ」

・・・は？

「言った通りだ。お前にはそれが足りねえんだよ。いや…無いが正しいか」

「そんなこと！！」

俺は反論しようとして試みる・・・が。

「言い切れるのか？」

クソつたれが。確かに俺は・・・敵兵だろうと生きていて欲しいさ。でも、それを許すとより多くの命が失われる・・・確かに今までの傲慢だったとも言いきれない。ふう、とオルソンはため息を一つ。二本目のタバコも、既に短くなってきたしまっている。

「それが答えだ。それなのに“正義”に“力”。テメエがやってるのはな、ガキのマスターベーションなんだよ」

「ッ！？」

はあ！？ わ、わけのわかんねえこと言ってんじゃねえ！！

「俺からの課題だ馬鹿弟子。お前が真に“正義”だと呼べるモノを探せ。自分の人生を賭けてな」

「俺の正義は……」

「だからお前の正義は、俺から言わせれば、ただの独りよがり。それを他者に押し付けてるだけだ」

・・・言えなくもない。だから余計に腹が立つ。

「なら…アンタの“正義”は？」

別に聞いてどうこうと言うわけではない、が。

この男の言うことなら、何か分かる事があるかもしれない・・・。

「んなモンは無えよ」

「えっ？」

「“正義”なんてモンは退役した時にドブ川に捨ててやった。“正義”は時代と立つ陣営によって変わる。まるで風向きみてえにな」

「昨日の味方は今日の敵？」

「ああ。そして、昨日の敵は今日の味方って奴だ」

な……なんだよ。それ……。

「だが強いて言うなら『俺が正しいと思つた事を実行に移す』。それが俺の正義。…たぶん相棒の奴もそう答えるかもな」

オルソンはそれだけ言って紫煙を吸い込み鼻孔から吐き出した。

俺が正しいと思ったことを実行に移す……。

「俺から言う事はそれぐらいだ。…終わりましたよ、コイツを送って下さい」

「~~~~~ん、ああ終わったのか。んじゃ転送つと」

いきなり現われた神は、俺に向かってなんらかの術をかけるっておい！！

まだ俺の話は……！！

「……………！！」

クソ、声がでねえ！

俺の視界が真っ暗になっていく。  
最後の力を振り絞り、叫ぶ。

「待ってくれオルソン！俺はどうすれば自分の“正義”を“力”を見付けられるんだ！？」

「そんなモンはテメエで考えて、テメエで見付ける馬鹿弟子が！いつまでもガキ扱いされてえのか！？」

「ガキ！？」

「テメエで気付けねえなら何歳になってもガキだ。じゃあな」

「待つ……」

俺が最後まで言い終わらないうちに、目の前が真っ暗になった……。

「フウ……良かったのか？」

「さあてね、これがアイツにとって最善だったかは判りませんよ」

「だが…次善にはなっただろうよ」



「そう信じたいですね……」

俺の聞こえた最後の会話……なんだかんだ言っつて、俺のこと思っつてくれてたのか……。

次に目を覚ましたのはさっきのゼウスの部屋だった。俺の前でゼウスは、のんびりと椅子に腰掛けている。どうやら俺も座っているようだ。

「……で、どうだった？ 再会は」

「胸糞悪かったよ……本当に。あれが5年ぶりの再会のあるべき姿か？」

ゼウスは口角を吊り上げて笑う。

「だけど……その割には良い顔してるじゃないか」

「まあな。口はわりいが、やっぱりアイツは俺の師匠だからな」

五年ぶりの再会とさえ思わなければ、あの口の悪さだって承知のはずだ。

それに、少し俺としても反省はある。これからどう生きていくか、なんて難しいことは考えず、少し周りの人間の考えも探ってみよう……。

「うん、それがいいよ」

そう言ってゼウスはにっこり笑う。

「心読むなし」

俺も笑った。

オルソン、ムカつくし腹立つしぶちギレそうだけど……まあ、感謝だけはしといてやるよ。  
……ありがとな。

第60話 師匠との再会、改める信念（後書き）

祝！60話書き上げ！！

……人気投票とかって、やりたいけどタイミングがつかめない。

第61話 デート？イリスと買い物へ 前編（前書き）

（報告）

・煉獄姫さん、感想ありがとうございます！！

・今回、いろいろとリア充要素が加わります。苦手な方はご遠慮ください。

## 第61話 デート？イリスと買い物へ 前編

ゼウスの部屋を後にした俺は、すぐに目が覚めた。

起きてみると既に日は差しており、だいたい元の世界で言えば8:30くらいであろうことが予想される。大きく伸びをして、ベッドから這い出して着替える・・・そこで昨日、タキシードから着替えもせずに寝てしまったことに気付いた。

「ふう、そついや昨日は酷い目に遭ったんだった。シエラの奴・・・」

精神衛生上、彼女と踊るのは周りの視線が辛かった。

正直もう、パーティーなんか出たくない・・・。

とりあえず服を着替え、黒めのジーンズと白いワイシャツ、そして黒の外套・・・フロウを纏い、鏡の前で髪を確かめる。

そついえば本当に黒髪ってほとんど居ないんだよな。目立つのは嫌いじゃないんだが、目立ちすぎるのは遠慮したい・・・。

寝癖を直し、部屋を出る。いつものように食堂へ向かっていると、後ろから声がした。

「カエデ！」

振り返ると赤髪短髪、細いながらもしつかりとした肉付きをした男が、刀を片手に走ってきた。

「ドレイクか。どうした？」

「聞いてなかったぜ？このあとグライドの稽古をすることになったんだが、カエデから連絡が来るはずだったんじゃないのか？」

「あ。」

やっべえすっかり忘れてた。  
そういえば昨日約束したんだっただな。グライドにドレイクの修行を  
受けさせるって。  
俺は頭を掻きつつ、片手で謝る。

「わりい、言っただけでなかったな……んで、手伝ってやってもらえね  
えか？」

「まあ俺は構わないけどよ……。午前中だけな。」

「分かった。朝飯行こうぜ。」

「おう。」

ドレイクと二人、食堂へ向かった。

階段に差し掛かり降りている途中、ドレイクが訝しそうに俺の顔を  
覗き込んだ。

「それにしても、今日のカエデはなんかすっきりした顔してねえか  
？」

「ん？そうか？」

特にいつもと変わらない表情をしていたつもりだったが……。  
ドレイクにはそう映ったらしい。

「ああ、なんか晴れ晴れしてるぞ？」

ま、吹っ切れたっちゃ吹っ切れたよな、昨日の夜。  
俺は頭の後ろで手を組み、のんびり言った。

「ま、夢の中で説教喰らったからだろうよ。」

「夢？」

不思議そうに聞いてくる。

「ああ、わざわざ別の世界からな……。」「  
「?????」

ドレイクの様子を見る限り、分かって居なさそうだが放っておく。それにしても、本当にわざわざ他の世界から来てくれるとは……。意外と弟子思いじゃねえか、オルソン。少しそんなことを思いつつ、失笑してしまう。あの軍隊育ちの最強クラスの傭兵が、俺のことをわざわざ気遣ってくれていたとはな……。とにかくアイツには恩を返す場所もない。正直歯がゆいが、俺が自分の正義を見つけて、それで世界を仲間と平定できたなら、それが恩返しってことでいいか？オルソン。ふう、とため息を一つ吐くと、食堂の前に到着する。食堂と言ってもさすがは王城、豪華なシャンデリアに、大きな円テーブルが沢山。果ては食材は全て高級品つと。いろいろ無駄遣いしてんなあ。俺とドレイクが食堂に入ると、一つのテーブルに黒虹メンバーは全員そろっていた。

「おはよ、カエ兄。」

アリシアが声をかけてくる。まだ起きぬけのようで、髪は結ばずストレート、少し目がトロンとしていた。俺はアリシアの隣に座ると、全員を見る。

「もうみんな食べ終わったのか？」

「これからだよ。カエちゃんとドレイクのこと待ってたからっ！」

「そか、わりい。」

しばらくすると、メイドさんがいろいろ食事を持ってくる。それを食べながら、今日の予定を話すことにしたいが・・・昨日のこともあって、イリスと顔があわせにくい。

覚えてなきや嬉しいんだが・・・向こうも目が合つと頬を赤らめてそむけてくる辺り、忘れてなどいないだろう。

「さて、今日明日はみんな休暇だ。その後、少し全員で出かけるかな。」

「・・・？どこへでござるか？」

フライドチキンのようなものをかじりながら、シャオが聞いてくる。だがまあ、この話は

「その時のお楽しみだ。」

につこり笑ってシャオに言う。何かあると思ったのかシャオはもう何も聞いてこなかったが、代わりにフォーリが口を開いた。

「兄貴い、何か隠してんのかあ？」

「まあな。明後日までちょっと待ってる。」

フォーリをなだめ、残りの食事に手をつける。  
このパンみたいな美味しいな。

「あの・・・カエデさん？」

「ん？」

上目遣いでちらちらこちらを見ながら、イリスが話しかけてくる。



頬も染まっつて……朝からヤバイなおい！

「今日、あの、城門の前で待ってますから……。」

「ああ、了解。」

「言えたあ……。」

なんだ、そつちのことか。つて違う。昨日のこと覚えてるかどうか、後で言及しないとな。

覚えてたら謝んなきゃいけないし。

するとアリシアが、妙な笑みを携えている。よく見るとアネスもだ。

「カエ兄とイリ姉はお出かけですかあ〜？」

「ち、ちが！そんなんじやにやいです！つて噛んじやったはうう……。」

「イリス、なに自滅してんだよ……そ、買出しに行ってくる。みんなは予定どうなってるんだ？」

周りを見渡すと、それぞれ思い思いに口を開く。

「そうだな、私はケルベロスを率いて久々に狩りでも行くかな。」

「拙者は今日はドレイク殿と修行。それが午後からでござる。」

「私は医務室に居るよっ。」

「午前中はグライドの稽古、午後からシャオと修行だな。」

「俺は練兵場で訓練だぜえ？」

「あたしはどうしようかな〜……フフ」

最後のアリシアのは気になるが、まあそれぞれ予定はあるみたいだな。

「それじゃ、二日間余暇があるから、気ままにみんな過ごしてくれ。」

「  
それだけ言って席を立つ。とりあえず、今日明日の予定をレオに連絡して・・・金稼ぎの手段でも聞くかな。黒虹は義勇兵扱いだから衣食住の提供はされても収入ねえし。そんなことを考えながら廊下を歩く。昨日を見てるとやけに人が少ない気がするが、まあこちらが正常なのだろう。」

「あの、すみませーん。」

「んあ？ああキミは・・・。」

赤茶の髪をした、15歳ほどの幼げな女の子・・・確かエリーナと言ったか。昨日の祝勝会で絡まれていた子だ。今日はドレスなどではなく、動きやすそうな服に、バンダナみたいなものを巻いている。

「昨日はありがとうございました！」

そう言っ頭を下げる。わざわざそれを言いに来たのか・・・。

「ああ、良いつて。あんなことあったら誰でも助けるし。」

「いえ・・・ああそれと。陛下より手紙を預かっています。」

「レオから？」

服の胸ポケット？みたいなところからいそいそと白い封筒を取り出すエリーナちゃん。

手渡されたものを受け取り、封を開く。ん？エリーナちゃんは俺の様子をずっと見ているみたいだ。

カサカサ、と手紙を取り出し広げると、なんともまあ綺麗な細かい

字の羅列が書いてあった。  
それが二枚。とりあえず一枚目を読んでみる事にした。

親友へ

昨日はとても楽しませていただきました。  
シエラもあのあと機嫌がよく、こちらとしても色々と助かっていま  
す。

さて、王城で暮らすようになってから既に15日・・・衣食住の提  
供はして参りましたが、カエデは職を持っていないそうですね。  
そろそろ金銭面での問題が出てくるのではないでしょうか。

恩人に支給するお金もないのは心苦しい限りですが、こちらにも金銭  
不足でして。

つきましてはお詫びという形で、稼ぎ先を一つ紹介させていただきます。  
ます。

戦士ギルドです。

このギルドは依頼を受けてそれを完遂していく事で報酬を得られる  
場所です。

まあギルドは普通、ランクを上げていかなければ高い収入は得られ  
ないのですが、そこは“黒虹”、私が紹介状を書きましたので、最  
高ランクの一つ下・・・SSランクから始められるようにしてあり  
ます。

ちなみに手紙を渡したオルエンド嬢は、ギルドの受付嬢ですので疑  
問があれば彼女へ。

なかなか良い話ですし、専門家が知り合いなのですから乗らない手  
はないと思います。

黒虹の休暇を利用して、散歩気分で稼いでみてはいかがでしょう？

では。

レオール・アルス・アリア

・・・散歩気分つてさ、俺をなんだと思つてんだよ。

つて言うかこの手紙みた時点でもう、レオの部屋に足運ぶ必要なくなつたな。

二枚目を見てみると、これはギルドへの紹介状のようだ。

「エリーナちゃん、受付嬢だったんだ？」

「はい。」

微笑んで返事を返すエリーナちゃん。どうやらこの子は手紙の内容を知ってるみたいだな。

「じゃあこの話受けるよ。あとでそのギルドには寄るから・・・この紹介状は渡しとく。」

「分かりました。お待ちしております！」

俺から手紙を受け取ると、エリーナちゃんはスキップして去っていった。

さて・・・じゃあイリスを待たせても悪いし、部屋に戻って準備しますか。

レオの部屋に向かっていたので、その下の階にある俺の部屋は当然同じ方向だ。

部屋の前までは軽い早足だ。イリスを待たせちゃ悪いしな。

「ふう・・・財布は・・・と・・・あった。さて・・・。」

辺りを見回し、足りないものを探す。

久々の買い物だ。何か足りないものがあれば買っておきたい。

「・・・特にない、か。」

それだけ確認すると、自分の部屋の鍵を締め・・・こうしているとホテルかなんかに泊まってるみたいだよな。

そして城門へと歩き出す。ここからは少し遠いが、まあ疲れるような距離じゃない。

北の塔を出て、気持ちの良い日差しの中歩く。

木漏れ日が心地良い。

「最近また少し気温が上がってきたか・・・？」

そんなことを呟きながら、城門を目指す。

この世界・・・というよりこの国にも四季はあるようだ。

他の国は分からないがな。この世界に落とされた時より、ずっと暖かい。

「そろそろ着くか。」

城門が見えてきた。その下には、城門に寄りかかる小さな影も確認できる。

イリス、先に来てたのか。

「わりい、待たせたな。」

そう言いつつ近寄る。するとイリスもこちらに気付いたようで、

「いえ、私も今着いたばかりです。」

と微笑んだ。・・・やっぱり可愛いな。

その笑顔もさることながら、その小さな体に似合った可愛らしい白いワンピースに、青い上着を羽織っていて、それがブロンドのウェーブした髪に合っているからもう何だか正直今すぐ抱きしめたいくらいに愛らしさだ。

「あの・・・カエデさん？」

「ああ悪い。見とれてた。」

「ほえ！？・・・いえ、あの、ありがとうございます・・・。」

顔を真っ赤にして背けるイリス。

「さて、買い物って言ってたけど、何が欲しいんだ？」

「あ・・・はい。服とアクセサリ、少し魔道具を見て、帰りに食事でもできたらと。カエデさんは予定ありますか？」

なかなか女の子してるなあ。魔道具を無視すれば、女の子のショッピングのソレだ。

「そうだな、途中一回だけ戦士ギルドに寄ればそれでいい。」

「戦士ギルドですか。分かりました。」

「じゃ、行くか。」

「はい。」

頷いてくれたので、二人で城門前を後にした。

城門を出ると、そこは直接城下町のメインストリートへと繋がっている。

当然かなりの賑わいを見せており、これは商業都市バイゼル並・・・いやそれ以上か？

熱気が凄いな・・・呼び込みや競り（せり）の音がどこかしこに響いていた。

「凄いですねやっぱり・・・。」

「ああ、王城に来てからは内部だけで充分だったからな。見てなかったよ、城下町・・・。」

かなり混雑しているが、さすがは城下町。道もかなり広いのでバイゼルのように押し合いへし合いになることはない。

「じゃあまず服でも見ていくか？」  
「はい！」

元気よく返事してくれるイリス・・・昨日のことがあるからかな？  
なんだか過剰に可愛く感じる。

「？ どうしたんですか？」

「いや、なんでもないよ。とりあえず・・・ここだ。入ろうか。」

どの世界も洋服店というのは同じなんだろうか？

店内には生地や材質の違いで区分けされた洋服やらズボンやらスカートやらが、所狭しと並んでいる。そしてどの世界でも同じなのか、女の子は楽しそうにいろいろ洋服を選んでいる。

イリスもその一人のようで、自分にあてがってはコレでもないアレでもない、自分にあつた服を探しているようだ。・・・最も、俺から見ると全部似合っているように見えてしまうのだが。

別に俺はワイシャツに黒ズボン、フロウというこの格好が気に入っている、購入する必要もない。というわけでイリスを見守る事で時間を潰していた。

それにしてもこの店、だいぶ洒落たものがたくさん売っている。元の世界にこの店があれば、ずいぶん鼻<sup>ひいき</sup>尻にしたのになあ。

「カエデさんカエデさん・・・。」

「イリス？」

しばらく自分の頭の中へとトリップしていたせいか、イリスが居なくなっていることに気付かなかった。そして小声で呼ばれているものの、一瞬どこから声が出たのか分からずあたりを見回す。

・・・オイオイ、試着室まであるのかよ。

イリスはその試着室のカーテンから顔だけ覗かせ、俺を手招きして



いた。

行ってみるとイリスはカーテンを開ける。

さっきまで着ていた服をハンガーにかけ、赤黒チェックのミニスカートにリボン付きブラウスという、これまた可愛い格好で立っていた。

「その・・・どうですか？」

「イリス、俺を悩殺する気か？」

「ほえ！？の、悩殺ってそんな・・・。」

「ソレくらい可愛いよ。凄く似合ってる。」

「本当ですか!？」

目を輝かせて言うイリス。・・・ってか何でこつも俺の好みの服装じゃないかねこの子は。

さつきから可愛すぎてしょうがない。

カーテンを閉め、衣擦れの音がしばらく鳴っていたかと思うと、イリスが出てきた。

手にはさつき着ていたブラウスとミニスカートを持って。

「これ買っちゃいます。」

「いいのか？俺の感性だけで。」

エヘへと笑ってイリスは言っているが、別段俺はファッションに自信があるわけでもない。

俺の意思だけで決めて良いのか？

「いいんです。カエデさんが可愛いって言うってくれるならそれだけで・・・。」

恥ずかしそうに下を向いて呟く。

・・・なんだこの可愛い生き物は！！！！

「そ、そうか。じゃあまあ、良いけど・・・。」

ああもう！何を押されてんだよ俺は！！

「じゃあお会計済ませて来ますね。」

それだけ言つと、ご機嫌で店の奥へと入っていった。

硬貨の音と店員の声がしてしばらく、イリスが紙袋を持って戻ってきた。

「もう服は良いのか？」

「はい！」

「じゃあ出るか。それ持つよ。」

俺が右手を差し伸べ店の外に出ようとすると、急に右手に暖かい感触がした。

「イリス？」

「ダメ・・・ですか？」

俺の右手に乗つけられたのは紙袋ではなくイリスの左手・・・オイオイちよつと待て。

昨日の夜オルソンに会ったばかりでそれは辛いつて・・・！！でもね、瞳を潤ませて聞いてくるイリスに拒絶を起こせる勇者が居たら出てきて欲しい。

ま、そんな奴居たら俺がボコボコにするけどな？

「ダメじゃないけど・・・荷物は持つよ。」

「あ、ハイ、ありがとうございます……。」

心なしかすげえ嬉しそう。とりあえず俺は左手で荷物を受け取り、そのまま肩に担いだ。

まあ学生時代に鞆とかを肩から吊る提げたアレだ。

「すみませんがそういうことは店頭以外でもらえると嬉しいです。さつきから店内のお客様……特に男性のお客様からの舌打ちが聞くに堪えません……。」

「うわ！ごめんなさい！！！」

慌てて外にでる。店員さんが申し訳なさそうに言ってくるから余計に恥ずかしい……！

道に出ると、また目立つなあ……。片や黒髪黒マント、片や絶世の美少女……。浮くって。これ絶対浮くって。さっさと店に入って逃げよう。

「じゃあアクセサリショップだな。」

「はい。お願いします！」

手をつないでいるせいで、さつきより距離が近い……。その至近距離で見上げてくるからもうなんか嬉しい通り越して泣きそう……。

「あ、ありましたあ。」

城とは反対側……。つまり南の方角を指差すイリス。

そちらを見てみると、左側のほうに露店があった。確かにいろいろアクセサリを売っているようだが……。露店<sup>こゝれ</sup>じゃあ人の視線から逃れられないなあ。

その目の前まで行くと、露店のオッサンに呼び止められた。

「その黒マントの兄ちゃん！彼女に何かプレゼントしてやりな！」  
「か、かか彼女ってそんな・私はまだ力エデさんとはそんな関係じゃ・・・ってまだとか自分で言ってるし私ったらちゃっかりしちゃってフフフ・・・。」

右隣でトリップしている子がいるが、気にしたら負けだと思つ。

「そつだな。お勧めはあるかい？」

「お、買ってくれんのかい？ その嬢ちゃんだと何でも似合つちまいそつだが、コレなんかどうだい？」

そう言つて商品の中から翡翠色の石が入つた指輪を出してきた。この石はエメラルドだろうか・・・？指輪自体は銀色で、メツキだとは到底思えない。受け取ると、そんなに重くはないようだが。

「いくらだろうか？」

「これは銀貨10枚だな。」

ん？高いな。この世界の価値感は一回イリスに聞いたことがある。だが、だいたい銅貨一枚100円くらいの値段だったはずだ。そう考えると、この商品は10万円という事になる。

「じゃあ店主、これが銀貨10枚に等しいという証明になる説明をしてくれよ。」

「おお良いだろう。そうやって価値を見出せるのは中々だぜ？ じゃあ説明しよう。この銀色の台座とリングだが、これはサントロの奥地にある、ドラゴンの住まう鉱山から採つてきた最高級の銀だ。ドラゴンの住まうところの資源はどれも高級な材質になることは知ってるよな？ そこで採れた銀をだな、イル教国の技術で丁寧に加

工してある。それだけでだいたい銀貨3枚の値が付くな。それで次だ。この翡翠色の石だが、これはルナを帯びた石でな。天に近いところで数年間置いておかないとルナを帯びることはない。そしてこれは木属性のルナを帯びているから、こんな美しい色になっているのさ。どうだい。ここまでの色にするのに3年は掛かるものなんだぜ？」

なるほど。確かにこの指輪の銀細工は大したものだし、翡翠色の石にしたって元の世界では俺のような庶民がお目にかかれるものじゃない。だが問題は……。

「そんなものを店主みたいな露店商が買えることだけが信じられないのだが？」

「ハツハツハ！鋭いなあキミは。確かに俺のような露天商がそんなもの買えるはずないかも知れない。だが俺はバイゼルに店を持っていてな。たまにコチラに売りに来る、向こうでは少し名の知れた商人なのさ。だから仕入れていても問題ない。」

「なるほどな……まあいいだろ。どの道この指輪は気に入った。」

そういつて銀貨10枚を渡す。

すると店主は驚いたような顔をして、

「兄ちゃんみたいに鋭い人が、まさか買っていくとは思わなかったよ。いやさっきの話に嘘はねえがな？」

「人を見る目だけはあると自負してるもんでな。目を見て決めたま。これからも面白いもんがあったら売りに来てくれ、店主。」

「おう！毎度あり！」

それだけ言うと、イリスを向き直る……まだトリップしてたか。

「イリス。」

「でも私はそんなこと・・・ほえ!? な、なんででしょう!？」

「何を一人で言っていたかは知らないが、とりあえず俺から。」

指輪を手渡すと、イリスの表情が凄く明るくなり、次いで赤くなりそして・・・またトリップした。プロポーズがどのとか言っている。ちげーっつの。

「ほら、行くぞ。」

「ほえ!? あ、はい・・・。」

大事そうに指輪を握っていたのを見て、俺も少しあげてよかったと思っただ。

少し、おなががすいたな。

お天道様を見れば、だいたい正午あたりであることがうかがえる。

「少し、何か食べるか？」

「そうですね。そういえばメイドさんたちに教えてもらった美味しいお店があるので、そこに行きましょう。」

「ん、任せる。」

そのままイリスに引かれるように付いていく。もちろん手は繋いだまま・・・オルソン、見逃せ!

するとメインストリートが一つの大きな交差点にぶつかった。そこを右に曲がり、進む。すると左手に大きな店が見えてきた。まるでドン・キホーテのようなキングサイズの店に驚く。

「これが戦士ギルドですよ。食事を終えたら寄りましょうか。」

「ああ、そうだな。」

言われてみれば、そこに出入りする人間はだいたい荒くれ者のような姿だったり、装備を整えていたりと様々だ。なるほど、確かに戦士ギルドかも知れない。

そこを通り過ぎ、そのまま歩くこと数分。

何だか小じやれたログハウスのような店が現われた。

「ここ？」

「そうです。城のメイドさんたちには一番人気のお店だそうですよ。」

カランコロン……

「いらっしやいませ。」

店員さんに案内されるがまま、窓際の二人席に座る。向かい合う形だ。

それにしても、元の世界にもありそうな店だな。

このログ調の壁や家具なんかはそのままそっくり地球にありそうだ。

「何を頼みましょうか。」

「メイドさんたちは、お勧めとかは何も？」

「そういえば、ありましたね……これです。」

メニューを眺め、必死で探していたようだが、どうやらあったみたいだ。

その名前のところを指差し、俺にメニューを見せてくる。

「何々……デミグラスハンバーグ!？」

「な、何をそんなに驚いているのですか？」

いや・・・地球にあつただる確か、こんな名前の料理が。ハンバーグとかモロだし。

「俺はそれでいいや。イリスは？」

「私もお勧めのものを食べてみたいので、それで・・・すみませ  
くん。」

店員さんが来て、注文をとる。何だかレストランの形態も、あまり  
変わらないんだな。

ま、家族経営の神様だから同じようになるのは仕方ないのかもなあ。

「それはそうと、こんな指輪頂いて本当に良いのですか？」

「ああ、良いつて。なかなか良い代物らしいしな。」

店員さんが居なくなつて、イリスが聞いてくる。ま、元からあげる  
つもりだったから問題ない。

「そうですか・・・本当にありがとうございます。あと、昨日酔い  
つぶれた私をわざわざ部屋まで運んでくれたそうですね。何から何  
まで、恥ずかしいですが、ありがとうございます。」

！ 覚えてないみたいだな。良かったあ・・・。

でも、酔つた上に告白が今までされたんだよ・・・アレ本当は  
どうなんだろうか。もっとも聞く勇氣なんかないけれど。

でもイリスも酒飲むとああなるんだな。覚えとこう。封印しなけれ  
ば問題だ。

そうこうしているうちに、料理が運ばれてきた。

熱々のグリルの上に、美味しそうなハンバーグ。完全にデミグラス  
ソースかかっているしなあ。



「いただきます。」

「ご丁寧にナイフとフォークもあるしな、この世界。

まあそれは最初に来た時から知っていたが・・・モグモグ。

「お、確かにメイドさんたちに大好評なだけあるな。美味しい美味い・・・む？」

「どうした？イリス。」

「あ、いえ。そうやって食べるものなのですね・・・。」

「あ？ああ。」

「普通にフォークで抑えてナイフで切って、フォークで食ってたんだが。」

「もしかしてそれはこの世界では亜流なのか？」

「両手とも使うのかぁ・・・上手く行きません。」

「ガチャガチャと頑張っているが、ナイフで上手く切れなかったり、フォークの力が強すぎたりと、いろいろ問題があるようだ。」

「この世界では、片手しか使わないのか？」

「え？ああ、異世界の食べ方でしたか・・・でも器用なんですねカエデさん。」

「まあトンファー使ってるからな。両手とも上手く使えねえと、死ぬし。」

「フフフ、そうですね・・・それにしても、難しいです。」

「はは、練習だ練習。」

「うう〜！」

イリスはずっと頑張っていた。とうに食べ終えた俺は、目の保養にその光景をずっと眺めていた。

第62話 デート？イリスと買い物へ 後編（前書き）

〈報告〉

・きしねいさん感想ありがとうございます…！

## 第62話 デート？イリスと買い物へ 後編

レストランで食事を食べ終えたあと、俺たちは戦士ギルドの前に来ていた。

さつき見たときも思ったが、トンでもなくでかい建物だ。

扉の向こうの喧騒がここまで聞こえる。多分、この扉を開けたらもっと騒がしいだろう。

扉はそんなに大きなものではなく、一人の力で簡単に開けられる観音開きの扉だ。

木製で何か炎と水と・・・ああ、魔法の属性が8つそれぞれモチーフにされた彫刻が施してある。

「相変わらず大きな建物ですねぇ・・・。」

後ろで感心したようにイリスが呟く。振り返ると、この建物を見上げて呆けていた。・・・クス。

ワンピースに上着羽織っただけの格好っただけで年下に見えるのに、そんな見上げ方してたらなんか小学生みたいだぜ？

「アホ面引っ提げてないで、ほら行くぞ。」

「ほえ？・・・ってアホ面ってなんですかあゝ！！！」

俺の背中をポカポカ叩いてくるイリスを無視して、扉を開ける。すると、開いた瞬間風が吹いてくるように喧騒が広がった。

「うるせえ・・・。」

「ですね。」

紙袋を片手に持ち替えて扉を開け中に入ってみると、ここは無造作

に沢山の丸テーブルが置いてあるエリアらしく、戦士同士の待ち合わせ場所のようだ。

右手には酒やら飯やらを売っている売店があり、そこで戦士たちは酒やらを買い込み、ここのエリアで騒いでいるらしい。

酒くせえったらありやしねえ。しかもしばらくの間王城暮らした俺だから、この酒は酔うより不快感が出てきそうだ・・・つまるところ、安酒。まあ、贅沢な！なんていわれたらしようがねえけどな。基本俺酒飲まねえし。

扉から一直線上にはテーブルは置いておらず、真っ直ぐ目線で追っていくと掲示板のようなものがあつた。

察するにクエストボードだろう。前の世界でゲームもそこそこやったからな。

ギルドの掲示板「クエストボード」って感覚がある。

ん？

その横には階段があり、二階に行けるようだ。

二階のほうへ目をやってみると、数人の戦士がいるのが見えた。どうやら二階はバルコニーのようになっていて、あそこからならギルド内が一望できるのだろう。

ふむ、そういう展望台みたいところが好きだからな。後で行ってみよう。

さて、一階に目を戻す。エリーナちゃんが受付嬢と言っていた以上、受付があるはずだ。

・・・まあ無いつて言うのも想像できないけどな。

掲示板を見てみると、一人の屈強な男が紙切れを一枚引きちぎるのが見えた。

その男を目で追っていると、左のほうへとどんどん進んで行き・・・あつた、受付。

男がその紙切れを提出しているところが、まさしく受付のようだった。

「受付みつけ、と。イリス、行こうか。」  
「あ、はい。」

俺らが歩いていると、なにやら視線がうざい。ま、いかにも怪しい少年と、お出かけ着の可愛い少女だからな。場違いにもほどがある。

掲示板の前にたどり着き一度眺めてみると、やっぱりクエストボードだった。

なにやら同じような紙切れに色々な依頼が書いてあり、その紙切れたちは例外なく右下にスタンプが押されている。主にDとかEとかだ。俺の予測が正しければ、そのローマ字以上のランクしか受けられない依頼、という事だろう。・・・でも、この世界にもローマ字があつたとはな。

俺がSSSの賞金首になりそうだ、って話を聞いたときも思ったが・・・やっぱり家族経営の神様どもが仕事をサボったからだろうか？ゼウスはともかく、あの軽そうな兄貴のほうならやり兼ねん。

さて、受付へ行こうか。

回れ左・・・ってなかなか聞かないが、とりあえずそうする。

そして真っ直ぐ歩いて行くと、受付があつた。エリーナの姿はなく、緑色のエプロンに茶髪の女の子が接待してくれる。

「こちらへどうぞ。」

「あ、はい。」

俺が受付の前に行くと、その女の子は営業スマイルで受け答えてくれた。それにしても受付嬢ってエリーナちゃんぐらいの年齢の子しかいないのだろうか。この子もエリーナちゃんと大して変わらない年齢だと思うのだが。

「今日はどういっごう用件でしょうか？」

「エリーナちゃんは居る？」

「エリーナですか？さっきお昼休憩に入ってしまったが・・・少々お待ちください。」

そう言っつてその受付嬢の女の子は去っていった。それにしても去り際に不審な顔していたが、誤解されてないといいけど・・・。

くマリsideく

はい、受付嬢のマリです！

今廊下を休憩室に向かつて早足で歩いてます！

今受付やってたんだけど、なんか可愛い女の子連れた男の子が来て、結構カツコイイから話せるだけチャンス！と思って他の受付の子に取られないように慌てて呼んだんだけど・・・。

何？エリーナの知り合い！？

全くあの子意外と隅に置けないんだから！

話が終わったらちゃんと紹介してもらわないとね！！

・・・着いた！

バン！！

ちよっとお行儀悪いけど、扉を思いっきり開く。

数人お食事中の同僚が居たけどエリーナは・・・居た！！  
隅っこでお友達と談笑してるし。

「エリーナ！！なんかカツコイイ黒髪の男の子がアンタのこと探してるわよ！！どういうこと！！？」

大声で叫ぶと、お食事中の同僚たちも一斉にエリーナのほうを見る。するとエリーナは一瞬ハテナを浮かべたのち、

「あ、カエデさんだ！いつけない、早く行かないと！」

慌ててエプロンを締めて、身なりを整えて・・・あら？鏡の前で髪型まで確認しちゃって珍しいわね。フッフ・・脈ありかしら？それにしてもカエデって・・・どっかで聞いたような名前ね。

すると、次々に同僚がエリーナを囲みはじめる。

みんな色恋沙汰好きよね。ま、年頃ですからしょうがない。

「その人とどういう関係？」

「エリーナが髪型までチェックするってどういうことよ？」

「あとで紹介してね？」

次々に言い寄る同僚たちに、エリーナが顔を赤くして叫ぶ。

「そんなんじゃないってば！！あの人はただこの前助けてもらっただけの・・・じゃなくて！！ただのお客さんだから気にしないで！！」

そのまま私の横を通り過ぎて受付の方へ走っていった。

残された私たちの取る行動は・・・

「「「「「偵察よ！！」「」「」「」

「「「side out」



「そういえばイリス、ここ来たことあるのか？」

「あ、はい。お兄様が登録しに来た時に一度だけ。」

受付嬢が居なくなつてから数分、俺は受付に寄りかかってイリスに話しかけていた。

受付の上に紙袋を乗せ、軽く腕を回しながら問いかける。

イリスはと言うと、近くにあつた木製の背もたれのない椅子にチョコンと座っている。

「兄貴つて、イルの方？ルスリアの方？」

俺が聞くと、イリスは首を振つて答えた。

「どちらでもなく、行方知れずの長兄です。私、他の二人には懐きませんでしたから。」

どことなく悲しそうな笑みをたたえて言うイリス……少し申し訳ないことを聞いてしまったか？

それにしても長兄ねえ。確かイリスと同じく武術の出来がよくなかった、って言つてた人か。

「わりい、嫌なこと思い出させて。」

「いえ……逆にお兄様を思い出せて胸が暖かいです。」

この笑みには、悲しさは無かった。本当のことかまでは分からないが、確かにさつきと違って少し嬉しそうな笑みだ。

「お待たせしました!!！」

「おおっ!？」

後ろから急に声がして振り返ると、エリーナちゃんがゼエゼエ言いながら、顔も赤くして立っていた・・・なじえ？

「そんな急がなくても良かったのに。」

「いえ・・・待たせては悪いですから。」

俺は話しながら紙袋を受付から下ろし、手に持つ。

につこり笑って赤茶の髪を払うと、こちらを向いて微笑んだ・・・およ？

受付の奥に沢山の人の気配を感じるが・・・まあいいか。

「さて、とりあえず来たが。」

「あ、はい。ギルドカードは出来上がっています。さすがにSSからスタートなんて異例中の異例なのですが、ギルド長に見せたら二つ返事です承してくれました。」

おいおいギルド長良いのかよ？

まあSSランクってのがどれだけ凄いかなんてあまり実感ないんだけどな。

話しながら、受付の下でござこそやってるエリーナちゃん。

あ、あつた。という声がして、俺の視界に戻ってきた。

「お帰り。」

「へ？ ああ、ただ今です・・・？」

くだらないやり取りにも付き合ってくれた。これだけでやり取りを始めたほうは嬉しかったり。

「それで、こちらがギルドカードになります。」  
「ん。」

手渡されたのは免許証程度の大きさをした鉄のプレート。  
真ん中に名前が薄紫色に彫り込んであり、プレートの淵には薄紫色の筋がグルッと一周している。

そして裏にはでかかと薄紫色でSSと彫り込んである。

イリスが横から覗き込んで、感嘆のため息を洩らしていた。イリスのその横顔も可愛かったり。

ほったたプニプニしたい衝動を抑えつつ、ジーンズの右前ポケットにプレートを仕舞う。

ポケットを軽く叩いて、ちゃんと入ったことを確認しつつ、エリーナちゃんに向き直った。

「なんで文字が全部薄紫なんでしょう？」

イリスが素朴な疑問を口にする、エリーナちゃんはにっこり笑って返答した。

「SSランクの印です。最高のSSSに上がると、濃い紫色になりますよ。」

「ふん、ランクによって色が違うわけか。」

なんで一番高いのが紫なのかは疑問だが……。

「ちなみに、階級別の色はこうなっています。」

そういつてまた下のほうへもぐるエリーナちゃん。そこが物置なのね？

受付の下なので、また視界から消える。

しばらくすると出てきたが、同じことを二度やるのも面白くないので黙っておく。

するとなにやらパネルを俺たちに見せてきた。

左に階級が上からSSS、SS、S、A+、A、A-、B、C、D、E、F、Gとなっており、

横に色が、濃紫、薄紫、蒼、水色、赤、橙、黄、レモン、白、灰、黒、無色・・・か。

ってこんなにランクあるならSSからっただいぶ鼻屑じゃね!?

でもこの色の割り振り、どっかで見たことあるような・・・オイオイ、冠位十二階じゃねえか。

もっともあの時代の青は紫に近い色だったから、水色なんかにはやらないと思うが。

やっぱり家族経営、手え抜いてんなあ。

「なるほどね、サンキュー。俺暇な時に来るから、依頼の受け方教えて。」

「あ、はい。まず依頼板で依頼を取っていただいて、それを受付に提出していただければ受注となります。ちなみにカエデさんほどのランクでも受けられるので安心してください。」

「了解。でさあ、後で二階行っていい?」

「二階・・・ですか。あそこには対人依頼が貼られていて、A-以上じゃないと立ち入り禁止・・・あ、カエデさんSSでしたね。」

「じゃあ行っていいのね・・・対人依頼ってなに?」

なんか凄いやな単語が聞こえた気がするんだが。

俺が受付に頼杖について問いかける。

「対人依頼というのは、横領をしている貴族の屋敷から証拠を取ってきたり、盗賊団の殲滅だったり、後は他国の危険人物の暗殺です

ね。このギルドでは、受ける依頼に上限はありません。Gランクの人がSランクの依頼を受けようが問題ありません。ただ対人となると失敗が許されないので、A-以上という規定を設けています。」

なるほどね。さすがにギルドを通していているもので私怨による暗殺依頼なんかはないか……。

それにしたって他国の危険人物の暗殺とかあんのな。確かにこの国の利益にはなるだろうけど、やり過ぎじゃないの？

「分かった了解。じゃあ今日は依頼受けないから、また今度ね。二階から展望して帰るわ。」

「あ、はい。また来て下さいね！」

俺が受付をあとにすると、手を振って見送ってくれていた。

「じゃ、イリス。二階行って帰るか。」

「はい！」

＼エリーナside＼

ふう、行っちゃったあ。

それにしても展望って。そのために二階行けるか聞いたのかな？  
ホント何考えてんだろあの人……。でも助けてくれた恩人だし、  
カツコイイし……。不思議な人ってああいう人のこと言うのかも。

「エリーナちゃん！」

「はう！？」

後ろから沢山の同僚が・・・っでもしかして

「見てたの~~~~!!?」

するとマリが進み出た。

「当たり前じゃない。なんであんなカッコイイ人と知り合いなのか、ちゃんとご説明願おうか？それと、ギルド長が二つ返事でSSからを許すなんて、あの何者よ!？」

あれ？黒髪黒瞳で異例のSSからって言われれば普通気付かない？あ、でも・・・私も助けられた時気付かなかったか。

ずいずいと他の皆も詰め寄ってきて・・・正直怖いです~~~~!

「マリ、気付かなかったの？黒髪で、黒瞳で、黒マントで・・・。」

そこまで言ったらマリの顔が見る見る変わっていく。別に青ざめていってるわけじゃないけど、驚きに変わる顔が、なんだか面白い。私がクスリと笑いそうになったとき、マリが叫んだ。

「カエデってカエデ・ミナモトのことお~~~~!!?」

くエリーナsideoutく

二階に上がる際、見張りのゴツイおっさんにギルドカードの提示を求められた。

なるほど、A - 以上じゃないと登れないってのはこういうことか。でも俺がイリスを連れてきている分には別に構わなかったらしく、二人一緒に通された。

それにしても階段を上るときの一階の連中の視線がハンパない。

羨望、嫉妬、憧憬・・・なんか申し訳ないよな、ありえない飛び級しちゃって。

さて、階段を上り終わると、右奥にクエストボードが見え、左手前のテラスのように突き出ている部分は、どうやら休憩所のようなつくりになっていた。

二人席で向かい合って座る形のテーブルが何個か。一つはなにやら屈強そうな男たちがのんびりくつろいでおり、もう一つは女性剣士が一人で紅茶を飲んでいた。

紅茶なんてどこで買えるんだよ、と思って見てみると二階にも売店があった。

クエストボードの右隣に、上品そうな売店があった。いやはや、一階とは偉い違いだな。

ついでに右手前は本棚がずらりと並んでおり、魔物の生態や痺れ薬の調合法など、戦士ギルドにありそうな本が沢山あった。

「ファンタジーしてるなあ。」

「? どういうことですか?」

「ああいや、なんでもない。」

横で首を傾げて聞いてくるイリス。まあ、ファンタジーな世界の住人にとってはこの世界は全然ファンタジーしてないもんな・・・。あとでテラスには行くとして、少しその対人依頼に興味を湧いたのでそちらに行ってみることにする。

クエストボードの前まで来ると、右隣に売店がある・・・売店な

んて言い方しちやいけないな。

喫茶店、もはやバーのような良い感じの粋な雰囲気がある店だ。

さて、クエストボードを覗いてみる・・・何々、やっぱり軒並み数値高つけえなあ。

平然とSSSやらSS、30枚程度の依頼があるのに、ざっと見たところ最低でもA+だ。凄いな。

SSSの依頼が少し気になったので数枚見てみる。・・・討伐依頼一つに、暗殺依頼二つか。

この三枚が現在最高ランクの依頼のようだ。どれ・・・。

ちなみにこの依頼に書いてあるローマ字は、危険度リスクを示しているらしい。

・・・リスクってどっかで聞いたような。

『討伐依頼：海の王者』

危険度：SSS

場所：バイゼル沖

対象：ルナティア海賊団

詳細：バイゼル沖の海賊の討伐を早急をお願いしたい。これではバイゼルの商業が滞る。

依頼人：バイゼル商会

報酬：金貨900枚

『暗殺依頼：I』<sup>ワシ</sup>

危険度：SSS

場所：イル教国

対象：ローグレス・ウィンディネス



詳細：イル教国の脅威、secret unitのIの討伐を依頼する。

依頼人：ルスリア帝国

報酬：金貨950枚

『暗殺依頼：神剣』

危険度：SSS

場所：ルスリア帝国

対象：マルス・ロード

詳細：ルスリア帝国の脅威、五剣帝の神剣の討伐を依頼する。

依頼人：イル教国

報酬：金貨970枚

・・・なんね？

他国からの依頼とか、マジなに？

しかもこの前レオと話したマルスの暗殺依頼あるし。

・・・もしかしたらコレ、他国では俺の暗殺依頼もあるかもな・・・  
いくらだろ。

適当に依頼を眺めると、SSには五剣帝のデス・・・イリスの兄貴の討伐依頼も見つけた。

つてか依頼人が国単位だもんなあ。この依頼完遂したらさ、一生遊んで暮らせね？

だって金貨970枚とか、日本円に換算したら9億7000万だぜ？  
まあ宿屋とかが安い割りにはこの世界無駄に物価高いから、そんな大金にはならないだろうけど。

旅人が多いからか銀貨一枚ありや食事つきで一泊できるのに、日用品とか平気で同じくらいの価格するもんな。経済観念が違うのかも。

「さて、イリス、テラスに行くか？・・・あり？」

イリスを見失った。またかよ、とは思うが仕方が無い・・・グルつとひと回り見ると、本棚の高いところにある本を一生懸命とろうとしているイリスの姿が目映る。

なにあの可愛いイキモノ。

爪先立ちしても届かない。指の先っちょが筋力の限界で震えてんのに届かない。

拳句ピョンピョン跳んでも全く届かない。

そんな金髪ワンピースの美少女を想像してみたい。

ほら、鼻血が出てきたらどう？

・・・お遊びはこのくらいにして。

俺はとりあえずイリスのほうへと向かう。

「ほら、これだろ？」

「あう、ありがとうございます・・・。」

『サバイバルでも美味しくできる！野外料理百科！』という本を取ってやる。

にしてもこれデカイな。ギネスブック並のサイズに、広辞苑の分厚さが入ったくらいと想像していただきたい・・・って誰に言ってるんだ俺は？

読みたいようなので、これを俺が紙袋を持っていないほうの手でテラスまで運んでやる。イリスは後ろからピョコピョコ着いて来た。

「よいしょつと。」

クエストボードに近めな場所にその本と紙袋を置いて俺はクエストボード側に座る。

階段に近いほうにイリスが座り、俺に礼を言ってから一生懸命読み始めた。もうあまり野外料理なんてしないと思うが……。

さて、ここからだと思ってもギルドが一望できる。相変わらず喧騒はあるが、二階には何かの魔法の応用でもあるのか、あまり喧騒が届いてこない。ふむ、良い場所を見つけたかもな。

しばらくの間、俺がギルド内を眺め、イリスが静かに本を読むというなんともリラックスできる時間が続いた。喧騒がほとんど聞こえないため、イリスが本をめくる音だけが静かに響く。

なんともまあ、居心地の良い空間だ。

それが唐突に壊されたのは、正直俺のボルテージを跳ね上げるには充分だった。

「おい、新入りか？ここは俺の場所なんだよ、どけ。」

ツツ。めんどくせえ。後ろから声があるが、無視！……. . . . .  
ところだが、基本的にイリスは単体では無力なため俺が対応するしかない。ここで魔法を使うと厄介だからな。

それにしても、説教喰らったばかりでまたこんなことになるとは、本当についてねえよ。

俺が振り返ると、スキンヘッドで、肌そのまま皮鎧を着てクレイモアを背負った、THE武力派の男が居た。あれ？コイツどっかで…….

「カエデさん、この人いつか、ドレイクさんにケチヨンケチヨンにやられた男じゃないですか？」

「ドレイクだあ？しらねえよそんな奴！俺は負けた事など無い！」

「ああ、そっぴやあつたな……お前じゃんそれ。よく覚えてたなイリス。」

「だから俺は負けたことなんかねえんだよ！！なんだテメエ、新入りのクセして、Aランクの俺に楯突くのか？ああ！？」

「お前焰龍にズタボロにされてたじゃん。よく思い出せよそのなさ  
そうな頭で。」

すると、少し血色が悪くなるが、必死でキレる。テーブルをバン！  
と叩き、

「いい加減にしろお！俺は負けたことなんか無い！新入りのクセ  
して調子乗ってんじゃねえよ！」

ああ、居るよなあ、こういう新入りイビリたくてしょうがない奴。  
んで結局その“上”の方では只の下っ端。だから新入りをいびるこ  
としかできないけど、その新入りにもさっさと抜かれる。

Aランクとか言ってたけど、それこの“二階”の中じゃあ下から二  
番目じゃん。

俺のことは多分、新入りだからA-だと思ってんだろうな。とりあ  
えずあまり階級で文句つけんのは好きじゃないからそこは何も言わ  
ないけど、あまり派手に暴れるところに居づらくなるからな。

どうしよう。やっぱり階級持ち出して黙ってもらうか。拳銃で怯え  
させるのもアリだけど。

「わりい、俺、SSだから下っ端とは絡みたくないんだよね。」  
「な！？」

ギルドカードを見せ、言う。もちろん嘘である。下っ端ってか下の  
ランクの連中にだって強い奴は沢山いるだろうし、何より上で強が  
ってる奴より、今から強くなるうと頑張ってる奴のほうがずっと付  
き合ってた面白い。でもコイツは、ギルドカードを見せたとたん、  
平伏し出した。

「あ、いやその、申し訳なかった。俺は初めて見た奴はついテスト

したくなるものでな・・・。」

俺こついう奴大っ嫌い。貴族にもいるよな。えばつといて自分より階級が上だと知るや媚売りに来る奴。そついう奴に限つて下から頑張つてこようとする奴の芽を摘むんだ。

「失せる。二度と目の前に現われるな。」

「はい？・・・えつと、え？」

「二度も言わせるな・・・消え失せる。」

「し、失礼しました！！！！」

慌てて逃げていった。するとイリスが、本から目を離さず聞いてきた。

「殺気も放たずそんなことするなんて、珍しいですね。」

・・・この野郎、俺がアイツの相手してる間、ずっと熟読してたのかよ。

「まあ、あまりねじ伏せるのもな。俺が天下統一すると言つた以上、ああいう奴も平和に暮らせちゃうから・・・この場でキレル筋合いあんのかなつて。まあ、いづれ答えを出すさ。」

するとイリスが本から目を離し、俺を直視してくる。

「変わりましたね、少し。」

「ん？まあな。ダメか？」

「いえ、私は力エデさんがどうあるつと着いて行きます！」

これは今の行動に対する否定だろうか・・・。むう、まだまだ考え

るところがありそうだな。

「まあいいや、そろそろ出るぞ。日も暮れてきたし。」

「この本借りられますかね？」

「知るか。」

結局本は借りられた。俺のギルドカード名義で5冊まで本は借りられるらしい。  
なんだか図書館のカードのようだ。  
ギルドを出ると、すっかり夕方、もうすぐ日が沈みそうな時間である。

昼とはまた風景が違って見える。家々には明かりが灯り、街のあちこちから食事の良いにおいがしてくる。

「さて、後はどこに行くんだっけ？」

「あ、はい。後は魔道具を見て・・・最後に夜になったら行きたいところが一つだけ・・・。」

「最後のほう聞こえ辛かったんだけど。」

「いえ！夜に行きたいところがあるだけです！！」

顔を赤くして言うイリス・・・なんなんだ？

まあいいや。とりあえず魔道具店に行きますか。

紙袋を肩から吊る下げ、俺は歩き出した。

「魔道具店つてのは、なんで？」

「定期的にチェックしておけば、面白いものが入ったときに見られるじゃないですか。」

なるほどね。確かに、今ドレイクが持つてる皮袋とかイヤリングなんかは、かなり役に立ってるからな。

いろいろと見て回っていると、魔道具屋の前にたどり着く。怪しげな雰囲気漂わせる店内が窓から見え、正直オカルトチックだがまあ仕方が無い。

丁寧に二スを塗ってあるような光沢を発する扉を開け、中に入る。

カランコロン・・・

「静かだな。」

「そうですね・・・いつものことですが。店主はお会計の時にしか現われません。なので、じっくり見て周りましょう。」

「了解。」

確かに店内には所狭しと雑貨が並んでいる。壁に釘を打ってそこに飾っているものや、台の上に展示してあるもの、おまけに床に放置してあったり天井に張り付いていたりとなんでもアリだ。

「なんか面白いものあったか？」

「今日は外れの様子ですね・・・また明日来ることにします。」

「・・・毎日来てんの？」

「あ、いえ。あいている時間がある時だけです。」

ふぐん。でも、毎日きて当たり前外れがあるってことは、毎日品揃えが変わるってことだよな？

面白そうだし、俺もまた来てみようつと。

「じゃあ出ましようか。」

「ん。日も暮れたし、行きたいところがあるなら、そこ行って帰ろうか。」

「・・・そう・・・ですね・・・。」

何か小声で言いながら拳を握り締めているイリス。・・・何かあるというのだろうか。

正直怖かったり。

店を出て、紙袋を背負いなおす。一日このままだったから、俺の肩にフィットするようになってきて、担ぐのが楽だわ。

「それで、どこに行くんだ？」

「カエデさんも好きなどころだと思います。その前に少し、飲み物でも買いますよう。」

「？ 分かった。」



そのまま、魔道具店を後にしてメインストリートに出る。さすがにそこは別の場所と違って明るさも段違いだ。普通の家や裏道の店は火属性魔法で明かりを点けるらしいが、この大通りは雷属性魔法を駆使しているようだ。・・・近代的だな。

歩いていると、たまに歩幅が合わずに早足で隣に並ぼうとするイリスが可愛くつてしょうがない。

その度に俺が謝るのだが、それは負けた気がすると言って否定する。笑えるな、この子。

さて、適当な店で飲み物を買う。二人ともコップに入ったお茶だ。

さすがに緑茶ではなく紅茶だが、湯気が出ていて暖かいものに、簡単な紙のふたを用意してくれたのでそれでコップをふさいで歩く。

慎重にこぼさないように歩くのだが、イリスよ、何も忍び足で歩くことはないのでは？

歩いていくうちに大通りを離れ、細くはないがそれでもさっきの道より活気が少ない道へと進む・・・この方向は。

正面には高い塔が立っている。さすがに王城の塔ほど高くはないが、それでも高い。

鐘の鳴る塔・・・つまるところ時計塔だ。

「ここですよ。さあ、登りましょう。」

「いいのか？ここ。」

するとイリスはにっこり笑う。いたずらっ子のソレな気がする。

「ばれなきゃ良いんですよ。それに時計の鳴る時間はとうに過ぎました。この後は朝まで鳴りませんから。」

「ま、俺は構わないけどな。」

イリスに先導してもらい、時計塔に登る。なかなか長い螺旋階段だ。足元からはコツコツ、と金属音に近い音が聞こえ、この時計塔

は登りきるまで外が見えないためか真っ暗だ。  
そろそろ階段ノボリも飽きてきたころ・・・急に視界が開ける。

「着きましたよ。」

「おお・・・。」

夜の城下町は美しいな。暗い中に、夜空に広がる星々のように輝く店や家。

これは壮観だなあ。

感動している俺を見て、イリスがクスリと笑った。

「フッフ、やっぱりここにして良かったです。紅茶でも飲みながら、ゆっくり過ごしましょう。」

「そうだな。ありがとう。」

「いえ。」

紅茶の湯気を立てながら、俺とイリスは隣同士で塔の手すりに寄りかかり、外を眺める。

「綺麗ですね・・・。」

「ああ、ちよつと感動した。」

「良かったあ。」

屈託のない笑みを俺に向けるイリス。こういう時に女の子に気の利いたセリフを言ってやるんだろうが、まあ俺にゃムリだ。

「今日は楽しかったです。ありがとうございました。」

「礼を言うのはこつちだよ。連れ出してくれてありがとうな。」

「ほえ？あ、はい・・・嬉しいです、そういつてもらえて・・・。」

わずかに頬を染めて、イリスが呟いた。俺がイリスを見ると、すぐに景色のほうへと顔を背けてしまう。

「私、本当はですね……。」  
「ん？」

横を見ると、必死で何か言おうとしている。そして妙に顔が赤い。これは……恥ずかしいのか？

「昨日酔った後のこと、覚えてるんです……。」

「ナニイ!？」

「まずーい。」

「いやこれはまずーい。俺が色々酔ってやらかした過ちを謝らなければ!！」

「その件に「それで酔ってないから言います。」ん？」

今度は俺のほうにきちんと向き直り、俺の目を見てきた。

だがその表情はどこか恍惚としていて、熱にうなされているかのよう。顔が赤い。さっきの恥ずかしげな赤みではない……。

「私は……カエデさんのことが好きです。」

「……ここでそう来たか。まてまて何でそう冷静になれる?多分今俺の顔もめちゃくちや熱いと思うぞ?」

「いや、俺はイリスのこと凄く可愛いと思うし、好きだとも言える。他の女の子にそんな感情は出てこない。だが今そんなこととして良いのかといえ、答えはNOだ。」

「今俺がしなきゃいけないのは天下統一。ここでイリスと恋愛してし

まえば、俺個人の幸福しか得られない……。

「イリス……。」

「私は求めているわけじゃありません……状況は誰よりも分かっているつもりです。でも……どうしてもこれだけははっきりさせて置きたくて……カエデさんのことを思うと胸が苦しくて、私どうして良いのか分からなくて……。」

この子めちゃくちゃ可愛いわ。

少し涙ぐんで話すこの女の子を見ると、俺も少し抑えきれなくなる。

そして……

「ほえ!？」

「今は状況が状況だし……俺個人が幸せを掴んじやいけないと思う。だから戦争が終わるまで、待っていてくれないか？俺も同じ、気持ちだから……。」

「心の苦しみが、一気になくなりました……。私今、とっても幸せです……。」

イリスは俺の胸のなかで、とめどなく流れる涙を拭うようにいつまでも強く俺の背中を掴んで。

俺は片手をイリスの後頭部に優しくあて、もう片手で背中を愛しげに抱き寄せて。

時計塔の上にあった二つの影が一つになっていた。

早く戦争を終わらせた方がいい理由が増えた、今日でした。

## 第63話 西方戦線！（前書き）

（報告）

- ・ドラキユラさん感想ありがとうございます！！
- ・嵐々さん感想ありがとうございます！！

今回の話は少し短め・・・かな？

### 第63話 西方戦線！

「ただいま〜っと。」

「帰りましたです。」

俺とイリスが食堂にやってくると、黒虹メンバーの他にガンドロフ將軍、侯爵の二人も揃って席に座っていた。

この人数でも一つの丸テーブルに収まることでどれだけデカイのか想像して欲しい。

席は手前に3つ並んで空いており、その中の二つ・・・真ん中に俺、左にイリスが座る。

食事はもういろいろできており、みんな楽しく食事していた。

「お、帰ってきたでござるか。なにやら今日は国王から報告があるようでござるよ?」

俺が席に着くと、シャオがこの状況・・・つまりガンドロフや侯爵が同席していることについて説明を入れてくれる。

「だからオツサンと侯爵がいるのか。」

「ガツハツハ、その通りだ!!」

「まあ呼ばれたからな。」

豪快に笑いながらマンガ肉をむさぼるガンドロフに、礼儀正しい笑みを浮かべながらフォークでゆっくりとサラダを口に運ぶ侯爵・・・偉い差だよな。ってか対照的。でもこの二人って結構前からの仲らしいんだよな。

「それはそうと、カエ兄?」

アリシアが無邪気な笑顔を向けてくる。  
緑のツインテールと相まって、かなり子どもな印象が強いよな、アリシアって。

「なんだ？」

「フフーン、今日二人のことつけてたから。」

「ブツ!!」

イリスが飲んでいた紅茶を吹く。正面にいたドレイクにかかるが、イリスは苦悶の表情を浮かべるドレイクを見ると、

「・・・まあ正面がドレイクさんでよかったです。」

「おい!!」

と言って口元をナプキンで拭く。

当然ツツコミはドレイク。こちらも顔全体をナプキンで拭きながらのツツコミである。

「それにしても、ずっとか？」

俺が近くにあったチキンっぽいのに手を出しながら問いかけると、アリシアは答える。

「さすがに店の中とかは覗けなかったけど・・・最後のと「ブー  
ー!!」・・・イリ姉、汚いよ？」

「だ、誰のせいだと・・・またドレイクさんにかかってしまいましたよ。」

「謝れやコルア。」



「またもドレイクはナプキンで顔をフキフキ・・・熱いとかそういう反応はないのな？」

「にしてもアリシア・・・時計塔まで見られていたか。」

「俺がアリシアを一瞥すると、なんだか夢見心地で天井を仰いでいる。」

「はああ・・・あたしも恋したいなあ。」

「まてまてそんな事言うといろいろバレルじゃねえか・・・。」

「すると放心状態のアリシアの目の前にアネスが腕を出し、静止のポーズを取る。」

「・・・アリシア、ちょっといいか？その脈絡から行くとカエデ君とイリスは・・・？」

「うおい兄貴い！！イリスちゃんをたぶらかした罪は重いぞお！？」

「アネスの発言を聞いたフォーリが、俺のほうを勢い良く向く・・・チキンを啜えたまま。テメエ食ってから喋れや。」

「俺がこの状況をどうしようかと頭を抱えていると、キアラだけが蚊帳の外にいることに気付いた。」

「どうしたキアラ？」

「キアラに話しかけると、食べていたサラダを飲み込んでコチラを向く。なにか不機嫌そうだ。」

「恋って何さっ？」

「は!？」

「俺が思いのほか大きな声を出してしまったことで、みんながこちらを向く。」

キアラはほつぺたを膨らませて、

「知らないんだもんっ！」

「これは・・・キアラおま、まさか・・・。」

「ああ、カエ兄、キアラ姉はあたしより精神年齢低いから。」

俺の予測を確実なものにしてくれたアリシアは、半ば呆れ顔で頭を掻いている。

そしてなぜかイリスとフォーリはかなり苦い表情で口元だけを緩ませていた。

ガチャ。

そんなとき食堂の扉が開き、何かとみんなそちらへ注目する。

そこから顔を出したのは、銀髪で優しい表情の青年・・・レオだった。

「やあ、遅れてしまいましたね。せっかくお集まりいただいたのにわたくしが遅刻してしまいお恥ずかしい限りです。」

苦笑しながらこちらの円卓へと歩いてくるレオ。

俺が椅子ごと少し左に寄り、レオが席に座れるよう場所を空ける。

「いや、別に食事楽しんだから問題はねえよ。」

「そうですか、ありがとうございます。」

レオはそう言いながら微笑んで俺の右隣に着席する。

なにやら白い封筒のようなものを持ってきたので、全員そちらに注目した。

「失礼、さてさっそくですが、昨日皆さんが戦っていた時にイル教国がまたも部隊を出動させたとの連絡を受けまして、それを調べていました。」

「!?!」

全員が息を呑む。まさかもう一軍がアリアに攻め寄せてくるのか？と不安に駆られた。

するとそんな空気を読み取ったレオが、白い封筒の封を切りながら語る。

「出陣したのは前回我々を襲ったメンバーとは違うsecret unit。それもマルスに及ばずとも劣らないエがリーダーだとか。」

「!?!」

“マルス”という単語に、皆の焦りが募る。メイドさんたちが食事を片付けに来たが、それも俺以外気付かない。もっともレオはメイドさんのいる間話すのは控えていたようだが。

メイドさんがいなくなると、自分の前に淹れられた紅茶を一口飲んでレオは再度口を開いた。

「そして向かった先は……ルスリア南西。」

「はあ!?!」

「関係ねえぞお!?!」

「ビックリしました!?!」

おうおう、口々に不平不満……というより非難の声が続く。するとレオは悪戯っぽく微笑んで……コイツ、わざとやったな？

「フフフ、まあその反応は想定内でした。それより面白い情報が入

りましてね・・・今日の夕刻、その決着がついたそうですよ・・・  
イル対ルスリア、もっと言えばI V S楼剣のミリアの戦いが。」  
「楼剣だとお！？それで、どうなったあ！？？」

そういえばフォーリ言ってたな。楼剣のミリアには勝てなかったっ  
て。

その楼剣対イルのトップか。なかなか面白いことになりそうだな・・・  
俺は紅茶に砂糖のようなものを入れ、マドラーでかき混ぜながら耳  
を傾ける。

「では決着の前に、戦況を順追って話していきましよう。」

ズズ・・・甘！？砂糖入れすぎた！！

昨日夕刻・・・

〈ミアリアside〉

ミアリアは皆で敵・・・secret unitとかゆる奴を待ち構えていまゝす！

でも、マルス様は居ないんだあ。シヨボ〜ンって感じい。

だけど・・・見ててねマルス様。ミアリアいっぱい頑張つて、マルス様に褒められるようにするから！

皆の見張り台に居た兵士が、大声を張り上げる。

「敵軍が見えましたあ！数はおよそ80000！指示をお願いします！！」

そつういえばあ、ここの指揮官つてミアリアなんだよねえ。

唇に人差し指を当てて少し考え込む。

「う〜ん、じゃあミアリアと白虎ひやくこで攻め込むからあ、朱雀しゆくすはこの指揮してね？落とされたりしたら許さないんだから！」

「。。。はい、愛しのミアリア様あ！！」「」「」

ウフフ、ちよ〜つと可愛くしてあげるだけでコロつといつちゃうんだから。

で・も。ミアリアの心も体もマルス様だけのモノ・・・ミアリア、マルス様が居ないと寂しいですう・・・。

そんなことも言つてらんないかあ。よし、攻め込むよ。

愛刀“夢幻むげん”を腰に差し、城門へと移動する。

ちなみに夢幻の形状は、鞘に納まっている間はただのロングソード。

「ただど抜くと・・・ウフフ、今日もミアの餌食が増えるのだあ〜！」

「楼剣様、行きましょう。」

「そーだね。」

隣を歩く白銀の髪をした偉丈夫が呟く。この男の特徴は、獲物を追うがごとくの眼光と、その強靱な足腰。・・・うん、個人的にあまりタイプじゃないかなあ。

ギイイイイ・・・

城門が開くと共に、夕焼けが目に染みる。

・・・あれが敵軍か。

「白虎、敵の主要メンバーを潰しまくってくれない？ミアはトッブを殺るから。」

「御意。」

返事をする白虎は脱兎の如く走り去っていった。さて、ミアも敵を探さないとね！

（ミア side out）

第64話 対峙するミリアとローグレス!! (前書き)

感想ほつすいく・・・じゃねえや下さい!!!!

今回は三人称視点になります。

## 第64話 対峙するミリアとローグレス！！

角刈りの抹茶髪の男は薙刀を背負い、ルスリアの南西砦侵攻の陣頭指揮を取っていた。

イル教国軍に攻める合図を送ろうとした瞬間、城門が開き、敵軍が打って出たのである。

夕日に照らされ若干敵軍が見えにくい中、抹茶髪の男・・・ローグレス・ウィンディネスは部下の *secret unit* とともに必死で戦っていたのである。

殺した敵兵の数が十を超えようかという頃、ローグレスの前方には桃色の髪をした幼げ・・・いやキャピキャピした感じの少女が現われた。

敵・・・だろうな。

ローグレスはそう感じた。この戦いのさなか、彼女に迫るイル兵は断末魔の叫びすら上げることなく、静かに静かに死んでいく。首を飛ばされたり、袈裟切りにされたりと様々だが、さながら彼女の戦いぶりは夕日に輝く胡蝶のような、美しいものであった。

その美しさが、楼剣と呼ばれるひとつの由縁でもある。そのことにローグレスが気付くのは、そう後の話ではない。

「あれ？」

桃色の髪をした少女と、ローグレスの目が合う。

すると少女は少しローグレスの顔をうかがうと、呟いた。

「抹茶髪に、大薙刀。うん、マルス様が言ってた通りだね。アンタがローグレスでしょお？」



・・・!

その少女に名前を知られていたことと、神剣の本名を知っていたことに、ローグレスは驚きを隠せないで居た。だが、少し考えてみれば分かる事だ。マルスの名を知っているということは、幹部クラスであるということはほぼ間違いない。そのなかで桃色髪の少女と脳内で検索すれば、簡単に答えは出てきた。

「楼剣か。まさか最初から五剣帝と出くわすとはな。」

ローグレスはため息交じりにそう呟く。このローグレスという男は、マルスとは違い全くの非戦闘狂である。強い相手との戦闘など極力避けたいと思っているし、何よりも夢・・・イル教国による天下統一に対してしか興味が無い。よって目の前に立つ少女はローグレスにとって、邪魔以外の何ものでもなかった。

ローグレスは、面倒くさそうに背中の中の薙刀を取る。

ミアはニツコリと微笑んだ。

「ミアの名前を知っていて、武器を抜いた・・・それは肯定と取っついていいんだよね？」

「ああ。SSクラスの賞金首め・・・俺が成敗してくれる。」

そのセリフとは裏腹に、ローグレスは心底けだるそうだ。それを見て、ミアは嘲笑する。

「これがマルス様に最も近い男らしいけど・・・ミアにはそう見えないなあ。まいつか。ここで死ぬ人間のことなんか。」  
「ふん、それはお前のことだろう？」

ローグレスが薙刀を持って突進すると、ミアはどす黒い笑みを浮かべながら、ロングソードを鞘ごと自分の前にもつてくる。そして、一層黒い笑みとともに、その剣を引き抜いた。

バリ！！！！

空間が裂けたような、そんな空気にローグレスは襲われた。

そして避けた空間は桃色とも紫ともいえる色となって広がり、ローグレスとミアのいるその場所自体を包み込む。

当然そんなことになっているので、ローグレスは慌てる……だがそこは彼の特色。

「ここは……？」

「あれえ？普通の人ならここに来てただけで恐慌状態になるのになあ。」

ローグレスの前方には、小首を傾げるミア。その抜いた剣はロングソードのはずだった……

あまりの事態にローグレスの心はかき乱される。だが平静を装い、薙刀を構えなおす。

「冷静なことだけが、取り柄なのでな。」

「ふん。まあいいわ、教えてあげる。この空間はミアの剣、“夢幻”の能力。」

ミアはその剣を胸元へ持ってきて説明を続ける。

「この剣、魔法武器なんだよね。それも檄レアの……まあミアアが作ったものだから二つとしてないんだけど。これを引き抜いたときにミアを見ている人間は、強制的にイビルゲートにかかる。」

イビルゲート・・・!

その言葉にローグレスは驚愕を隠せなかった。

闇の中級魔法、イビルゲート。それは相手の目に向かって呪文を発動しなければならなかったため、なかなか使える魔法ではない。だがそれが当たれば敵に幻覚を見せることができるという魔法だ。

ミアは魔法武器の開発に着手し、このような凶悪な武器を作り上げた。

「ずいぶんとチートな魔法武器だな。」

「それは褒め言葉として受け取っておくわ。」

冷や汗を流しながら頬をかくローグレスと、夢幻を構えるミア。二人はまた対峙した。だが、それは最初の向き合いのように対等な勝負ではない。

「ここはミアの幻術空間。アンタに勝ち目はないんだよあ?」

「フ・・・誰に言っている・・・思ってる!!!」

刹那、ローグレスは走り出す。当然標的はミア。ミアは不敵な笑みを浮かべながら夢幻を構える・・・が。

「魔法武器は脆いと・・・習わなかったのか!??」

思いつきり薙刀を振り下ろすローグレス。

「そんな!??」

そしてそれを防ごうとしたミアの夢幻は砕かれ、ミアは真っ向から切り伏せられた。

ドサ、と倒れるミリアを見て、ローグレスはため息を一つ。

「終わったか……。」

……!?

その直後、ローグレスは異変に気付いた。

空間が解けないのだ。夢幻によるものなら、砕いた直後に幻覚が終わってもいいはずだからだ。

「ウフフフ……。」

ミリアの声が聞こえ、ローグレスは慌ててその死体の方を向く。するとソレは塵となって、どこからか現われた風によっていずこへと運ばれていった。

!!

ローグレスの冷や汗は止まらない。忘れていたのだ、ここが奴の空間だという事に。

この空間を打破しなければ、万に一つもローグレスの勝利はない。

「分身とは言え、自分が斬られるのを見るってえ、なかなか気持ちよくないね。」

また吹いた一陣の風。その風が一箇所に集まり、人の形を構成する。それはやがてミリアとなり、ローグレスの目の前に再度現われた。

「……厳しいね、五剣帝戦というのは。」

ローグレスはそう毒づく。手段が見つからないのだ。

ミリア・クルアイン。彼女はその美しい、桜の舞うような剣技と、桜の魅せる夜の幻覚・・・すなわち幻術を操ることから、楼剣のミリアと呼ばれるようになったのだ。

その幻術を破る術は、神剣のマルスのみを知る。

「ツツ、厄介な相手だ。」

「でもアンタはまだ傷ついてないのよね。もっと苦しんでもらわないとなあ。」

舌打ちするローグレスに対し、ミリアはその艶やかな唇を舐め、獲物を見る目でローグレスを見据える。

そして、夢幻を手に、ゆつくりとしなやかに動き始めた。

しなやかに、幻のごとく。

ローグレスを中心に、右に左に、前に後ろに・・・現われては消え、現われては消え・・・それを繰り返す。

ローグレスの第六感が警鐘を鳴らす。このままでは死ぬ、と。

まずい、どうにかしなくては！

ローグレスはそう思う。現われては消える幻覚のミリアを、分かっ  
ていても斬ってしまう。そしてそれは瞬時に塵となり、あざ笑うよ  
うな声が耳をくすぐる。

クソ！

ローグレスはそう思わずには居られなかった。一対一でまともに遣  
り合えば負けることはないのに、と悔やむ。しかしそれは叶わない  
こと・・・すると耳元で、少女が囁いた。

「死ぬ。」

それと同時にローグレスの背中から激しい激痛が襲う。かなり深く斬られた切り傷からは、とめどない血が流れ出していた。

「ぐう……。。」

薙刀を小脇に抱え、右手で背中を押さえるローグレス。

するとそんなローグレスの前に、塵が集まりミアが現われる。その表情はどこか寂しいようでもあり、呆れたようでもあった。

「マルス様と互角だって言うからどの程度のモノかと思えば……。面白くない。死んでもらうわ。」

それだけ言うと、ミアは夢幻を振り上げる。

だが、ミアには一つ誤算があった。ローグレスは背中に確かに重傷を負っているが、決して動けないわけではないということ。

「舐めるな！」

ローグレスはミアの腹に横薙ぎ一閃。ブウンという風の唸りと共に、ミアの下半身と上半身を分けた。

「つく……。やはりか。」

「当たり前でしょお？」

だがそれも当然塵となり消える。そしてまた新たに現われるミア。ローグレスにはもはや打つ手はなかった。

幻術使い……これほどまでに厄介だったとは。

ローグレスは齒軋りする。

ここまでの力の差を味わったことは無かったからだ。

戦いには相性というものがある。純武闘家の彼にとって、ミリアは最悪の相性であったのだ……しかし。

「これだけは使いたくなかったな。」

「？ 何？ 切り札でも？」

ミリアが訝しそうに聞くそれもそうだろう。この状況でローグレスは、爽やかではないにしても勝ち誇った笑みを称えていたのだから。

「召喚 風魔<sup>ふうま</sup>」

「！？……へえ、召喚魔導士。」

「当然、イル教国で魔法を使えない人間など、戦士にはなれん。」

背中を押さえながら、ローグレスは立ち上がる。するとローグレスの目の前の地面に、魔方陣が展開する。そしてローグレスは何を思ったか、その上に乗った。

その様子にミリアはハテナを浮かべる。

ミリアを見たローグレスは、笑みを含んで語った。

「俺の召喚魔法は、その召喚獣を俺の体に呼び覚ますことにある。つまり、その属性への換装だ。」

「……まあいいや。それで何かが変わるわけでもないしい。」

するとまもなくしてローグレスの体に吹き荒れる風が纏われていく。その姿は荒々しく、搦んだ雑刀にまでその影響は及んでいた。

「これで俺も全開だ。」  
「好きにしてよ。」

それまでの比ではない速度で、ミリアへと襲い掛かるローグレス。さながら瞬間移動。

マルス並の速度にミリアは驚く。ローグレスはそのまま風を纏う薙刀で横に一閃！

ミリアは当然塵になる・・・が。

「くっ・・・！」

風圧のせいで上手く塵の再構成がなされない。

ミリアが次に元の体に戻ったときは、少々傷が目立っていた。

その様子にローグレスは納得した笑みを向ける。

「なるほど。少し塵がどこかへ飛んでしまったようだな。そのせいでムリに再構成しようとして・・・再構成できない部分が傷になった、と。」

ミリアは鋭く睨みつける。だがローグレスはその目を流し、もう一度切りかかった。

袈裟切りの薙刀が振るわれる。ミリアは当然のように塵となるが、そうなつてからしばらくの間、ミリアは現われなかった。そして少し。

「はあ、はあ・・・。」

ローグレスの前には、疲れた様子で肩からの流血を抑えた少女が立っていた。

ミリアは息も荒くなりながら、舌打ちする。



「仕方ないか。」

それだけ言って、目の前で夢幻を鞘に仕舞った。

パチン！

鞘に仕舞われた音と共に、現実世界に舞い戻る二人。空は晴れ渡り、昼下がりの午後であった……。

「なぜだ！？」

ローグレスは叫ぶ。それもそのはず。戦いを始めたのは夕方だったからだ。

ミリアは周りを見て、呟く。

「勝ったわね。この男を封じておけば勝てる……朱雀の言うとおりかなあ。ミリアの空間は時間軸が大幅にずれてるんだあ。だからあ、今は戦いを始めた翌日の昼下がりにじゃない？」

ローグレスは啞然としてしまう。

戦況はイルにとって芳しくなかった。

攻め入ったはずの兵士たちはことごとく死屍となり、砦内部にはまだ元気なルスリア兵が喚声を上げながら残るイル兵士たちに矢を射掛けている。

「ツツ！一時撤退だ。」

そう呟いてローグレスは風の換装を解く。

するとミリアは流血を抑えながらも笑って言った。

「二度と来るな！」

ローグレスはそれを無視して騎乗し、駆けていく。

ミリアは疲れたような笑みをみせ、その場に座り込んだ。

「ふう。痛かったなあ。マルス様に慰めてもらっただからあー！」

肩を抑えて、駆けていくローグレスを眺めながらそう言った。

そのマルスが重傷だとも知らずに……。

第65話 それぞれの国にて（前書き）

（報告）

・しばらく休載してしまったこと、ご容赦ください。

## 第65話 それぞれの国にて

「・・・とまあこのような結果に終わりました。」

レオはそれだけ言っと報告を終え、皆のほうを見渡した。するとフォーリが苛立たしげな表情で、粗雑に呟く。

「それにしても楼剣のミリア、相変わらずムカつく能力だぜえ・・・」

「そういえばフォーリは戦ったことがあるんだっけか？」

ふと、旅の途中でフォーリが言っていたことを思い出す。

楼剣のミリアには圧倒的な力で負けた、と。

話を聞く限り、楼剣の名に負けぬ幻術と変則舞踏術“桜舞”<sup>おつぎ</sup>の応用を使役する戦闘スタイル。これは下手をすればマルスより厄介かも知れねえな。

フォーリは俺の問いに対し、軽く頷くことで肯定する。

「マルスには敵わないものの、奴の实力はケタ違いだあ。ついでに四聖獣だが、獣のように惨忍ながらも繊細かつ完成された戦闘術を使役する4人の総称だあ。あいつらも問題だぜえ。」

そういえば四聖獣って連中については詳しく知らなかったなと思いつつ、俺は一度伸びをしてから円卓を見回す。

「とにかく俺達の敵が互いに潰しあって戦力を消費し、拳句データまで寄こしてくれたんだ。僥倖だと思わないとな・・・さて、明日まで休日だが、みんなどうするか決めておいてくれ。」

俺の言葉に黒虹メンバー全員が頷く。  
話が一通り終わったので、俺は周りを見渡す。

「何か他に連絡事項は？」

「そうそう、イル教国から贈り物が届いたので後で皆さんにお渡ししますね。」

レオが微笑みながら言う。だがなにを？と聞いても笑うだけで答えはくれなかった。

「他には？」

すると侯爵が静かに手を挙げた。

「どした？侯爵。」

「あゝ、すまないがカエデ、それとシャオには明日、空けておいて欲しいんだが。」

「拙者もでござるか？」

全員が食後の紅茶を楽しんでいる中、一人だけ空気を読まずに湯のみで緑茶を啜るシャオがこちらを向いた。・・・少し寄せ。

「お二人だけですか？」

イリスが首を傾げて侯爵に問う。侯爵はそれを肯定すると、紅茶を一口飲んでから俺とシャオに向いて言った。

「キミら二人には、明日サンゼルスシティに出向いてもらいたい。」

サンゼルスシティ。シャオと俺達が出会った魔法都市だ。

懐かしいな。あんどきゃ入り口でドレイクが叫んだり、シャオが訳の分からない魔道具を買ったせいで迷いの森から変な場所に出たりしたっけ。

俺はフロウを払い、暑いのでYシャツのボタンを一つはずして侯爵に向き直る。

「・・・で、そのサンゼルスシティになにをしに？」

俺とシャオで頭にハテナを浮かべながら侯爵に問いかける。すると侯爵は軽く笑みを含んで、手を払いながら言った。

「そんなに問題視することでもないよ。私もついていくしな。」

質問の答えになっていない侯爵のセリフ。

なにやらもつたいぶっているようだが、正直イライラするだけだ。シャオが焦らされて耐えられなくなったのか、侯爵に少し語気を強くして話す。

「結局なにをせよと言つのでござるか？侯爵殿は。」

「ハハハ、すまない。二人にはサンゼルスシティの魔法学校に行つて、授業をしてもらいたいのだ。特別講師としてね。」

「なにい〜！？」

侯爵の予期せぬ言葉に、俺とシャオの怒鳴りが城の夜に旋律を奏でた・・・。

「ルスリア帝国 帝城内部」

城門前まで意気揚々としていたミアは、思わぬ凶報にリーダーの部屋へと全力疾走していた。

目には涙さえ浮かべ、恋焦がれる相手の怪我……

マルス敗れる

という情報に。

廊下ですれ違う人間が不思議そうに見てくるが気にしない。

普段なら容姿に気を使い、自分をどこまでも可愛く見せようとするキャピキャピ系女子がミアの売りなのだが……。

カエデがその姿を見れば、

「ああ、元の世界で言うAグループの女の子か。」

と呟いただろう。学校内でも目立つ女子グループに居そうだ、ということだ。

さて、それはともかくとして今のミリアにはそんなことは関係ない。髪を振り乱し、息も絶え絶えになりながら顔を涙でぐしゃぐしゃにしてマルスの部屋へと到達する。

バン、とノックもせずミリアは扉を開き、叫んだ。

「マルス様!!!」

「やあ、ミリアかい？」

ミリアは当然の如く返ってきた返事にしばし硬直する。

なんで……？

そう思わずには居られなかった。

だがマルスはそんなこと露知らず、いつものように揺り椅子に腰掛けて紅茶を楽しんでいる。

そしてミリアの声がないことを不審に思ったのか視線を扉のほうに向け、驚いた表情をしながらも言った。

「……どうしたんだい？この世の終わりでも見たような顔をして。」

「マ……マルス様あ~~~~~!!!」

マルスが発した言葉が起爆剤となったか、ミリアが全力でマルスに飛びついてくる。

一瞬慌てたが、即座にマルスは紅茶をそばのテーブルに置き、座ったままミリアを抱きとめた。

「マルス様、死んじゃったかと思ったあ……。クスン、わ〜ん！」

「!!!」



ミリアはマルスの胸に顔をうずめたまま泣き出してしまふ。マルスはそれを優しく撫でながら、笑って言った。

「そういうことが……。まずは任務お疲れ様。彼には必ずリベンジするぞ。」

微笑んで言うマルス。

ミリアもだいぶ収まってきたのか、嗚咽交じりに会話を続ける。

「ふえ……。？やっぱり負けたんですか……？」

「ああ。彼は僕の弱点を提示してくれたばかりか、再戦の約束までしてくれた。僕はこれからもっと精進してあの武器を克服する……！」

ミリアは少し訝しそうな表情をして、マルスに言った。

「なんだか、楽しそうですね。」

「もちろんだよ。彼というライバルを見つけたんだ。これからいつまでも戦っていける、僕の好敵手を……。これ以上の楽しみなど、僕にあるものか……！」

かつて無いほど生き活きとしたマルスの表情に、ミリアは少々嫉妬を覚える。

口を尖らせてマルスに抗議するミリア。

「ミリアは心配してたんですよ？それなのにこんなに楽しそうで……。ミリア、バカみたいじゃないですかあ。」

「フフ、申し訳ない。だが、僕は絶対彼に勝つ、勝ってみせる！」

「さっきから彼、彼って、誰のことですか？」

もっともなミアアの質問に、マルスは我が事のように胸を張りながら言った。

「僕の最初にして最後のライバル、アリア王国特殊部隊“黒虹”のリーダー、カエデ・ミナモトさ！」

「イル教国 神殿内部」

「ローグレス君……！」

精神統一を図っていたローグレスのところへ、ティウリが駆け込んでくる。

「おう、頼んでおいた手配書は完成したか？」

「す・・・とローグレスは目を開き、ティウリを見据えた。

ティウリは座禅を組むローグレスの目の前まで来ると、数枚の紙切れを彼に手渡した。

「これが黒虹の新たな手配書よ・・・まさかあのマルスに勝つ人間が現われるとはね・・・。彼の手配書は歴代NO.1の金額よ・・・1000金貨。」

ローグレスは手渡された数々の紙切れ全てに目を通し、その紙を床に適当にばら撒いた。

ティウリはその行動の意図が読めなかったのか、首を傾げる。

「ローグレス君？」

「黒虹の連中の手配書はコレで良い。今さっき様々な情報が入ってきてな、黒虹メンバーの特徴もあらかた掴めたそうだ。面白いことに、髪の色が虹色らしい。」

ばら撒いた紙の一つ一つを眺めながら、ローグレスは呟く。

ティウリは納得した表情で頷いた。

「だから“黒虹”なのね？リーダーは黒髪・・・珍しいなんてモノじゃないわ。ちょっと不吉ね。」

「ああ、キミの弟やシャオを従えている人間だ。とてつもない力を秘めていると思って間違いないだろう。ツツ、我らの夢に邪魔が入ったか。それもかなりドデカい障害が。」

ローグレスはため息を一つ。  
ティウリはばら撒いた紙を眺めてなにやら考え事をしているので、  
ローグレスはそのまま窓の外を眺めた。  
自分達は夢・・・天下統一を思わぬ敵に邪魔されているのに、外は  
サンサンと降り注ぐ太陽光が木々に映え、青い小鳥達が気持ち良さ  
そうに囀っていた。

「やはり・・・道は遠いか。」

自分より強い人間がまた一人増えてしまったことに対し、ローグレスは暗澹たる雰囲気隠せないでいた・・・。

「アリア王国 王城内部」

メイドさん方がテーブルを磨いたり忙しい時間になってきた。そろそろお開きにしようかという事で、レオの言っていた贈り物が手渡されることとなる。

「イル教国からとは・・・敵対国からなんの贈り物でござろうか？」

シヤオが自分の故郷からの贈り物にいささかの疑問を見せる。

それは周りのみんなも同じのようで、円卓に座るほとんどの人間の頭上にハテナが浮かぶ。

それを見たレオは苦笑した。

「なにか、渡しにくい雰囲気でございますね。とりあえずカエデ以外の皆さんに手渡すことと致しましょう。」

「？俺には無いのか？」

「いえ？ありますよ。とびっきりのがね。」

悪戯つこの笑みを浮かべながら言うレオに、俺は食い下がる術もない。

レオは銀髪をかきあげ、懐から数枚の紙切れを取り出す。その中から一枚を無造作に選び、テーブルの上に静かに置いた。

なんだなんだ？と俺以外の皆がテーブル上に置かれた紙に集まる。上から見れば何かの餌に群がる動物だな、と俺は外から見て苦笑いした。するとまもなく、ドレイクの怒鳴り声が響いた。

「なんじゃこりゃあああ！！」

「なにがだよ？」

「とりあえずうるさいので黙ってください。」

「ちょ!?!」

・・・なにが何だか分からないが、全員の顔色を見る限り、どうやらドレイクと同じように思っているみたいだ。さすがに気になってきたので、俺もドレイクの頭を押しつぶし、上から覗くことにする。

「おい!」

ドレイクの声が聞こえたが気にしない。  
さて、この紙は・・・!

『暗殺依頼：黒虹の赤』

危険度：S+

場所：アリア王国

対象：ドレイク・ベルナス

詳細：アリア王国の脅威、黒虹の赤の討伐を依頼する。

依頼人：イル教国

報酬：金貨720枚

・・・。

おいレオ、これが贈り物の正体か？

ご丁寧に綺麗な似顔絵まで作っちゃってまあ・・・。

!! これもしかして人数分あのか!?

俺らがお口あんぐりな状態な中、一人だけ平常心で次々と紙を出していくレオ。

『暗殺依頼：黒虹の橙』

危険度：S+

場所：アリア王国

対象：フォーリ・バイカウント

詳細：アリア王国の脅威、黒虹の橙の討伐を依頼する。

依頼人：イル教国

報酬：金貨720枚

『暗殺依頼：黒虹の黄』

危険度：S-

場所：アリア王国

対象：イリス・ハーミット

詳細：アリア王国の脅威、黒虹の黄の討伐を依頼する。

依頼人：イル教国

報酬：金貨20枚

『暗殺依頼：黒虹の緑』

危険度：S

場所：アリア王国

対象：アリア・クロノ・イグニシヤス

詳細：アリア王国の脅威、黒虹の緑の討伐を依頼する。

依頼人：イル教国

報酬：金貨200枚

『暗殺依頼：黒虹の青』

危険度：SS

場所：アリア王国

対象：シャオ・シルヴァンス

詳細：アリア王国の脅威、黒虹の青の討伐を依頼する。

依頼人：イル教国

報酬：金貨800枚

『暗殺依頼：黒虹の藍』

危険度：S -

場所：アリア王国

対象：キアラ・クレスタ

詳細：アリア王国の脅威、黒虹の藍の討伐を依頼する。

依頼人：イル教国

報酬：金貨20枚

『暗殺依頼：黒虹の紫』

危険度：S

場所：アリア王国

対象：アネス・フィードウッド

詳細：アリア王国の脅威、黒虹の紫の討伐を依頼する。

依頼人：イル教国

報酬：金貨100枚



おいおい・・・まあさすがに全員S+とまでは行かなかったが。  
あ、ちなみに報酬金貨以上でS-らしい。  
ついで

S・・・金貨100枚以上

S+・・・金貨700枚以上

SS・・・金貨800枚以上

SSS・・・金貨900枚以上

だそうだ・・・まあ正直どうでも良い話だが。

この並べられた紙切れの数々に、いつのまにかみんな黙りこんでしまっていた。

その中でイリスが一人、恐る恐る声をあげる。

「これってもしかして・・・私達は暗殺対象になってしまった、ということでしょうか？」

「そうなりますね。」

間髪入れずに両断するレオ。その言葉に、女性陣はため息を洩らした・・・あくまで女性陣は。

「よっしゃあ！これで大義名分の下向かい来る猛者どもを一掃できるー！！」

「腕が鳴るぜえ！俺がみんなの分まで返り討ちにしてやらあー！！」

「まあ、拙者でなければ怯えるでござろうが。」

などなど。あ、ちなみにドレイクはシャオより賞金が下だったこと  
にかなり文句を垂れていた。  
さて。

「なあレオ、俺のは？」



続いてドレイクがうらやましそうに文句を垂れる。

「破格じゃねえか・・・いいなあ。それだけ強え敵が来るんだぜ？」  
「テメエじゃねえんだ嬉しくねええ！！」

ハア、ハア・・・全く、このアホどもが。

最後にYシャツの裾をクイッと引っ張られた気がしたので、下を見るとイリスが居た・・・涙を浮かべ、上目遣いで。

なんで？

「死なないでくださいね・・・？」

うわ・・・なんかもうやつぱり癒されるわこの子・・・。  
俺が感傷に浸っていると、レオが全員に向かって言った。  
結構真面目な声色で、真剣な瞳をしていることから、全員たわごとではないと感じて彼を見る。

「いいですか？これは敵国に脅威と認定されたという喜ぶべきことでも悲観すべきことでもあります。これから動きにくくなるでしょうが、その分動いた時に敵国に与えるダメージは今までより遥かに強くなりますからそのつもりで。これは我々の天下統一への第一歩と考えましょう！」

『おっ！』

これから本格的な戦いになる、それを予感させながらも、黒虹はまた一歩前進した・・・そう思える今回の“贈り物”であった。

第65話 それぞれの国にて（後書き）

「（これ）で人数分表記するより、『』で数人のハモリとして表記したほうが書きやすいし分かりやすい気がする……。」

第66話 授業？シャオと魔法学校へ 前編（前書き）

いやぁ・・・マジで難産でした。

まさか一週間考えることになるうとは。

お気に入り登録してくださっている方々、そうでない方々も、お待たせいたしました。それではどうぞ！！

## 第66話 授業？シャオと魔法学校へ 前編

俺の指名手配書が出された翌日、現在俺とシャオの二人は魔法学校に向かうため、準備を済ませて城門前で侯爵を待っていた。

晴れ渡る空、日の光に照らされながら、俺とシャオは騎乗して侯爵を待つ。

「暑いな……。」

思わず呟く。ここ最近は段々と気温が上がっており、初夏と呼んでも良いくらいの気温になってきていた。もっとも、俺のいつもの服装、黒ジーンズに白Yシャツ、フロウという格好にはなんの問題もないのだが。フロウはかなりの通気性があり、ジーンズで過ごせないほどの暑さというわけでもない。

だが待ち始めてから俺の腹時計で約40分。その間ずっとお天道様の下にいれば、正直暑くなるのも否めない。

「侯爵殿、遅いでござるなあ……。」

城の方角を向いて呟くシャオを見ると、頬に一筋の汗が流れていた。するとまもなく、シャオの見つめる方角から緑髪の男が馬を駆ってこちらに向かってくる様子が視認される。

「やっと来たか……。」

「遅れてすまない!!!」

こちらに駆けてくる侯爵の声からは、焦燥と疲れが見て取れる。彼なりに急いできたんだらうと思いい、そこまで言及するのはやめておくことにする。

「おう。んで、俺らはどうするんだ？」

俺らと並ぶところまで馬を駆ってきた侯爵に向かって、すぐに質問をぶつける。シャオは少し遅れたことに関しての弁解が聞きたかったようだが……。

とりあえず俺が質問すると侯爵は自らの額の汗を拭きつつ、答えた。

「そうだな。とりあえずサンゼルスシティに向かってくれ。もちろん私もついていく。とりあえず城下町を出たら東へと向かい、迷いの森を抜けて西エリアに入る。そうすればサンゼルスはすぐだからな。」

馬・・・この世界での馬は、前の世界の馬の比ではなく、凄まじい速度を持っている。

人が歩く速度で10日かかるところを、一日足らずで踏破してしまう。

そんな速度で城からサンゼルスシティへと赴いたのだが、だいたい昼前にはサンゼルスシティに到着してしまった。

馬は速いなあ、などため息を吐いていたのだが、迷いの森を抜ける時にふと感傷に浸ることがあった。それは、迷いの森の中にかけられていたつり橋を渡るときにシャオが言った一言が原因である。

「ここ、ドレイク殿が怖がらなければ、城下町へのかなりのショートカットでござったなあ。」

まだ王都へはイリスを送るという名目で行くはずだったときだ。まあ良い王だといいな、などと夢想はしていたが・・・それはいいとして、そんな頃に迷いの森を通り、吊り橋の前でドレイクが立ち往生してしまった時の事を思い出す。あれは今思い出してもこっけいだったな。

赤い髪とは対照的に顔を青ざめさせ、谷底を震えと共に見つめるドレイクは、なかなかレアな光景であった。

「さあ、サンゼルスシティについたぞ！」

侯爵の声で我に返る。ふと目の前を見ると、高く白い城壁に囲まれた城塞都市が眼前にあった。

こちら・・・つまり東側の跳ね橋は元々降りており、修理中であった西側の跳ね橋はもう直っているのかな？などと考える。

目の前にある跳ね橋を見つめた後ち、右・・・つまり北の方角のほ



うへ目線をやると、最初に訪れた時にシャオを馬に載せて・・・いや干して歩いて来た時のことが思い出される。続いて左、南の方角へと目をやると、こちらはみんなで魔法の練習をした森だ。

あん時は確か学生たちに絡まれたよな、と苦笑を洩らす。

「カエデ殿、行くでござるよ。」

「おう。」

跳ね橋の奥、門の中へと入ってしまった侯爵を追いかけようとして、俺がいないことに気付いたのが後ろを振り返ってくれるシャオ。待たせては悪いので、俺も入ることにした。

そのまま宿へと侯爵に案内されたのだが、別段一泊するというわけではなく、ただの休憩所兼会議室に扱うだけということであった。馬を厩舎に入れ、侯爵についていくと部屋に入る。そこにあったロテーブルを囲む四つの革張りのソファは、なんだか神域でゼウスの兄貴やオルソンと再会したときの部屋と似ており、またもや考え事をして苦笑した。

「さて、じゃあ掛けてくれ。まずは二人にもらいたい授業の説明をしよう。」

自らも窓側にあるソファに腰掛け、俺とシャオを促す侯爵。

今更目の前の壮年の男に対する礼儀もないので、俺は隣に、シャオはその対面に座る。

すると俺達が席に座ったことを確認した侯爵は両肘をロテーブルにつき、そのまま手を組んでそこに顎をのせて語り始めた。

要約すると、俺らにして欲しい授業というのは大まかにこういうことであった。

・・・まず、俺達は講師という形で一度だけ、希望者対象の講義をすればよい。

時間は昼過ぎから夕刻前まで。アバウトだが、最近の時間の流れから行くと2時間無いくらいだろうと俺は予測する。

そしてその講義内容についてだが。

6属性を行使するシャオ（実は7属性）には、自らに眠る新たな属性の可能性を語る講義をして欲しいとのこと。

確かに俺達と旅をしてから光属性を身につけたシャオである。説得力はあるだろう。

正直俺はまだそのシャオの光属性魔法を見たことはないのだが・・・

。続いて俺には、エンシエントスペルについての講義。

なにを話せばよいか分からない、と侯爵に言ってみたが、笑って今から話すから、と俺をなだめた。

とりあえずエンシエントスペルが存在する事についての話。別にその魔法を使える経緯は話さなくても構わないらしい。

それで、本来ならシャオだけでも構わなかったのだが、と侯爵は一旦口を閉じた。

一瞬の間の後ち、シャオが問い詰めたところ、俺には国からの回し者として、未来の魔法使いをアリアへ呼び込むよう工作して欲しいらしかった。

つまり、黒虹のリーダーでかつ創造魔法を行使できる人間が居たり大魔道が居たり、おまけにもう一つのエンシエントスペル・・・時空魔法の使い手もアリアにしていると宣伝する。そしてアリアにきてくれたならまた講義をしよう、と話すわけだ。

だがこれならば今回の講義を成功させなければならぬ。

幸い希望者が集まってくるので意欲には問題ないものの、希望者たちに物足りなさを感じさせてはダメなのだ。

また聞きたい、そばに仕えたい・・・そう思わせる意図がある今回

の講義なのだそうだ。

別に俺はレオの意向なら反するつもりはないが、正直自信がないのも確かだ……。

どうしようかな……。

侯爵からの説明を終え、午後から始まる講義に陰鬱の表情を浮かべて天井を見上げた……。

第66話 授業？シャオと魔法学校へ 前編（後書き）

短いつすね・・・はいすみません。

さすがに一週間以上空けるのは躊躇われたので、一応の形で投稿いたしました。

明日も更新して償えるよう頑張ります！

第67話 授業？シャオと魔法学校へ 後編（前書き）

（報告）

・ドラキュラさん感想ありがとうございます！！

「明日には・・・とか言っついてどれだけかっとなんじゃ己はあ  
！！」

ひい！！

執筆中に途中まで書いてたものが消えて萎えたんですう！

「理由になつたらんわさつさと本編いけえ！！」

はいい！ただ今！！

## 第67話 授業？シャオと魔法学校へ 後編

お天道様がちょうど真上に来ようかというところ、俺達は宿屋を後にし魔法学校内部にいた。

魔法学校とは言ってもあまり元の世界の学校と変わりないな、というのが第一印象である。

廊下や教室にも無駄な装飾や変わったものは見られず、この学校がそのまま元の世界にあっても違和感はほとんどないだろう。……もっとも途中に見つけた、“実験室” “召喚の間” “魔法薬室” などというのは絶対にならない気がするが。

魔法薬というのは治癒魔導士が使う魔術を使って作られた薬のことだそうで、この前のフォーリの毒を治したのもキアラの魔法薬らしい。

……キアラとアリシアは連れてきたほうが良かったんじゃないのか？

そんなことを思っていたのもつかの間、現在俺達は学長室の前に居る。無論侯爵がここまで案内してくれたのだが、入るのは二人だけ。侯爵も宰相としてこの学校の運営に口出ししに来たらしく、あまり時間は無いそうだ。

それならば仕方ないということで、部屋の前で侯爵と別れたあと俺とシャオは学長室の扉を叩いた。

「どうぞ。」

少々しわがれた声が聞こえる。おそらく学長は爺さんだろうと思いい扉を開けると、案の定好々爺とした優しそうな爺さんが、黒いソファに腰掛けていた。

「失礼します。」

まだ高校生活のころのクセが抜けていないのか、校長室に入るときのように言ってしまう自嘲する。俺に続いてシャオが入り、爺さんもとい学長は微笑んで自分の向かいにあるソファに掌を向けた。

「ようこそいらっしやいました。どうぞ、おかけください。」

やはり国属の部隊相手ということもあって対応がしつかりしているのだろうが、学校長にこうも遜られるとくすぐったくなってしまうのは学生の性だろうか・・・？

俺がソファの左、シャオが右に腰掛ける。

シャオはその腰までかかる長い髪を尻で踏まないように払ってから座った。そういう時長髪は不便だな・・・。

俺達がソファに座ったことを確認すると、学長は口を開いた。

「初めまして。私が魔法学校学長・・・今回貴方がたに依頼をした者でございます。黒髪の貴方がカエデ・ミナモト様、青髪の貴方がシャオ・シルヴァン様でよろしかったでしょうか？」

「ああ。」

「左様。」

俺とシャオが口数少なく返事をする、どうやら扱いにくい印象を与えてしまったらしく、少々困惑した表情を見せる。なのでこちらから話しかけることにした。

「だいたいの話は侯爵から聞いた。あとはどこどのくらいの人数を相手にするか・・・俺はそれが聞きたい。」

俺がそう話している間、女性教師らしき人物が、俺とシャオ、学長にお茶を差し出して去っていく。

そのお茶を手に取り、学長は答えた。

「まず、場所は我が校最大の講義室、大講堂を使用していただきました。というのも今回の講義に対しての希望者の数が多くての・・・300名近いのです。高学年はほとんどが受講、9年生にいたっては全員が受講届けを提出しまして・・・。」

別に問題視することではないが、学長は申し訳なさそうに言う。俺達が手間取るか、迷惑がかかるかと思っっているのだろう。

ちなみにこの学校は9年制。卒業が15歳であるから、元の世界の小中一貫校つてところか？

俺もお茶を取り、一口啜った。

「それはまあ全然構わない。講義内容は俺達に任せてもらって大丈夫なのか？」

「ええ。ただ今回の講義の名目が“世界トップクラスの魔導士に学ぶ、高等魔術教室”となっておりますのでそこさえ気にしていただければ。」

俺の質問に対し笑顔で答えてから学長はもう一口お茶を啜る。すると隣に居たシャオがズイッと前に出て学長に問うた。

「一つ聞いてもよろしいでござるか？この学校を卒業しても、半数以上が魔導士になれないというのは本当でござるか？」

意図がつかめなかったが、これは初めてサンゼルスシティに来る時にイリスから聞いた話だ。

学長は少し物悲しそうな顔をして頷いた。しわが増えた気がする。

「そうですねえ。体内のルナが増えなかったり、制御力不足であっ



たり・・・そうして毎年半数以上が魔導士になれずに卒業して行きます・・・。」

シャオはそれを聞いて一つ頷いた。

何か授業に役立てる情報だったのだろうか・・・。  
さて、俺はどんな授業をしようかな。

ザワザワ・・・

昼過ぎの大講堂。大学の大講義室のような半円状の講堂の中心部には、大講堂の広さから考えるとずいぶん小さい教卓が一つ。そして

その半円を見渡せるような広い教壇・・・ライブ活動ができるのではなかるうかとさえ思える大きさである。

全て木製でそろえられた離れの講堂であり、校舎とは少し離れたところになっっている。最も、校庭のないこの学校では、離れといってもそこまで遠くはないのだが。

これから始まるであろう、今一番有名な組織“黒虹”の講義に胸を膨らませた生徒達が大講堂にゾロゾロと入ってきている。

そして前から前から詰めて入っていく姿は、学習意欲の高さを思い知らされるものであった。

生徒は、筋骨隆々であったり、学者風の青年だったり、仲良さげに話す女生徒だったり統一性がない。それは逆に、どんな生徒にも意味がある授業になるだろうという予測でもあるのだが・・・。

「ハードル高そうだなあ・・・。」

「さようござるなあ・・・。」

教壇の裏手、暗幕の後ろの控え室では、二人の青年が身を屈めて大講堂の様子をのぞいていた。

一人は珍しい黒髪黒瞳に白いYシャツという風貌。もう一人は青髪蒼穹瞳、腰までかかる長髪・・・異質コンビである。これがアリア王国主要メンバーだとは、ハタから見てもあまり気付かないだろう。あまり、というのは、黒髪黒瞳といえば黒虹と、国内では決まっているようなものだからだ。

今回の講義の流れは、まず学長から彼らの紹介。そしてシャオの講義、カエデの講義という順序である。シャオに全てを話されやしないか、ネタが尽きやしないかと、カエデは焦燥に駆られていた。

ほどなくして鐘が鳴る。これはどの世界でも変わらないらしい。もともと家族経営の神様であるから、そこら辺が似ているのは仕方がないのかも知れない。

その鐘が鳴ると、生徒達の話し声が止む。

そして静かになったところを見計らって、学長が暗幕から姿を現し、空咳を一つして語り始めた。

・・・

学長のありがたい説教が行われている中、俺とシャオは紹介されたときに出て行けるようスタンバイだ。

学長の語る内容は、ずいぶん俺達を過大評価し生徒達に見習うよう促すものだった。

そんな大そうなものじゃない、と言いたいが、それを今言ってもいろいろと遅い気がするので黙っておく。

シャオは隣で照れていたが、あまり緊張はしていないようだった。正直こういう場所は俺、戦場より怖いかも知れない・・・。

「それでは今回の講師を紹介する。皆、拍手で迎えるように。」

パチパチパチパチ・・・

まばらでもなく、そこまで凄いものでもない拍手が鳴り始め、俺とシャオは顔を見合わせ、頷いてから同時に教壇へと出る。・・・するとなぜか主に女生徒から黄色い声が・・・なじえ？

パチパチパチパチパチパチ・・・

俺とシャオが出たとたん、拍手の音が一層響く。ああ、黒虹のネームバリュースゲえなと思いつつ、俺達は学長の左横に立った。そして軽く生徒達に向かって礼をする。

それを確認した学長は、小声で「じゃあシャオ様はここに残って講

義を始めてください。」と言って、俺を連れ立って暗幕のほうへと去っていった。暗幕に入る直前シャオを振り返ると、教壇の上でいつもより輝いているシャオの姿が見えた。

・・・

シャオにとつて、こういった場は初めてではない。だが講師としては初めてである。元々魔導士部隊の隊長であった彼は魔導士見習いのころ先輩魔導士の講義を受けた経験があり、その先輩のようになりたいと憧れたことがあったのだ。もっともその頃既に実力は彼のほうが上であったが、親身になって丁寧に語ってくれる、そんな人になりたいと思っていた。

そして今、自分はその場にいる。緊張などはしていなかった。それよりも学長から聞いた、“半数以上が魔導士になれない”という言葉に少なからずショックを受けていたのだ。

そして彼はそんな生徒を一人でも救済すべく、会場を隅まで見据える。そして声をあげた。

「やあ諸君。拙者はシャオ・シルヴァンス。黒虹の青であり、大魔道と呼ばれている。」

教卓に両手をつき、前に乗り出すようにして語り始める。

生徒達はその言を、一言一句洩らすものと必死に聞いていた。

カエデは暗幕の間からシャオを見つめて感心のため息を洩らすと、会場を見る。

するとやけに必死そうな水色髪の少年が目に入った。

〈カルロside〉

「やあ諸君。拙者はシャオ・シルヴァンス。黒虹の青であり、大魔道と呼ばれている。」

ザワザワ・・・

今回の講師は本物の大魔道様のようです。彼の顔写真とインタビューは1年生の頃の教科書に載っていましたが・・・生で見られる機会があるとは、正直驚きです。

みんな驚いているようですね・・・。それにしてもいつの間にある“黒虹”のメンバーだったのでしょうか？

確かイル教国のお人だと聞いていたのですが・・・。それはそうと、僕はこの授業で絶対に上級魔法を身につけないといけません。

でない就多分、僕は魔導士になることなく卒業になってしまうからです。

大魔道様から上級魔法のノウハウを学び、今日のうちに全身全霊で吸収しなくては・・・！

ペンを握り締め、真っ白のノートに構えながら、顔と耳は今回の講師、大魔道様にロックオンです。

「さあ、講義を始めるでござるよ。」

そういつて周りを見渡す大魔道様・・・ござるってなんででしょうか？

「学長殿から聞いたのでござるが、毎年半数以上の卒業生が魔導士になれずに卒業するらしいでござるな・・・そんなことが絶対に無いよう、拙者は本気で今日教えるでござる・・・！」

凄い熱が入っています・・・！

大魔道様は本気でみんなを魔導士にしてくれるつもりの方です。

僕も必死に頑張ります！！

ペンをこれでもか、と握り締め、大魔道様を睨みつけました。

「さて、まずは魔導士になるに当たって、上級魔法が必要になるのでござる。魔導士になるためには、とにかく得意な属性を伸ばすでござるよ。そしてルナの向上について必要な点でござるが・・・」

わわわ、いきなり凄いこと言ってます！

ペスが止まりません！

殴り書きでノートを黒く染めていきながら、大魔道様の言を聞き続けます。

周りを見ると、みんな驚きのようです。それはそうでしょう。ルナの手っ取り早い向上法や上級魔法に関する正しい制御の仕方・・・こんなノウハウのレベルではありません！革命です！！

「・・・でござるから、制御をするには少し余計にルナを、魔法の発射地点に込める必要があるでござる。先ほど挙げた訓練法を使い、とにかくルナを上げることが先決でござるな。ルナの込め方については・・・」

なんなんですかこの授業！！！！？？？？

いつもの先生方の授業が必要なのか分からないくらいです！と思って先生方を見ると・・・御口あんぐりですね・・・先生方も知らない方法ですか・・・大魔道様、恐るべし。ってああ！！ノートとらないとおおおお！！！！

「ここまでが上級魔法に関する注意点でございます。・・・ん？」

大魔道様が疑問の声をあげた・・・まあそれもそうでしょう。こんな革命的な授業をされたら・・・

シーーーーーン・・・

みんな驚きますよ。

あ、でも授業料を多額に払った甲斐はありました。いえむしろお金が足りないくらい！

「・・・諸君、どうしたのでござるか？ まあいいでございます。とりあえずこれで一人でも多く魔導士となってくれんことを願うでございますよ。」

微笑んで大魔道様はそうおっしゃった。

となりの女生徒はもう、恍惚とした表情です。惚れてますね、分かります。

でも僕は、次に大魔道様の言葉が信じられなかった。

「魔導士になる、という点ではこれくらいしか手助けできないでございます。次、というか最後に、使役できる属性を増やす方法を教えて終わりにするでございますよ。」

『はあああああ！！！！？？？？』

な、なにを言っているのですかこの人は！！

属性というのはほとんどが先天性のもの。後天性で使役できる者など、ほとんどと言っていいほど……っていうか二つも使役できる魔導士になれるんですか！？

本当に珍しいんですよ！？

「……そんなリアクションされても。では話すでござるが、まず属性の適正を調べる時に……」

ガサガサガサガサ！！！！！！

うわぁ！

この講堂の全員がノートとり始めました！

なんか後ろで見張ってた先生達まで血走った目でメモを取っています……怖いです。先生……。

あれ？全員が必死な中で、暗幕の近くの壁に寄りかかってのんびりしてる人がいます。

両手を頭の後ろにやり、足を組んで……あ、欠伸しました。

こんな凄い授業に興味ないのかな……ってアレ、さっき大魔道様と一緒に並んでた人だ。

ん？黒髪……？

じゃなああい！！

僕が一番ノートとらなきゃいけないじゃないか！

なにしてるんだ聞き逃しちゃだめえええ！！

「……つまり、この原理で一人二つまでなら属性を持つことが可能になるはずでござるよ。まあそれでもできない時は仕方ないでござる。しかしここに居る魔法に縁のある諸君なら、2属性持つことは可能だと思っでござるよ……さて、少し長かったでござるが、



拙者の講義は終わりでございます。お疲れ様でございます。」

ハア、ハア・・・どうにか、ノートとれたあ・・・。

大魔道様って、やっぱり凄いなあ。

大魔道様はそのまま軽く礼をして、

「ではもう一人の講師、我らが黒虹リーダーにバトンタッチするでござるよ。」

ザワワ！！

え！？

大魔道様の次はあの“黒虹”のリーダーの人が講師！？

この講義凄すぎます！！

どうやらそれは周りも同じのようです。

まあ、“世界トップクラスの魔導士に学ぶ、高等魔導教室”ですからそれなりの人が来るとは思っていましたけど・・・まさか大魔道と黒虹リーダーとは。

大魔道様は暗幕のほうに去っていきます・・・あ、さっきの黒髪の人いないなあ。

うわあ、ノートぐちゃぐちゃだあ・・・。

（カルロsideout）

凄い授業だったみたいだな。みんな必死でノートとり始めたときはつい笑いそうになって暗幕の中に引き返してきたが・・・さすがは大魔道つてところか。

俺が控え室の木製椅子に腰掛けていると、暗幕が開いてシャオが入ってきた。

「ただいまでござる。いやあ、楽しかったでござるよ。」

俺も楽しかったよ、いろいろと。と言おうとして止めた。さすがに失礼だ。

さてと、俺の出番かね。

「じゃあ俺が行くかあ。」

「頑張ってくるでござるよ。」

背にシャオの声援を受けて、俺は暗幕を後にした。

〈カルロside〉

周りで、黒虹のリーダーに関する話題がちらほら聞こえる。

僕も噂程度には・・・確か国王様の親友で、創造魔法の使い手で、得物はトンファーで、黒髪黒瞳・・・ん？黒髪？

まさかさっきの・・・

すると暗幕から一人の青年が出てきた。

やっぱり！黒髪だったし、さっき並んでたし、この人がリーダーか！！・・・でもなんだか、思ったたより痩せた人ですね。

歩いている姿には確かに雰囲気がある。でも力強いオーラじゃなくて、もつと颯爽としたような・・・よく分からないけど、とにかく一般人ではないようです。

彼は教卓の前に立つと、黒髪をガシガシと掻きながらこう言った。

「あゝ、黒虹の黒、カエデ・ミナモトだ。よろしく。」

『お願いします・・・。』

遠慮がちにみんなが言う。さっきのシャオさんとは違った迫力があり、みんなも気圧されてるのかもしれない・・・。

「さて、俺の授業はシャオのみたいに大したものじゃない。どちらかというところ今君達に話したいから・・・とりあえずノートしまつてくれ。」

ガサガサ・・・

みんながノートを閉じる音が聞こえる。でも僕は必死なんです。魔導士になりたいんです。

だからできる限りこの人からも吸収して・・・するとカエデ・ミナモト様は全然別の方向を向いているにも関わらず、驚きの発言をしました。

「おい、左側のほうに座ってる水色髪の少年、ノートしまえ。」

「・・・!?」

見てないですよ！？見えてないですよ！？

驚きのあまりしばし動けませんでしたが、次第に周りの視線が僕に集まっているのに気付き、慌ててノートを仕舞います。

「よし。じゃあ俺の講義始めるか……でも声張り上げんのも面倒だし。」

なにを言ってるんですかああああ！

声あげんの面倒って何！？

多分会場中がツツコンでますよ！！

「創造 マイク 魔導音声拡声器」

『！！！？？』

今度は会場中が息を呑みました！

そうです、黒虹のリーダーは創造魔法が使えるんです！

彼の手元が輝いたかと思うと、その手にはよく分からない細長い物体。なんででしょうね？

カエデ・ミナモト様はその先端の黒い部分を口元に近づけ話し出しました。すると驚いたことに、あまり声をあげていないにも関わらず声がよく聞こえます！

なんなのでしょうか。

「あ……よし、これでいいな。さてみんな、これから話すのは君達と国の未来についてだ。」

物凄いぶっきらぼうに言ってますけど、それ重要ですよね！？かなり重要ですよね！？

なんなんですかこの人！？

「俺達黒虹は、この世界から戦争を失くすべく活動している。シャオの魔法も、俺の力も、そのために振るっている。君達は近い将来魔導士になるだろう。その時その力を何のために使う？」

みんなが静かになってしまっています。

この人ぶつきらぼうに見えて、繊細で丁寧で・・・ちゃんと考えているんですね。

さすがは黒虹のリーダー、なのでしょうが。

「なんのために振るうよ？さっきの水色髪のキミ。」

「は、はい!？」

僕ですか!？

さっきと違って僕のほうを真っ直ぐ見据えています。

凄い迫力です!

「さつきノートを仕舞えと言ったとき、キミだけ仕舞わなかった。

俺から吸収しようという姿勢は結構だ。だが、その時キミは自分以外を見てなかったんじゃないか？」

「。。。。。」

確かに、僕が魔導士になるためだけに必死でした。

この人は全て見えているようですね。。。。。

カエデ・ミナモト様はさらに教壇でつづけます。謎の細長い物体を片手に。

「君達に求めているのは魔導士になることではない。魔導士になった後、誰のために、何のために力を振るうか、だ。」

みんなが真剣に聞いています。

道徳の授業としてバカにすることもできますが・・・その徳を実行している人に言われると、納得できてしまうものですね。

「さつきも言ったが、俺達黒虹はこの世界から戦争を失くすため、そのために力を使っている。無駄な命が散る事が無いよう、だ。戦争なんて、上層部でふんぞり返ってるクソ共のために無関係の人々の命を奪っているに過ぎないからな……。そんなことを許せない、そうしてできたのが黒虹だ。君達には、そういう……。いや、それ以上の信念を持って行動してもらいたい。」

隣を見てみると、女の子が今度はカエデ様に惚れています。

後ろを見てみると、先生が感銘を受けたような目で食い入るようにカエデ様を見えています。

凄いですね、やっぱり。これが世界に台頭する人間像ですか……。

「ふあゝあ……。」

ぜ、前言撤回です！こんな講義で欠伸ですか貴方は！！??

「あふ……。失礼。反応がないとみんな寝てるのかな？つて。」

いや、みんな必死で考えていたところでしょう!?

小首傾げても可愛くないですから!!!

クラ……!

あ、隣の女の子が鼻血出して倒れました。

で、でも可愛くないですからね!?

「まあいいや。君達にはそれを考えてもらいたい。」

『……』

みんな、本当に考えているようです。僕も……考えないといけま

せんね。

すると、「じゃあ俺も終わりだ。」と一言残して去ろうとするカエデ・ミナモト様。

まあいいや・・・ってところで段々キャラが見えてきましたよ。

すると去り際に一言、背をのけぞって教卓に顔だけ残し、こう言った。

「そうそう、今後アリア王国にも魔導隊部門ができる。仕官しても  
らえれば、俺やシャオが手取り足取り魔法を教えてやる。」

『・・・ええええええええええ！？』

ま、マジですか!?

そんなのここに居るよりかなり魔導士として成長するに決まっています！

絶対魔導士試験に受かって、仕官します!!!

ほぼ全員がそう拳に力を入れていた。

そんなどよめきを意に介すことなく、カエデ・ミナモト様は立ち去る。

暗幕の中へと消えていった。

そしてまもなく、今回の講義は終了となった・・・みんなどう思っただろうか。

〈カルロsideout〉

「ありがとうございます。」

夕日が目に染みる中、俺とシャオ、侯爵は魔法学校の門の前で学長の見送りを受けていた。

学長は深々と頭を下げる。

俺は両手を前にだし、遠慮がちに言う。

「良いつて。俺も面白い経験させてもらったし。」

「さようございませぬ。拙者、一つ夢が果たせたでござるよ。」

シャオも照れながらそう言った。

「夢っ。」



学長と俺が聞く。するとシャオは頭を掻きながら、少年時代の先輩魔導士のことを語る。

学長はなるほど、と笑顔で頷くと、俺達を送り出してくれた。

「じゃあ、またな！」

「はい、ありがとうございました〜!!」

俺達が馬で駆けていく。その後姿を、学長はいつまでも見送ってくれている。

「それで、その先輩魔導士の名前はなんて言うんだ？」

馬上での俺の問いに、青髪をなびかせながら、左でシャオが答える。

「偽名を使っていたでござるよ。その偽名は確か、アルヴィス・ルナティア。」

「へえ、なんで偽名なんか？」

俺が風を受けながら前を向いて聞くと、シャオも前方を向き直り、肩をすくめる。

「拙者には分からないでござる。されど、人徳があり、魔法とサーベルを併用して、かなりの使い手でござった。魔法もサーベルもそんなに扱いは上手ではないのでござるが、併用する技がこの上なく厄介で・・・そして打たれ強い。どこことなくドレイク殿に似たスタ

イルの、金短髪の青年でござるよ。多分今は齡23とかではないでござるうか……?」

ふうん……会ってみたいものだな。

そう遠くない未来に、いろいろな驚きの事実を交えながらカエデとアルヴィスは出会うことになる。

そしてそのアルヴィスを巡り、思惑が動き出す。

第68話 新たなる旅立ち（前書き）

「お前・・・いつまで待たせてんだよ。」

ひい！

「言いたいことは・・・分かってるな？」

はいいい！！

皆様早く本

「死にさらせえ！！！！」

編へえグボゲラ！・・・ビクン、ビクン・・・

## 第68話 新たなる旅立ち

カエデ達が授業を行った翌日の朝・・・そうカエデが言っていた“  
どこかへ出かける朝”である。

結局黒虹メンバーは何も教えてもらえず、朝食を済ませた後はケルベロスの根城兼黒虹本部である西の塔へと集合していた。

・・・カエデを除いて。

そのカエデはというと、その頃戦士ギルドに居た・・・。

『討伐依頼：海の王者』

危険度：SSS

場所：バイゼル沖

対象：ルナティア海賊団

詳細：バイゼル沖の海賊の討伐を早急にお願いしたい。これではバイゼルの商業が滞る。

依頼人：バイゼル商会

報酬：金貨900枚

・・・あつたあつた。

俺は戦士ギルドの二階で、この依頼を探していた。

おもむろにそれを引きちぎると、階段を降りて受付へと向かう。

この時、俺を避けたり、羨望、嫉妬などの視線が多々あるが正直無視だ。

そのまま受付に着くと、誰が並んでいるわけでもなく暇そうに受付で頬杖をついているエリーナちゃんを見つけた。

「エリーナちゃん、手続きお願い。」

俺がそう声をかけると、いろんな受付嬢が一斉にこちらを見る・・・何故だ。

そんな中エリーナちゃんは微笑みながら俺が手渡した依頼紙を受け取り・・・血の気が失せた。

面白いように顔を青褪めさせていくエリーナちゃんの顔を笑って堪能していると、彼女は次第に口を広げ、叫んだ。

「SSS~~~~!!!???」

その声にギルド中が注目する。恥ずかしいからやめてくれ。

俺は苦笑しつつ事情を説明した。

「いや、これからサントロ・・・南の大陸に船で向かおうと思ってね。バイゼル沖だって言うからついでに受けちゃおうと思ったださ。」

「なんでサントロに？」

「まあそれは・・・秘密だ。」

エリーナちゃんは未だ顔色を悪くしているが、ため息を一つするとその依頼書を上下半分に切断し、依頼名の書いてあるほうの紙を受付にある棚に入れ、依頼人などが書いてある下半分を俺に手渡すと言った。

「これで受注されましたが・・・まあいいです。ご武運を祈ります。」

俺は笑顔で了解すると、戦士ギルドを出た。

扉を開けると光が差し込む。一瞬目くらましを喰らったようになるが、晴天の真っ只中へと足を踏み入れる・・・そういえばこの世界に来て思ったのが、かなり快晴日数が多いことだ。雨なんてほとんどない。まあそれは季節やらも影響してくるのだろうが。

もしかしたらこの世界・・・というよりこの国は、乾季、雨季の二つがあるのかもしれない。

それはそれとして、街中を歩いている時、俺は思いを逡巡させていた。

確かにSSの俺とはいえ、初の依頼がSSSじゃあさすがに驚くかもな。

海上戦の戦法なんて分かったもんじゃないけど、イリスに任せておけば問題ないだろうし・・・そういやルナティア海賊団、か。どっかで聞いたような名前だな。

そんなことを思いつつ城門をくぐる。衛兵が敬礼してくるので一応答礼し、そこに立ててある立札を見て、少し苦笑した。レオ、早とちりしすぎだろう。

『魔導隊部門設立にあたって』

そう銘打たれた立札には、こんな説明がしてあった。

魔法学校を卒業した者に限り、魔導隊入隊試験を実施する

というような感じだ。そこには魔導隊がいかに名誉であるかや、給料が優遇されること等をつらつらと書き並べており、あまり読む気にはならなかったが。

この立札は、レオに昨日の授業内容を話したら「さっそく」と言つて夜中に国王一人で書き上げたものだ・・・俺の部屋で。

全く、と苦笑しつつ、黒虹本部である西の塔に入る。

そのまま塔の内壁に沿って作られた螺旋階段を上って行き、作戦室の扉を開いた。

『おっそーい！』

全員の怒鳴り声が、突風のように俺の耳に響いた。

「わりいわりい。集まってくれてありがとう。出かける、とは言つてあったよな？サントロに行こうと思うんだ。」

俺が作戦室の一番奥にある、俗に言うお誕生日席に座りながら言つと、ドレイクが訝しそうに尋ねてきた。

「そりやまた、なんでだ？」

その意見に山道するように全員がこちらを向く。

虹色の髪が一斉にこちらを向くので、ああ綺麗だななどと思ってしまったりはするのだが、それはそれ。  
両手を組み、そこに顎を乗せて説明した。

「この前誰かから聞いた。サントロにはドラゴンがいるらしいじゃねえか。」

そう切り出すと、ドラゴンというワードにある者は驚き、ある者は目を輝かせる。

輝かせた派筆頭のフォーリは俺より少し遠い席から身を乗り出すようにして言った。

「全員でドラゴン狩りにでも行くのか!?!」

・・・そう思うと思った。

だが俺がしたいのはそうじゃない。

首を振って否定すると、いくばくか残念そうな顔をしたので、俺は続きの言葉をつむぐ。

「他にも聞いたところ、どうやらイル教国の魔導隊は召喚したワイバーンで移動するものらしい。ルスリアにも2頭、移動用のドラゴンが存在すると聞く。・・・そちらのドラゴンは北方、ソルキア王国原産の小型種らしいが。・・・空を飛べるって良いよなあ。」

そこまで言って、アネスやシャオ、イリスといった、飲み込みが早い奴は納得したらしい。

アネスは呆れたような顔で額に手を当て、紫の髪をしならせた。

「要するにカエデ君は、アリア・・・いや黒虹にも移動用の“足”が欲しいというのだな?」



その言葉により、俺の話の意図を掴めなかったメンバーもいろんな表情をしながら俺を見た。満面の笑みで頷いてやる。

「そういうことだ。あ、ついで行きかけ、バイゼル沖でルナティア海賊団と一戦交えるから。」

ポケットから依頼書を取り出しヒラヒラと振る。

「バイゼル・・・?」

「ルナティア・・・?」

前者はアリシア、後者はシャオの呟きである。

アリシアは嫌悪に眉をひそめ、シャオは首を傾げていた。よく見てみるとイリスもいろいろと考え込んだ表情をしている。

「ここまで聞いて、行きたくないという奴は？　今回は黒虹として動くわけじゃない。だから別にいきたくないならそれでいいが・・・」

そういつて周りを見渡すと、キアラが笑って言った。

「私は行くよっ!」

「助かる。ドラゴンは未知数の相手だから・・・回復役は欠かせない。」

俺が頷くと、ドレイク、フォーリも続く。

「俺も行くぞ!」

「ドラゴンたあ、楽しみだぜえ！」

残るはアネス、シャオ、イリス、アリシアだが……。

答えを言っていないメンツを眺めると、アネスもゆっくり手をあげた。

それに続き、シャオ、イリスも挙手する。

「私も行こう。その間はケルベロスをクロッドに任せれば良いしな。」

「その海賊団がいろいろと引つ掛かるでござるが……行くでござるよ。」

「私もシャオさんに同意見ですが、いきましょう。」

後はアリシア、か。俺がアリシアの方を見ると、彼女はツインテールを垂れ下げつつむいていた。

「あたしは……ちょっとダメかも。バイゼルは、ね……。」

まあそうだろうと思ったから行くか聞いたんだが。心なしか涙声に聞こえる。

俺がフォローの声を入れようとしたとき、意外にも隣にいたフォーリがアリシアの頭をそつと撫でた。

「いいんだぜえ。過去つてのは辛いこともあるもんだあ。過去との整理ができたときに改めて行きゃあいい。」

アリシアが小さく頷いた。フォーリの慈愛に満ちた瞳に俺は感心しつつ驚くとともに、やっぱり辛い過去がある者同士は思うところがあるのかもな、と呟いた。

「さて、じゃあアリシアとケルベロスに都市の警護を任せて、俺らは行くぞ！」

実際昨日のうちにレオには出かける旨を伝えてあったので、別に連絡や引き止める要素もない。

どこかしらにでかけるとは言っていたから、黒虹メンバーの準備も万端だ。

俺達は西の塔をあとにした。

城門では沢山の人に見送られてしまった。

敵国に隙を与えるから、あまり大々的に見送って欲しくなかったの

に。  
俺と、御者を兼ねるドレイク以外はもう、馬車に乗り込んでしまっ  
た。  
六頭立ての、豪華ではないが機能が充実された、レオが好みそ  
うなデザインだ。  
この馬車なら全員乗せても全然平気だろうと、昨日のうちにレオが  
準備してくれていたらしい。  
アリシアやシエラもレオにつきそい見送りに来てくれている。

「じゃあ、いないときに何かあつたら頼んだ。」

「うん、あたしが居ればなんとかなるよ！カエ兄、いってらっしや  
い！」

「行政には問題ありませんわ。御武運をお祈り申し上げます。」

それぞれの返答に安心し、ドレイクが御者台に乗り込むところを見  
て俺も言う。

「じゃあ行くわ。」

レオに向かってそう言って、馬車の後部座席に乗り込む。  
それを確認したドレイクは馬車を動かし始めた。

「ハイヤア！」

と馬の尻を打ち、俺達は城下町に行く。

さすがに黒虹メンバーが乗っているとは知らないだろうが、道行く  
人々は立ち止まって頭を下げる。・・・こう見ていると、日本の大  
名行列とか、やりすぎだよな。こうやって立ち止まって頭下げても  
れるだけで充分じゃねえか。最も俺はそれすら辞めさせたいけれど  
も。

土下座はありえないって。

見送っていたレオたちも城のほうへと戻っていったらしかったがまあ、敵にバれる前に戻ってこよう。

・・・このとき俺はナメていた。敵国の情報網、そして行動力を。

その日の夕方、カエデたちがバイゼルに到着したころ。

「イル教国 神殿内部」

バン！

という音とともに、抹茶色の髪をした、背中に薙刀を背負った屈強そうな男と、細身の橙ポニーテールの少女が連れ立って教皇の謁見の間へと入ってくる。

その傲慢な態度を咎める者は誰も居ない。

なぜなら彼らがイル教国の支えだから……。

教皇は年端もいかない少年。大魔道逃走後の戴冠だから仕方がない。その教皇の前にローグレスは片膝をつき、言った。

「アリア王国にて、黒虹の多数が王都を後にしたようです。これは千載一遇のチャンス。直ちに攻め込むべきかと存じます。」

威厳のこもったローグレスの声色に、教皇は反論する術を知らない。

「よ、よきに計らえ。」

「はー！」

それだけ言質を取ると、ローグレスは出て行った。

天下統一のため、ここは絶対に逃せないチャンスだと考えたからだろう……。

「ルスリア帝国 帝城内部」

ブロンズ  
金髪を背に流し、一括りに纏めた青年は、紅茶を片手に部屋に一人の兵士を招きいれ、話を聞いていた。

傍らには桃色の髪をした可愛い少女と、寡黙そうな金短髪の青

年が控えている。

「ふうん・・・分かった。ありがとう、もう行っていいよ。」

「はい、失礼いたします!」

この部屋の威圧に耐えられなかったであろう一兵士は、脱鬼のごとく逃げ出していった。

その兵士を見てミリアは呟く。

「ホント、喋ってる時もびくびくしちゃってかっこわるうい。ミリアああいう男嫌い。」

ぷう、と頬を膨らませて言うミリア。その様子にマルスは苦笑する。

「まあいいじゃないか・・・それにしてもこの時期に都を空けるとは、カエデはどうしたのかな?」

「・・・つぶすのですか?」

デスの声に、マルスは優雅に首を振る。

そして紅茶を一口飲んで、言った。

「多分この情報を掴んだら、ローグレスは動くと思うんだよ。でもそれだとカエデは帰るところを失うよね?・・・ふむ。罠の可能性はないだろうし、カエデはそういうところ疎そうだからねえ。デスの妹なら指摘するかもしれないけれど、ついて行ったということはその可能性も無い。」

ミリアはよく分からないマルスの態度に少し声を高める。

「どうするんですかあ?」

「・・・？」

デスも同じようにマルスを見た。  
マルスはフツと笑うと、一言言った。

「なあに・・・カエデを少し困らせる。それだけさ。」



## 第68話 新たなる旅立ち（後書き）

第三章突入記念！！！！

キャラクター人気投票~~~~！！！！

というわけで、好きなキャラをお選びください。投票は私へのメッセージか感想を利用していただければと思います！  
投票形式はこちら！！

1、黒虹部門！

貴方の選ぶ黒虹メンバーベスト3をお教えてください！！

2、その他！

敵国や黒虹以外での貴方の好きなキャラベスト3をお教えてください！

いずれも3人以内なら結構ですし、一人だけに投票していただいても構いません！

投票の終了告知はあらずじ・・・小説情報で致しますし、多分第三章が終わるまでは延々と続きますので、皆さんドシドシ投票してください！！！！

「待つてるからな！」

「おねがいますね」

byカエデ&イリス

第69話 前哨戦・西アリア大戦勃発（前書き）

（報告）

・ドラキュラさんレビューありがとうございます……！  
・みなさま、感想ありがとうございます！  
・人気投票のほうも、たくさんの方に応募に感謝です……！今のところ、あの娘が一位です（笑）



「アリア王国」

レオールが居る謁見の間に、1人の兵士が転がり込んできた。

「何事ですか？」

その兵士に、数多の視線が突き刺さる。黒虹代表で参加しているアリシアも、その1人だ。

「ローグレス・ウィンディネス率いる軍勢が、西アリアの関所に向けて進行中！ 救援を求めます！」

「！？」

その兵士の言葉で、謁見の間はざわつく。

レオールは上手く周りを押さえ、兵士に細かな情報を提供するように促していく。

「それで、情勢はどんな形なのでしょう？」

「は！ 敵軍は20000相当、しかしsecret unitが5人参加しておりますので、我々30000の軍でも持ち堪えられ

ません！」

「なるほど、ではカエデ！・・・は今多分もう連絡しても間に合いませんから、アリシア！　お願いします！」

命じられたアリシアは一瞬硬くなったが、すぐに平静を取り戻して了承する。

「承知しました！」

「ありがとうございます。ではケルベロスにも同行を命じます！」

ケルベロス代表で来ていたクロツドも、レオールに敬礼を表してアリシアとともに謁見の間をあとにした。

「大丈夫なのですか？　あんな少女と優男に任せて・・・」

「彼らは黒虹。あのカエデと肩を並べる人間ですよ？　ご心配なく」

「さようでございますか。過ぎた事を申しました」

廊下、アリシアとクロツドは歩く。

「大丈夫かなあ。ドレイクがやられた人より強いのがくるみたい。なんでこんな時に・・・」

「おそらく、既に情報が漏れていたのでしょう。城内の人間は既に騒動の時洗ったつもりでしたが、衛兵に紛れた可能性も・・・いえ、今考えるべきはそこではありませんね。いきましよう」

数刻して、アリシアとクロツド率いるケルベロスは城を後にした。颯爽と走り行く彼らは、かなりの期待を背負っていた。

クロツドの示すとおりの道を通ると、かなりのショートカットになった。

山賊時代にアリア中の裏道を記憶したそうので、通常の道を通る倍速い。

「日が暮れてきましたね。もうじき到着するでしょう」

「分かった！」

言うとおりに、そんなに時間もかからず関所に辿りついた。

援軍に駆けつけた彼らに、関所の人間は大歓声を上げている。

つい最近共闘したばかりだから、アリスアたちとしてもやりやすい。

「待っていましたぞ！ さあ皆様こちらへ！」

この前は見かけなかったオッサンに導かれ、クロツドたちは城内に入っていく。

そこは既に歓迎会とも言えるような宴席になっており、兵士達はずでに戦勝ムードでわいわいやっていた。

もともとお祭り好きな元盗賊ケルベロスも、その空気に吞まれててんやわんや。

「アリスア様も、さあ」

「あたしはいいかなあ。何より今から敵来るんでしょ？ そっち優先しないと！」

「さ、さようですか。ではまた戦勝祝いに」

さきほどのオッサンはそう言ってすごすごと引き下がっていった。

アリスアはクロツドを見やる。すると彼も、酒は遠慮しているようだった。

その夜。

「首尾はどうだ？」

「へえ、援軍の将2人は断りましたが、おおむね成功でございます！」

「よくやった、後で褒美を取らせる」

「へへえ！」

「野郎ども！ 行くぞ！」

ローグレスは先ほどまでアリア軍に紛れていた将、変装使いのVを自軍に戻し、号令をかけた。



第70話 南の旅・再びのバイゼル（前書き）

遅れました。はい、新人賞に向けて頑張っております笑

いつの間に皆様の人気投票がドシドシと……！

まだ受付けて居ますので今後もよろしくお願いします！

## 第70話 南の旅・再びのバイゼル

「やあつと着いたぜえ……」

馬車を降りつつ、フォーリが軽く伸びをした……拍子にするっとフードが落ちる。

「さてと。それでは前来た時と同じ宿でいいですよな？ カエデさん」

「ん？ ああそうだな。よろしく頼む」

確か海岸が良く見える、どこかのリゾートホテルのような場所だったな。

馬車では、この前通らなかつた道を通り、途中でこの前俺たちが南下に使つた道に合流。

バイゼルの、前と同じ入り口に俺たちは居た。

すぐそこには階段があり、俺が今居る場所からはバイゼルの街並みが一望できる。

「相つ変わらず賑わつてんなあ、カエデ」

「この前来た時より、さらに人が多い気がするな」

俺の隣には、帯刀したドレイクが腕を組んで立っていた。

イリスは先に階段を降りて宿屋の予約を取りに行き、シャオはその付き添い。

アネスは馬車の馬を世話しており、フォーリは潮風に当たっていた。……酔いでましたか？

「そりゃあ、夏になってきたからな。ぶっちゃけ海に関しては、コ

「以上のリゾート地はねえわけだ」

「なるほど……宿、とれっかな」

「さあ……まあ、どうにかなるだろ」

「そうだな。ドレイクが廊下で寝ればいい」

「ぴよ!？」

少々弄つてから、フォーリを呼ぶ。

「どうした兄貴！」

「いや……ドレイクとフォーリは先に宿に行くか……それか食料の  
買出しでも行つてくんねえか？」

「……いいけどよ。カエデはどうすんだ？」

「ああそれなんだが。こんな依頼を……受けていてな」

懐から、SSSの依頼書を取り出す。

「おお！ こりゃ面白そうだぜえ！ サツスガ兄貴！」

「まあなあ。んで、その依頼主に会いに行くからよ。その間にいろ  
いろやつといてくんねえか？ って話だ」

「なるほどな。分かった。行くぞバカ」

「んだあ？ テメエだろうが！」

「助かるよ」

不毛なケンカが始まりそうだったので、俺は場所を移してアネスの  
ところへ行く。

「アネス！」

「んん？ どうしたんだい？」

「ああ、わりいけどその馬車の管理頼んでもいいか？」

「ああ、構わないよ。それよりもカエデ君。ルナティア海賊団は危

険だと聞く。大丈夫か？」

「……まあ、油断はしてねえけど緊張もねえってところだな。ぶっちゃけ俺たちなら、なんだかんだ言っただうにでも出来そうだしな」「そうか。まあそれなら私も頑張ろうか」

さあて、行くか。

トントんと階段を降りると、そこはもう人人人で賑わう繁華街。どうせイヤリングの補正で皆の場所は分かる事だし……とにかく依頼主が居るといふバイゼル商会へ向かおうか。

人ごみを避けつつ、店頭に並ぶ物品を見ていると、なんだかやつぱり楽しくなってくる。

はあ。アリシアも連れてきてあげたかったな。

俺だって彼女の年齢くらいの時はよく、つるんでた連中とカラオケやらダーツやら行っただもんだ。

ダーツは行かない？　そうですか。

でもやつぱり、そういう経験して欲しいってのはあるからな……。

いくつか角を曲がると、段々と売り物の値段も高く、品質の良いモノや元から高い魔道具などが売られている道に出る。魔道具に関して素人の俺にはあまりわからないが、シャオにとっては掘り出し物があるのかも知れねえな。

高価格物品街をさらに奥へと進む。

するとそこには、ギルドまでとはいかないものの、巨大な木造建築物が巖のようにずっしりと建っていた。

「ここか」

看板にはデカデカと、『バイゼル商会』と書きなぐられている。

だが意外にも、建築物自体にそこまで装飾はない。商人の集まりだというから、もっと煌びやかになっているのかと思っていた……悪い意味で。

まあいい。とにかく入ろうと、両開きの扉を開いた。錆びているわけではないだろうが、どこか軋んだ音を立てつつ、俺の視界は開けていく。

「へえ、内装も大して。ここは実を重視するのか」

薄暗いとまではいかないものの、明るいわけでもない。だが空調は効いているのか、この初夏にはとても涼しく感じられた。

「いらつしゃいませ。どのような御用でしょうか」

入ってきた俺に、ささっと走り寄る少女が一人。ギルド役員か？と思えば、なにやら黒い首輪付き。

……奴隷？

いや、今は特に考えない方向でいいか。

その赤いボブカットの少女に、とりあえずの用件を告げる。

「依頼を受けて来たんだが、代表者は？」

「はい、依頼ですね？ 代表に問い合わせますので、しばらくお待ちください」

そうして、なにやら奥の方にあるカウンターへと姿を消す。ぶつちやけ入り口にたたずんでも邪魔だと思ったので少女についていくが、周りを見るとなかなかどうして。人影もあまり見なかった。

「なんだ……仮にもバイゼルの商会が、こんなにも閑散としているものなのか？」

素朴な疑問を呟きつつ、カウンター前までくると少女はちょうど問

い合わせを終えたところらしかった。

「代表は二階奥の部屋でお待ちです。どうぞこちらへ……」

さらなる違和感はこれだ……彼女の首輪。

疑問は募るばかり。ここは一体どうなってるやがる。

「なあ」

「はい？」

「……いや、なんでもない」

案内されて階段を上る途中、彼女に聞いてみようと考えたが、振り返った少女を見てやめた。

一つは、こんな首輪をされているような少女が知っている気がしない、話してくれる気がしない。

一つは、彼女の目だ。……感情の起伏がほとんど感じられない。

あたかもこの前バイゼルを見た、アリシアと一緒に連れて行かれていた奴隷のような……奴隷？

だとすると、やっぱりこの子は奴隷なのか？

ふむう……イリスを連れてくるべきだったか。

「あの……こちらです」

「え？ あ、おう済まない」

とりあえず謝辞を入れ、部屋の前に立つ。

……？

ここでも違和感だ。なんだか、この部屋、いやこの扉だけ妙に絢爛だ。

黒い扉なんだが、無駄にデカいしなんだかキラキラと輝いている。

どっかの黒曜石か？

「お客様が参りました……」  
「入りたまえ」

疑問を拭えぬまま、ドアノブを回して部屋に入る。少女は扉の前で待つようだ。

正面を見ると、革張りのソファに座り、葉巻を啜えたいかにも大富豪なふくよかな男。  
着ている服も豪華だ。……なにかが引つ掛かるんだよなあ。

「依頼を受けてきたんだが」  
「ああ、かけたまえ」

指し示したのは、彼の正面にあるソファ。俺もゆっくりと腰掛ける。この男、敵意は感じないが、嘗め回すような視線が腹立たしいな。

「それで、依頼……ルナティア海賊団の討伐について詳しく聞かせてもらおうか」  
「おいおいおい」  
「？」

笑い方が腹立つ眼前の男。なんだってんだ？

「口の利き方考えろよ。俺は依頼主さまだぜ？」

おうおう、中々いいご身分じゃねえか。

「生憎なあ、俺は敬語なんざ生まれてこのかた、使ったこともないもんでな」

「は！世の中甘くみないでくれ。お前のような人間が渡っていけ

るほど甘くないのだよ」

……滅茶苦茶渡ってるよな？ 俺。

「んなのどうだっついていんだよ。さつさと依頼について話せ」

「キミが私に敬意を払ったその時に伝えよう」

……つわ、つぞ。

「勘違いすんなよ？ テメエは依頼主。俺は戦士。ギブ&テイクの対等な関係だ。テメエに敬意を払うつもりなんざ端からねえ」

「はっはっは！ じゃあこの依頼はなかったことにしようか。お金が無駄になるぞ？ それでもいいのか？」

見るよみんな、このドヤ顔。まあだ勘違いしてやがるぜ。

「いらねえよ」

「は？」

男の顔色が変わる。

「いらねえんだよ金なんか。SSSだっつーから楽しそうに受けただけだ。べっつに国王からの命令だったとしても向かったさ。金貨900枚？ わりいがその程度の金なんざ、俺のチームのメンバーが集まればいくらでも稼げんだよ」

「いらねえというのか？ 金貨900枚だぞ！ それを」

「うぜえな、いらねえつつつてんだろが。もういい。それだけなら俺が勝手にルナティア海賊団潰せば良いだけの話だ。SSSの相手だっことは分かったんだしな」

「……クソが。対等で構わないから、話をさせる」



「さつさとそうすりゃ良かったんだよ」  
「うるさい！」

おっさんの顔が真っ赤になる。血糖値高いとさつさと死ぬぞ。

「んで？」

「ルナティア海賊団の討伐証明は、海賊団の総長、アルヴィス・ルナティアの首級。それ以外は認めん！」

「総長の首級ねえ……よっぽどソイツが危険なわけだ」

「ああそうだ！ だから……だからアイツの首を！」

人殺しはしたくねえが、まあいいか。

「了解。んじゃ、終わったらまたここに戻ってくるな」

「う、うむ。だから、さつさとやってこい！」

「わあったよ」

そう言っただけで立ち上がる。特に殺気は感じないが、男から俺に向けて猛烈な憎悪を感じる。

まあそりゃそうか、あんだだけコケにしたんだからな……。

ドアノブを捻り扉を開くと、先ほどの少女が居た。

その姿は男の位置からも見えたらしく、大きく怒鳴る。

「おいユリア！ その受注者を外まで送っていけ！」

「……はい」

俺が扉を閉めると、向こう側から「くそつたれがあ！」とフラストレーションを発散する怒号。

そんなにプライド触ったか。

「……こちらです」  
「ああ、サンキュ」

そのまま階段を降りる。  
すると、降りきったところで、先ほどユリアと呼ばれた少女が振り向いた。

「？」

「あ、あの！」

先ほどまでの瞳とは違う。彼女の目には、光があった。それも、一縷の希望を目にしたような……ん？ 目にした？ ひよっとして俺に何かを期待してんのか？

「代表を！ 助けてください！」

勢いよく頭を下げる少女。

赤い髪が、遠心力で遅れながらもさがる。

「……どういうこと？」

「あ、はい。とりあえずこちらへ」

彼女の足取りは速かった。先ほどの案内とは比べ物にならないほどのはや歩き。

いや、俺が追いつけないわけじゃないけどな？

彼女は一階の右隅の区画まで来ると、おもむろにその石畳の一つを持ち上げた。

「階段？」

こくりと頷く少女。その下からは、なにやら不穏な香りが漂う。

「……ファイアーボール」

ユリアが小声で唱えると、小さく彼女の掌に炎が浮かぶ。ランタン代わりだろうか。

そのまま彼女の先導で階段を降りていく。

「魔法、使えるのか？」

「はい。魔導士になり損ねましたから……」

小さく笑う彼女は、炎の明かりも相まって可愛らしかった。

「それで、階段を降りきるまえに教えて欲しいんだが」

「？　なんででしょうか？」

「……俺に何をさせる気だ？　いやこれじゃ人聞き悪いか。何をして欲しいんだ？」

「それについては代表から。貴方に頼んだ理由なんて知れています。まさか……時の人がこんなところに現われるなんて」

……なるほど。黒虹レベルでないと厳しい話なのか。

「まあ、それなら了解だ」

「はい。ここで階段は終わりです」

「お、おう」

彼女は上にいたときと違い、表情豊かだ。どういつことなのだろうか？

と。それよりも。

降り立ったここは、地下牢の入り口だった。正面に伸びる道に沿った左右には、沢山の牢獄が連なっている。

「……元々、商会の荷物倉庫でした。ですが……」

彼女は歩きつつ説明をくれる。コツコツと音を響かせているのだが、人が気付く気配も、人の気配もない。

「……ここには誰も居ないようだけど」

「ええ、この先です」

奥も奥。振り返ると階段が米粒くらいにしか見えない位置の牢獄に、沢山の人が詰め込まれていた。

「……これは！」

「代表。救世主が現われましたよ」

そつと声をかけるユリア。おいおい、俺は救世主なんて大それたもんじゃ……つて！

「アンタは！」

「おお、キミはいつぞや王都で」

代表と呼ばれた彼は、俺がイリスの指輪を買ってあげたときの行商人だった。

でも代表って。

「代表は上に居たあいつじゃねえのか？」

「……それは」

ユリアが唇をかみ締める。それに代わって、その代表が説明をくれた。

要約すると、こういうことだ。

この、俺に指輪を売ってくれた行商人が本物の代表。名前はアレフというらしい。

彼が王都へ行商に出かけている間に、山賊団が現われ、バイゼル商會を乗っ取ってしまった。

人質に使われたユリアはこき使われ、その他商會メンバーはこの牢獄にぶち込まれている、と。

そしてそれをかぎつけ、元々アレフとも仲の良かった海賊団、ルナティア海賊団が決起したものの、商會の権力を掌握した山賊団“ニズヘッグ”にまんまと引っ掛けられ、今は潜伏期間を取っている、と。

……なるほどな。だからどんなに金をかけてもその海賊団を追い払いたいから、今回の依頼をした、と。

はあ。

ため息を一つ吐く。なるほどな。これが今回俺が感じていた違和感の全貌か。

「なあ。俺この牢獄ぶち壊せるけど」

「やめたほうがいい。今はその時期じゃない」

「ていうか、俺ら黒虹、ほとんど今バイゼルに集結してるからその山賊団如き瞬殺だと思っただけど」

「それについては……私から少し言わせてください」

ユリアが言葉を切る。

「ルナティア海賊団の皆さんは、本当に良い人たちなんです。でも

今は海賊のレットルを貼られていて。それで、そこに黒虹の皆様がきてくれたのなら」  
なるほどな。

「俺たちがバックアップして、ルナティア海賊団と共闘、悪い山賊をやっつけたルナティア海賊団は良いヤツらだから、賊扱いはやめましょう。要は一石二鳥が出来るというわけだ」

「そういうことです」

「幸い我々は明日も生きられるか分からない命、というわけではな  
いから、こういう一石二鳥は商人の血が騒ぐんだ」

アレフが猛然と語る。もう初老だろうに、元気だなこのおっさん。

「じゃあユリアがその海賊団に連絡取れるか？」

「いえそれが……」

彼女はそう呟きつつ、自分に着けられた首輪を指す。  
そういえばこれ、なんなんだ？

「これは最近イル教国で作られた、服従の首輪。これが有る限り、  
彼女はこれにかけられた制約から逃れることができないんだ。奴隷  
商人に売るべく私が入手したものだ、こつもあつさり奪われて悪  
用されてしまうとは……」

「私は、ここから出ることや、外部通信器具の使用が出来ない体な  
んです。それで……」

俺を上目遣いで見つめてくる。……はあ、分かったよ。

「俺が外部との連絡をとり、それが出来次第ここに攻め込む形でい

いのかな？」

「……山賊どもは外部に潜んでいる。気をつけてくれよ」  
「ああ。もちろんだ」

ただの海賊狩りのつもりが、偉く面白いことになってしまったみたいだな……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9193q/>

---

とある異世界とある国、そこに伝わる物語。

2011年7月30日12時24分発行